

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

Texts of tape-recorded conversations in Japanese dialects (Volume 2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002271">https://doi.org/10.15084/00002271</a>

# 方言談話資料(2)

—奈良・高知・長崎—

国立国語研究所資料集 10-2

国立国語研究所

1979

方言談話資料(2)

——奈良・高知・長崎——

国立国語研究所

## 刊 行 の こ と ば

国立国語研究所では、昭和49年度から同51年度にかけて、『各地方言資料の収集および文字化』のための研究」という題目の下に、全国各地で方言による談話を録音し、その文字化（標準語訳・注つき）を行った。この研究は、急速に失われつつある方言を現時点で録音・文字化し、国語研究の基本的資料とすることを目的としており、当研究所地方研究員の協力を得て実施された。

その成果は、機を得て、順次刊行する予定であり、昨年度には、その第一集として、『方言談話資料(1)―山形・群馬・長野―』を刊行した。今回は、その第二集として、本書を刊行する。

本書に収めた録音・文字化資料は、もっぱら、後藤和彦(奈良県担当)、土居重俊(高知県担当)、愛宕八郎康隆(長崎県担当)の三氏の尽力によるものである。また、話者もしくは司会者として、後木弘、泉谷正彦、東ふで子、大野寿男、深瀬政晴(以上奈良県)、田島正実、高橋秀子、森田多賀恵(以上高知県)、竹中ユエ、尾上サミ、山崎政右衛門、溝口誠治、平尾美和子(以上長崎県)の各氏の協力を得たほか、現地教育委員会や有志の助力があった。記して深く感謝の意を表する。

昭和54年3月

国立国語研究所長 林 大

## 方言談話資料作成のための担当者

国立国語研究所言語変化研究部長

飯 豊 毅 一

国立国語研究所言語変化研究部第一研究室

徳 川 宗 賢 (現在,大阪大学教授) 佐 藤 亮 一 (室長) 真 田 信 治 (研究員)

沢 木 幹 栄 (研究員) 白 沢 宏 枝 (研究補助員)

国立国語研究所地方研究員 (五十音順)

秋 山 正 次	愛宕 八郎康隆	五十嵐 三 郎	井 上 章	井 上 史 雄
今 石 元 久	岩 井 隆 盛	上 野 勇	遠 藤 潤 一	大 島 一 郎
大 橋 勝 男	岡 野 信 子	奥 村 三 雄	笥 大 城	加 治 工 真 市
加 藤 信 昭	加 藤 正 信	金 沢 直 人	川 本 栄 一 郎	神 部 宏 泰
剣 持 隼 一 郎	後 藤 和 彦	小 松 代 融 一	斎 藤 義 七 郎	迫 野 虔 徳
佐 藤 茂	佐 藤 虎 男	清 水 茂 夫	杉 山 正 世	田 尻 英 三
種 友 明	玉 井 節 子	近 石 泰 秋	土 居 重 俊	日 高 貢 一 郎
日 野 資 純	広 戸 惇	廣 濱 文 雄	北 条 忠 雄	本 堂 寛
馬 瀬 良 雄	松 本 宙	三 浦 芳 夫	虫 明 吉 治 郎	村 内 英 一
室 山 敏 昭	谷 開 石 雄	矢 作 春 樹	山 口 幸 洋	山 本 俊 治
和 田 實				

## 「方言談話資料」(2) 編集担当者

飯 豊 毅 一 佐 藤 亮 一 真 田 信 治 沢 木 幹 栄 白 沢 宏 枝

## 収録・文字化担当者 (協力者)

奈良…後 藤 和 彦 高知…土 居 重 俊 長崎…愛宕八郎康隆

## 目 次

刊行のことば	3
まえがき	7
凡 例	10
I 奈良県吉野郡十津川村那知合・谷垣内	11
解説	13
十津川の暮らし (1)	23
同 (2)	66
II 高知県南国市岡豊町滝本	125
解説	127
1. 滝の由来と景観	134
2. 支那弥様の祭り	151
3. 夜這い	176
4. 女房かたぎ	191
5. 昔の服装と遊戯	203
6. 小学校時代の思い出	214
7. 迷信習俗	220
8. 稲の不作	241
III 長崎県西彼杵郡琴海町尾戸郷小口	247
解説	249
1. 蕎麦作りの話	263
2. 麦こぎ・麦すりの話	271
3. 西瓜作りの話	277
4. 遊びの話	287
5. 恋愛・結婚の話	300
6. 正月の話	328
7. 米作りの話〈もみ種のこと〉	340

8. 米作りの話〈苗代のこと〉 .....	340
9. 米作りの話〈田植えのこと〉 .....	344
10. 米作りの話〈もみすりのこと〉 .....	354
11. 病気・医者の話 .....	358
12. 食生活の話 .....	364

# まえがき

## 研究の経過

この研究は、昭和49年度から同51年度にかけて行った。

昭和49年度は準備期間とし、全国47都道府県で各種の実験的録音・文字化を行い、その結果に基づいて、次年度以降の計画を立案した。

50年度は、全国的視野のもとに重点地域を定め、23の府県から各1地点を選定して、老年層の男性と同女性との対話、もしくは、男女を含む老年層話者3人の会話を録音し、文字化することとした。

録音・文字化を実施した府県は次の通りである。

青森\*、岩手、宮城\*、山形、群馬、千葉、新潟、石川\*、福井、長野、静岡、愛知、京都、奈良、鳥取、島根、広島、愛媛、高知、長崎、宮崎、鹿児島\*、沖縄

51年度は収録地点を4地点減らし(\*印の県を割愛した)、19の府県について、原則として50年度と同一の地点で、(a)目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話、(b)老年層の男性と若年層の男性との対話、もしくは、両者を含む3人の話者の会話、(c)場面設定の会話、の3項目についての録音・文字化を行い、なお、このほかに収録可能な地域では、付録として、民話の収録・文字化も実施することとした。(c)については、「品物を借りる」「(旅行などに)誘う」「新築の祝いを述べる」「隣家の主人の所在をたずねる」「けんかをする」「道で知人に会う」「道で目上の知人に会う」「うわさ話をする」の八場面を、全地点共通の場面として設定した。

以上の録音・文字化資料は、すべて国立国語研究所で整理し、保管しているが、当研究所では、このうち、50・51両年度分について逐次刊行していく予定である。今回は、50年度に収録・文字化を行った老年層話者による談話資料のうち、「奈良県吉野郡十津川村那知合・谷垣内」「高知県南国市岡豊町滝本」「長崎県西彼杵郡琴海町尾戸郷小口」の3地点分について、オフセットにより複製印行する。

## 話者の条件

話者には次の条件の人を選ぶこととした。

### 1. 老年層話者による談話(50年度)

その土地で生まれ育ち、よその土地に住んだことのない、あるいは、その期間が比較的短い人で、日常生活ではもっぱら方言を用い、また、録音機を前にしても方言色豊かなおしゃべりが可能な人。したがって、よその土地から嫁入り、婿入りした人は採らない。ただし、女性については、他に適当な人が得られないときには、近隣地から嫁入りした人でも、収録地点との間に大きな方言の違いが認められない場合は可とする。話者の年齢は、原則として収録時において60歳



以上とし、やむをえないときは、55歳以上も可とする。発音その他の障害がなければ、高齢者でも差し支えないが、話者相互の年齢が離れすぎるのは好ましくない。また、話者相互の地位・身分関係も、ほぼ対等であることを原則とする。

## 2. 目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話（51年度）

話者の年齢は上記1に準ずる。この項は、改まった表現や種々の敬語形式などを得ることをねらって設定したものであり、対話の具体的な人物像として、たとえば、旧地主階層の人物対旧小作階層の人物、僧侶対その壇家にあたる人物、その土地出身の教員（校長など）対その土地の一般的職業（農業・漁業など）に従事している人物などを候補として示したが、地域の事情もあると思われるので、この点は各地の担当者（地方研究員）に一任した。なお、目上にあたる人物として、在外期間の比較的長い人物を登場させなくてはならない場合もあると考えられるので、在外歴に厳しい条件はつけないことにした。

## 3. 老年層男性と若年層男性との談話（51年度）

老年層については原則として60歳以上、若年層については原則として20～30歳台とする。話者相互の地位・身分関係は、ほぼ対等であることが望ましい。職業は老若ともにその土地における一般的なものであること。在外歴については1に準ずる。

## 4. 場面設定の会話（51年度）

上記1に準ずる条件を備えた老年層の男女に、場面に応じて、種々の演技的対話をしてもらった。

## 5. 民話

特に条件はつけず、その土地で生まれ育った民話の語り手であれば可とした。

### 司会者

主たる話者のほかに、話の引き出し役としての司会者が同席することとした。司会者はこの研究の主旨を理解し、かつ、司会役としての能力を有する地元方言の話し手が望ましい。司会者の年齢・居住歴等に、特に条件はつけなかった。

### 録音量・文字化量

50年度・51年度ともに各約60分程度の録音量（51年度については、各項目平均20分、合計60分程度）について文字化を行うこととした。また、内容の豊かな文字化資料を得るために、文字化すべき録音量の数倍を録音し、その中から適切な部分（話がとぎれず、しかも発言が特定の話者にかたよっていないこと。話の流れ、話題の展開が自然であること、など）を選択して文字化することとした。

### 文字化原稿の作成・表記

1. 将来のオフセットによる複製印行に備えて、一定の様式の文字化用紙を作成し、担当地方研究員に配布した。

2. 文字化は原則として表音的カタカナ表記によることとした。これは、利用者の便宜、文字化作業の能率などを考慮してのことである。ただし、対象とする方言の性格によって、カナ表記では特殊な字母を多数必要とし、かえって煩雑になると判断される場合は、国際音声字母による表記も可とした。なお、それぞれのカナで表わす具体的音声の範囲・内容については、各担当者が「解説」の中で説明することとした。
3. アクセント、文末イントネーションの記述の有無は、その表記法を含めて担当者の判断にまかせた。
4. 聴き取りが困難な箇所や、言いよどみ、言い重なり、言い直し、笑い声などについては、これらを一定の符号で表わすことにした（凡例参照）。

文字化には、標準語訳、および、場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注をつけることとした。なお、標準語訳はあくまでも内容理解のための手がかりの一つと考え、訳が問題となるような箇所については、できるだけ詳しい注をつけることを担当者に求めた。

#### 収録方言・表記・収録内容についての解説

文字化原稿とは別に、収録方言・表記・収録内容についての解説を担当者に求めた。解説には、原則として次の事項を記すこととした。

##### A. 収録地点とその方言について

1. 地点名
2. 収録地点の概観（位置・交通・地勢・行政区画の変動・戸数・人口・主な産業など）
3. 収録した方言の特色
  - ①方言区画上の位置・隣接諸方言との関係
  - ②音声・音韻上の特色
  - ③文法上の特色

##### B. 表記について

それぞれの符号（カナ・音声符号）で表わす具体音声の範囲、特殊な表記についての説明など。

##### C. 収録内容の概説

1. タイトル
2. 録音年月日
3. 録音場所
4. 話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴など
5. 録音環境（同席者・話の進行状況・場の雰囲気など）

## 凡 例

1. 場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注は各章の末尾にまとめて記し、該当箇所を本文のそれぞれの位置に番号（かっこつき）で示した。
2. 発言や録音が不明瞭なため聞き取りが困難な箇所には~~~~~線をつけた。  
例 モ コツチナ アノ (29ページ1段)
3. 最終的に聞き取り不能の箇所には~~~~~線のみを記した。
4. 言いよどみは、その末尾に-----線をつけた。
5. 複数の発言が重複した場合には、重複部分に\_\_\_\_\_線をつけた。  
例 K ソレ ユーノワノー (Aウレナング Bウレナング) イマワノー  
(52ページ6段)
6. 言いかけて、それを言いなおした場合には、言いかけた部分にxxxxxxxxをつけた。  
例 タカ<sub>xxxxx</sub> タカタキカ ドッカ イトル。(58ページ9段)
7. 笑い声、咳ばらいなどは、(笑)、(咳)のように示した。
8. 同席者の短い発言や突然の訪問者のことばなどは文字化していない場合がある。その際や、録音テープを編集して談話内容の一部を削除した際には、該当箇所に\*の符号をつけた。

I . 奈良県<sup>よしの</sup>吉野郡<sup>とつかわ</sup>十津川村<sup>なちあい</sup>那知合・<sup>たにがいと</sup>谷垣内

収録・文字化担当者 後 藤 和 彦

## A 収録地点とその方言について

1 地点名 奈良県吉野郡十津川村那知合・谷垣内

### 2 収録地点の概観

1)位置 十津川村は、奈良県最南部に位置する全国的にもめずらしい巨村である。村の西端は東経 $135^{\circ}33'$  南端は北緯 $33^{\circ}52'$  北端は北緯 $34^{\circ}43'$ 、東西の距離は $64.13\text{km}$  南北の距離は $102.22\text{km}$  であり、村面積の $669.770\text{km}^2$ は奈良県総面積の $18.1\%$ にあたる。

2)地勢 昭和49年度『奈良県勢要覧』によれば、昭和45年における十津川村の耕地面積は

田  $105\text{ha}$       畑  $118\text{ha}$       樹園  $42\text{ha}$

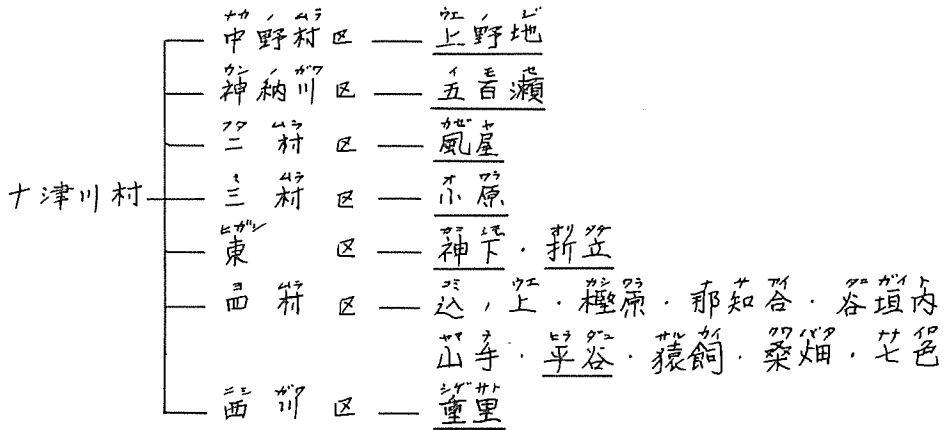
の如くきわめて僅少である。この点からも推知されるように、全村山林におおわれ、地勢はいたって險阻であると言てよい。山間を經つて村中央部と十津川が南流する。

3)交通 したがつて交通の事情も悪く、今日の幹線である国道168号線は、ようやく1959(昭和34)年に開通した。それまでは長く、新宮との間に設けられたフロペウ船が村民の交通の役に立っていた(後出の十津川村史略年表を参照していただきたい)。

4)行政区画 村内は7区に分かれてゐる。次に代表大字とともにそれを示す。ただし、今回の報告に直接関係の深い四村区だけは大字名を全部列記することにする(次ページ)。

この区分は明治23年に行われたものである。すなわち、旧十津川郷はその広大さによって明治22年に一旦、北十津川村(現中野村区・神納川区)、十津川花園村(現二村区)、中十津川村(現三村区)、東十津川村(現東区)、南十津川村(現四村区)、西十津川村(現西川区)の6村に分立されたが、同年8月、世にいわゆる十津川の大水災が大きな影響を与えた。明治23年に6村はふたたび統合し、現在の如き一村とな。

のものである。



村には村長，区には区長，大字には総代が置かれ，各長がそれぞれの担当領域に対する行政上の連絡・取りまとめ等を行う。

ここで十津川村民の村の地域に関する意識について付記しておくかと思う。

十津川村民の間には，中野村区上野地を五条方面に通じる北の玄関口，四村区平谷を新宮方面に通じる南の玄関口として，南北を二分して意識する傾向が強い。更に図式的に言えば，三村区小原あたりを境として，村の南北を意識する傾向が強いようである。今日，十津川高校（四村区込ノ上）には和歌山県からの進学者が，村北には五条高校への進学者が，それぞれかなり多いということである。古くからも村全体としては下表の如く新宮・五条方面と経済上深い交渉を持っていたようである。

十津川の産物 1854年（安政4年）

品名	規格	単価	出産総数	備考
杉材	並角 2~3間 5寸~15尺	尺 <sup>+</sup> 銀10匁	尺 <sup>+</sup> 6843本	新宮港価格
	良 " 8寸~12尺	" 25匁	8550本	"
松材	並 " 5寸~11尺	" 17匁	1383本	"
	良 " 5寸~15尺	" 33匁	1800本	"
松材	並 " 5寸~15尺	" 18匁	2,920本	"
	良 " 8寸~2尺	" 50匁	1,200本	"
樽丸		1尺 銀12匁	5,613枚	"

板(ま)並	6尺~9尺 9尺~1.5尺 6分	尺廻り一枚 銀 8分	26,225枚	"
板(板)上	6尺5寸 9尺~1.5尺 6分	299分	29,000枚	"
煙草		1貫 693分	8,480枚	新宮下市 価格
割菜		3分	2,592枚	"
こうち		8分	1,373枚	下市五筋本宮 価格
当帰(葉草)		1斤 9分	4,00斤	
木炭		1担(6斗) 475分	3,500担	新宮 価格
蜂蜜		1斗 16分	80.8斗	五条下市 価格
(巾)皮		100枚 299分	635枚	五条新宮 価格
榎茸		1斗 40分	499斗	大坂五条下市 価格
とりもち		10分	60斗	田辺 価格
松煙		10分	960斗	"
松脂		1斗3分5厘	114斗	新宮 価格
茶		692分	2,174斗	五条下市 価格

(『郷土誌十津川』による)

5) 変動 近年、奈良県は埼玉・千葉・神奈川・大阪の各府県について人口増加率の高い県である。それは、昭和33年にはしる一連の総合開発計画による産業・資源開発、都市圏の膨張と県の環境とが必然的に惹起した住宅開発等の社会的要因によるものとされる(『昭和49年度奈良県勢要覧』)。

ところが、十津川村の場合、大略、次のような人口の推移を示している。

年	世帯数(戸)	総数(人)	男(人)	女(人)
昭和 30		12,503		
32	2,390	12,366	6,166	
35	3,117	15,588	8,776	
45	2,295	8,502	4,247	4,255
47		7,979	3,980	3,999
48		7,732	3,875	3,857

昭和32年から35年にかけての人口増加は、ダム・道路工事によるものと

見られる（後出の十津川村史略年表を参照していただきたい）。全体的には近時減少の傾向であり、その激しさは吉野郡の中でも大塔村・川上村に並ぶ。このような人口減少の理由は、今回の録音資料の中でも語られているように、産業の乏しさ、主産業である林業の労働の激しさ、生活上の貧困、それに対する若者の都会生活へのあこがれが挙げられる。林業従事者の平均年齢は45~46才とも50才とも聞いた。

以上のような人口減少のほか、十津川村における昨今の主な変動として、次の二つが挙げられる。第一に、国道168号線の開通に伴って、入湯客を中心とした観光客の入り込みが増えた。昭和50年8月10日には、平谷一瀬<sup>ド</sup>八丁間を走るバス路線も開通し、今後、訪村者は増しこそすれ減りはしないものと思われる。第二に、同じく国道168号線の開通を契機として、村内における地域的格差が新たな問題として認識されるようになってきた。警察署・役場・郵便局が小森<sup>コモリ</sup>から小原に移転した、これは168号線全開以前のことであつたが、それにしてもこのことが象徴しているように、山間谷谷の在住者は便を求めて幹線の走る十津川べりに居を移す。その結果、義務教育施設（小・中学校）の統合が促進され、そして逆に上記施設の統合が僻地の過疎化をはやめるといふ現象を惹起して今日に至っている。

6)くらしと文化 元治元年に文武館<sup>ブンブクワン</sup>が開校されて以来、いわば学校教育と十津川村との関係は深い。か、前条に記したような事情で近時とくに学校統合が進み、現在では全村で小学校9、中学校4が置かれている。文武館は県立十津川高校として引継がれている。

宗教は、廃仏毀釈を契機として、全村大社教である。

娯楽施設はいたって乏しく、電気さえも、上野地・杵立・平谷以外は昭和25年にやっと普及した。

婚姻は、近隣の大字間で行われることがこれまでは多い。

7)十津川村における大字郡知合・谷垣内 今回、録音資料を蒐集した郡知合・谷垣内は、十津川村四村区に所属する二つの大字である（ともに小字を持たない）。この二つの大字にわたっての録音をすることについて、最初危惧も抱いたが、次の諸点から、今回、この方法をとること



にした。

1) この二つの大字は指呼の間にある。

2) 此神をひとしくする。

3) 那知合・谷垣内の子弟はともに旧那知合小学校（現在は平谷小学校に統合）に通う。

4) 古くから両大字とも日常の買物を此神（川崎神社）わきの店で済ませていた。つまり、那知合・谷垣内を通して一軒の小売しか無く、比較的大きな買物は平谷に下っていた（現在はその店もなく、すべての買物を平谷で行うようになっていゝ）。

5) 今曰でも山手川流域に点在する三つの大字、つまり、山手・谷垣内・那知合を総称して垣内と言う（尤も山手は古くから学校も買物も平谷に出向くのがあった。同じ垣内でも那知合・谷垣内と山手とは区別すべき点があるように思う）。

以上の点から那知合・谷垣内の二つの大字を同一生活協同体と考えて（このことは録音資料末部の盆踊りの話（からも推知できると思う）、今回の調査対象地点とした。

二津野ダムから山手川に添って約4km登ると川崎神社（谷垣内）に至る。そこから山腹にへぼりつくようにして点在する那知合の家屋も見える。それらは、神社わきの旧那知合小学校舎も養蚕場として、いま、養蚕業・林業・椎茸栽培はともにもなる生業としていゝ人かとの家屋だ。ここはかつて、平谷—山手—谷垣内—那知合と来て明円ミツエンを通り小森（旧役場所在地）へと抜ける主要な道すじであったのだが、役場等も小原に移り、幹線が十津川べりばかりに足んで次第にさびれてきた。明円もいまは無人の大字となった。10年ほど前に那知合とまりの定期バスが通うようになって現在に至っている。過疎化現象はこの二大字にもきびしく、旧十津川町（奈良県教育委員会）に記されている戸数那知合11戸、谷垣内29戸が、今回の調べでは那知合11戸、谷垣内21戸に減少していた。

付) 十津川村史略年表 十津川村の推移を知るための一助にと考え、ここに村史略年表を付することにした。とくに『郷土誌十津川』『わたしたちの村十津川』付載の年表を参照し、近代を中心に編んだ。

西暦 年号	事 項	西暦 年号	事 項
1864 元治元	文武館開校	1953 昭和28	大水害起る。台風13号。
1871 明治4	玉置神社の鹿嶋鉦鼓	1958 33	平谷までバス乗入れ。
1874 7	小森・平谷に郵便局開設	1959 34	伊勢湾台風被害。
1875 8	村内に19の小学校開校		国道168号線開通。風屋ダム本工事開始
1876 9	全村51寺の鹿嶋鉦鼓	1960 35	風屋ダム完成。二津野ダム本工事開始
1882 15	上野地・風屋・重里・静に郵便局開設	1962 37	二津野ダム完成
1886 19	小森に五ヶ所警察署の分署開設	1964 39	学校統合により西川中、西川第一、二村小開設
1887 20	造林資金3万5千圓から借る。	1965 40	学校統合により五百瀬小、平谷小、折立中開設
1889 22	大水害起る。北端道へ約600戸移住	1966 41	学校統合により上野地小、上野地中開設
1890 23	十津川村と七種一。7区55大字に分ける	1967 42	学校統合により葛川小、小原中開設
1894 27	小森に新村役場開設	1968 43	小原村にNHKテレビ中継塔設置
1905 38	折立に郵便局開設	1969 44	重里に十津川村養老センター開設
1908 41	平谷・本宮間に電信開設	1970 45	学校統合により三村小、西川第二小、追西川小開設
1924 大正13	新宮・折立間にプロペラ船の運航開始		七色の生徒は和歌山県の小学校へ
1925 14	長殿まで小型バス開通	1971 46	竹筒の生徒は和歌山県の小学校へ
1926 昭和元	十津川警察署開設		平谷神楽園開設。武茂に十津川電報電話局開設
1927 2	上野地までバス乗入れ	1975 50	平谷・静間にバス開通
1928 3	川津までバス乗入れ		
1930 5	北5海道第2次移住・中川村の建設		
1932 7	風屋までバス乗入れ		
1933 8	ブラジル等へ移民		
1937 12	山崎までバス乗入れ		
1942 17	滋州興安省シラントンへ移民		
1944 19	湯の原までバス乗入れ		
1947 22	小原までバス乗入れ		
1948 23	小森から小原へ警察署移転		
1949 24	折立にバス乗入れ。小森から小原へ役場移転		
1950 25	村内に電燈設置		
1951 26	小森から小原へ郵便局移転		

### 3 収録した方言の特色

#### 1) 音韻

##### 1) モーラ表

1	ウ	オ	ア	エ	イ	ユ	ヨ	ヤ	ワ
2	フ	ホ	ハ	ヘ	ヒ	ヒュ	ヒョ	ヒャ	
3	ク	コ	カ	ケ	キ	キユ	キョ	キャ	
4	グ	ゴ	ガ	ゲ	ギ	ギユ	ギョ	ギャ	
5	ク <sup>o</sup>	コ <sup>o</sup>	カ <sup>o</sup>	ケ <sup>o</sup>	キ <sup>o</sup>	キユ <sup>o</sup>	キョ <sup>o</sup>	キャ <sup>o</sup>	
6	ス	ソ	サ	セ	シ	シユ	ショ	シャ	
7	ズ	ゾ	ザ	ゼ	ジ	ジユ	ジョ	ジャ	
8	ツ	ト	タ	テ	チ	チユ	チョ	チャ	
9		ッ	ダ	デ					
10	ヌ	ノ	ナ	ネ	ニ	ニユ	ニョ	ニャ	
11	ル	ロ	ラ	レ	リ	リユ	リョ	リャ	
12	フ <sup>o</sup>	ホ <sup>o</sup>	バ <sup>o</sup>	ベ <sup>o</sup>	ピ <sup>o</sup>	ピユ <sup>o</sup>	ピョ <sup>o</sup>	ピャ <sup>o</sup>	
13	フ <sup>o</sup>	ボ <sup>o</sup>	バ <sup>o</sup>	ベ <sup>o</sup>	ピ <sup>o</sup>	ピユ <sup>o</sup>	ピョ <sup>o</sup>	ピャ <sup>o</sup>	
14	ム	モ	マ	メ	ミ	ミユ	ミョ	ミャ	
	ッ	ン	ー						

1) 解説 次へ上の表について簡単な説明を加えておく。

各列の母音はそれぞれ [u, o, a, e, i]。

第2列の子音はフでは [f], ヒでは [ç], ホ・ハ・ヘでは [h]。

第3～5列の子音はそれぞれ [k, g, ɣ]。

第6列の子音はシでは [ʃ], ス・ソ・サ・セでは [s]。

第7列の子音はジでは [ʒ], ズ・ゾ・ザ・ゼでは [z]。

第8列の子音はツでは [ts], チでは [tʃ], ト・タ・テでは [t]。

第9～14列の子音はそれぞれ [d, m, r, p, b, ɱ]。

ユ・ヨ・ヤ・ワはそれぞれ [ju, jo, ja, wa]。またッは促音、ンは

撥音. 一は引き音.

次に横浜市街地区と対比する形で調査地点の音声の特徴的傾向を記しておく.

- i : ju- [juwa] (岩), [juwasji] (鯛)
- ai : a: [ma:] (無い), [sa:ta] (咲いた)
- au : o: [uto:ta] (歌った), [waro:ta] (笑った).
- io : ju: [kakju:] (柿を), [mujju:] (麦を)
- si : si [sitji] (七), [sitjo:] (飼料)
- so : ho [hosite] (そして), [honde] (それで)

また, [-d-, -y-] 等は [e~da] (枝), [si~da] (羊歯), [kaburesa~ya:te] (かぶれさがして = 一面にかぶれて), [na~yoja] (名古屋) のように, しばしば [-~d-, -~y-] 等に開くことがある。文字化の場合, これらは, たとえば「エング, カブレサンカーテ」のように記した。また文字化の場合, 無意味と考えられる引き音も「-」で記した。

2) アクセント / 音節名詞と2音節名詞とのアクセントについて表示しておく.

	型	語 例	語 類
一音節名詞	o, o▷	柄・蚊・…・菓・日・…	第1・2類
	o, o▷	松・尾・…	第3類
二音節名詞	oo▷	飴・梅・…	第1類
	o o▷	歌・音・…・泡・池・…	第2・3類
	o o▷	粟・糸・…・雨・井戸・…	第4・5類

調査語彙は『国語学辞典』の「国語アクセント類別語彙表」による。た、この類別語彙表による録音資料の話し手のアクセント調査は十分に進行できなかったが、少なくとも高校生年代では、頭高型以外の場合、第一音節を低く発音する傾向が強いようである。

3) 文法 次に注意される点を記す。

1) 上下一般動詞のラ行五段化がはげしい。したがって、

ロ) 見ル・寝ルの語類には、未然形・志向形・命令形に、それぞれ、ミ  
ン・ミラン、ネン・ネラン、ミヨー・ミロ一、ネヨー・ネロ一、ミ一・  
ミレ、ネ一・ネレの如く2形が認められる。

ハ) 動詞の連用形における音便現象は次のようにならわれる。

イ音便 カ行五段・ガ行五段・サ行五段

ウ音便 バ行五段・マ行五段・ハ行五段

撥音便 ナ行五段

促音便 タ行五段・ラ行五段

この音便現象に伴って生ずる連母音上の問題は音韻の条を参照していただ  
きたい。ハ), ト)についても同一条を参照していただきたい。

ニ) カ変動詞の志向形はコーという形をとる。

ホ) 変動詞の命令形はセーという形をとる。

ヘ) 形容詞の終止形・連体形の語尾はイである。また、

ト) 連用形にはウ音便形がある。

カ) 形容動詞の終止形語尾は連体形の場合と同様にナ語尾が優勢である。  
また、

リ) 仮定条件にはシズカナケリヤ一のような形の用いられることが多い。

ヌ) 指定の助動詞はジャ～ヤによる。

ル) 打消・打消過去はそれやれン・ナンダによる。

ロ) 過去推量にはツ口を用いる。

ワ) 結果存続にトル、現在進行にオル～ヨルを用いる。

カ) 対象を示すのにミテを用いることがある。

コ) 理由原因を示すのにスカを用いることが多い。

ク) 間投助詞的にノーラが多用される。

リ) その他。反射代名詞としてワカが用いられる。また自称にオレ・ワ  
シ、対称にオマエが男女上下の別なく普通である。間投助詞的にはノー  
ラのほかノー・ナーも聞かれるが、ナーはやや少いようである。ノーラ  
が最も親しみを感ぜさせると言う。この3形の間に特に待遇関係は意識  
してないようである。

## B 話者・録音環境等

1 昭和50年8月9日 録音

2 奈良県吉野郡十津川村字谷垣内 川崎神社拝殿

3 話し手

A 後木 弘 (男) 大正11年生まれ 農業  
尋常高等科(8年)卒 第2次大戦中兵役2年の経験  
父は那知合の出身 母は谷垣内の出身

B 泉谷 正彦 (男) 明治35年生まれ 農業  
尋常高等科(8年)卒 在外歴なし  
父は谷瀬の出身 母は那知合の出身

C 東 小で子 (女) 大正2年生まれ 農業  
尋常小(6年)卒 在外歴ほほとんどなし  
父母ともに谷垣内の出身

(司会者)

大野 寿男 (男) 大正14年生まれ 教員  
大学卒 父は那知合の出身 母は十津川小井の出身

(介添役)

深瀬 政晴 (男) 明治33年生まれ 農業  
尋常高等科(7年)卒 父は重里の出身 母は谷垣内の出身

## 4 録音状況

大野氏に話し手の人選および司会を依頼し、話し手A、B、Cのほか、介添役として字の長老深瀬氏および担当研究者後藤和彦が同席した。

話題は十津川の暮らしについて、とくに養蚕、子弟の教育、それからの生業、金踊りなどをめぐって跡切れることなく、録音は極めて円滑に行われた。今回の事業に対する話し手ほかの心証も良かったと思う。

十津川の暮らし(1)

話し手(司会者・介添役も含む)

(略号)	(氏名)	(性)	(生年)
S	大野壽男	男	大正14年生
K	深瀬政晴	男	明治33年生
A	後木 弘	男	大正11年生
B	泉谷正彦	男	明治35年生
C	東ひで子	女	大正12年生

S アー ナカブ<sup>(1)</sup>ラノ オジーワ ソノ<sup>(2)</sup>ー カイコー イマ オジート  
 ああ 中村<sup>(1)</sup>の 小父は その 蚕<sup>(2)</sup> 今 小父<sup>(1)</sup>の  
 コ カイオル。 カイコー。  
 所 飼<sup>(3)</sup>っている。 蚕<sup>(2)</sup>。

K ヨーヤク コーテ<sup>(4)</sup> コナイダ ダシタバ<sup>(5)</sup>ッカリジヤ。  
 ようやく 飼<sup>(4)</sup>って この間 出した<sup>(5)</sup>ばかりだ。

S アー ジャーカ。  
 ああ そうか。

K ウン。  
 うん。

S イマトー ムカシト ダイブ チカウ<sup>(6)</sup>ンジャロ。 カイコノ カイ  
 今と 昔と 大分 違うの<sup>(6)</sup>だらう。 蚕<sup>(6)</sup>の 飼<sup>(6)</sup>..  
 カタジヤトカ。  
 方<sup>(6)</sup>だ<sup>(6)</sup>か。

K ソリャー 千かうヨ。  
それは 遠うよ。

S ソレ イッパン チョットノー アノー オジー ハナシー……。  
それ(を) 一遍 一寸ねえ あの 小父 話し……。

(咳) オジートコ ムカシー カイコ サカンジャッタワノーラ。  
小父(の)所 昔 蚕(が) 盛んたつたわねえ。

K オー。 オレヲノ コドモノ トキニワノ ソノー カイコ カウ  
アア。 俺等の 子供の 時にはね その 蚕(を) 飼う(は)

ユータラ チサンカラ モー クワオ トッテ キタ ヤツオ  
言ったら 祖蚕から もう 桑を 採って 来た ヤツ

キザンデ ソレモ エー オーカタ コー ハオ ミテノー メオ  
刻んで それも ええ 大方 こう 葉を 見てね 葉を

ミテ コー イチバン アノー ヨー ノビタ トコガ ソレカ  
見て こう 一番 あの 良く 伸びた 所が それが

アノー イチバン マ ミ イットル ハジャッテ ユー ワケ  
あの 一番 ま 身(が)入っている 葉だから 言う 訳

ジャ。 ソレオ マー キジュンニ シテ ソコオ イチバン サ  
た。 それを まあ 基準に して 其処を 一番 最

イショニ トッテ ソレオ マー ツンデ <sup>××× ××× ×××</sup>チサン アノー ギサ  
初に 採って それを まあ 摘んで 祖蚕 あの 蟻

ンジャイ。 アノ カヤッタ ヤツオ ギサンチュー。 ソレニ マー  
蚕だわい。 あの 孵った ヤツを 蟻蚕と云う。 それに まあ

キザンデ タベサシタモンジャ。 ソレモ アノ コツチデー  
刻んで 食べたものた。 それも あの 此処で

アノ ヨーザンギシガ クルマデワ ジブ<sup>(10)</sup>ンラデ ソノママ キ  
あの 養蚕 技師が 来るまでは 自分等で その 終 刻



ザンデ コー タベサシタモンジヤケント ソレカ アノー ヨー  
んで こう 食べさせたものだから  
それが あの 巻

ザンセンセー キテカラニワ コー フルイオ カケテノー コマ  
委先生(が) 来てからは こう 篩を 掛けてぬ 細

(11)  
カー キッタ ヤツ フルイオ カケテ ソレデ コー カ<sup>xxx xxx</sup> ヤ  
かく 切った 奴(と) 篩を 掛けて それで こう 飼<sup>xxx xxx</sup> や

ッタモンジヤ。 ソレワ ナカナカ ウマク ヤッタモンジヤケン  
ったものぞ。 それは なかなか うまく やったものだから

ドナ ソレカ ムカシト イマトノ チカイワ イマワ ソノー ソ  
それが 昔と 今との 違いは 今は その 昔

ー シテ キザンダノモ ヤルシ アルイワ ソノ ジンコーシリ  
う して 刻んだのも やり 或は その 人工飼

ョー ユーテ コンダー ネリヤクノヨーニ コシラエタノモ ヤ  
料(と) 言って 今度は 練葉の様に 扱ったのも や

ルト。 マ ソレデ ダイブニ ソノー マ カイカタカ カイ  
ると。 ま それで 大分 その ま 飼の方が 改

リョーセラレタ。 ソノー チサンワ ソーデ アルシ ソレモ一  
良せられた。 その 雑糞は そうで あるし それも

マ タニカイトーワ トクニ ナチアイ タニカイトート ユー  
ま 谷垣内は 特に 那知合 谷垣内と 言う

トコデ アノー トツカワテ ハジメテ チサンノ キョードー  
所で あの 十坪川で 初めて 雑糞の 扱 同

シイクジョーオツクッテ ソレデ マ キョネンカラ ハジマッタ  
飼育場(と) 違って それで ま 去年から 始めた

ワケジャ。 ソレニ ヨッテ アノー イママデ チサンキョー  
訳だ。 それに 依って あの 今まで 雑糞扱<sup>xxx xxx xxx xxx xxx</sup>

アノ チサンシイクスルノニ カクカテデー スコシズツ ヤル  
 あの 継養飼育 ねのには 各家庭で 少しずつ 上  
 ノーカ° ミンナカ° テカ° カカッットッタ ヤツオ マ ニサンニン  
 のか 皆か 手か 掛かっていた 奴と ま = 三人  
 ノ モノカ° セワシテ ヤルンデ° チサンチュエノ シゴトワ ミ  
 の 者が 世話して やらんで 継養中の 仕事は 皆  
 ナ アノー メンメニ ジブシノ ウチノ シゴトカ° デキル。  
 あの 娘とに 自分の 家の 仕事か° でまよ。

マ コー ユーヨーナ マ トクテンガ° デキタト ユー ワケ  
 ま こゝ 言う様な ま 特典か° でまよと 言う 訳  
 ヤノー。

たね。

S ジャーノー。  
 そうだね。

K ソーシテ マタ アノー ムカシーワ アノー ワタシラーノ マ  
 そうして 又 あの 昔は あの 叔等の ま  
 コンドモジブシニワ ソノ マブシ ユーテモ アノー コシラ  
 子供時分には その 養(と) 言っても あの 様と  
 エタノー ナシニー アノー ヤシマノ トシカーノ エシダヤト  
 たの(で) 無いに あの 山の 梅の 枝た(と)か  
 カ アルイワ ソノー シシダヤトカト ユーヨーナ モノオト  
 或は その 茜朶た(と)かと 言う様な 物と 様  
 ッテ キテ アノー マユ ツクラシタ。 ソレカ° アノ チョッ  
 って 来て あの 繭(と) 作らした。 それか° あの 一オ  
 ト ソノ カワッテ キテ コシダ° オリマブシチュエテ ワラオ  
 その 変わって 来て 今度は 織 簾と(と)言つて 簾と

コー オッテ マブシニ シテ ソレデ ツクラシタ。 ソレカ  
こう 織って 簾に して それで 作らした。 それが

マタ ダンダン カワッテ コンドウ アノー ムカトデマブシ  
又 段々 変わって 今度は あの 白足 簾と

ッテ ユーヨーナ モノオ コシラエテ ヤッタ。 ソレカラ コン  
言う 採り 物と 揃えて やった。 それから 今

ダ ナワマブシト ユーヤツマ コノ ナワマブシガ イチバン (咳)  
度は 概 簾と 言う 奴も この 概 簾が 一番

エー ナンテ マユ ツクラセルノモ カンベンテモ アルシ シ  
ええ 何で 繭(玉) 作らせるのも 簡便でも あつて 上

ョーズニ ツクリモ シ マタ アノー マユカ ハヨ デキルト。  
手に 作りも し 又 あの 繭が 早く できるよ。

ソレカ マー イチバン ナガイ コト ヤッタ ワゲサノー。  
それが まあ 一番 長い 早 やった 訳さね。

ソレデ アノー マユ ツクラシタ。 ソレカ ダンダン コ  
それで あの 繭(玉) 作らした。 それが 段々 今

ンダ カワッテ キテ コンダ カイテンマブシ ユーテ (咳) ホ  
度は 変わって 来て 今度は 回転 簾(玉) 言つて

ールカミテ コー クンダ ヤツ イッコ イッコ デキル ヤツ  
ホール 紙で こう 組んだ 奴 一箇 一箇 できる 奴

ソノー マー カイテンマブシチユーノオ ツクッテ イマワ  
その まあ 回転 簾と 言うのも 作って 今は

マー ハックブマデワ ソレオ ヤッテ ソノー ジョーゾク  
まあ 八九分までは それを やって その 上 簾

シーカネルノジャトカ アルイワ ハジメニ チョット テカケタ  
1 かわりのたてとか 或は 初めに 一寸 出掛けた

ノジャトカ ユーノオ ナワマブシ ツカウグライニ シテ ダイ  
 のた<sup>た</sup>と<sup>か</sup> 言うのと 繩<sup>ひ</sup> 籠<sup>かご</sup> (と) 使う位に して 大  
 タイカ モー カイテンマブシジャ。 ソレテ マー ノーリツモ  
 体が もい 回転 籠<sup>かご</sup> た。 それで まあ 能<sup>よ</sup> 率<sup>りつ</sup> も  
 アカルシ ジョーゾクモ ハッキリスルシト ユー コトニテ  
 上が<sup>あ</sup>り 上 籠<sup>かご</sup> も はっきりするしと 言う 身<sup>み</sup>で  
 マ ソー ユーヨーナ ツゴード イマワ カワリカタカ ソー ユー  
 ま そう 言う標<sup>め</sup>な 都合<sup>ごうご</sup>で 今は 変<sup>か</sup>わり 才<sup>さい</sup>が そう 言う

ツゴードナンジャ。  
 都合<sup>ごうご</sup>なのた。

S ジャーノ。 アノー <sup>(12)</sup> ミナミノ シヤ。 アノー  
 そうな<sup>な</sup>ね。 あの 南<sup>みなみ</sup> 衆<sup>しゆ</sup>上<sup>じやうじやう</sup>。 あの

A ウン。  
 うん。

S アレジャロ。 トツカワデ ソノー カイコ カイダシタチユノワ  
 あれだ<sup>だ</sup>らう。 十津川<sup>しづがわ</sup>で その 蚕<sup>かいこ</sup> (と) 飼<sup>かひ</sup>い出した<sup>い</sup>た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>言うのは  
 ダイブ フルインジャロト オモーケンドヨー。  
 大分 一回<sup>いちど</sup>のた<sup>た</sup>らうと 思<sup>おも</sup>うけれ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>ね

A ウン ウン。  
 うん うん。

S ナンシテ ソノー トツカワー ソノー カイコ カウヨーニ ナ  
 どうして その 十津川<sup>しづがわ</sup> (は) その 蚕<sup>かいこ</sup> (と) 飼<sup>かひ</sup>う<sup>う</sup>標<sup>め</sup>に た  
 ッタカチユヨナ コト ソリヤ マー アノー ミナミノ シト  
 、たか<sup>たか</sup>と<sup>と</sup>言う標<sup>め</sup>な 事<sup>こと</sup> それ<sup>それ</sup>は まあ あの 南<sup>みなみ</sup>の 衆<sup>しゆ</sup>と  
 シテワ ドガーニ オモーヤ。 \*  
 しては とん<sup>とん</sup>に 思<sup>おも</sup>う。

A ヤッパリ ナンジャ口ト オモ一加ヨ。 モ コッテナ アノ一  
 矢張り 何だろと 思うよ、 も 此方には あの

(14)  
 ミタトリーニ ホンマニ ヒツタテバタケジャノ一ラ。 ホンマニ。  
 見た通りに 本当に 仏、たて 畑 だ。 本当に。

(15) (16)  
 ソヤシ シヤ ホテ モー ノ一ラ オトコシラチューカーノ一  
 そうだ(シ) ねえ ぞい もう ねえ 男 象 等と 言うかね

(17)  
 オヤジラ モー オーカタ ヤマエ イテノ一ラ ヤマハタラキ。  
 親 爺 等(は) もう 大方 山へ 行ってねえ 山 倒さ。

(18)  
 ソレモ チカ チカデ アリヤ イーケント ダ ホンマニ チ  
 それも 近 <sup>xxx xxx</sup> 近くで あれば だ、(け)ねえ ね 本当に 近

(19)  
 カジャ ソリカーニ アリヤ センシヨ シヤ オーカタ アノ一  
 くでは そんなに ありは しろ(し)よ ねえ 大方 あの

(20) (21)  
 トマリヤマ ユーテノ一 シブッ <sup>xxx xxx xxx</sup> コオ オーテカラノ一  
 泊り山(七) 言ったね しぶ、(こ)こ しぶ、(こ)こ 買ったねえ

(22)  
 ラ シブッ コチュータカノ一ラ アノ一 クサラ オーテヨ 杉ヤマ  
 しぶ、(こ)こ 買ったよ ねえ あの ぐさ(ら) 買ったね ぞい 山へ

(23) ダ  
 エ イテ ホテ ランポデ アカーテカラ スキ <sup>xxx xxx xxx xxx</sup> シバ スキシバー  
 行った ぞい ランポで 明かして ね 杉 柴 杉 柴 (七)

ター <sup>xxx xxx</sup> イブツテヨ タヌキアナー クスブルヨーナ サワキミタ  
 焼い しい(て)ね 狸 穴(七) 火 燻 標 ね 馬 ぎ みた

(24)  
 一ナ コト シテ メシユ一 ターテ クーテ シオリ ホテ カ  
 いね 芋(七) (七) 飯(七) 炊(七) 食(七) (七) ねえ ぞい

(25)  
 カーラフノ一ラ ウチデ オツテカラ オマエ ノ一ラ オマエ  
 嬢 等(は) ねえ 家(七) 居(七) ねえ ねえ ねえ ねえ

ホンマニ カネニ ナル シゴトチューテノ一 ヒツタテバタケデ  
 本当に 金(七) (七) 仕事と 言ったねえ 仏(た)て 畑(七)

キビヤ アレオ ツクットッタチューテノーラ ソンカーニ カ  
奈ヤ むれを 作っていらと書いてねえ そんなに 全

ネニワ ナリヤ センシ……。 マ センセンジャケントノーラ。  
には なりは しない……。 マ 単独前を付けてねえ。

(26)  
ホテ<sup>(26)</sup> ヤッパリ ナントカ シテ オヤジュー タスケンナラン  
それと 矢張り 何か して 親爺を 助けやばらねえ

ト オモーテ ダヨ テ マ ヤッパリ ソノ タメニワ ホカニ  
思つて ね それと ま 矢張り その 為には 他に

モーグサユノワ アリヤ セン。 ヒツタテバタケテ<sup>スリヤ</sup> ホカニ  
儲けを言うのは ありは しない。誰か 吐いて 火田で 他に

カネ ハール モノワ ナーシヨ。 ホンテ シヤ ヤッパリ ク  
金(の) 入る 物は 無いよ。 それと ね 矢張り 柔

ワジャッたらノーラ ハイスイチューカノーラ ハイスイカ<sup>イ</sup> イー  
たつたねえ 排水を言うかかえ 排水か 良い

シヨ スルシ シヤ マー イチバン マー フクキョーテ<sup>ヨカ</sup> ヨカ  
(よ す)し ね まあ 一番 まあ 副業で 良い

ローチュー コトデ<sup>マ</sup> マー カ<sup>xxx</sup> カカラー カイコー コーテヨ  
うと云う 事と まあ か 娯楽(は) 套(は) 飼つてよ

ナニ ショッタ。 ホテ マー センコ サッキ ナカブ<sup>ラ</sup>ノ ジ  
何 してた。 それと まあ 戦後 さっき 中材の 弁

一サン ユータヨ<sup>ニ</sup>ノーラ モー ヤッパリ ハンマイ ナケリ  
さん(か) 言った様にねえ もう 矢張り 飯米(か) 無け

ヤノ<sup>一</sup> ナンチューテモノ<sup>ラ</sup> アノ イショク タツテ レーセ  
ればね 何か書いてもねえ あの 衣食 足つて 礼節

(27)  
ツ スイ<sup>(27)</sup>チューヨ<sup>一</sup>ナ コトデ<sup>ノ</sup>ラヨ<sup>一</sup>。(笑) ホンテ ヤッパ  
知りと云う様ね 事とねえ。 それと 矢張り

リ モー コリヤ シヨ アラセン。 モー ニッポン マケタ  
もう こわは 任探(か) ない。 も) 日本(か) 負けた

トキワ ナニカ ナンデモ オマエ クー モノカ ナカッタウ  
時は 何か 何でも お前 食う 物ヲ 無かつた

シヨ アラセンジャロチユ一ヨ一ナ コトデナ。 ホンデ" マ モ  
任探(か) ないた"うと云う探取 尋ねた。 ぞわて ま せ

一 ソレオ クワ ヒ ッ キオコイテナ ホシテ ナニジャ ムキユ  
う それと 葉(と) 引き起(は)ね それ 何だ" 是と

一 ツクッテノーラ ホンマニ ム ッ カチ エ ッ ライ サ ン キョー  
作"たわえ 本当に 葉搦ち 大変な 作業

オレラ ム ッ カチスルチユ一タラ アノ一 カブレサ ン カ一テ  
俺等(は) 葉搦ちた"と云うた" ちの 一面にかぶれて

一 ラ アレルギ一タイシツ オラー モー ムキカチユ一 スル  
アレルギ一休養 俺は もう 葉搦ちて ち(と)

ユ一タラ ナンジャ ッ タヨ。 ヤ ッ キョク イテカラノ一ラ アノ  
言"たら 何だ"たよ。 葉局(は) 行"たわえ ちの

一 チューシャ ウ ッ テ モロータリヨ (笑) クスリ モロータリ  
注射(と) 打"た 貰"たわよ。 葉(と) 貰"たわ

スルヨ一ナ サワギユ一 シテノーラ シタンジャ ッ タ。 ソレ  
た"探取 騒ぎを してわえ したの"た"た。 ぞわ

デモ シカター ナー。 マー クー モノ ナケリヤ一 シヨ ナーワ  
でも 仕方(は) 無い。 食う 物(か) 無ければ 任探 ないわ(と)

ユ一テ ヤリヨ ッ タ。 ダンダントナー ショクリョ一シ"シ"ョ一  
言"た や"ていた。 た"ん た"ん"とね 食糧 事情(か)

ヨ一 ナ ッ タチユ一カナー。 ハンマイデ"ソロー イ ン キタス  
良く 何"た"と云うかね。 飯米(か) 出揃"って 行"た 来た"か

(32) カニ コンダ ヤッパリ コンダ カネノ ネウケン デテ キタ  
今度ハ 矢張り 今度ハ 金の 値打が 出て 来た

チュンジャロカ。 カネガ アッタラ ナンデモ カエルチューヨ  
と言うのどうか。 金が あつたら 何でも 買ひに言う程

ーナ ジダイニ ナッテ キタスカー ソー ナッタウ マタ コ  
時代に 取つ 来たから とう 取つた 又 今

ンダ クワー ウエタ ホー カイコ コーテ カネ モーケタ  
度ハ 巻(エ) 植(エ) オ 巻(エ) 飼(エ) 金(エ) 儲けた

ホーカ マッシャノチューヨーナ コトテナ ホンデ ソガーニ  
オカ 増した奴と言う程 幸(エ) 是れ(エ) 是れ(エ)

サキーモ ユータヨーナ ソソ センセーラ ユー。 ソラー ク  
前(エ) 言った程に 是(エ) 先生等(カ) 言(エ) 是れ(エ) 巻

(34) ワ コーテ イチバン マシンジャーゼチューヨーナ ハナシカ  
(エ) 飼(エ) 一番 増した世(エ) 言う程 儲(カ)

アレシタスカ ホンジャ ヤローカチューテナー ダンダン フェ  
エホ したから 是れ(エ) 是(エ) やアうかと言(エ) 段(エ) 増(エ)

テ キテ イマ ナンジッコ ヨンジッケンカ ナンボ イエン。  
来(エ) 今 何十戸 四十軒(カ) いく 家の。

トツカワネ コートルジャ ナー ワケナンジャロート オモンジャ。  
十坪(エ) 飼(エ) 是(エ) 無(エ) 訳(エ) の(エ) 思(エ) の(エ)

S マツヤノ アノー ジーサントコラヨー ムカシカラ カイコー  
松屋 是(エ) 爺(カ) 所(カ) は(エ) 昔(カ) 巻(エ)

サカンニ カウ トコジャッタワノーラ。  
盛(エ) 飼(エ) 所(カ) だ(エ) ち(エ) わ(エ) 。

B モ オレワ ナンジャワ。 シチジュースキジャケント モ ゴジ  
も(エ) 俺(エ) 何(カ) わ。 七十(カ) 過(カ) だ(エ) ち(エ) ち(エ) 五(カ) ナ



ユーネンライ カワラズ ショット (36) シューセシノ ハル イッカ  
手 末 変わりが していて 終戦の 春 一回

イダゲジャ。 (37) トーシ コートルワ。 ソレニ ユートーリ (38) マ  
だけた。 通し 飼っているわ。 それに 言ひ通り ね

ショクリョーモ ジャーケンド ハンダカデ シゴト デキント  
食糧も そうだけれど 裸で 仕事(は) できらへ

モー フクロー トイテノーラ サルマタニ シタリ ジバンニ  
もう 袋(は) 商売してかえ 猿 股に したり 操伴に

シタリ シタワノーラ。 ソンデー ハルサキワ カイコ カウ  
したり (たかかえ、) それで 春先は 蚕(は) 飼ひ

コトか デキナーシナー。 カネモ ジャーケンド ヒトツ キモ  
事が できらへ(か)。 金も そうだけれど 一っ 着

ノ コサエンナ シゴトン デキントモーテ。 サー ソレカラ  
物(は) 振らへ(は) 仕事か できらへ(は) 思ふ。 さあ それから

カー オリヤ…… (39) オンダゲジャワズーット コータノワ。 セ  
xxx xxx 俺は……。 俺だけだわ ずうと 飼ったのは。 戦

ンゼンア/セシゴズーット。  
前 あの戦後 ちと。

A ジャー ジャー。 ホンマニ マツヤノ ジーサンダゲジャッタワノ  
とじ とじ。 本当に 松屋の 爺さん だいた、たかかえ、  
ーラ。

B ~~~~~ ホンデ アノー ナンジャ (40) ケンカラ キテ アノー シ  
それと あの 何だ 県から 来て あの

モイ午ニ (41) シドーシャチュテフ ケンガクニ コイ ユーテ キテ  
下市に 指導者とす、わか 恩恵に 来(は) 言ひ 来て

ソレデ' カエッテ キテ マ ソノ一 ミンナ ミセテ モロー  
それと 帰って 来て 又 その 皆 見せて 賣った

タ オレーニ ヒトツ トツカワニ ヨーザン フヤスワイッテ  
お札に 一つ 十連川に 養蚕(七) 増やすわ"って

ユーダッタンヤ。 ソレカラ マ ダイタイ ニシカワノ ホーイ  
言ってやったのだ。 ほかから 又 大休 西川 a 赤は

(43) ミテ ウンドーシタンジヤカナ。 ホレデ' カウ カーコ カ  
文にして 運 動 したのだよな。 それと" <sup>xxx xxx</sup> 「養(七) 飼

ウカ イーノーラチュー シモ アリヤー カイコカヨーチュ シ  
うか 「良いわえ」と言う 象士 あとは 「養かかえ」と言う 象

モ アルシノラ。(笑) ソレデ' ソレカ' ダンダン タ アノー イ  
も あついわえ。 それと それか' 殺さ ね あの 今

マ ユートーリニ フェテ キテノーラ チヨイッチヨイ チヨイッチヨイ  
言う通りに 増え 来いわえ ちよいちよい ちよいちよい

(44) カイシテ イマ ダイブン デキトル キトルケント' ダイタイ  
飼いして 今 大分 できている できているけれど 大休

ソー ユー フーニ シテヤナ センテ"ンシタ ワケジ"ヤ <sup>~~~~~</sup>  
そう 言う 風は したわ 宜伝(七) 訊た

(46) ソシテ マー キボーモ ナニシ。 ソシテ マター マ スギ  
そして 夫 希望も 何。 それと 又 又 杉

ヤ ヒノキ ウエヨルケント' スギヤ ヒノキ ウエテモ サンジ"  
桧(七) 植えていってあげて 杉や 桧(七) 植えても 三十

ユーネンモ シジューネンモ <sup>カ ター</sup> カネ ハイル クワ  
年も 四十 年も <sup>xxx xxx</sup> 金(七) 入る 口(七)

(47) ハイリヤ センシノーラ <sup>ソヤケド</sup> クワ ウエタラ モ コトシ  
入りは (ちい)わえ それで"あげて 乗(七) 植えては ちい 今年

ウエタラモ コトシ アキカウ モ カネニ ナルンジャ。 ハタ  
植え込め 今年の 秋から お 全に なるのや。 儲か...

ラータラ ハタラータダケ カネニ ナルンジャ。 イチバン イー  
たさ 儲かたけ 全に なるのや。 一番 良...

チューテノー ソレデ" <sup>(48)</sup> ワカモ ヤ ヤットルカラ。 イマモ ヤッ  
と言ったね そとで 自分も ~~xxx~~ やつていから、 今も やつ

トルシヨノ一ラ。(笑)

ていしよわえ

A オリヤ マツヤノ ジーサンカ マシネシテノー ホンデ" オレト  
俺は 松屋の 爺さんの 真似にね そとで 俺の

コロノ オレトコモ ダイター オレトコノ ハジメタチューノワ  
所の 俺の所も 大体 俺の所の 始めにと言うのは

オレトコノ カカーノ一 マツヤノ ジーサンニヨ キーテカラ  
俺の所の 嬢(か)か 松屋の 爺さんに 聞い

マツヤノ ジーサン ホンマニ ヤッパリ ミナミノ カカーヨ。  
「松屋 爺さん(か) 『本当に 矢張り 南の 嬢よ。

カイコー コーノ イチバン マシンジャーゼ"チューテ ユーゼ"チ  
蚤(と) 飼いの 一番 増したとせと書いた 言うせ」と

ユージャ"チューテヨ一。 <sup>(49)</sup> ホネカラ ナンジヤツタ。 ニグラムハン <sup>(50)</sup>  
言う(の)に」と言ったね。 そとで 何だのや。 ニグラム半か

カ ナンホノ一ラ。シテホッテ シタラ ヨーガンセンセ一 キタラ  
いくらね。 してそして そとで 養蚕芝生(か) 来たさ

オマエ マシマゴトアソビミタイナモンジャチューテナー (笑) ヌ  
「お前 飯事遊びみたいなものや」と言ったね ~~xxx~~

ワ <sup>(51)</sup> イワレタジヤケント" ソレカラ ホンデモ ダンダン ヤッパ  
~~xxx~~ 言われた(の)だけかと そとから そとでも 段々 矢張り

(52)

リ コリャー マシジャートモータ カカリソメテ。 マ イマ  
ニナは 増したと思つて 掛つた初め。 ま 今

(53)

マー オレトコ イチバン ヨケークライ カイオレンジャ ッツ口  
まは 他(の)所(か) 一番 余計位 飼つていたのたけわえ。

ノーラ。 ソノクライニ ナッタンジャケント ノーラ。  
その位に なつたのたけわえ。

B オレン イチバン ヨーケ カヨッタンジャケント オレン マケ  
俺が 一番 余計 飼つていたのたけわえ 俺が 負け

夕。 モ コ カイコ カウノ ヤメナー ションアナー。(笑)  
た。 も <sup>xxx</sup> 蚕(毛) 飼うの 止めわえ 仕舞が 無...

~~~~~  
ワルイシ。(笑)  
悪いし。

S イマワ アノー カイコ カウノモ タ<sup>ん</sup> チャント カイコ カウ  
今は あの 蚕(毛) 飼うのも な ちゃんと 蚕(毛) 飼う

ハヤチューカーノーラ アノー ハナレ ツクツタリ シトルワナ  
部屋と言ふかねえ あの 離れ(毛) 道(たり) していいわねえ。

ノーラ。 ムカシワ アノー ナンセ ニンゲン カイコ カウダ<sup>ん</sup>  
昔は あの なにし 人間(か) 蚕(毛) 飼う(か)

ツタラ ニンゲン ドクソエ イテ シモータ (B~~~~~笑)  
たらたら 人間(か) 何処(か)へ 行つて しまつて

ノーラ ホチ カイコノ ホーカ カイコカ オーサマジヤッタ  
ねえ そ(毛) 蚕(毛) の 方が 蚕(毛) 王様(だ)ったの  
(笑)  
ンジャ口。  
だらう。

B ソー ソー。  
さう さう。

S (55)  
 ホタウ フデコネーウ。アノー ワカイ ジブンニ オトーワ ヤ  
 といふ おて子姉等。 あの 若い 時分は お父は 山に  
 マイ イクシ ホタウ オナコシヤ コドモウデ カイコ コータ  
 行くし さいたし 女子衆や 子供等と 蚕(モ) 飼ったウ  
 ンジャロート オモーフ。ヤッパリ ノーウ。  
 だ"334 思うわ。 矢張り ねえ。

C (56)  
 ワタシガ チーサイ トキニワナ。  
 私が 小さい 時にはね。

S  
 ソノ ハナシ イッペン チョット。  
 その 話(モ) 一巻 一丁。

C  
 ワシラ ダイタイ カウ ユーテモ クワツミクワイノ コトデ  
 僕等(は) 大体 飼う(モ) 言(モ) 桑 摘み位  
 ホカワ ミナー オヤウカ シタシナー。 ソンデ クワ ツム ガ  
 他は 皆 親等が したわ。 かねて 桑(モ) 摘む 学  
 ッコーエ イク イキ カイツテ キテカウニヤ クワ ツンデ。  
 娘は 行く <sup>XXX XXX</sup> 帰(モ) 来(モ)かゞは 桑(モ) 摘んで。  
 (笑) ホンニモ オンドリ ミセテ モウイー ヨー イカンクラ  
 盆(モ) 踊り(モ) 見せ(モ) 貰(モ)い(モ) よう 行(モ)か(モ)る(モ)位に

(57)  
 イニ (笑) クワ クワツミシテ。 ソカンニ ネブタカッタウ モー  
<sup>XXX</sup> 桑 摘み(モ)わ。 「そんなに 眠(モ)か(モ)ら(モ)さ(モ)う(モ)も」  
 オドリ イクナ。(笑) カイコ カワシテ モロタモンジャ <sup>innu</sup>  
 踊り(モ) 行く(モ)な(モ)。 蚕(モ) 飼(モ)わ(モ)し(モ)て 貰(モ)った(モ)もの(モ)だ(モ)ら(モ)た(モ)。

ホシテ ワシ モー カタ エンズイテカウニワ カイコワ  
 せ(モ) 僕(モ) もう 採(モ)付(モ)いた(モ)が(モ)は 蚕(モ)は

(58)  
 ワシウ オブウシテ クレナンダワノ。 オル シュートジーサン  
 僕等 踊(モ)ら(モ)した(モ) 男(モ)ち(モ)かつ(モ)た(モ)わ(モ)ね。 居(モ)る(モ) 罿(モ) 爺(モ)まん(モ)か(モ)。

カ センブ ナブッテ。 モー イエノ コト クサカリヤ ナニ  
全部 贈って。 もう 家の 草 草 刈りや 何と

モカモバッ カシジヤ ッタ。 ソンデ カイコワ アカン アカンジヤ  
かもはかりたら。 ちかこ 「蚕は いけたい いけたい(の) ？」

ゼ。 カイコノ コトニ ダケワ アカンジヤ。 ワシ。 ガッコー  
蚕の 草をけは いけたい(の) だ。 僕(か) 学校(に)  
(59)

イク ユー トキニ ホン クワツミダケヤ ッタサカノ。 ホン  
行く(に) 言う 時に 来た 桑 摘み たけたらから。 ちかこ

デ カイコカイチュー コトワ ホト ホトント モー オトシヨ  
蚕飼いと云う 事は 殆ど もう 女身作り

リニノ。 モー ガッコー アガッテカラニワ イエニ オラン  
にや。 もう 学校(に) 上がったから 家には 居ない

モノ。 ワシウ モーズー ット ヒトノ デ アケコメト オテ  
も。 僕等 もう ちかこ 人の ちかこ ちかこ ちかこ

ツダイニ イタシ。(笑)  
はいに 行かした。

A ソシタラ ナニカ。 アノ カイコノ シタラデ クソ ヒリカケ  
とした 何か。 あの 蚕の 下等な 屎(を) 糞掛り

ラレテカラ ネタチューヨーナ ソカシ コトワ ナカ オボエト  
らして 寝ると云う 様を さんち 事は 無か 管(に) 入

ランカ。  
ちかこ。

C ソラー アノー ネルチューーワ ネル コトワ ネットワノ。 夕  
ちかこ あの 寝ると云う(の) 寝る 事は 寝るわ。 柳

ナノ タナノ シタデ ネル チュー コトワ ナイケント ヤッパ  
ちかこ 柳の 下で 寝ると云う 事は 無いかと 矢張り

(60)

シノー。(笑) オーゼー カナイジャ ッタデヨ ウチヲヨー。 モー  
ね。 大勢 家内 たらぬからか 家等ね。 も

デシ ミナ オイトルシノー。 ショ<sup>XXXX</sup> ショー バイチユカ ソカ<sup>~~~~</sup>  
弟子(七) 皆 置いていくな。 高亮 と言ふか せん

(61) (62)

一ノ デシ オイタリノ シト ッタサカニ モ オーゼー ジャ。  
弟子(七) 置いていくな (七いふか) も 大勢た。

(63)

アータ ドコエ (笑) ネタ ドコデ ネルッテ ヒトネヤエ サンニンクラ  
貴方 何処へ 寝は 何処で 寝るに 一聞へ 三人 位で

(64)

イズツ ネットワノ。 ガッコージダイワ。(笑) イマ コドモモ一  
寝はわね。 学校 時代は。 今 子供も

コドモウモ一 ヒトリスツ ネルケンドノ。 ワシラノ トキニワ  
子供等も 一人 ずつ 寝るだけな。 僕等 時には

モーズー ット サンニンクラ イ ネルグライ ジャ ッテ。 カイ  
も ずつ 三人位 寝る位であつて。 蚕と

コナユ カイコモ クワツミダケ グライ ジャ ッテナー。  
言う 蚕も 桑摘み だけ位であつてわ。

A ホンマニ コドモジブン ガッコーカラ キタ ッテノーウ モリュ  
本当に 子供 時分 学校から 来つてわに 夕に

一 スルカ クワー テ<sup>xxx</sup>ノ テツダイ。 ホンマニ。  
アか 桑 の 夕に。 本当に。

C ~~~~ モリュ一 サセテ モウラバ<sup>~~~~</sup>カリ クワツミカダケ<sup>~~~~</sup>ジャッ  
夕に させ 賢う ばかり 桑摘み だけ たらぬから。

(65)

夕ニ。 デ アケル エータ ッテ ワシラ ヨー イマ ヨランワ。  
で 上げ(七) 言つて 僕等 よう 今 遅らぬわ。

(66)

シランワ。 ド<sup>xx</sup>ドンナノー アカルヤラ ヒ ヒトノ テチダイ イキタ  
知らぬわ。 どん存の(か) 上がるやう <sup>xxx</sup>人の 夕に(に) 行き

(67)  
 イト オモーテモ ヨー イテ シテ アゲンヨ。  
 たいて 思ったも よし 行った には 再びたのぶ

A ウーン。  
 うーん。

C ソノクライジヤ。(笑) イマ トナリニ フカセサントコ カ、ヨッ  
 その位だ。 今 隣に 深瀬さん(の)所(で) 倒つて

テモ アゲニ イタツタラ イート オモーテモ ソノ ムシカ  
 いても 上げに 行ってあげたら。 たいと 思ったも その 虫さ

ドノ ドノ テードデ アカレンジャヤラ。(笑) イネムリ イネムリ  
 どの どの 程度で 上がりのであらうか。 居眠り。 居眠り(も)

カクゴウイノ コトジャ。 イテモ。  
 かくごうの 事だ。 行ったも。

S マー アノー アレジャロノー。 ソノー コノコロノ コーフ  
 まあ あの あれだろうね。 その この頃の 子は

アカン アカント ユーケンドヨ。 シンボー ナー タロー シゴ  
 いけない いけないと 言うけれどもね。 辛抱(が) 無いとか 仕事

トセンジャー タローテ ア ナンカ コドモカ ワルイヨーニ ユ  
 (を)しない(の)だとかで。 あ 何か 子供が 悪いほどに 言

ーケンドー ホンマワ アノー ソー ジャ ナクテ オヤカ サセン  
 うけれども 本当は あの そうでは 無くて 親が させない

ジャワナ。

(a)だわね。

C ソー。 オヤカ サセンジャワナ。  
 そう。 親が させない(a)だわね。

S サセントイテ デキン デキン デキン。 ソリヤー デキル ハ  
 させないであらう できる できる できる。 たいと できる 答



ズ ナイワノ一ラ。 (C アサデモ)

(70) 無いわね。

朝も

(70)

C アサデモネ オヤラ ハヨ オキーテ オコシタラ イーケント。

朝でもね

親等(64)

「早く

起きよ」

起しな

良いわね。

マダ ヤカマシー トシヨリラン ホーカ、 ハヨ オキー オ  
まだ やかましく、 年寄り等、 方ね 「早く 起きよ 起

キー ユーケト オヤラワ ゼンゼン オキー イワンモン。 ジカ  
きん(71) 言うけね 親等は 全然 「起きよ(71) 言わねもの、 時

ン クルマデ。 (笑) アンマリ オコシヨッタラ マタ バカニ  
間(64) 来たよ。 余り 起しな(64) 又 馬鹿に

サレルニ。 ソカニ オコサデモ オキル トキニワ オキ  
(71) (72)  
されるから。 「そんなに 起さなくとも 起きる 時には 起す

ルワヨ一。 (笑)

るわよ。」

A ホンマニ アン ナンジャノ一ラ。 アノ一 コドモ アバヤカシ  
本当に あの 何だね。 あの 子供(73) 甘やかし

スキルチ ホンマニ ムカシ マタ ホテ コドモ一 キョーサン  
(73)  
過ぎる、 本当に 昔(74) 又 そ(72) 子供(73) 仰山

コシラエタスカデモ アルカ シランケント モ一 キバツタ。  
おんなからでも おか 知らね(74) もう 緊張ね。

オリャー イチバン ウエンジャツツロ。 ジャースカノ一ラ  
(74)  
俺は 一番 上のだらう。 (74) にかのね

ホンテ ガッコウカラ インダラ モリョ シテ ションゼョ一  
そ(75) 学校から 往んだら 守(75) して 小(75) 便(75)

セナカイ タレカツカレテカラノ一ラ (笑) マ ホシテ カワ一  
皆中に 童れからがれてねえ ま そ(76) ツ(76)

イキトーテ カナワンノ口。ホンデ<sup>xx</sup> モーカ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup> ヲリテ<sup>xx</sup> イラ アカンジ<sup>xx</sup>  
行ったこと。 叶わぬよね。 靴を け 川(に) へで 行った 川(に)の(に)で

ホンデ<sup>xx</sup> ヲリ<sup>xx</sup> イラ<sup>xx</sup> ヲリ<sup>xx</sup> イタラ ハンジカン グラ<sup>xx</sup>イ<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup> コイ<sup>xx</sup>チ<sup>xx</sup>ユ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup>ジ<sup>xx</sup>  
靴を 行かせぬ へ 行ったら 「半時間ほど 来いよって言うのだ。

マ。 モド<sup>xx</sup>ッ<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup> コイ<sup>xx</sup>ッ<sup>xx</sup>チ<sup>xx</sup> イワ<sup>xx</sup>レル<sup>xx</sup>ス<sup>xx</sup>カ<sup>xx</sup> ナ<sup>xx</sup>ゴ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup> イ<sup>xx</sup>キ<sup>xx</sup>タ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup>モ<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup>  
「戻って 来いよって 言わぬから 長く 行ったことものなにか  
(77)

ジャ<sup>xx</sup>ス<sup>xx</sup>カ<sup>xx</sup> ジャ<sup>xx</sup> モ<sup>xx</sup>リ<sup>xx</sup>ユ<sup>xx</sup> シ<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup> イ<sup>xx</sup>ク<sup>xx</sup>チ<sup>xx</sup>ユ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup> ア<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup>コ<sup>xx</sup>ッ<sup>xx</sup> モ<sup>xx</sup>リ<sup>xx</sup>  
「では 守りて して 行くと言った 守りて

ユ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup> シ<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup>カ<sup>xx</sup>ラ<sup>xx</sup> オ<sup>xx</sup>マ<sup>xx</sup>エ<sup>xx</sup> カ<sup>xx</sup> ミ<sup>xx</sup>ズ<sup>xx</sup>ノ<sup>xx</sup> オ<sup>xx</sup>ト<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup> キ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup>タ<sup>xx</sup>ラ<sup>xx</sup> モ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup>  
して 前 水の 音(に) 聞いたら もい  
(78)

カナ<sup>xx</sup>ヤ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup> ジ<sup>xx</sup>ッ<sup>xx</sup>ト<sup>xx</sup> シ<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup> オ<sup>xx</sup>レ<sup>xx</sup>リ<sup>xx</sup>ヤ<sup>xx</sup> セ<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup>ジ<sup>xx</sup>ャ<sup>xx</sup>ロ<sup>xx</sup>。(笑) ハ<sup>xx</sup>シ<sup>xx</sup>ッ<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup>  
叶いは じつと して 居れば しないだろう。 走って  
(付1) (79)

モ<sup>xx</sup>ド<sup>xx</sup>リ<sup>xx</sup>ユ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup> モ<sup>xx</sup>ッ<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup> シ<sup>xx</sup>リ<sup>xx</sup>オ<sup>xx</sup> ハ<sup>xx</sup>ラ<sup>xx</sup>カ<sup>xx</sup>ケ<sup>xx</sup>ニ<sup>xx</sup> シ<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup> ハ<sup>xx</sup>シ<sup>xx</sup>ッ<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup> イ<sup>xx</sup>  
戻りて 持って 居て 腹掛けた して 走って 行

タ<sup>xx</sup>モ<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup>ジ<sup>xx</sup>ャ<sup>xx</sup>。 マ<sup>xx</sup>ッ<sup>xx</sup>タ<sup>xx</sup>ク<sup>xx</sup>。(笑)  
ったものだ。 全く。

C ワ<sup>xx</sup>タ<sup>xx</sup>シ<sup>xx</sup>ラ<sup>xx</sup> コ<sup>xx</sup>ド<sup>xx</sup>モ<sup>xx</sup>ノ<sup>xx</sup> ジ<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup>ブ<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup> ガ<sup>xx</sup>ッ<sup>xx</sup>コ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup>ジ<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup>タ<sup>xx</sup>イ<sup>xx</sup>ニ<sup>xx</sup>ャ<sup>xx</sup> カ<sup>xx</sup>ワ<sup>xx</sup>エ<sup>xx</sup>  
私等 子供の 時分 学校時代には 川へ

ヤ<sup>xx</sup>ッ<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup> ヨ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup> モ<sup>xx</sup>ロ<sup>xx</sup>ワ<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup>ヤ<sup>xx</sup>ロ<sup>xx</sup>。 ホ<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup>デ<sup>xx</sup> イ<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup>マ<sup>xx</sup>デ<sup>xx</sup>モ<sup>xx</sup> カ<sup>xx</sup>ワ<sup>xx</sup>エ<sup>xx</sup> イ<sup>xx</sup>  
やって よい 貰わないだろう。 それで 今でも 川へ 行

ク ユ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup>タ<sup>xx</sup>ラ<sup>xx</sup> サ<sup>xx</sup>ム<sup>xx</sup>イ<sup>xx</sup>ノ<sup>xx</sup>。 ジ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup>ッ<sup>xx</sup>ト<sup>xx</sup>。 ア<sup>xx</sup>ノ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup> ミ<sup>xx</sup>ズ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup>オ<sup>xx</sup> ソ<sup>xx</sup>カ<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup>  
く(に) 言ったら 寒いもの。 じつと。 今の 水と さんざん

オ<sup>xx</sup>ヨ<sup>xx</sup>キ<sup>xx</sup>ニ<sup>xx</sup> ヤ<sup>xx</sup>ッ<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup> ク<sup>xx</sup>レ<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup>モ<sup>xx</sup>ン<sup>xx</sup>。 モ<sup>xx</sup> カ<sup>xx</sup>エ<sup>xx</sup>ッ<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup> キ<sup>xx</sup>タ<sup>xx</sup>ラ<sup>xx</sup> モ<sup>xx</sup>  
泳がずに やって 買えないもの。 ち 帰って 来たら ち

ナ<sup>xx</sup>ニ<sup>xx</sup> セ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup> カ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup> セ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup> ユ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup>テ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup> コ<sup>xx</sup>ド<sup>xx</sup>モ<sup>xx</sup>ー<sup>xx</sup> オ<sup>xx</sup>ワ<sup>xx</sup>セ<sup>xx</sup>ラ<sup>xx</sup>レ<sup>xx</sup>ル<sup>xx</sup>カ<sup>xx</sup>  
何(に) せよ 彼(に) せよ(に) 言って 子供(を) 買わせらるるか

(笑) ナンナトノ一 ミナ シタスカニ。 デ カワエ イマデモ  
何なりとぬ 皆 したから。 それで 川へ 今でも

イッテン サムイヨ一ナ~~~~~。(笑) イマノ コドモウワ モ マ  
行って 寒いよな。 「今の 子供等は もう 増

ッシジャチ ユーケト ヤッパシ オヤウカ スルンジャワノ一。  
したがって 言うけれど 矢張り 親等が 子の代わり。

A ソラ ジャー。  
それは そうだ。

C ナカナカ アサデモ ヒチジニ ナラニヤ オキンワ。 ダ' ミンナ  
なかなかな 朝でも 七時に なるわい。 起きないわ。 ね 皆  
モ一。(笑) オコシタラ マー ヤスミンダ'ケナト ネサシタレヨ  
もう。 起こしたら 「まあ 休みの(時)だけなりと 疲さしてやれよ」(ヒ)

ユーテヨ一 ワカー シラニ カキー イワレルモン。 ダ'マッ  
言ってる 若い 衆等に 先に 言われるもの。 黙って

トラニヤ。(笑) アサ ヒチジニ ナッタラ オキテ ゴハン タベ  
いわい。 朝 七時に 起きたら 起きて 御飯 食べて

テ ガッコ一。 ガ'ッコーエ イテ。 イマ ヤスミニ ナットッ  
学校。 学校へ 行って。 今 休みに なるって  
(80)

テモ ツトメル シモ ツトメル シ。 マイニチ。 オトトイ ケ  
勤める 衆も 勤める 衆。 毎日。 兄弟(は) 剣

ントーイ イクノニ (笑) イキヨルケント。 ワシラ ホンマニ ナ  
道に 行くのに 行っているけれど。 衆等(は) 本当に ね

カワエ イク スベモ ナニモ シランワ。  
川へ 行く 術も 何も 知らないわ。

A マー ホンデモ ナンジャロカイ。 ケッキョク ナンジャロノ一  
まあ。 それでも 何だろうか。 結局 何だろうわえ。

ラ。アノー ソンダケ セーカツニ ヤッパリ ラクニ ナッタ  
あの それだけ 生活に 矢張り 楽に 行った

チューンジャロノーラ。ムカシャ ヤリカネタ。オヤラン ヤ  
と言うのだからねえ。昔は ヤリかめた。親等が ヤ

リカネタスカ コンドモ ニクイ オヤワ オリヤ センジャケン  
りかめたから 子供(が) 憎い 親は 居りは ない(の)だけかと

ドヨノーラ モ ワシカラン エライスカイノーラ モ コンドモ  
ねえ もう 自分等が 大変だからねえ もう 子供を

オセチゴローテデモ (81) かせニャー オレナンダケント イマ マー  
せちがらでも させねば 居れなかつたけれど 今 まあ

ドンカーナトノーラ オマエ ヤッテ イケルスカ マーノーラ  
どんなにだってねえ お前 やって いけるから まあねえ

コレデモ ワシカラン カナワン イシカワゴエモンジャック  
これでも 自分等が 叶わない 石川五右衛門たつて

カナワン トキ コンドモー フミダイニ シテカラ ~~テ~~ テロー (82)  
叶わない 時 子供(を) 踏~~×~~台に して 出よう

ト シタチューンジャースカイラ。(笑) マー ドーニカ ワカラン  
と したと言うのだからなあ。 まあ どうにか 命らぬ

ヤレルカ ~~~~~。ムカシャ ソレ エラカッタンジャーゼト オモータ  
やれるか 。昔は それは 大変だったのだせと 思ってた

ルワ。

やるよ。

S ウン。

うん。

B ハタラカニャー クエナンダスカナー。

働きかたは 食えなかつたからね。

A ソリャ ジャーゼノーラ。 ワシカラン エライスカニ。  
それは そうだぜねえ。 自分等が 大変なから。

B トモ トモが トモカセキ<sup>0</sup>ジャワノーラ。  
xxx xxx xxx xxx xxx  
其 様子を<sup>0</sup>ゆねえ。

(84)

S ヤッパリ ムカシワ エウカッ ツロカイ。  
矢張り 昔は 大変な<sup>0</sup>たらうか。

K ソリャー エウカッタノワ ムロン エウカッタヨ。 ソリャー  
それは 大変な<sup>0</sup>のは 無論 大変な<sup>0</sup>だよ。 それは

アノー コノー アノー オバサンラー ワカイ ジブンニ ミス  
あの この あの 小母さん等(が) 若い 時分に 水

アスビー イッタノカ イカンノカ ヨー オヨクノカ オヨカン  
遊び(に) 行ったのか 行かないのか 良く 泳ぐのか 泳がない

ノカ シラン。 ジブンラノ トキニワノー ワシノ トキワ マ  
のか 知らない。 自分等の 時にはね 僕の 時は まあ

ー アノー ナチオヤガ ハチネンモ アシ ワズローテ センゼ  
あの 父親が 八月も 是(は) 鬼って 全然

ン ヤマエモ カワエモ アノー アスビー イカナンダ。 ダッ  
山へも 川へも あの 遊び(に) 行かなかった。 た<sup>0</sup>

テ イマデモ アノー ヤマリョー カワリョー ヤリタイトモ  
て 今でも あの 山猿 川猿(は) やりたいとも

オモワンシ ア<sup>xxx</sup> イテ アスビタイトモ カンガエン ワケヤ。  
思わない 行って 遊びたいとも 考えない 詠た。

ホンテ モー (咳) カワエ イテ ホンテ モー ミス フトカッ  
それで もう 川へ 行って それで もう 水(が) 多か<sup>0</sup>

タラ コイツ ハイルノ カナワン。 ウカツニ ハイッタク モ  
たら 此奴 入るの(は) 叶わない。 迂闊に 入ったら も<sup>0</sup>

(85)

一 デテ クル ホー ツカニチュー コツチャナー。(笑) ホン  
出て 来ると 方(が) つかないと言ふ 事だね。 それで

デ モー ミズモ アノー フンバリバ ナー ミズン ナカタケ  
もう 水も あの 踏張り場(の) 無い 水の 中たけは

ワ ゴメンジャワ。 ヤマダッ タラノ。 キーワ ナンボ タコーテ  
御免だね。 山だったらね。 木は いくら 高くても

モ ソリヤ カマワンケンド。

それは かまわなれいけれど

A ホンデ オヤラー ウマー コト ユータモンジャ。 アノ ダマ  
それで 親等(は) うまい 事(は) 言ったものだ。 あの 騎

(86)

クラカーテナー。 カワアソビ イタラ アノー ゴーラ オルンジ  
してね。 「川遊び(は) 行ったら あの 河童(が) 居るの

(87)

ャテ。(笑) シリノネオ スカレルンジャチュテ。(笑) シリノネオノ  
たうて。 「尻の根を 抜かれるのたうて言て、 尻の根もね。

(88)

オーノ。 ユータノーラ。

大野。 言たねえ。

S ユータ。 ユータ。

言た。 言た。

A オマエラモ キーツロー。

お前等も 聞いたろう。

S キータ。 キータ。

聞いた。 聞いた。

A オーノヨノーラ。 アノー モー ~~MAX MAX~~ ゴー コレ ミズン ネポー  
大野よねえ。 あの ちう これ 水が 粘く

ナツテノ ヨー アルカンヨーニ ナツテ キタラ サー ゴーラ  
たうてね よう 歩かない採に たうて 来たう 「さあ 河童

ニ ヒッコマレテ シリノネオ スカレルンジャチユーテスカニ  
に 引込まれて 尻の根を 扱かれるのた』と言ってから

ホン<sup>xxx xxx</sup> アノー モー ハヨー コイナ アンマリ ミズィ ツカッ  
あの もう 早く 来いよ 余り 水に 漬かっ

トッタラ アカンジャーゼチユーテカラ ユワレテ。 アカバエ  
ズいたら いけない(の)だせ』と言ってから 言われて。 赤鯰

トリ イケナンダ。(笑) ホンテー ダヨ マークーモノモジャーク  
採り(に) 行けたかった。 として ね 蕎麦 食う物も たわわえ。

ノーラ。 オマエ ムカシャ ホンマニ ウタノ アノ <sup>xxxx xxx</sup> ホン  
お前 昔は 本当は 唄の あの 盆

ウタシジャノ一テモノーラ オマエ ホンカ キタラ ナスビシ  
唄では 無くともねえ お前 盆が 来たら 「茄子 醬

ヨユダキ ジャコ イレテチユーグライ (笑) オマエ ムキー コ  
油炊き 雑魚(を) 入れて』と言う位 お前 「麦(に) 米

メオ マゼテチユーテノーラ ホンマニ ソンカー ナカッタンジ  
を 混ぜる』と言ってねえ 本当は ほんらに 無かったのた。  
(付)

ヤ、 ホンマニ。 ムキノ オーニツケオ クーテノーラ クーテ  
本当に。 麦の 大煮付けを 食ってねえ 食って

マ <sup>xxxxxxx</sup> イッ ホンカ ショーガツシジャ ナケリヤ シロイ メシッ  
ま 盆か 正月で 無ければ 白い 飯と  
(89)

チユーカ コメノ メシワ クワシテ クレリヤー セナンダ。(笑)  
言うか 米の 飯は 食わして 笑れば しなかった。

ホンテ マー アノー ボンカ キタラ ナニヨリモ マー ウレ  
それで まあ あの 盆が 来たら 何よりも まあ 嬉し

シーチユーテモノーラ オマエ コメノ メシー クエルトモ一テ  
い』言ってもねえ お前 米の 飯(を) 食えよ』とって

ノ一ラ。イマ...  
ねえ。 今

B シカシ ムカシーワ ソノ ベンリカ マルカッタスカ カエナン  
しか 昔は その 便利が 恵らぬから 買えぬか

(90)  
ダケユ ワケジヤ。 シブンガ ツクラナンダラ クエンタユ一  
たと言 訳だ。 自分が 作らぬから 食えぬと言

(91)  
ハナシジヤ。 ホンダケジヤノ一。  
話だ。 此れだ付だわ。

S ジヤ一ノ一。  
そだね。

B イマジヤッタラ カネ ダシタラ ナンデモ マワッテ クルスカ  
今だたら 金(E) 出たら 何でも 廻って 来らから

ニ ナンデモ コーテ クエルヨ。 カネ ダシテ カネ ナシニ  
何でも 買って 食えよ。 金(E) 出して 金 無いに

(92)  
カネニ ナル モノ ナシニ シタラ コートイタユ コス"カイ  
金に なる 物 無しに したら 買っておいで 小遣 には

グクニ ナルスカ。 ムカシヤ ソー ソーシ ナカッタンジヤワ  
ちから。 昔は さんなに 無かったのだわ。

。 フカラ ツクラニヤ。 モ コメモ ムコーノ タニノ タニ  
自分等(が) 作らねば。 もう 米も 向きの 谷の 谷

(93)  
バタノ 子一サー トコデモ<sup>タ</sup> ナールイ トコデモ ミナ タ一  
端の 小さい 所でも なる。 所でも 皆 田(E)

ツクッタリ コサエタリ シテ ハタケモ コサエタリ シテ ツ  
作ったり 扱えたり して 畑も 扱えたり して 作

クッテ クータンジヤ。  
って 食ったのだ。



S タカラ ……  
だから

K イヤ。コメワ アツテモ タカカッタシヤローヨ。ドーモ カ  
いや。米は あつても 高かったのぢやうよ。 どうも 買  
ウ キー セナンダチュー コトワ タカカッタニ ナカイ ナイ  
う 氣(が) しなかつたと言う 事は 高かったに 違ひ 無い  
ンシヤノ。   
のたね。

S ソリヤ マー…  
それは ちあ

K モー コーテ クーノニ ソノー ボンヤ ショーカツニダケド  
もう 買って 食うのに その 盒や 正月にだけ 何  
ッカニ アツタチュー コトジヤ ナイ。 ソリヤ アルニワ ア  
ルかに あつたと言う 事は 無い。 それは あつたには あ  
ッタンシヤケド ヨー カワナンダチュー コトヤロ。  
ったのだけこれと よう 買わなかつたと言う 事だらう。

B タカイチュー コトワ ヨースルニ アノ ベンリガ ワルイスカ  
高いと言う 事は 要ねに あの 便利が 悪いから  
エソー デキンスカニ アル イチブニシカ ナースカ タカー  
輸送 できないから 或る 一部にしか 無いから 高い  
チュー ワケジャロ。 モノシカ ヨーケ アツテモ マワツテ  
と言う 訳ぢやう。 物が 余計 あつても 廻つて  
コンスカノ。  
来ないからね。

A ホツテヨー ソノ シンゴトモ マー ノーラ イマ ミタイシヤ  
そしてね その 仕事も ちあ ねえ 今みたいでは

チカッテ ロードーノ チンキンチエーカノーラ アレウモ ヤ  
 違ッテ 労働の 賃金と云うかゆえ あれ等も 夫  
 ッハリ イマカラ クラベタラ ヤスカッタンジャ ナーカトモ一  
 張り 今から 較べたら 余かつたのでは 無いかと思ふ  
 シ ホテ ヤッハリ ホテ コドモラ キョーサン オッタンジャ  
 し 共に 矢張り 共に 子供等(が) 仰山 居ったのたゆわ  
 ワノーラ。オマエ。(笑) ホンマニ ダイタイ ダイタイ クニン  
 ねえ。 お前。 本当に 大休 大休 九人  
 ジューニンチエーノワ ガウジャッタンヨーニ。 イマジヤッタラ  
 十人と云うのは せうたらに程に。 今たらたら  
 コドモ サンニンイジョー ウンダラ アカンダラ ユーテノー  
 子供(8) 三人以上 産んたら いけないとせう 言ッテねえ  
 ラ オマエ ユージャケト ムカシヤ ウメヨ ファセヨ ヒ サ  
 お前 言う(の)だけれと 昔は 産めよ 殖せよ 十  
 一 ヒレ ヒレチューグライノ~~~~~ (笑) キョーサン ウンダワ  
 あ 放れ 放れと云う位の 仰山 産んたわ  
 ナノーラ ミンナ、ホンマニ、(笑) オリヤ ソー ユー コッチ  
 ねえ 皆、 本当に。 俺は そう 言う 事だ  
 ャト オモウンジャ オリヤ。  
 と 思うのた 俺は。

S ソレット アノー コリヤー マー ワシ アノー ソー ソー  
 それと あの これは まあ 儂 あの そう そう  
 ユー ワザト ソカーニ オモウンカ シランケントノーラ ムカ  
 言う わざと そんなに 思うのか 知らないけれとねえ 昔は  
 シワ ソノー マー イマデモ ジャーケント タイテイノ ウチ  
 その まあ 今でも そうたけれと 大概の 家

エ ヤマ タシヨ一ナリト ヤマオ モッテル ノーウ。 ヤマオ  
 ハ 山(ト) 多少ありヒ 山ト 持つていろ ねえ。 山ト  
 ウリヤ イツデモ カネニ カエル コトワ ソー ムズカシー  
 売れば 何時でも 金に 換える 事は そう 難しい  
 コトジャ ナカッ タヤロト オモウン……。 ケドモ ヒトツニ  
 事は 無からなれようヒ 思うの ……。 けれども 一つには  
 ワ アノ一 ヤッパリ ジブン タチカ クー タメニ ヤマオ ウ  
 あの 矢張り 自分達が 食う 為に 山ト 売  
 ルチュ一 コトワ コリヤ一 ソノ一 イエノ ハジジヤトカ ソ  
 うと言う 事は これは その 家の 恥だ"ヒか そ  
 ー ユ一 モノカ タブンニ アツタンジャ ナイカ。 ダカラ  
 う 言う ものが 多分に あったのでは 無いか。 た"から  
 ナカナカ ソノ一 ヨッポト"チ" ナクリヤ ヤッパリ ヤマオ ウ  
 ながなが その 余程で 無ければ 矢張り 山ト 売  
 ルチュ一 ヨ一ナ コトワ アノ一 カッコー フルイ コトジャト  
 うと言う 標は 事は あり 恰好 悪い 事だ"ヒ  
 カト ユ一 コトカ アッ タカモ シランシ ソレカウ モヒトヒ  
 か"ヒ 言う 事が あったかも 知らな"ヒ( それから もう一つは  
 ワ アノ一 マツヤノ ジーサンカ ユ一ヨ一ニ モノカ ナカッ  
 あの 松屋の 爺さんが 言う標に 物が 無から  
 タ。 イマワ モ一 モノ ナンポデモ オーサカト オンナシヨ一  
 た。 今は もう 物(か) いくらでも 大股ヒ 同じ標に  
 ニ アルワノ一ウ。 ダカラ カネサエ ダシヤ アル カエルト  
 あるわねえ。 た"から 金さえ 出せば あり 買えるヒ  
 ユ一 コト。 カカシワ ダカラ ヤマワ アツテモ ゲンキン  
 言う 事。 昔は た"から 山は あ"ても 現金

ソノモノワ モッテ ナカッタ。 テ ユーヨーナ コトデ ヤッ  
そのものは 持って なかった。 て 言う様で 幕で 矢

パリ セーカツカ クルシート……

張り 生活が 苦しいと……

K ソレワ ソレワネ。(咳) ヤマオ ウルノカ ハスカシート ユーヨ  
それは それはね。 山を 売るのが 取かしいと 言うよ

リカ ヤマカ ウレナンダチューノカ ホントノ ハナシ。  
り 山が 売れるのがと云うのが 本当の 話。

S アーソーカ。

ああ そうか。

K ソレ ユーノワノー (<sup>A</sup>ウレナンダ<sup>B</sup>ウレナンダ) イマワノ  
それ(と) 言うのはね 売れたらた 売れたらた 今はね  
(94)

二 イマワ モー カセンジャロト イロイロノ ホーホーニ ヨ  
今は もう 架線たづと 色々の 方法に 依

って チョットノ モノデモ ハコンテ コレルニダ。 トコロカ  
って 一オの 物でも 運んで 来るのた。 所が

アノー ムカシヤッタラ スコーシノ ヤマー ツクットッタッ  
あの 昔たたら 少(の) 山(と) 造っていたって  
(95)

テ ソレー カセンスル ワケジャ ナイシ スラダシシタラ ダ  
それ 架線する 訳では 無いし 修羅本(した)ら 出

シニ カカッテ シモータ モ キリチンモ ナインジャ ヤマダ  
しに 掛かっ (まっ) ても 伐り賃も 無いのた。 山代

イモ ナインジャトカ ユー コトニ ナリヤ ウレナインダチュ  
も 無いのた"とか 言う 事は 本当は 売れないのた"と云う

一 コトナンジャ。 ホンデ モー ベンリノ トコデ ヨケー  
幕のた。 それで もう 便利の 所で 余計

アル トコジャ ナケリヤ一 ウレナンダ。  
あゝ 所で 無ければ 売れなかった。

S アーソーカ。  
ああ そうか。

K ウン。 ウルニモ ウレナンダノヨ。  
うん。 売らにも 売れなかったのよ。

A ソーシヤノ。  
そうだね。

K ウン。 ダユーテ ヤマオ オーキナ ヤマオ モットル ヒトシ'  
うん。 だ(七)言って 山を 大きな 山と 持っている 人で  
ヤ ナケリヤ カネワ ツカエナンダト ユー コトヤ。 ヒンボ'  
無ければ 金は 使えなかったと 言う 事だ。 貧乏  
ーニンワ ツクウニヤ クエンチューー コトヤ。  
人は 作らねば 食えねいと言う 事だ。

A ホッテ ナンジャロ。 ヤッパリ ソノー ヤマノ ネウチラチュ  
そして 何だろう。 矢張り その 山の 値打等と言う  
ーノモ イマト モンダイシヤ ナー。 ホンデナ ムカシナ オ  
のも 今と 問題では 無い。 それでね 昔には 山  
マエ ムキユー イッショート カエタンシヤ ッチューーヨーナ ヤ  
前 差を 一升と 換えたのだからと言う 様だ 山  
マワノーラ シタリ シタチ。 ホテ ガイモクデモジヤロ。 イマ  
はねえ したり した。 所以 株木でもだろう。 今の  
ノ ヤツワ チーソーテモ ナンデモノーラ オマエ ミナ ツマ  
奴は 小さくても 何でもねえ お前 皆 つま  
ミアケテ モッテ ウレルケド ムカシヤー ホンマニ ヒョンケ  
み上げて 持って 売れるけれど 昔は 本当に 妙だ

(96) (97) タ  
ナ ホボラー ミナ クサカー シモタヤロ。 トユーノウ オマエ  
ほぼ算(は) 腐らし(2) しもたやう。 と言うのはね お前

コトシ キッタノ サライネンアタシ オマエ ミヤコー ミル  
今年 代ったのが 再来年あたり お前 都(と) 見る

ヨーナ チョーイ コツジャ ッツロ。  
採ら 遠い 串たつたろう。

S サンネン…… ( B サンネン…… )  
三斗 三斗

A (98)  
クサベラン ハエチヨウタモンジャ ノーラ。  
草べらが 生えていたものだねえ。

S  
ウン。  
うん。

A アレカーナ コッチャスカ ソリャー ヤッハリ……。  
あんな 串たから それは 矢張り。

B トニカク ベンリーカ ワルカッタ。  
兎八角 便利が 悪かった。

S  
ウン。 ダカラ モー……。  
うん。 だから もう。

B ベンリカ ワレイカラ ソー ナルンジャ。  
便利が 悪いから そう なるのだ。

A (100)  
ホテ ドカーナケリャー。 イマー コメン ヒトフクロ ナンボ  
そして どんぐりであれは。 今 米が 一袋 いくら(6)

ユーテ。 ハッセン ~~XXXX~~ ~~XXXX~~ ~~XXXX~~ ~~XXXX~~ ダイタイ ナナセンエンカ ハッセンエン  
言て。 八千 大俵 七千円か 八千円だ

ジャロ。

ろう。

K ナナセン ナナセンエングヤナ。  
七千 七千円だね。

A ホトラ トキニ ドカーニ ナリヤ。アノ ジブシノ ロードーナ  
そいつら 時に どんぢに 白れば。あの 時分の 労働  
ンギン。マ イマヤッ タラ マ オナゴシン ドラ ヤマハラ一  
賃金(は)。ま 今だったら ま 女子衆が 奴等 山松い(に)  
イテモ ダイタイ フツカ ホド イタラ オーカタ コメ ニ  
行つても 大体 二日 経 行つたら 大方 米(加) ニ

ト カエルカナノ一ラ。ホナラ アノ トキ ムカシ ンゴロ ナ  
斗 買えるよねえ。それなら あの 時 音 頃 中

カブラノ ジーサンナント ドカーナモンジャッタ。アノ コメ  
村の 爺さん等(は) どんぢものだった。あの 米

オ ヒトフクロ ニト カウケュータラ ナンゴクゴライ ハタラー  
を 一袋 二斗 買うと言つたら 何区位 働いた

タイ。

かい。

K トカク アノ一 ダシオ スル ヒトカノ一 イチニケ サンジヨ  
兎角 あの 出しを する 人がね 一日 三升(七)

一 ユータンヤ。イチニケデ サンジヨ一。ソレデ マー ア  
言つたのだ。 一日で 三升。 それで 又あ あ

ノ一 ゴロクシヨ一ジャノ一。ソレマデ ゴロクシヨ一 イチニケ  
の 五 六升た ね。 松で 五 六升 一日

デ。

で。

A ソー。ヤッハリ ソンダク チカウケュー コツケノ一。  
そう。矢張り それだけ 違つと言う 事だね。

B イットダイ イットダイ ショートモータラ ナカナカ テンキリ  
 一斗代 一斗代 (上) と 思ったら なかなか 天切り  
 カセキセン ナラナンダスカノーラ。コメ イットダイ。 イマ モー  
 稼ぎ(ない)と 知らなからなからねえ。 米 一斗代。 今 もう  
 オナコシカ ヤマハラー イテ コメ イット イッキニ クレル  
 女子衆が 山 払い(に) 行つた 米 一斗 一気に 呉れる

ワイ。(笑)

わい。

A ソンダケノ チカイ。  
 それだけの 違い。

B ソンダケ チカウンジヤ。  
 それだけ 違うのだ。

S マ ホンデモ アレラシーノーラ マダ。 シコクヤトカ アソコラ  
 3 それでや あれらしいね まだ。 四国ととか 彼処等(に)

アルイタラ チンガ ヤスイウシーセ。 イマデモ。 コノ ヘンワ  
 歩いたら 貸が 安いらしいせ。 今でも。 この 辺は

チンガ イーラシーノ。 ウーン。 ヤマノ チンデモ ナンデモ  
 貸が 良いらしいね。 うん。 山の 貸でも 何でも

1-。 シコクノ...  
 ね。 四国の

B ~~~~~ シコクジヤ チンガ ヤスインジャロシ。 オレモ  
 四国では 貸が 安いのだらうし。 俺も

シコクニ リョコー イタ コト アルカ マ アノ ヘン アス  
 四国に 旅行(に) 行った 事(が) あるが ま ああ 辺 彼

コデ セーカツ デキルカト オモ一 ホド ジャッタ。 ヤマー  
 処で 生活 できるかと 思う 程だった。 山(は)



アッテモノー カネン ナル キン ナカッタワイ。 アノ ヤマニ  
あつてもね 金に なる 木が 無かったわい。 あの 山に  
ノー。  
ね。

A フーン。  
ふうん。

B オソラク アノ トクシマカラ トサエワ アノ イツモ <sup>(106)</sup> ウネオ コエテ イ  
恐らく あの 徳島から 土佐へは あの いっも <sup>峯も</sup> 越えて 行  
クンジャ。 アスコラ ヤマバツカシシヤ ケントナ ヤマニ カネン  
くのだ。 彼処茅(は) 山ばかりだけれどね 山に 金に

ナル キン ナー。 ホンテ' アノー コツチ <sup>(107)</sup> ミテ アノー  
なる 木が 無い。 それで あの 此方(に) 対して あの  
デカセキニ クルンヤナー。  
出稼ぎに 来るのだね。

A アー シコクン シン ヨーケー コツチニ キトルワ。 タ。 ノー  
ああ 四国の 衆が 余計 此方に 来ていられ ね。 ねえ。  
う。 ウン。 ホンマニ ジャイ。  
うん。 本当に そうだわい。

S イヤ、 ソノ デカセキニ キトル シコクシン ユーヨ。 アノー  
いや、 その 出稼ぎに 来ている 四国衆が 言うよ。 あの  
コツチワ チンガ イーチューテノー。 ソンテ' クルンジャチ  
此方は 賃が 良いと言つてね。 それで 来るのだらう。

。 ムコーエ イタラ トテモ ソノー アホクソーテ ハタラケ  
向こうへ 行ったら とこも その 阿呆臭くて 働けない  
ント。 ヤスーテ。 イマ。  
と。 安くして、 今。

C ウチラエモ キトルワ ヒトリ。  
家来<sup>も</sup> 来ているわ 一人。

S ジャロ。  
だろう。

C モー カエ ナカナカ カエランワ。  
もう <sup>xxx xxx</sup> なかなか 帰らないわ。

S カエランヤロ。  
帰らないだろう。

C ウン。 カエラン。 カエラン。 カエッテモ ジキニ クルワ。  
うん。 帰らない。 帰らない。 帰っても 直に 来るわ。

ホテ シコトー ドンナヤーテ ジキ ユーテ クルワ。 ホテ  
そして は事(は) ほんまだって 直 言って 来るわ。 そして

コー コレ イマ キューニ デキタ ユー タウ トンテ<sup>ク</sup> クル  
こう これ 今 急に できた(と) 言ったら 飛んで 来る。  
(108)

。 ヒトリ キトル。 ココノ ココニ シモニ ソーコニ オル  
一人 来ている。 此処の 此処に 下に 倉庫に 居る。  
(109)

。 イマワ <sup>xxxxxxx</sup> タカ タカタキカ ドッ カ イトル。  
今は 高 適か 何処か 行っている。

A アー ジャーノカ。  
ああ そうか。

C ズット ナガイ オルワ アノ ヒトワ。 シコクノ ヒトジャ。  
ずっと 長い 居るわ あの 人は。 四圍の 人だ。  
(110)

A ナンノ カーノチューテ ヤッパ<sup>リ</sup> ホイジャ イマノ ホーカ  
何の 彼のと書いて 矢張り それでは 今の 方が

アリカターチュー コツチャノラ。  
有難いと書く 事だねえ。

B イマノ シダイノ ニンゲンワ イチバン コーフクジャワイ。(笑)  
今の 時代の 人間は 一番 幸福なわい。

δ イマ イマワ コーフクジャケンドローラ コレカウ ホンデモ  
今 今 幸福なけれはねえ これから せぬでも

イマノ コドモノ オーキー ナツタラ ドカー ナルナイチュー  
今の 子供の 大きく なつたら どんなに なるのかいと言う

コトー カンカエテ オクナランノー ヤッハリ。  
事(は) 考えて 置かねばならぬ 矢張り。

C ソレオ ミンナ シンパイシオルンヤノ。 イマノ トシヨリカ。  
それと 皆 心配しているのたね。 今の 毎朝りか。

メージネンダイノ ヒトカ シンパイスルンヤ。 コレカラニ ド  
明治時代の 人が 心配するのたね。 これから ヒ

カーニ ナルカチュー コトオ。 ウチノ オヤッサンガ イツテ  
んなに なるかと言う 事と。 家の 親爺さんか 何時で

モ イーオルワ。 コノ イマノ コドモラワ ラクシオルケンド  
も 言っているわ。 「この 今の 子供等は 樂しているけれは

ドー ナルンナイヨ。 ドー ナルヨッテ。 クワ サゲル スベ  
どう なるのかいね。 どう なるわって。 金銭(は) 下がる 街

モ シランヤロ。 イマノ コドモラ。 モー センゼン クワ サ  
も 知らないだろう。 今の 子供等(は) もう 全然 金銭(は) 下

ゲル スベ シランモノノ。  
ける 街(は) 知らないものね。

K ミンナガ アノ シンパイシテモ シンパイスルダケデ チョット  
皆が あの 心配しても 心配するたけで 一寸も  
(11)

モ ムイブサクデバヤカリ オルンジャロートモ。 シンパイダケ  
無為無策ではかり 居るのたろうと思ふ。 心配なけで。

デ。 オレワ ホンマニ コノ トツカワフノー ノーリンコーコ  
俺は 本当に この + 津川はね 農林高校(2)

一 ックラナ イカンテ ヤカマシユー ユーヨル。  
作らねば いけな<sup>ら</sup>て 喧しく 言<sup>っ</sup>てい<sup>る</sup>。

S アー ジーサンワ ソカーニ オモーク。  
ああ 爺さんは そんなに 思うか。

K オレワ モー ショツチュー イーヨル。…… 氷  
俺は もう 始終 言<sup>っ</sup>てい<sup>る</sup>。

A マッタク ソノノー カソチュー モンダイワノーラ コリヤ ホ  
全<sup>く</sup> そのね 過疎<sup>と</sup>皆<sup>う</sup> 問題はねえ これ<sup>は</sup> 本  
ンマニ ムズカシカロート オモークワイノーラ。ジ<sup>ン</sup>サイモンダイ  
当<sup>に</sup> 難<sup>し</sup>か<sup>ら</sup>う<sup>と</sup> 思<sup>う</sup>わ<sup>い</sup>ね<sup>え</sup>。 実<sup>際</sup>問<sup>題</sup>と

ト シテヨ。 ホデ<sup>ン</sup> ナンジャ ナーカト オモーク。 トツカワデ<sup>ン</sup>  
してね。 誰<sup>で</sup> 何<sup>で</sup>は 無<sup>い</sup>か<sup>と</sup> 思<sup>う</sup>。 + 津川<sup>で</sup>

ワカイ モノ マー トドマランチュー イチバン マズ<sup>ク</sup> オリ  
若い 者<sup>(か)</sup> まあ 留<sup>ま</sup>ら<sup>な</sup>い<sup>と</sup>言<sup>う</sup> 一番 ま<sup>だ</sup> 俺<sup>は</sup>

ヤー オモークノニノーラ イチバン ヤッパリ ナンノ モンダイ  
思<sup>う</sup>の<sup>に</sup>ね<sup>え</sup> 一番 矢<sup>張</sup>り 何<sup>の</sup> 問<sup>題</sup>

ワノー セーカツカ アンテースルカ ド<sup>ー</sup>カチュー コト  
はねえ 生活<sup>が</sup> 家<sup>定</sup>お<sup>か</sup> 何<sup>う</sup>か<sup>と</sup>言<sup>う</sup> 事

ジャポート オモークワイノーラ。 ト ユーノワ マ ホンマニユータ  
た<sup>ら</sup>う<sup>と</sup> 思<sup>う</sup>わ<sup>い</sup>ね<sup>え</sup>。 と 言<sup>う</sup>の<sup>は</sup> まあ 本<sup>当</sup>に 言<sup>っ</sup>たら

ラ ヤクバ<sup>ン</sup> イクトカノー ホデ<sup>ン</sup> センセーヤトカ アルイワ キ<sup>ン</sup>  
役<sup>場</sup>(に) 行<sup>く</sup>と<sup>か</sup>ね 誰<sup>で</sup> 先生<sup>た</sup>と<sup>か</sup> 或<sup>は</sup> 銀

ンコー ユービンキョクチューノワ ダイタイ キマッタ サラリ  
行 郵<sup>便</sup>局<sup>と</sup>言<sup>う</sup>の<sup>は</sup> 大<sup>体</sup> 決<sup>ま</sup>った サラリ

一オ モローテノーラ ソンデ' モー セーカツノ アンテーチニ  
 一E 貰ってわえ それで もう 生活の 安定と言うか  
 一カ ミトーシカ ツクワノ。 セッケー……。 トコロが マ  
 息通しか つくわね。 設計……。 所が ま  
 サンリンロードーラ ジャッタラノーラ。 ソレ マー コレが ナ  
 山林労働等 たらわえ。 それ であ これが 何  
 ンジヤノ。 トツカフノ コレ カンコーリン' ジャッタラノ  
 だね。 十津川の これ 官公林 たらわね  
 エーリンショトカ ナントカチエテ オーキナ ナニシトルケト'  
 管林署 七か 何七かと言っ 大きな 何して いるけれど  
 マー ユータラ チ<sup>xxx</sup> チーサー シホンカラノーラ アレシトル。  
 であ 言ったら 小さい 資本家等 ねえ あれして いる。  
 ソン タメニ マー ユータラ モー イマ シゴトイ カカッ  
 七の 為 には であ 言ったら もう 今 仕事に 掛か  
 テ モー ツキノ シンパイオ シゴトノ シンハイセンナランジ  
 七 もう 次の 心配を 仕事の 心配せねば ならないだ  
 ヤロートカノ。 ソンデ' マー アノ ボーナスマ ナケリヤー  
 三う七かね。 それで であ あの ボーナスマ 無ければ  
 アルイワ マタ モー ヤンメテモ ソノー シツキョーホッケン  
 成は 又 もう 止めても その 失業 保険  
 トカノ ナニモ ナーシア/ マツダ ソノー ナンジャ レーサイ  
 七かね 何も 無いし あの 全く その 何だ" 零細  
 ナ ナリジャト ユー コトト ジャースカ ヤッパリ ワカイ  
 七 業だ七 言う 事七 だから 矢張り 若い  
 モノト シヤヤ ナントカ ヤッパリ。 ソノ タメニワ ユータ  
 七に しては 何七か 矢張り。 その 為には 言っ

ヨ一ニ シータケトカ カイコラデモジャノ一ラ モ アル テー  
様に 榎 芽ヒカ 蚕 芽でもたねえ もう 或る 榎

ト 毛 ソレデ セー <sup>xxxx</sup>セーケ一カ ナリタツチュークライナノ一  
度 もう それで 生 計か 成り立つヒ言う位だね

アレシ ナッタラヨ一。 ホシタラ マー ワカー モノモノ一  
おれに なったらね。 そしたら ねあ 若い 者もね

ヤッパリ ソノ一 キボ一カ アルノヨノ一ラ。 ユメカ アルノヨ  
矢張り その 希望か あるのよねえ。 夢か あのよ。  
(112)

マー オマエ オ <sup>xxx</sup>オ <sup>xxx</sup>ナンジャ トシオクンヨノ一ラ ワン  
ねあ お前 何だ 寿男君よねえ 自

かうモ ワカー トキノ コトオノ一ラ トシヨリ ナニカ コー  
分等モ 若い 時の 事モねえ 年寄り 何か こう

ナーノ一ラ トシヨリジミテノ一ラ モー ブンベツ ブンベツク  
ねえ 年寄りじみてねえ もう 分別 分別臭い

サ一 コト イ一ヨルケント ワンかうモ ワカー トキジャツタ  
事(モ) 言ってるけれヒ 自分等モ 若い 時ならぬか

カノ一ラ オマエ ワカー モンニワ ヤッパリ ユメカ アリ  
ねえ お前 若い 者には 矢張り 夢か あり

ナニ アッテコソ ……  
何(か) あつてこそ ……

S  
ソ一 ソ一。  
そう そう。

A  
ダカラノ一 アレラノ ユメチュー モノモノ一ラ カナエルヨ一  
だからね あれ等の 夢と言う ねもねえ 叶える程に

ニ ワンかうノ一ラ カンキョ一 ツクッテ ヤルッチューノ コ  
自分等(モ)ねえ 環境(モ) 作つて やつて言うの こ

レ オトナノ セキニンデモ アロート  
れ 大人の 責任でも あらうと

♪ ジャー。 ウン ウン ウン。  
そうだ。 うん うん うん。

A オモ一ノヨノ一。 ノ一。 ソノ カンキョーズクリチュー コト  
思ふのよね。 ね。 その 環境 作りと云う 事 (E)

マス ワレワレノ セキニント シテ ナントカ センナラント  
先ず 我々の 責任と して 何とか せねば 行かないと

オモ一ワノ一。 デ ヤッパリ コノ ソレニ ツイチャ ゴラク  
思ふかね。 それで 矢張り この それに ついては 娯楽

チュー コトモノ一。 ソンデ ソンデ ヤマシゴトジャノ一 コレ  
と云う 事よね, それで それで 山 仕事だね これ

デモ ジャーゼー。 マ セウカク クレマカ ナニカ アツテモ  
でも そうだせ。 ま 折角 草が 何か あつても

ヨ一 マツタク ホトンドノ一 ウチカラ カヨ一テ イケリャ一  
ね 全く 強かね 家から 通つて 行けるからね

ノ一 ソリャ イ一ノヨ。 トコロカ ト一 キョービノ ワカー  
それは 良いのよ。 所が <sup>XXX XXX</sup> 今日びの 若い

モノニノ一 ドマリコーデ ランフノ一ラ ランフヤ ホトボシ  
着はね 泊り込んで ランフ ねえ ランフや 灯し

オ アカーテノ一ラ サキーモ ユータヨ一ニ スキシバ ターテ  
を 明してねえ 前にも 言った様に 杉柴 焚いて

メシユ一 ターテクーチ ソンナ コト オレラデモ カナワント オ  
飯を たいて 食うって そんな 事(は) 俺等でも 叶わないと 思

モノニ ワカー モノ デキンジャロ。 ヤッパリ ウチデノ一  
うのに 若い 者(は) できないだろう。 矢張り 家でね

う コレう うなカラ カヨーテ フロモ イレノーラ メシモ  
 これ等 家から 通って 風呂も 入水(乙)ねえ 飯も  
 ターテ モライ ソレテ" テレビモ ミテコンノーラ モ テレビ  
 炊いて 貰い... それで テレビも 見させねえ もう テレビ"  
 ラチューノ マ トツカフジャ イチバンノーラ ムロン ササヤ  
 等と言うの 妹 十津川では 一番ねえ 無言 寸寸  
 カナ ヨロコビチューカ ゴラクノ タッタ ヒトツノ モンジャ  
 やかな 喜ば"言うか 娯楽の たった 一つの ものだ  
 ロート オモ一加ノーラ ソノ タメニワ ヤッパリ コー ミナ  
 うち 思いがねえ。 その 為には 矢張り こう 道  
 モ カイゼンセニヤ ドコノ ヤマエ ヤマシゴト イテモノー  
 も 改善せねば 何処の 山へ 山仕事(12) 行ってもね  
 タンシャ デ" タイカイ イケルトカ ヨツ<sup>xxxxxxx</sup> デキリヤ ヨツクルマ  
 単車で 大概 行けるわい できれば 四っ車  
 ヤノー ジョーヨーシャテ" ユキカヨエルチューヨーナ カンキョ  
 だね 乗用車で 行き通えるとき探さ 環境  
 ーオノーラ ミナノ セービモ シテ ヤルシ。 コレが ヤッパ  
 ねえ 道の 整備も して やるし。 これが 矢張  
 リ ソー ユー コトオ ホントニ コレガノーラ カンキョーセ  
 リ そう 言う 事を 本当は これがねえ 環境 整  
 ービト ユー コトガ コレガ ワレワレト シテ センナ。 ホ  
 備え 言う 事が これが 我々も して せねば。 そ  
 ンテ" ワカー モノバツカシノーラ アンマリ セメテ ミタチュ  
 ねえ 若... 者ばかりねえ 余り 攻めを 見たとき  
 ーテノーラ ヤッパリ コノ カンキョーオ コシラエタルチュ  
 ったねえ 矢張り この 環境を 拆してやるという



コトが    ダイジナ    コトジャ    ナーカト    オレワ    コー    オモ一  
事か    大事な    事は    無いか    俺は    こ    思っ

ノ。    ジッサイモント    シテノー。

ね。    実際問題と    12ねえ。

十津川の暮ら (2)

話(手)は「十津川の暮ら(1)」に同じ

B マ トツカワニ コレカラ セーカツシヨートモータラ ナンジャ  
 夫 十津川に こゝから 生活(よう)と想(おも)つたら 何(なに)だ  
 ノーラ。 コリヤ アノー ヒトツノ ショクジ ショク ショクキ  
 ねえ こゝは あの 一つの 職業(しごく) 職業(しごく)  
 ヨージャ セーカツ デキン。(咳) オレ イツモ ユートンジャ。 タフケ  
 では 生活(い) できない。 俺(おれ) いつも 言(い)っているの(の)だ。  
 (113)  
 ン ナニモ カモ ヤラニャー アカンチ マゴラニ ユートルン  
 何(なに)も 彼(かれ)も やらねえ いけねえと 豫(よ)言(ご)に 言(い)っているの  
 ジャ。 ウチデ セン シゴト センカチューテ ウチデ シゴトカ  
 した。 「家(い)で ない 仕事(しごと) (ない)か」と言(い)つて 「家(い)で 仕事(しごと)か  
 テキルチ ユーテ。 ウチ イタラ ヤマモ ハラオーシ タモ  
 できる(い)て 言(い)つて。 「家(い) (に) いたら 山(やま)も 採(と)れよう(い) 田(い)も  
 ツクローシ カイコモ カオーシ シーダケモ カオーシ ナニ  
 作(し)らう(い) 蚕(かいこ)も 飼(か)えよう(い) 椎(か)きも 飼(か)えよう(い) 何(なに)も  
 モ カモ ヤラニャ ヒトツノ ショクキョージャ クーテ イケ  
 彼(かれ)も やらねえ 一つの 職業(しごく) では 食(た)べ いか  
 ンチ。 ミナ ソー ユー フーニ アノー (咳) ソー ショート  
 ねえ。 皆(みな) そう 言(い)う 風(ふう)に あの そう (よう)と  
 モーテモ カイコ カオーチューテモ ヘリー スキ° ウエルヨー  
 思(おも)つても 「蚕(かいこ) (を) 飼(か)えよう(い)と 言(い)つても 縁(えり) (に) 杉(さ) (を) 植(う)える程(ほど)  
 ジャ カエン ナッテ クル。 ソー ユー トコロモ ミンナ  
 では 飼(か)えよう(い) (に) なつて 来(き)る。 そう 言(い)う 所(ところ)も 皆(みな)

カンカエニャーノーラ。

考えねばねえ。

A ジャー ジャー。

そう そう。

B ソンテ" アノー アノー セーカツ デキン デキン。 ミンナ シ  
それぞ あの あの 生活 正まぬい 正まぬい。 皆 (

テ キトルノジャ、 カナワンヨ ソリャ。 ヘリニ ハタケノ  
マ 来ているのだ。 叶ぬぬいよ すれば。 轡に 畑の

ヘリニ ワノヘリニ スキウエテ オマエ クワ ウエテ ナ  
轡に 田の 轡に 杉(ト) 植えて 其前 桑(ト) 植えて 何

ニシテモ オマエ コエトル スキノ スワレテ クワ アキヤー  
(2モ 其前 肥えている 杉に 吸われぬ 桑(ト) いけぬい

センジヤロ。 ソーシヤー カイコモカエン。 シータケ シ  
たじろ。 そう 叶ぬぬい 養も 食ひぬい。 推尊 推

ータケ ショート オモータモ シータケワ マー イーケンドモ  
尊(ト) (ようや 思ふも 推尊は 其 良いけぬぬい

ゲンボクカ ワレワレ ナーワノーラ。 ホンテ ノーナモ ヤ  
原木か 我々 無...よねえ。 それぞ 無くても 大

ッパシ ナンジャ ナニモ カモ チロイ チョイ チョイ チョ  
張り 何だ 何も 彼も ちよい ちよい ちよい ちよ

イ コマメニ ヤラナンタラ トツカワワ セーカツン デキンヨ。  
い 小豆に わらなかつたら 十津川は 生活 正まぬい

よ。

A シータケナンドモジャノーラ。 マタ シー アノ ハナシ ナニス  
推尊をせよたねえ。 又 ~~xxxx~~ あの 話(ト) 何

ルケンド シータケノ ハナシニ ナッタケントヨー ヤッパリ  
おしけれど 椎茸の 部は なるたけおねえ へ張り  
ナンジャワノーラ。モ ゲンボク ナー ナッテ キタラノ マタ  
何だわねえ。 ち 原木(か) 無く なる 来たらね 又

ホカカラ コーテモ イーノヨノーラ。 ヒア ホテ モッテ  
外から 買った 良いのよねえ。 して せして ち

コレカラ ナマジータケデ ダストカノーラ ホッテ ホカナンサ  
これが 生椎茸で 出せばおねえ して

ヨー タダ アノー ナンジャワナ ムカシカラノ アノ ホーソ  
たね あの 何だわね 昔からの あの 柞木は  
ンジャ シージャ ノーテモノーラ カシーモ ハエリャノー。(笑)  
椎では 無くてもねえ 樫も 生えたらね。

ナニモ ハエルンジャシ スルシカノー ソレ ホンデダヨ ウマ  
何も 生えのたし ちかすね ちか ちかだたよ うま

イ コト ホーサーニャ ウレリャー センチューヨーナ コト  
い 事 千エねは 売ればは いらへき; 持ち 買て

カンカエントノーラ。 ナンデモ ナマジータケデ ダータニ シテ  
考えないとねえ。 何でも 生椎茸で 出したに して

モ ケッコー ウレルンジャシノーラ。  
も 結構 売れるのた(ねえ。

B イマ ブナン タケ ワルイチューケント ブナエモ ミナ キン  
今 樫の 茸(か) 悪いと言うけれど 樫にも 皆 菌(と)

ウエタラ カンマンジャ。  
植えたら かまわない(の)た。

S カマワンヨ。  
かまわないよ。

B ウン カンマンヨ。 オレン ヒロシマイ イタ トキ - ブナ  
うん かまわな<sup>い</sup>よ。 俺が 衣島に 行った 時(=) 桂(=)

ユーテ アレ ~~キフ~~ キコート オモ<sup>テ</sup>テ キカナンタケントヨ。  
言<sup>つ</sup>て あれ ~~聞~~ニ<sup>う</sup>セ 思<sup>つ</sup>て 聞か<sup>ら</sup>な<sup>か</sup>つた(=) ~~た~~れ<sup>て</sup>ね。

ブナジャ ッ タラ ドクン ナレンジャ ナーカシラント オモ<sup>テ</sup>  
機<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup> 毒に なる<sup>の</sup>で<sup>は</sup> 悪<sup>い</sup>かし<sup>ら</sup>セ 思<sup>つ</sup>

テ。 カンマンジャ。 タネ ウエテ。 ウン ナンデモ シータケワ  
2。 かまわ<sup>ら</sup>な<sup>い</sup>(?)<sup>た</sup>。 種子(=) 植<sup>え</sup>て。 うん 何<sup>も</sup>も 推<sup>算</sup>は

アー ハエルラシーワ ホーソヤ ナニンジャ ノーテモノ。  
ああ 生<sup>え</sup>る<sup>ら</sup>しい<sup>わ</sup> 柞<sup>や</sup> 何<sup>に</sup>で 悪<sup>く</sup>ても<sup>ね</sup>。

S ホフラエワ アカンゼ。(笑) オレ ジッケンシテ ミタンジヤ。  
ホフラへは い<sup>け</sup>な<sup>い</sup>せ。 俺 実<sup>験</sup>して 水<sup>の</sup>た<sup>ら</sup>。

ホフライ。 ドカーカシラント オモ<sup>テ</sup>ノ<sup>ー</sup> ムサシノ ガッコー  
ホフラに。 と<sup>ん</sup>か<sup>か</sup>(<sup>ら</sup>セ 思<sup>つ</sup>て<sup>ね</sup> 武<sup>蔵</sup>の 学<sup>校</sup>

= オル トキノ<sup>ー</sup> ガッコーノ ホフラカ アノ<sup>ー</sup> ムサシノ  
に 居<sup>る</sup> 時<sup>ね</sup> 学<sup>校</sup>の ホフラが あ<sup>の</sup> 武<sup>蔵</sup>の

ガッコーノ<sup>ー</sup>。 アノ ホフラ<sup>ー</sup> タイフ<sup>ー</sup>テ タオレ<sup>テ</sup>ノ<sup>ー</sup>。 ト  
学<sup>校</sup>ねえ。 あ<sup>の</sup> ホフラ(が) 風<sup>は</sup> 風<sup>で</sup> 倒<sup>れ</sup>て<sup>ね</sup>。 じ

ー ショ<sup>ー</sup>チュ<sup>テ</sup> イッペン シータケ<sup>キ</sup>ン ~~ア~~ ウエテ ミタロ  
う (よ) <sup>と</sup>言<sup>つ</sup>て 一<sup>遍</sup> 推<sup>算</sup>葡<sup>(=)</sup> 植<sup>え</sup>て 見<sup>え</sup>や<sup>ら</sup>

ーカーチュ<sup>ー</sup>テ ウエテ ミタン<sup>ジ</sup>ヤ。 ジッ<sup>ケ</sup>ンシ<sup>テ</sup> ミタン<sup>ジ</sup>ヤ。  
う<sup>か</sup>と<sup>言</sup>つ<sup>て</sup> 植<sup>え</sup>て 見<sup>た</sup>の<sup>た</sup>。 実<sup>験</sup>して 見<sup>え</sup>の<sup>た</sup>。

ナニモ カモ コレ ベンキョ<sup>ー</sup>ジャワ<sup>ク</sup>チュ<sup>ー</sup>テ<sup>ノ</sup>。 アカ  
何<sup>も</sup> 彼<sup>も</sup> これ 思<sup>え</sup>強<sup>い</sup>わ<sup>と</sup>言<sup>つ</sup>て<sup>ね</sup>。 いか

ナンダワ。

な<sup>か</sup>つ<sup>た</sup>わ。

K ハエナンドカ。  
生えぬからむか

S ウン、アレワ アノ ホフウチュー ジキ クサレシジャワ、ホテ  
うん。あれは あの ホフウと云う(の) 直 腐るのだから ぞく  
。 ウン、モ ホンホン アカンナー、アノ キワ。  
エ、うん、もう 全く いけないな、あの 木は

A ジャーカ。  
どうか。

S ホフウチューノワ ホンデ マッチノ ジクニシカ ナランシジャワ  
ホフウと云うのは それで マッチの 軸にしか 燃らぬ(の)だから

アレワ。(笑) マダ アノー ハナシ カワ ルケドヨ アノー ア  
あれは。 王様 あの 話(か) 変わるわけだね あの 新  
タラシヤノ<sup>(119)</sup> オカーヨ。  
屋の お母よ。

C アイ。  
はい。

S ソノ クサカリチューノ ヤッパリ スルヤロ。  
その 草刈りと云うの 矢張り 了らねえよ。

C シオル シオル。  
してゐる してゐる。

S ノーウ。 マ ムカシホドモ センカ シラシラドヨ。  
ねえ。 え 昔 程も しついか しらぬわけだよ。

C ワシラワ モー マイニサ マイニサ。(笑)  
僕等の もう 毎日 毎日。

S クサカリカ。  
草刈りか。

C クサカリジャ。 ワシン トコ イチバン ヨーケー カットルヤ  
草刈りだ。 億の 所(か) 一番 余計 刈っていろ

ロノ一。

た"3うね。

K ソーヤノ一。

そうだ"ね。

B ~~~~~~~~~ オレモジャ。 マイニチ クサカリジャ。  
俺もだ。 毎日 草刈りだ。

C マイニチ カリオル キョー フ ケサカウ イカランダケ。 ヤッ  
毎日 刈って居る ~~~~~~~~~ ~~xxx xxx xxx~~ ~~xxx~~ 今日から 行かないだ"け。 や

ト マーケサモコレデ オワローカナート オモ一テ ケサカ  
と まあ 今朝 ち これぞ 終ろうかなと 思って 今朝か

ラ イカランダケ。 マイニチ イクンヤセ。 アサカウ ヒル ン  
ら 行かないだ"け。 毎日 行くのだ"せ。 朝から 昼 +

ユ一イチジスキマデ イテ ホテ モ一 ニジ スキタラ モ一  
一 時過ぎまで 行って せして もう 二時(日) 過ぎたら もう

デテ イクンヤモンノ一。

出て 行くのだ"ものね。

A ウーン。 ジャロノ一ラ。

うん。 そうだ"3うねえ。

C ソイデ ケサ ユーベカタニ シモ一テ キョーワ ネーカ<sup>o</sup> コ<sup>xxx</sup>  
それで 今朝 昨夕方に しまつて 今日(は) 姉か

ケナ コ ククリオル。 ククリツケオルンジャ。 (笑)  
~~xxx xxx~~ ~~xxx~~ ~~~~~~~~~

拾っていろ。 拾りつけていろのだ。

A (120)  
スシヨルンカ。

おしていろのか。

C スミトクンジャ、 モー モツノモ エライシヨ。 スルサカイ  
オシてみくのた。 もう 持つのも 大変だしね。 するからね  
ニナー アノ。   
あの。

S ヤッパリ マダ スス。  
矢張り まだ すす。

C スミトクヨ。  
すておくよ。

S アー ジャーカ。  
あか せうか。

C モー モツノ エライモン。 モツノ エライサケ キョーワ モ  
もう 持つの 大変なもの。 持つの 大変だから 今日(け) も  
ー ウナトコノ アメ フルニューテ ネーカ ヒルカウ ニヨル。  
う 家(の)所の 雨(が) 降ると言て 姉(が) 昼(か)ら (て)いる。  
ワシラカ イチバン ヨーケー カットルヤロ。 ソコラニデ。  
僕等(が) 一番 余計 刈(て)て いるから 其(れ)等(で)。  
アノー タニカイトデモ。  
あの 谷垣(内)で(も)。

A ジャーローノウ。  
たろうねえ。

C ウチノン ナケリヤ ヨソノモ。 キノーカー キタカイトノモ。  
家(の)か 無ければ 他所(の)も。 昨日(か)が 北垣(内)のも。  
(121)

S ホタウヨー アン ハタウチオ チヤント スルキュー コトカ。  
そしたらね あの 煙(た)打ちを ちゃん(と) する(と)言う 事(が)。

C ウン。 ハタオ モー ジーサンガ ダイブ ウッテ クレル。  
うん。 煙(た)を もう 爺(い)ん(が) 大分 打(て)て 突(つ)れる。



モ <sup>xxx</sup>ワ イ(ワ) ワ(ワ) ヒトワ ヒトクワモ サケンワ。 サケル マモ  
もう 今の 若い 人は - 鉄も 下げないわ。 下ける 間も

ナイシ ソシテ <sup>xxxxxxx</sup>シヨ ショーバイ シオルヤロ。 ソシテ ソ  
無いし として 商売 して(いる)だろ。 として せ

ノ マゴカ イマ チューカッコー ニネンジャ。 アノ ソレデ  
の 妹が 今 中学校 二年だ。 あの それで

クワ モツ スベ シランチ ジーサンカ。(笑)

「鉄(を) 持つ 術(を) 知らないで 爺さんが。」

A  (笑)

C モー アンダケ ケントーニ ウチコンドルンジャケントモ クワ  
もう あれだけ 剣道に 打込んで(いる)のだからセキ 鉄(を)

モツ スベ シランジャロ。 オシエテ ヤッテモ。 ヨー モッ  
持つ 術(を) 知らないだろう。 教えて やつても。 よう 持つ

テ フランジャワイノ。 ソリヤ ナカラワ アルンジャヨー。  
て 振らない(の)だからね。 それは カは あるのだよ。

ソリヤ ケントーシテモ ウツンジャシ スルンジャケント ソノ  
それは 剣道 (を)も 打つたし おも(う)だけれと その

ー <sup>xxxxxxx</sup>ドン ドンナニ シテ ドンナニ シテ フッテ イーンジャ  
ほんなに して ほんなに (て 振って 良いのやら

ウ ドリョー ドーシテ イーンジャラ ワカラン オシエテ ヤッテモ ワ  
どれと どうして 良いのやら 分かる(ら)い 教えて やつても 分

カラシ <sup>(22)</sup>  
カラシ ワカラン。 カラコソ アルンジャケント。(笑)  
らない 分らない。 幹(を)も あるのだから。

S イヤノー ホンマエ アノー ソノ ヘン イマ イー ハナシジ  
いやね 本当に あの その 辺 今 悪い 話(だ)わ。

ヌワ。 ア) アタラシヤノ オカーン シタケドノ。 ワシ ソ  
 あの 新 屋の お母が (たけれぬ 億(は)を  
 (123)  
 カーニ オモーンジャ。 ヒロムノ アニヨ。 アノ ガッコーデノ  
 んに 思うのだ。 弘の 兄の あり 学校でね  
 一 ムカシワ ワンカウ ガッコーイ イキオル ジブシニワ ダ  
 昔は 自分等(が) 学校に 行っていす 時々には ね  
 テツボーモ ナケリヤ トビバコモ マットモ ナニモ ナシナ  
 鉄棒も 無ければ 飛箱も マットも 何も 無した  
 ンダワノ一ヲ ソレコソ マイニチ ハシリマワルダケジャッ タク  
 ったわね。 それこそ 毎日 走り廻す だけならぬがね。  
 ノ一。 トコロガ イマ ガッコーエ イテ ミリャー モ テツ  
 所が 今 学校へ 行って 見れば もう 鉄  
 ボーモ アリャー トビバコモ アリ ヤレ ジャングルジムジャ  
 棒も あれば 飛箱も あり やれ ジャングルジムた  
 トカ ナントカテ ムズカシー イロンナ アノ ユークカ イッ  
 とか 何とからて 難い。 色々な あの 遊具が 一  
 パー アルワノ一。 ソデ マイニチ タイイクデ ヤロー。 タ  
 杯 あるわね。 それで 毎日 体育で やるだろう。 体  
 イソーノ ジカンヤチューノ イマ シューニ サンジカン アル  
 操の 時間って言うの 今 週に 三時間 ある  
 モノノ一。 トコロガノ一 クソニモ ナランチューンジャ。 ワシ  
 ものね。 所がね 「屎にも ならちやうて言うのだ。 億  
 ワノ一。 ダイイチノ一 ソカーナ コオ ヤマエ ツレテッテ  
 はね。 第一ね そんな 子と 山へ 連れて行って  
 ミ一。 チョットモ ヤマデ ヨー ウゴキヤ センワ。  
 見よ。 一寸も 山で よう 動かまほ (ないわ。

A ジャーノ。

だね。

B ウン。 ワシラワ ムカシノ一 ソカーナ アノ一 エープデ タ  
うん。 俺等は 昔ね そんな あの 遊具で 体

イソーワ セナンダケド ヤマエ イタラ ダレニモ マケン。  
操は しなかつたけれど 山へ 行ったら 誰にも 負けない。

イマデモ アノ ワカー モノニワ ケッシテ マケンワ。 ヤマエ  
今でも あの 若.. 者には 決して 負けないわ。 山へ

イテモノ一。 トコロカノ一 ガッコーノ タイイクト セーカ  
行つてもね。 所がね。 学校の 体育と 生活

ツカ ムスビツカンチューノワ ソレナンジャ、 ケッキョクノ一。  
が 稽がつかないと言うのは それなのだ。 結局ね。

ツマリ ケンドー ナンボ ウツテ ウデガ アノ一 ジョーブ  
つまり 剣道(五) いくら 打つて 腕が あの 丈夫(一)

ナツテモ ナカラカ ツイテモノ一 ハタウチスル スベオ ニ  
なつても カが ついてるね 煙打ちする 術を 知

ランジャーノ。 ノ。 ソコラニ ソノ一 キョーイクト ゲンジ  
らない(の)だね。 ね。 其処等に その 教育と 現実

ツノ セーカツトノ ソノ ミゾカ アルンジャ。 ノ。 トユ  
の 生活との その 溝が あるのだ。 ね。 と 言

一 コトワ トツカワテ ヤッパリ オーサカヤ トーキョノ ド  
う 事は 十津川で 矢張り 大阪や 東京の 地

マンナカデ スルヨーナ キョーイクオ ヤッパリ シオルチュー  
真中で する 操を 教育と 矢張り していると言う

コトナンジャ。

事なのだね。

B ソー ユー コッタノー。  
そう 言う 事だね。

S イワバ トツカワニワ トツカワノ キョーイクカノ アル ハズ  
言わば + 津川には + 津川の 教育がね ある 筈  
ナンジャ。 ソレオノ アノー モット カンガエテ イカニヤ  
なのだ。 それとね あの もっと 考えろ 行かぬは  
www。 コレワ ワレワレノ シゴトヤケド。 ワシラノ シゴト  
これは 我々の 仕事だね。 俺等の 仕事  
ヤケド。(笑)  
だね。

A コーコーデモ ジャッテノー。 アノ イマ ヤマハライシオロー。  
高校でも だね。 あり 今 山 払いしているだろう。  
コーコーデヨ。 ホッテ ムカシ アノー ブンブカンテューツロ  
高校だよ。 それで 昔 あり 文武館とあったらうよね。  
カイノーラ。 コーコー。 アノ ジブンノ アノ タマキカン ユ  
高校 あり 時分の あり 玉置山(七) 言  
ーテ ヤマハライ イキオッタカノー アノ ジブン アノ マサ  
って 山 払い(一) 行っていたがね あの 時分 あり 正  
クニタノ ノブハルト ドーキュージャーノー。 アレン イーオウツ  
邦(の)家の 延春と 同級だね。 あれが 言っていた  
ロー。 モー オレモ ヨー シットルシノー。 シテ マエノ オマ  
らう。 もう 俺も 良く 知っているしね。 (七) 「前の お  
エラン キオウタ アノ ジブンノ アノ ~~コー~~ ブンブカンノ  
前等の 来たね あり 時分の あり 文武館の  
セートラ イウタラ モー ホンマ バリバリ ハロータニノー。  
生徒等(七) 言、たら もう 未当 ばりばり 払ったからね。

イマノウワ オマエ クソモヤシミタイニ ヒョロヒョロ シテ  
今の等は お前 屎 萌 みにい ぽろぽろ して

オーキューワ ナツタケド イッタラ モー クソッホーニモ ナ  
大きは 夏にだけれど 行ったら もう 屎のほにも な

リャ センジャッテノーラ。 ホンマニ イテノー マンダ オマ  
りは しない(の)だじとねえ。 本当に 行ったね 未だ ね  
(125) (126)

エ アバノータラン ナラングライ ホダ キルヤラ ワカランシ  
前 あはなつてやれば ならない位 ほど(と) 切るやら 分らないし

(笑) ノーラ オマエ ホンマジャセ オマエ。 ダソ ホダー  
ねえ お前 本当だぜ お前。 「誰と ほど(と)

キツタンジャッタラノーラ ナンゾンジャータロー ユーテノ。  
切ったのたつたらねえ どうなのだじとか 言ったね。  
(127)

ホテ オナゴノ コノ シリュウ ヒネツタリ スルグライノ コ  
ぞして 「女子の 子の 尻を つかって する位の 事  
(128)

トデノーラ クソノ ヘニモ ナリャー センジャチュウテ ソン  
ぞねえ 屎の 尻にも たりは しない(の)だじとねえ 「と  
(129)

リャー モー クソカラバカシ アルンダケデノー ナンノ クソ  
ねえ もう 屎 幹ばかり するだけだね 何の 屎

ッホーニモ ナリャー センチュウテカラ イーオツツラヨ。 ソ  
ッほにも たりは しない」と言つて 言っていたらよね。 ぞ

リャ アノ ケンドーラ ウチャ サッキ ユータヨニ ケンド  
ねえ あの 剣道等(と) 打てば ちき 言った標に 剣道

ーラ ウチャ ショダンジャッタリ ニダンジャッタリ ユーノー  
等(と) 打てば 初段だったり ニ段だったり(と) 言うの(か)

オツタリ スルンジャケンド。 マダ ソンデモ ニシカワノ  
居たり ちのだけれど。 まだ せれでも 西川の

ウチワ マッシャゾー。

内は 増したぞ。

S ウン ウン。

うん うん。

A ウン。 アノ ヤッパリノー ヤマシゴトエ イタリテモ ナンデ

うん。 あの 矢張りね 山仕事へ 行ったりでも 何でも

モ サシトルシ。 ホンマニ シヤカイ テテッテナー マニ ア  
ましているし。 本当に 社会(に) 出て行ってね 間に 合

ワズ ホンマニ モーノー サキーモ ソノ セージト ムスビツ  
わが 本当に もうね 前(に)も その 政治と 絡む

イタヨ一ナモンジャケンドナ ホンマニ コーバンジャータロカ ア  
ついた 様を どの だけね ね 本当に 「交番であるとか、 あ

ノー ナンゾノ ジム トルダッケノ タメニ アノ キョーイク  
の 何ぞの 事務(を) とるだけの 為に あの 教育は

ワ アルグライノ コッチャ ナンジャ シューンジャノーラ。  
あの位の 事だ 何だ」と言うのねえ。

オマエ ソカーンニ イーオッ ツラヨ。

お前 そんなに 言っていたらね。

B ヤッパシ (咳) コドモノ ウチカラ オヤカ


矢張り 子供の 内から 親が

アノー ヤマエ ヒッパッテ イカニヤ ウソヤノー。

あの 山へ 引張って 行かねば 嘘だわ。

S ソーナンジャヨ。 ソーナンジャ。

そうなのだよ。 そうなのだよ。

B  シゴト  
仕事

＝ イヨクチューノ デテ コンジャワナ。 コレオ タノシミジ  
に 意 谷と云うの 出エ 来ない(の)たわね。 これを 楽しみだね  
(130)

エナ－ コー シタラ コンドワ イーンジャッ チューノ ソノ  
こう したら 今度は 良いのた"って云うの その

ナニ シランジャーモノ。 ソノ キノ ドガー シタラ オーキ  
何(と) 知らない(の)た"もの。 その 木が どう したら 大きく

ー ナルンジャトカ ソー ユー コト シランモノ。 ホンテ  
なるのた"とかが そう 言う 事(と) 知らないもの。 それで

オヤカ ヤッ パシ ウチヤマエ ツレテ イカニャ ウソヤノ。  
親が 矢張り 打つ山へ 連れて 行かれば 嘘だね。

オレカ コドモノ ウチヤ モ イタモノ。 ヤッ パシ ジーハン  
俺が 子供の 内は ち 行ったもの。 矢張り 爺さん等(か)

ラ カワハキ° イテ メシ モローテ クーテ シタリノーラ マ  
皮は"かに 行って 飯(と) 貰って 食って したりねえ 丸

ルタキリ イキャ ソレ ツイテッテ シタリ シタンジャワノ  
太 切り(に) 行けば それ(に) フ"って行って。 したり したんだ"わね。

一。 イマ ソー ユー コト コドモノ ウチ センワ。 サセ  
今 そう 言う 事(と) 子供の 内 しろいわ。 サセ

ンワナ チョットモ。 アブナーチューテ。 (笑)  
ないわね 一寸も。 危いと云って。

C イタラ スルンジャケドナー。  
行ったら するのた"だけね。

B イタラ スルンジャケド、ツレテキャ。 オヤカ ダイタイ オヤ  
行ったら するのた"だけね。 連れて行けば、 親が 大体 親

ランカ° ワルインジャノ一。 ユータラ。(笑)  
等が 悪いのた"ね。 言ったら。

A ホシテノー ヤッパリ ホンデノー ソカー シテ オレラジブン  
 ぞしてね 矢張り それでね そんなに して 俺等時分  
 ジャ ヲ タラノーラ コドモジブンカラ ソカー シテ ヤマハラー  
 たらたらねえ 子供時分から そんなに して 山払いも  
 モ イタリ シツロー。 ジャースカ ホンデノー ヤッパリ コ  
 行ったのり したろう。 た"から それでね 矢張り こ  
 ー ヤマオ アイスルニューノカ キモチカ ワクンジャノー。  
 う 山と 愛すると言うのか 気がか 湧くのた"ね。  
 キモ オーキュー ナルノ ミタラ ウレシーシノーラ。 ヤッパ  
 木も 大きく なるの(せ) 息がら 嬉しい(ねえ)。 矢張り  
 り オレ ハラー イタノ ガーニ<sup>(131)</sup> ヨー ナツタワチューテ ユ  
 俺(か) 山(は) 行ったの かいに 良く なったわと言った 言  
 ーテ オモンジャケドノー。 イマノラ オマエノーラ スターッ  
 った 思うのだけれどね。 今の筆(は) お前ねえ ずたっとも  
 トモ サセントイテカラ ウチニ オラニャーチュータツテ ソレ  
 させないでおいで 家に 居らねばと言ったって それ  
 デ ヤマハライモ ナニモ イタ コト ナーモンジャ ヲ タラ オ  
 だ 山払いも 何も 行った 事(の) 無いものだら"たり ね  
 マエ ヤマー アイスル キモチモ ナー。 ジャースカ オマエ  
 前 山(は) 愛する 気持も 無い。 た"から お前  
 トツカワエ ツンコモッテ トツカワノ サンキョーオ ドーノ  
 十津川へ つん籠って 十津川の 産業を どの  
 コーノツチューヨーナ アタマ ワーテ キヤ センジャノーラ。  
 どの"って言う探さ 頭(は) 湧いて 来た (らしい(の)た"ねえ。  
 ウン ホンジャースカ アキヤー センジャ。  
 うん それた"から あき(は) (らしい(の)た"。



B コドモ ッテ シコマナ アカン。  
子供って にまねば いけなへ。

C ツレテ イタラ スル イッテ ウチノ カーチャンモ ツレテ  
「連れて 行ったら お」(七) 言、マ 家の 母ちゃんも 連れて  
イクンヤ。 タローオ。 ソシタラ ヤッスー ハウウンヤテ。 ソ  
行くのだ。 太郎を。 そしたら 易く 払うのだ。そ  
レモ ヤッパリ マイニチ ケントー アルヤロ。 イマノ ヤス  
れも 矢張り 毎日 剣道(が) あるだろう。 今の 休  
ミ ヤスミナシジヤワ。 ニチヨーニモ ズーット マイニチ ヒ  
み(は) 休み無(た)め。 日曜日にも ずっと 毎日 平  
(132)  
ラダニニ イクヤロ。 ホンデ ニチヨー ナッタラ ヤマ イコ  
谷に 行くだろう。 それで 日曜日(に) なら、山(に) 行  
(133)  
ーラ。 ヤマ イコーラ イッテ ツレテク。 ツレテッタラ アン  
こうよ。 山(に) 行こうよ(七) 言、マ 連れて行く。 連れて行、たら 貴  
タ ハウウンヤッタラ (笑いなから) ムコーノ コガ ナカラ ア  
オ 払うのだ、たら 向こうの 子が カ(が) あ  
ル。 ソノ アノー ナンボ" アル。 アレ ナニ セメントガ。  
る。 その あの いくら ある。 あれ なに セメントが。  
セメント ジーサン サゲトルヤロ。 サゲテ アルクヤロ、イ  
セメント(も) 爺さん 提げ"ているだろう。 提げ"て 歩くだろう。 一  
ッピョー。 セメントブクロヨ。  
袋。 セメント袋よ。

K オー オー オー。  
みう みう みう。

C ソレデモ ヒョコット サゲルンヤ。 ソノ クライ ナカラ ア  
それでも 娘(は)と 提げ"るのだ。 その 位 カ(が) ま

ルンジャスカ ヤマエ ツレテッタク スルニ ナガイナイッテ  
るのだから 山へ 連れて行ったら おに 遠い無いて

ホテ カーチャン ツレテ イクンジャ。 ソシタク イタク ハ  
そし 母ちゃん(が) 連れて 行くのね。 そしたら 行ったら ね

ラウンヤト。 ヤスー ハラウンジャケド。(笑)  
うのだから。 早く ねうのだけね。

B ソリャ サセニャ アカン。  
それは させねば いけない。

C サセン ナランシ ソリャ ケンドーニ イワナンダラ ヒッパッ  
させねば ならない それは 剣道に(ヒ) 言わねばなら 引強ッテ  
(134)  
テ イコート オモータモ ケンドー マイニチ マイニチヤ。  
行こうと 思っても 剣道(が) 毎日 毎日だ。

ソレデ アノ ツレテ コヨーナンテ キョーワ アノー アノ  
それで あの 「連れて 来ようね」 「今日は あの あの

ヤスミカーテ ケサモ トータラ イヤ。 キョーモ イカン ナラ  
休みねって 今朝も 聞いたら 「いや。 今日も 行かねばなら

ラン。 アー キョーワ ツレテ ヤマエ イコート オモータノ  
ない。」 「ああ 今日 連れて 山へ 行こうと 思ったのにな。

ニ。(笑) ソノ グライジャースカノー ナョットモ アノー オ  
その 位だからね -オモ あの 思

モーヨーニ ツレテ テレン。 オトートノ ホーワ マダ コネ  
う様に 連れて 出られる。 弟の 方は 未だ五

ンセーヤケント アレモ マー マイニチ ケンドーイ イキヨル。  
年生たけれと あれも まあ 毎日 剣道に 行っている。

キョーワ マダ ヤクバニ イタク。 ナンゾ  
今日は 又 役場に 行っただ。 何ぞ

S キョーワ ショーキューシケンカ アルンジヤ。  
今日は 昇級試験が ありのな。

C アレ シニ イタカ。 ケサ ジブント チャント オキテカラノ  
あれ(と) しに 行ったか。 今朝 自分で ちゃんこ 起きてね  
ー ラジオタイソー シテ デテ イッタヨー。(笑) キョーワ キ  
ラジオ体操 12 まで 行ったよ。 「今日は 級  
ユー トッテ クルヨッテ ナン ナンキュー トッテ クルカー  
(と) ひとつ 来るよ ひとつ 来るよ」 「何級(と) ひとつ 来るよ」  
ッテ ワライヨッタゼ。 マ アノ クライヤッタラ ヤマエ ツ  
笑っていたせ。 ま あの 位だ、たら 山へ 連  
レ イ イ イクノモ マダヤケト モ チューガ、 コーイ ナッ  
れて <sup>xxx</sup> <sup>xxx</sup> ~~~~~ 行くのも また「た」けれど もう 中学校に 行く  
タラノ ダイブ ヒッパランニヤ アカンワ。  
たらね 大分 引張らねば いけないわ。

A ソラ モー コドモラ ナンジャノーラ。 モ センセーラカラシ  
それは もう 子供等(は) 何だ、ねえ。 ちい 先生等からして  
テ モー アノ トカイナレ カセルヨーニジャノーラ ホンマニ  
もう あの 都会慣れ させる様にた、ねえ 本当に  
トカイデ" セーカツスルヨーナ モー コドモラバ、カシ モー  
都会で 生活する様を もう 子供等はかり ちい  
コー シテ イキョールンジャノーラ。 モー ホテ シコトモ  
こう して 行っているのだ、ねえ。 もう そして 仕事も  
ホワイトカラート ユーカノー ソー ユー モノジヤ ナキヤ  
ホワイトカラーと 言うかね そう 言う もので なければ  
ー ニンケンジャ ナイ、チューヨーナノーラ ソカーナヨーナ  
人間で 無いって言う様なねえ そんな様を

セート センセーカラ ジャノ ーラ シテ イキヨルヨ。 マッタク  
\*\*\*\*\*  
先生からたねえ (マ いっていろよ。 全く

ソカ ソカーナ センセー オルワナノ ー。 ホッテ コッテエ  
\*\*\*\*\*  
そんな 先生(か) 居るかね。 それ 此オハ

キテ ナント エライ コレカーナ トコジャ コドモラ エラ  
来て 「なんじ 大変な こんな 所では 子供等(も) 大

カローシ ソリヤ オル キニ ナランノ アタリマエジャ ーケ  
変だ(う) そんな 居る えに ならぬ(か) 当り前だ」と言う程な

ーヨーナ コト スカスノ オルンジャ モノノ ーラ。(笑) ホンマニ  
事(ト) ぬかす(か) 居るのたものねえ。 本当に

クソッパラン ケューッパラン タツテ フルクライ ソンナニ  
屎の腹が 中っ腹が (135) 立て 来る位。 そんなに

エラケリヤ ウセーコイニヤ ー イーノニノ ーラ ホンマニ。( )  
大変であれば 来ねば 良いのねえ 本当に。  
(136)

笑) クソゴクソゴクドーナ フローラ。(笑)  
\*\*\*\*\*  
屎 極道な わらう等。

S イヤ マッタク ソーヤナー。  
いや 全く そうだね。

A ホンマニジャセ。 オマエノ ーラ。  
本当にたせ。 お前ねえ。

\*

S ホトラ アソコノ アノ ー ガッコーノ アノ ー イマノ フルイ  
そしたら 彼(か)の あの 学校の あの 今の 旧い

タテモノデワ アノー ヨーサンノ シイクジョ シヨルノカ。  
建物は あの 養蚕の 飼育所(モ) しているのか。

アレワ カイコ ヤルノ。 アソコデ。 アレワ タニカイトノ  
あれは 蚕(モ) やるの。 彼処で。 あれは 谷垣内のか。

カ。

K イヤ コレ ソンノ ~~~~~  
いや これ(は) 村の

S ホンデ ダレン カウンカイナ。 ミンナ アノ デテ カウ。  
それで 誰が 飼うのかいね。 皆 あの 出て 飼う。

K イヤー。 ソコウデ ニサンニンダケ。  
いや。 其処等で ニ三人だけ。

B ニサンニン デテ アノ カウンジャ。 コーテ クレルンジャ。  
ニ三人 出て あの 飼うのだ。 飼って 呉れるのだ。

S アー ジャーカ。  
ああ そうか。  
(137)

B ウン。 ミレマデノ。  
うん。 三齡までね。

S アー アー アー。  
ああ ああ ああ。

B ホンデ イマ モー アノー サツキ ユー タヨーニ クワ ツカ  
それで 今 もう あの さつぎ 言った様に 桑(モ) 使  
(138)

ワントニ カウ ヒリョー。 アンデ ミレーマデ カウ ワケシ  
わないて 買う 飼料。 あれで 三齡まで 飼う 訳だ。  
~~~~~

~~~~~

S アー。 クワ ツカワントカ。  
ああ。 粟(モ) 使わなれどか。

B ツカワンジャ。  
使わなれ(の)だ。

A ジンコーシリョー。  
人エ 飼料。

B ジンコーシリョー。  
人エ 飼料。

S フーン。  
ふうん。

B ヨーカンミタイナ ヤツデ。  
羊羹みたいた 女で。

S クワセルノカ。  
食わせるのか。

B センキリズキミタイニ ツイテ ソレカラ クワセルンジャ。 ソ  
織 切り 突きみたいた 突いて それから 食わせるのだ。 そ

ンデ ヒト イランジャ。 ソレデ アノー ヒリョーダイワ イ  
れど 人(が) いらなれ(の)だ。 それで あの 飼料代は い

ルワンカイノ。 クワー クワバタオ マエカラ アレ ケンデ ユ  
る 粟 粟畑を 前から あれ 県で 言

一テ クレトツタンジャケンド ナンセ イー バシヨ ナースカ  
つて 買れていたのだけなと ねにし 良い 場所(か) 無からぬ

ノ ソレデ クワオキン ナイシ ソシテ シク バシヨモ ナイ  
それで 粟置きが 無(い) として 敷く 場所も 無(い)

シ ニューサツ トツタラ マ ヨーカ フコーカ ガッコーカ  
( 入札(モ) とつたら 又 幸か 不幸か 学校が

ナッテ ソンニ カイトッテ ソシテ マー アノー イマ 今サ  
なつ 村に 買い取つて そして まあ あの 今 糺

ンキョードーシセツニ シテオレ ワケジャ。  
蚕協同施設に (ている 設た)

S ウメワ アカンヨーニ ナッタンカイ。 モー。  
梅は いけない様に なつたのかい。 もう。

B アシコノ ウメワ アカン。  
彼処の 梅は いけない。

A ウメワ イマ アカンラシーノーウ。 ウン。 ホンマニ。 ソウ  
梅は 今 いけないらしいねえ。 うん。 本当に。 それは

チャー アレジヤノーウ。 アノ ホカノ モンジャッタラ ナン  
て言ひが あれたねえ。 あの 他の 物だらたら なん

トカ ナルンジャケド ウメラツチヌーノワ マツタク ソウ ア  
とか 石のたけれど 梅等つて言うのは 全く それほ あ

ノ ツブシン キカンジャロカノーウ。  
の つぶしが 利かないたろうかねえ。

B ツブシ アゲナ モノ。 ツクラニヤ ソノー ヒリョー ヤランス  
つぶし あんち もの。 作らねば。 その 肥料を やらない

カ ナーシャースカ アカンジャ。 ミ ナカノ ミ ナチョーテ  
から 小さいから いけない(の)だ。 実 中の 実(が) 小さくて

ニクン ヨケー アルヨーニ セニヤ アカンジャ。 アリヤ。  
肉が 余計 ある様に せねば いけない(の)だ あれは。

ニク クワニヤノー。 アリヤ。  
肉(を) 食わねばね。 あれは。

A ウン。 ソリヤ マー ジャーノ。  
うん。 それは まあ だね。

B ソレカ ソノ トツカワト スリャー アカンジャ。 アカンサ  
それが その +津リと それほ いけない(の)だ。 いけないと

ユ一テモ ヤマ ウエイトイテモ クサワラヤロ。 ナカ タネオ  
言っても 山(に) 植えておいても 草原だろう。 中(は) 種子と

ミテ ミー アリャ センフ。(笑) ミ ミチ ミワ アルンジャ  
見と 実(が) 大(は) (ないわ。 実 実って 実(は) あるのだけか

ケント ソノ クエル ミン ナイ。  
と その 食える 実(が) 無い。

A マンナカ ナー ジャノ。 ケッ キョフ。  
真中(か) 無い(の)だね。 結局。

B マンナカ ナー。 ソレカ アカンジャ。(笑)  
真中(か) 無い。 それ(が) いけない(の)だ。

A シント カフバ... カリ。(笑)  
花と 皮(は)かり。

B アレワ マダモアレワ モ ソートーノ ナン スルンジャヨ。 ネワ ナ  
あれはまたあれはもう 相当ね 何 ねのたよ。 値はな

ルンジャケントノ。 ソンソンドケ スル ネウチカ<sup>xxx</sup> ト ト  
のた(は)けれとね。 その それだけ ね 値(が)

ツカワノ ウメワ ナイヨ。 うん。 タネバツカシ オーキュー  
津川の 梅は 無いよ。 うん。 種子(は)かり 大きくマ

テ ミ ナイ。 ニク ナイ。(笑) ソレデ アカンジャ。 アレワ  
実(が) 無い。 肉(が) 無い。 それで。 いけない(の)だ。 あれは。

。

S マー ホンナー ウメモ モー アカンジャノ。   
まあ それなら 梅も もう いけない(の)だね。



K イヤー ウメノー アカンキュー コトジャ ナシニ テイレグ  
 いや 梅ね いけぬいけ言う 華では 無いに 手入れが  
 タランキュー コトナンジャ。<sup>\*</sup> ソ/ アー ナニオ ショードクセン  
 足らぬいけ言う 華なのた。 初 おの 何を 消毒しない  
 コトト ヒリョーオ ヤラン コト。 コレオ フタツタケヤ。  
 事と 肥料を やらない 事。 これも ニつたけだ。  
 (139)  
 ソレワ アノ ジダニノ オカヒデオサントコノワ マイネン ド  
 それは あの 出谷の 岡 英雄さん(の)所のは 毎年 と  
 ンドン ツクレシ ドンドン ウル ワケヨ。 アコノダケワ ソ  
 んどん 作る( とんどん 売る 訳よ。 彼処のだけは そ  
 リヤ キレーナ オーキナ ツボネノ マルキリ ムキズジャヨッ  
 れは 綺麗な 大きな 粒の まるきり 無傷だから  
 テ ネ ヨー ナルノ。 ホカノ ヒトノワ アカン ハズナンシ  
 値(が)良く なるの。 他の 人の は いけぬい 華なのた。  
 ヤ。 テイレセンジャモン。 コエワ ヤランガ ショードクワ  
 手入れしない(の)おもの。 肥は やらぬいね、 消毒は  
 セン。 ムシテ クワレテ モー ボロボロデノー。  
 しない。 虫で 食われて もう ぼろぼろだね。  
 (付3)  
 A クサブツダーラジャワラノーラ。 ホンマニ ドコラ ミテモ ウ  
 草ぼうぼうの所がよねえ。 本当に 何処(を) 見ても <sup>xxx</sup>  
 メ ウメバタケトワ ホンマニ クサワラジャノーラ。 クサブツ  
<sup>xxx</sup> 梅畑とは 本当に 草茶だねえ。  
 (付4)  
 ンドニ ナツテ シモ一テ。  
 なるて しまて  
 B ヤッパシ ショードクシタンジャ。 オレモ コトシ ニカイカ  
 矢張り 消毒したのた。 俺も 今年 =回が

サンカイ。 シタヤ ショードクシタラ ナニ ツカンワイ。 ツ  
三回。 そしたら 消毒したら 何(か) つかないわい。 付

キン スクナイワ。  
きが 少ないわ。

A ハンテンガヤ。  
斑点(か)か。

B ハンテン ツカン。  
斑点(か) つかない。

A ジャーカ。  
そうか。

B ホンテ アノー ダソート オモオテ ツイ ジキ マ マチコー  
それで あの 出そうと 思っ2 つい 時期(は) 間違っマ

テ ダサズニ ツイ スネタリ ナンカ シヨルケント。(笑) ソ  
おさおに つい 捨えたり なんか しているけれど。 そ

リャー ヤッパシ ヒリョー ヤリ ショードクセーニャー アノ  
れは 矢張り 肥料(は) やり 消毒 せねば あの

ツクラニャ アカンジャ。 トツカワン シワ ツクランジャ。  
作らねば いけない(の)だ。 ナ津川の 象は 作らない(の)だ。

デキテ モラウスカ アカン。 デキナンダチニ ートルスカ ソ  
できて 貰うから 「いけない。 できなかった」と言っているから そ

レデ ソレガ アカンジャワ。 シンケン シンケンニ ツクリャ  
れで それか いけない(の)だわ。 真剣 真剣に 作らねば

ーノー ナンデモ アノ アカン コト ナイ。 デキレンジ  
何でも あの いけない 事(は) 無い。 出来るのた

ャケントモ ツクランスカ アカンジャ。  
けれども 作らないから いけない(の)だ。

A ジャー。  
そうだ。

B デキタバカシジャ。ホンマニ。(笑) ショードクセンニャ。シヨ  
できたばかりだ。 本当に、 消毒せぬぞ。 消

ードクナンカ シオツタラ フラワレルグライジャ ケンド ソノ  
毒なんか していたら 笑われる位だ。けれど その

グライデモ セーニャー アカンフ。 シテモ アカン ヤツオ  
位でよ せぬば いけないわ。 しても いけない 奴も

セニャ ナオサラ アカンジャ。(笑)  
せぬば 猫更 いけない(の)だ。

S マー アノ ヒライシサンラ ジキニ フタコトメニャー トツカ  
まあ あの 平石さん等(は) 直に ニ言めには 十津

ワノ リンキョー コレワ トツカワノ キカンサンキョー ジャカ  
川の 林業 これは 十津川の 基幹産業 だからと言って、

ラチューテ。 ソリャ ジャー。 ソレワ ダレ ダレシモ ソレ  
それは そうだ。 それは 誰 誰しも それ

ニ イロンオ トナエル ヒトワ ナーワノーラ。 ソリャ ジャ  
に 異論を 唱えよ 人は 悪いわけえ。 それは そう

一ヨ。 ジャケドモ ソレタケデワ アノー ソンミン ミンナ  
だよ。 たけれども それだけでは あの 村民 皆

ユタカニ クーテ イケンジャカラノ。  
豊かに 食って いけない(の)だからね。

B イケン。 ソリャ イケン。 サッキ ユータヨーニ ソノー ナ  
いけない。 それは いけない。 先刻 言ったように その 何

ンモ カモ ヤラニャー アカンチヤ オコナンジャ。  
も 彼も やらぬば いけないとは 此の取のた。

A

ソリヤ モー ゴジューネンモノーラ ヨンジューネンモ ゴジュー  
 2リヤ もう 五十 年もねえ 四十 年も 五十

ーネンモ カカル ヤッハリ モー コノ スピードジタイジヤス  
 年と 掛かる 矢張り もう この スピード時代 だからねえ

カノーラ ヤッハリ コー カネノーラ カッ<sup>xxx xxx</sup> ウンテンゴ カイ  
 矢張り こう 金(加)ねえ 運転か 回  
 (14/)

テンゴ ハヤイノーラ スル タメニワ ヤッハリ ネンネン シ  
 転か 速くねえ ずる 為には 矢張り 年々 42

ューカクノ アルモノニノーラ モー モトメニヤ アカンシノー  
 稜の ある物にねえ もう 求めねば いけないね。

チョーキテキナ モノト フターツ ヤッハリノーラ イッポノ  
 長期的な 物と ニッ 矢張りねえ 一本の

ノ ハシラジャラノーラ ニホンデモ サシポノ ハシラ コシ  
 柱ではねえ 二本でも 三本の 柱(と) 推

ラエテ オカニヤ イッポノノ ハシラゴ イッタウ モー ペッ  
 えと 置かねば 一本の 柱が 行ったら もう へ

シャーンナツテ イッテ シモータラ クソニモ ナリヤ センジ  
 しゃんた言て 行て したたら 屎にも たりは (511)の

ヤスカニ ヤッハリ ヨーケノ ハシラニノーラ シトクチュー  
 だから 矢張り 余計の 柱にねえ してなくと云う

コト ダイジナ コトジャロトモーワ。  
 事 大事だ。 事だろうと思わ。

B

サシズメ ホシタラ コノ タニウチラヤッタウ マー スキヒワ  
 差話 したら この 谷内等 たつたら まあ 杉 松は

マー コレワ マー ベツカクト シテ オイテモ アト ホナ  
 まあ これは まあ 別格と して 置いとく まあ せぬなら

ラ ナニ ヤルカト エタラ ヨーサンノ ハナシカ アッタシ  
何(ト) やるかヒ 言ったら 養蚕の 誰か あった

シータケカ マー アルシノー スルケドモ ソレイダイニ ナニ  
検査が まあ あるしね おそれれども それ以外に 何

カ コー カネニ ナルヨーナ シゴトチューノワ モー カンダ  
か こう 金に なる様な 仕事と言うのは もう 考え

エラレン ワケカイノ一。

られない 訳かいね。

K イヤ コッタケ アラスン ヤッタラノ一 (咳) コンニャク  
いや これだけ 蒸らすの だらたらね 蒟蒻は

ワ ナンボデモ ウレルシ ツクレルシ クエルシ コンニャクワ  
いくらでも 売れるし 作れるし 食えるし 蒟蒻は

ナンボデモ アノ ツクリサエ シリヤ デキルンジャ。 コリ  
いくらでも あの 作りさえ すれば できるのだ。 これは

ヤ アノ一 ビョーキニ カカランヨーニサエ シリヤ ビョーキ  
あの 病気に かからない採にさえ すれば 病気に

ニ カカランシ コレワ アノ ヨーサンノ ツズキワ コンニャ  
かからないし これは あの 養蚕の 糞まは 蒟蒻  
(142)

クヤノ一。 コンニャクワ ユズカネ一 コリヤ イマン ウチ  
だね。 蒟蒻は これは 今の 肉

ジャッタラ アノ一 ナンジャワ、チャーント ハン オシトイテ  
だしたら あの 何だね。 ちゃんと 判(ト) 押(ト)あ

モ マ マチカイナイト オモ一ワ。

も ま 間違いないと 思うわ。

B リョーカ ヨーケー ナケリヤ一 アカンワイナー。 ナンシテモ  
量か 余計 無ければ いけないわね。 何(ト)も

コンニャクモノ。

蒟蒻もね。

S マエ トツカワカラ アノー イロンテ アノー オー オーサカ  
 前(12) +津川から あの 色んな あの ああ 大阪の  
 (143)  
 ノ イチバエ ミテ モツタラシーワノーウ。 ホウ アノ ホイ  
 市場へ 対して 持ったら(144)わねえ。 ほう あの はい  
 (145)  
 モジャータロ コンニャクジャータロ ユリネジャータロノーウ。  
 だとか 蒟蒻だとか (146) 百合根だとかわねえ。

ソシタラ ヤッパリ コンニャクトノー アノ ホイモ イチバ  
 せいたら 矢張り 蒟蒻とね あの はい(147) 一番  
 ン イート。 アトワ アカント。 アノ ユリネラワノー マル  
 良いと。 あとは いけぬいと。 あの 百合根等はね まる  
 ッキリ アノ モツタラ ショーヒンカタガ ナイト。  
 まり あの 持ったら 商品価値が 無いと。

A ジャー。 マ コツクノナー アノ ホイモワ イーンジャーノーウ  
 そうだ。 ま 此方のね あの はいもは 良いのたわねえ。

。 アノ ホカノ アノノー スヤズヤシタヨーナノーウ ウマク  
 あの 他の あのね ずやずやした様ねえ うまく

モナー。 アノ オーサカラニ ウリヨンノノー。 オレヤ マエニ  
 も 無い。 あの 大阪等に 売っているのね。 俺は 前にね

ノ オヤジン アノ アノ ビョーイン イトル トキノーウ ホテ  
 親爺が あの あの 病院(15) 行って居る 時ねえ せは

ニマメ コーテ クータンジャ。 マツタク クワレタ モンジ  
 煮豆(16) 買って 食ったのだ。 全く 食わぬか ものでは

ヤ ナーノー アノ スヤズヤシタヨーナ イモテノー ホリ  
 無いねえ あの ずやずやした様ねえ 芋でね それ

ヌー ヤッパリ コッチノ アノ ヤツカシランジヤータロ アノ  
 は 夫張り 此方の 八頭のたかか あ  
 (147) (148)  
 ノヲ ヒューガンジヤータロ ヌー ヤツニト モンダイニ ナラ  
 ぬえ 日白のたかか 言う 奴には 問題に なら  
 ンワノヲ。  
 たいわぬえ。

B アレワ イチバン オイシーンジヤ。 (混) イチバン ウマイワノ  
 あれは 一番 おいしいのだ。 一番 うまいわね。  
 一、アレ。  
 あれ。

A アレワ コッチダケニクワイニシカ デキンジヤ ナーカト オモ  
 あれは 此方だけ位にか できない(の)では ないかと 思う  
 一ノ一ヲ。 アノ ホイ アノ ウマー ヤツワノ一ヲ。  
 ぬえ。 あの <sup>xxxxxx</sup> あの うまい 奴はぬえ。

B ダイタイ アレワ ア ア アレワ ヤセヂニ イーンジヤ。 イモ  
 大体 あれは <sup>xxx</sup> <sup>xxx</sup> あれは 瘦地に 良いのた。 芋  
 ワ。 イモワ コエトツタラ コエジワ アカン。 ズヤズヤスル  
 は。 芋 肥えていたら 肥地は いけない。 ずやずやする。

。 アレ ヤセジノ イモチユー モノワ サツマイモデモ ヤセ  
 あれ 瘦地の 芋と言う ものは 薩摩芋でも 瘦地  
 (149)  
 ジノワ アマインジヤ。 アンダケワ トツカワニ イーンヨ。 (
 のは 甘いのた。 あれだけ 十津川に 良いのよ。

笑) コエ~~~~~ (笑) ツクリダシサエ スリヤノ一。  
 肥え 作り出しさえ おれはぬ。

S モナモカニモ セナー クーテ イケンジヤータユークントモ  
 坊 何も 彼にも せぬは 食つた いけない(の)た"と言うけれども

ト ユーテ <sup>マダ</sup> ナニモ カモ シオ ッ タウ マダ ア ッ チモ コ ッ チ  
 と 言ッテ 又 何も 彼も して いたら 又 彼も 此も  
 モ コー チューイカ サンマンニ ナッテ チューイリョクウガサ  
 こウ 注意が 散漫に なッテ 注意が

(150)  
 ブンサンシテ シマオーガイヨ。 ノー アレモ セン ナラン。  
 分散して しまつたようよ。 ねえ。 あれも せねば ならない。

コレモ。

これも。

K アレモ セン ナラン。 コレモ セン ナラン ユーテモノー コ  
 あれも せねば ならない。 これも せねば ならない(と) 言ッてもね。 ニ

ノ シータケチューノワ カギラレトルヨ。 コレワ アノー ヤ  
 の 権算と 言うのは 限られて いるよ。 これは あの 山

マノ アル ヒトノ イチブノ ヒトジャゼ。 ソノー ヒャクシ  
 の ある 人の 一部の 人だけ。 その 百姓

ョー ッ テ サンタンカ ヨンタン アル ヒャクシヨージャ ッ タラ  
 て ミ反か 四反 ある 百姓 だつたら

ヨーガント コンニャクダケワ イケル ワケナンジャ。 ヤマ  
 養蚕と 絹 だけ には いくら 訳 なのた。 山。

ッ チューノワ モー ホントニ アノ ヤマモチチューノワ トツカワソ  
 て 言うのは もう 本当 あの 山持ちと 言うのは 十津川村

ンワ ミナ ヤマモチカト モート ソー ジャ ナイ。 トー ア  
 は 皆 山持ちかと 思うと そうでは 無い。 <sup>xxxxxx</sup> あ

ノ ホント ユー タウ サンワリ フライ ヤマモチ オルカナー。  
 の 本当 言つたら ミ割位 山持ち(が) 居るかな。

B ソカーニャ オランヨ。  
 そんなには 居ないよ。



K オランヤロ。 /ー。 ソジャカラヨー ソー (2) ヒャクショー  
居ないに3う。 ねえ。 それだからね。 その 今の 百姓 (7)

ユーター ヒャクショーワ マー サンダンヤ ヨンタンワ アノ  
言ったら 百姓は まあ ミヌヤ 四反は あの

一 アラシトッテモ ヤル キニ ナリヤー マ サンダン ヨ  
荒らしていても やる 氣に なすは。 ま ミヌヤ 四

ンタンワ アルワヨ。 ハタ<sup>xxx xxx</sup> ハタジデノー。 タワ ベット シ  
反は あわよ。 畑地だね。 田は 別々

テ。

で。

A チャワ ドカーナ モンジャロ。 アノ フジヨ<sup>(15)</sup> カミノヨノーラ  
茶は どんな ものた3う。 あの 伏拝のよねえ

フジヨカミラニ チャー シヨッテ。ホコトシ ナンジャワ。 ナ  
伏拝等に 茶(缶) していて。 今 今年 何だね。 那

ッ チャイニ ナンボ ユーテ ナンビヤッホンモ コータワノーラ。  
組合に いくら(7) 言っ 何百本も 買ったわねえ。

B アイヤ アイヤ アカント。 チャワ。 モー シモノ シラ テオ アケ  
あねは ねえいけないの。 茶は。 もう 下の 衆等(12) 手も あけ  
トルワ。

でいるわ。

A フーン。 ジャーカ。  
ふうん。 そうか。

B ナカナカ モー カネニ ショート オモータラ イマ ユートー  
なかなか もう 金に しようと 思ったら 今 言う通りに

リニ シテ テキテ モロータラ アカンジャ。 アノ ソートー  
して できて 貰うたら いけない(の)だ。 あの 相当

テマ カカルセ、 チャフ。 ヒリョーカラナ。 モー ウジ ウジ  
手間(か) かかるせ。 茶は。 肥料からね。 もう 宇治 宇治

イ イタラ モー アレ チャーント コモ カブセルグライジャ  
に 行ったら もう あれ ちゃんこ 鷹(七) かがせる位だわね。

ワノー。 ソートー テマ カカルンジャ。 アリャー。  
相当 手間(か) かかるのだ。 あれは。

＊

§ ムカシカラ アノ イオッタ。 タニウチノ ミチワ イツ イテ  
昔から あの 言っていた。 谷内の 道は 何時 行ス

(153)  
モ キレーナチヌーテノー。 アノ ヨー イオッタワヨー。 コ  
も 奇麗だと言ったね。 あの 良く 言っていたわね。 こ

リャ ヒョーバンジャッタワノー。 トコロカ コノゴロ ワリカ  
れは 評判 だったわね。 所か この頃 劇方

タ キタナイノーヲ。(笑) イヤ アノ オカワセンセーカノー  
誘いねえ。 いや あの 小川先生かね

ヨー ジマンシヨッタンジャ。 ナー オマエラ タニウチン ミチー  
良く 自慢 していたのだ。 「ねえ ち前等 谷内の 道(11)

キテ ミー。 タニウチノ ミチワ モー トツカワデ イチバ  
来て 身よ。 谷内の 道は もう 十津川でー

(154)  
ン キレーナ ミチジマナ。 イヤー マー タシカニ アン ソ  
番 奇麗な 道だ。 いや まあ 確かに あの せ

(155)  
レホド ホケル ホド ホンマニ アノ ヨカッタヤノ。  
れ程 ほける ほへ 本當に あの 良かった(め)だね。

K (156)  
アノ ニシマエノ ウエノ ホーテ<sup>ト</sup>トル マエニ ミセノ シモ  
あの 西前の 上の オで 取る 前に 店の 下(に)  
ダーツト イッパイ ツンドゥタンヤ。 オリヤ ソレオ ホン  
だあッて 一杯 積んでいたのた。 俺は それを 本

マニ アノ一 ヤツスキマテグライ カカッツロ。 ヒトリデ<sup>ト</sup>  
當に あの 八ッ過ぎまで位 かがったろう。 一人で ヒ

ード ソレオ ヒトリデ<sup>ト</sup>サイキン トッタンヤ。 モーノレコ  
うとウ それを 一人で 最近 取ったのた。 もう のりこ

(157)  
シテ キトッテ テーッ。(笑)  
して 来ッて だえ。

A マー ホンデモ ナンジャロ。 コッテノーワ マー ホンデモ  
まあ それでも 何なろう。 此方は まあ それでも

デダニラヤ ナニカノ ミチー イッタクノーウ トッテヤ カナ  
出谷等や 何かの 道(に) 行ったらねえ とて 叶

(158)  
ワンモンヤノ。 トクニナー ノーウ アソコノ オットロシーワ  
やないものだね。 特にね ねえ 彼処の 恐しいわ

ノーウ。 オマエ。 スイカラ ノシテ イタラ 夕ト ナイ イ  
ねえ。 お前。 西瓜等(を) 載せて 行ったら 一オ 何(を) 行

タク モー ハエ ハエ ハエ クワナンダラ モ グサグサニ  
ったら もう 早く 早く 早く 食べなかつたら もう ぐさぐさに

ナルグライニ ナルンジャケンド マー コッテラ マー ロメン  
なる位に なるのたねえ。 まあ 此方等(は) まあ 路面

モ イースカデモ アルケドノーウ マー デモ ナッテア イラシ  
も 良いからでも あるからねえ。 まあ でも 那知合らい

一 ヨーナ アレジャノ一ウノ ジーサンヨ モー ジックケンクライ  
 様な あれではねえ 爺さんよ もう 十軒位に  
 ニ ナッテ シモート口。 タカラ モー ミナブシンノ トキニ  
 乃て しまつて居る。 だから もう 道普請の 時に  
 ノー ナヌカニ ジャッツロノ一ウ。 アノ トキラ モー タイ  
 ね 七日に たつたらうねえ。 あの 時等(は) もう 平(は)  
 (159)  
 ラ イナベン オクンジャーシ シヤ アノ ミナワ イクラニテ  
 一番 奥のたし ね あの 道は いくらでも  
 (160) (161)  
 モ アルシノ一ウ コモリ イキオツタンジヤ。 イマニシ イキオ  
 あるしねえ 小森(に) 行っていいのだ。 今西(に) 行って  
 ッタンジヤ。 ツクツタ トージワ。 ソノ コモリ イクノモ  
 いたのだ。 作った 当時は。 その 小森(に) 行くのも  
 イクツノ ミナモ アルクライノ ハナシニ ナッテ (湿) ショー  
 いくつの 道も ある位の 話に 乃て 仕様  
 か ナー  
 か 無<sup>~~~~~</sup>

C タニカイトモ オンナシジヤ。 エライ ミナジヤワ。 タニカイ  
 谷垣内も 同じだ。 大変な 道だわ。 谷垣  
 トモ ドツカラ ドコマデモ。 オトツイカ アメフリニ ナヌカ  
 内も 何処から 何処まで。 一昨日か 雨降りには 七日  
 ヤッタヤ アメ フッテ カンナリ ヒルマニテ ワシトコノ ネ  
 たらたか 雨(か) 降って 雷(か) 昼まで 儼(の)所の 姉  
 一か デタンジヤ。 ソシタラ ネー ハチニ ココ クワレテ  
 か 出たのだ。 したら 姉(か) 蜂に 此処(も) 食われて  
 メー ミエンヨーニ ナッテ シモータ コンドワ カーチャン  
 目(か) 見えぬ様に 乃て しまつて 「今度は 母ちゃん

カワッテヨチユースカ カワッタウ サー エライ ミナジャシ  
代わってよと言っから 代わったら さあ 大変な 道だ"し

カミナリワ ナルシナー モー バンカダ トニカク ナカブラノ  
雷は 鳴りしね もう 晩オ 兎に角 中村の

オジサン カマオ オイテ デテ キタワ。アノ モー アッナ  
小又土ん(か) 鎌を 置いて 出て 来たわ。あの もう 彼方

ズット シモヘンデ モー カミナリワ ナルサカイッテ。(笑)  
ずっと 下辺で もう 雷は 鳴りからって。

ワシラ ホースイナンカ カケテ (笑) モッテ  
農等(は) 防水なんか 掛けて もって

キタ。 ドコエ イテモ エライ。 イマ ヤマミチワ。  
来た。 何処へ 行ったも 大変な。 今 山道は。

B サトミナモ エラインジャケンドノ一。  
里道も 大変なのた"けれビ"ね。

C ウン。 サトミナモ エライケドモノ一。  
うん。 里道も 大変な"けれビ"もね。  
コセーテ"

B ウチトコナンカモ イー シフク イー センジセ  
うち(の) 所(は) なんかも小勢で 修整(は) 良く しない(の)た"。

A ジャー。  
そなた"。

C ジャーヨ。  
そなた"よ。

B ワンカ トール トコダケジャ。 ヤッチャ グロリシジ+。  
自分(か) 通る 所(は) けた。 やっちは ぶろりんた"。

A ウーン。 オレッコソジャ。  
ううん。 俺こそだ。

S マー ホンマニ シカシ キョーワ モ ヒサシブリニ デオーテ  
まあ 本当に (か) 今日は もう 久し振りに 出会う  
かー。  
ね。

C (笑) ヒサシブリ。  
久し振リ

S ウーン。 エライ アノ イー ハナシ ギョーサン キカシテ  
ううん。 大変 あの 良い 話(は) 仰山 聞かして  
モローテノー マッタク ヨカッタワ。 ホンマニノー。 アノ  
貰ってね 全く良かったわ。 本当にね。 あの  
(163)  
ココーナ ハナシ ヤッパリ ダイジナノーラ。 ホンデモ。  
こんな 話(は) 矢張り 大層だねえ。 それでも。

A ソラ ジャーヨ。  
それは そうだよ。

S ノーラ。 マタ アノー イッパン ボンデモ アノー ダミン  
ねえ。 又 あの 一辺 盒でも あの ね 管。  
ナ。

K オー。 ヨッテノー。  
おね。 寄ってね。

S ヨッテ イッパイ ノーダリ ハナシオ シタリ。 ノーラ。  
寄って 一杯 飲んだり 話(は) (は) ねえ。

K アスビー コイヨ。 イッペン。 ノー。  
遊び(に) 来いよ。 一辺。 ね。

S ウン。 マタ アノ コサシテ モラウヨ。 ウン。  
うん。 又 あの 来して 貰うよ。 うん。

A イズレワ ソノ マタ ボンオドリモ シタリ シテジャノーウ。  
何れは その 又 盆踊りも したり してたねえ。



S ウン ウン。 ボンオドリ セヒ ショージャ ナーカ。 アノ一  
うん うん。 盆踊り(E) 是非 (よ)では 無いが。 あの

ワシ マタ アノ ヒラダニホーメンノ ヒトラニ ミンナニ  
僕 又 あの 子谷方面の 人等に 皆に  
(164)  
ユーヨッテ = ヨビカケテ ンダ。 ユノ マエ ニシマエノ シニ  
言うから 呼ぶかいてた。 この 前 西前の 衆に

ノ イツ コトシヤ オドリキヤケユッテ マー ユーンジャワイ。  
ね 「何時 今年は 踊り来か」と言って まあ 言うのたわい。

クルンジャッタラ クルヨーニ アノ ユーテ クレヨ。 ジ  
「来るのたらたら 来る様に あの 言って 呉れよ。 地

モトデモ チャント スルヨッテニ ッチューテ アノ。 ジャー。  
元でも ちゃんど 来るから」と言って あの。 「そうだ。

コトシワ ホンデモノー ドーゾ イーヨルセケユッテ ユー ハ  
今年は どれでもね どうとか 言っているせ」と言って 言う 話

ナシシテカラ。 アノ一 ソノ トキ ハナシー ナラナンダケント  
しから。 あの その 時 話(に) ならなかったけれどね。


ナ。


K モー デモ ハジメルンジャッタラ ハジメニヤ アカニノー。  
もう とも はじめのだったら はじめねば いけなね。

A ソリャー モー ヤッバリ ココ ココン ジモトノ ヤッヂャ  
それは もう 矢張り <sup>xxx xxx</sup> 此処の 地元の 奴では

ソリャ ナンチューテモ ナカブラノ ジーサンダモン。 ナ。ヒ  
それは 何に言っても 中村の 爺さんだもの。 ね。一

トツ オマエ  
ッ お前。

K オレジャ ナー。 アレジャ   
俺では 無い。 あれだ'

A シオーテ ヤッテ クレニャ モ アキヤー セン  (笑)  
1合2 ヤ2 呉わわは も あきは 1ない

C (笑いながら) リョコーニ イテモ マツヤノ ジーサンダケジャ  
旅行に 行つた 松屋の 爺さんだけだね。

一ネ。 サキー オドルノ。 ドコ イテモ イチバン サキー。  
先に 踊るの。 何処(1=) 行つても 一番 先(1=)。

ロージンカイ ……  
老人会 ……

S アー ジャーカ。  
ああ そうか。

C イチバン サキー オドルンジャ。 コノ マエワノ モネツキオ  
一番 先(1=) 踊るのだ。 この 前はね 餅搗き踊り何

ドリノ。 マツヤノ ジーサンガ イチバン サキニ オドッテ  
松屋の 爺さんが 一番 先に 踊つて

クレルネ。 ドコエテモ <sup>xxx xxx xxx</sup> リョコー ロージンカイデ リョコーニ  
呉れるね。 何処へ入つても 老人会で 旅行に

イフノニ イチバン サキニ オドッテ クレルワ。  
行くのに 一番 先に 踊つて 呉れるわ。



A カター コトモ ヤラコイ コトモ マズワ オマエ ロージンカ  
堅い 事も 軟い 事も 先のは お前 老人から

ラ カワキリッテ コトデ ヤッテ フレニャー アカシカイ。  
皮切りッテ 事で やッテ 呉れ物は いけないよ。

S クズノ シモ ゲンキナンジャロ。

葛尾の 衆も 元気なのだろう。

A ゲンキナヨ。 アレモ イソシーヨ。

元気だよ。 あれも 働いよ。

B アレモ ロージックミアイニ ハーッタンジヤ。 コトシ。

あれも 老人 組合に 入ったのだ。 今年。

S アー ジャーカ。

ああ そうか

B カイルチュンジャケンド オル アイダワ ハーレチューテ ソレ  
帰ると言うのにな けれど 居る 間は 入れと言って それ

カウ ハーッタンジヤ。 ソレデ トード ハーッタ。 オーサカ  
から 入ったのだ。 それで とうとう 入った。 大阪入

エ イクンジャチューテ チャット ウソ タレテ イケナンダケ  
行くのだと言って ちゃと 嘘(は) たいて 行かなかった

ンド。(笑)ゼニ シコタメテカウニ。(笑) ナクアイノ シラ  
けれど。 銭(は) 一杯貯めてから。 那知合の 衆等(は)

アホジャスカチューテ。 ダマサレタチューテ。(笑) ソーデモ  
阿呆(は)からと言って。 騙されたと言って。 とうとう

ナカローカ ツイ イケンヨーニ ナッタンジヤナー。

無からうか つい 行けない程に なったのだね。

A ヨカン クルーダ。

予算(か) 狂った。

B ヨサン クルータ。(笑)  
予算(か) 狂った。

C ジュ-ヨッカカ ソーカイジャノー。  
十四日(か) 総会だね。

S ジュ-ヨッカヤ。  
十四日(か)。

C タニカイトワノー タイカイ ジュ-ヨッカカ ソーカイジ+。  
谷垣内はね 大概 十四日(か) 総会だ。

S ナナアイワ。  
那知合は。

A ナナアイモ ジュ-ヨッカニジ+。  
那知合も 十四日(か)にた。

S ジャーカ。  
そ(う)か。

A イッショニジ+。  
一緒(に)にた。

S アー ジャーカ。  
ああ そ(う)か。

A タニカートワ ココデ イーワナ。 ナナアイワ ワンカノ ウチ  
谷垣内は 此処で 良いわね。 那知合は 自分の 家  
ホンノ オレン トコ キア モラウ……。 ミンナ キテ モラ  
ほんの 俺の 所(に) 来て 貰う。 皆 来て 貰

ウノモノー エライシ。 エライワ。 キノドクナンジャケント。  
うのもね 大変だ(わ)。 大変だ(わ)。 奇の毒なぬた(け)れど。

B ~~~~~ ナンジャ。 セツビ デキトラナー ショシ ナーワ。  
何(に)だ。 設備(が) できていねは 仕様(が) 無いわ。

(167)

A ホテ ラクサケ<sup>0</sup> アリャー センワノーラ、 アカーナ トコ。 モ  
 そに 楽下げ(は) ありは (ないわねえ。 あんた 所。 も  
 モー デンキモ キ……。 アカッテ キテ モラウノワ キノ  
 もう 電氣も 来……。 上って 来て 貰うのは 気の  
 ドクナンジャケンド。

春なのだけれど。

C ソーカイ シタ アトデ オドッタク ミンナ アノー オトコシ  
 総会(を) (た あとで 踊ったら 皆 あの 男衆  
 う オルケンドノ ココデ。 ココヨ。 モー ココヤ。 オドルノワ  
 筈(か) 居るけれども 此処で。 此処よ。 もう 此処だ。 踊るのは。  
 ホタラ ナチアイカウモ ココエ キテ モラワン ナランワ。  
 そしたら 那組合からも 此処へ 来て 貰わねば ならないわ。

オンナシヨ一ニ。

同じ様に。

K ダカウ ソレマデニ ナラサナ アカンワ。  
 たがから そゆまにに 慣らさねば いけないわ。

A ソリャ アカン アカン。  
 そりゃ いけない いけない。

C ワカイ コカ オランシノー。  
 若い 子が 居ないしね。

A モー マー オマエ ヒサシー コト ナニ セン。 オドリ+  
 もう まあ お前 久しい 事 何 1ない。 踊りは  
 センモノノ。  
 (ないものね。

K アシタノ バンカラ アシタノ バンカラ。  
 明日の 晩から 明日の 晩から。

(混)

K エー。  
ええ。

S ミセノ ネーデモ イキトリヤノーウ。  
店の 姉でも 生きていかねえ。

A ジャー ジャー。  
そう そう。

S うん。 アノシー ナトー ワカー コラ オシエテ ヤレヨケユ  
うん。 あの衆(に) 「一オ 若い 子等(に) 教えて やれよ」と言っ  
ッテ ユーテ。  
ア 言って。

A オウンモノーウ、 ホンマニ。  
居ないものねえ。 本当に。

K ソコラン オンナノ ヒトモ オドルジャロ。  
其処等の 女の 人も 踊るだらう。

C ミセニ <sup>(168)</sup> オレットコノ マーガ イマ コーコーニ イキヨレント  
店に 俺(の)所の まあが 今 高技に 行っているのと

カーミカイトノト サンニンクライヤノー。 ワカイ コジ。  
上 垣内のと 三人位だね。 若い 子で。

A モー ホテ ナンジャーゼ。 ワカー コニ ユータッテ ショー  
もう して 何だぜ。 若い 子に 言たって 仕舞か

ン アノ ムリヤー ナーデ。 ノーウ。 ソリヤ ヤッハカリ ナ  
あの 無理は 無いよ。 ねえ。 せれば 矢張り 何

ンジャーゼ。 モ トシヨリガ サキニ タッテ モー ドカーナケ  
たぜ。 もう 毎朝りが 先に 立て とう どんで


(169) リヤ一。 オマエ ヒナ ヒチハチネン ツイ カレコレ ジューネ  
あれば。 ね前 セ セ八年 っ かかこれ 十年位  
ンゴライ モ一 オドランジャ ナーカ。  
もう 踊らないうでは 無いわ。

S ジャーロー。   
たろうねえ。

A ロー。   
ねえ。

S ジャーロ。 ジャーロ。 タニウチデ オドリヨールテューノ キータ  
たろう。 たろう。 谷内デ 踊つていとて言うの 聞いた  
コト ナーワ。   
事(か) 無いわ。

A ナーゼロー。 ソレジャーヌカ モー シリヤ一 センカナ。  
無いわねえ。 それたから もう 知りは (ないよ)。

ワカー シラニ ユータッチッテロー。 ジーサンラ  
若い 衆等に 言ったて言つてねえ。  爺さん等

ゴライ ヨ一 シッ シットローカ。 オマエラ。  
位 良く XXXXXXXX 知っているたろうが。 ね前等。

B シランワ。 オレワ シランワ。  
知らないわ。 俺は 知らないわ。

A バカオドリゴライ。 (笑)  
馬鹿踊り仕。

S ヒラダニデ オドリオルセ。 マイバン。  
平谷で 踊つていっせ。 毎晩。

A ジャーカ。 ナラシオルカ。  
さうか。 慣らしてあるか。

§ アノノ一 ソンノムネカラ <sup>(171)</sup> ユータウ チバチューノカ オローカ  
 あのね 孫の背から 言ったら 千葉と言うのが 居るだろうよ  
 イナ。 アノ ユービン ショーンノ。 アレン スキナンジャ。  
 ね、 あの 郵便(E) しているの。 あれが 好きなのだよ。  
 ノーウ。  
 ねえ。

C アノ オトーカ スキジャ。 オトーワ モー ハタジュー スキ  
 あの お父が 好きだよ。 お父は もう 八十 過ぎ  
 ルケンドモ ヨッピオテ タッテッテ アシフミ チョイ チョイ  
 るけれども 夜、いって 立っていて 足踏み(E) ちょい ちょい  
 チョイ チョイ チョイ チョイ アシフミバツカシ シテ ウタ  
 ちょい ちょい ちょい ちょい 足踏みばかり して 唄(E)  
 ー ウタウンジャ ナー。 アノ ジーサンワ。 ハタジュー スキ  
 歌うのだね。 あの 爺さんは。 八十 過ぎ  
 ル ジー。  
 る 爺。

A アノ ナン ナンジャツタイ。  
 あの 何 何だったかい。

C チバ ヨシ ヨシタ ヨシタローカ。  
 千葉 吉 吉太 吉太郎か。

A チバ ヨシタローヤロ。 ヒゲタロー。 アノ ジーサンニ <sup>(172)</sup> アッ  
 千葉 吉太郎だろう。 秀太郎。 あの 爺さんに 「あッ」  
 ト オドロイタノワ コノ マエノ フクオカウ <sup>(173)</sup> イテノ一 ホシ  
 ヒ 驚いたのは この 前か 福岡算(12) 行ったね そし  
 テカウ オマエ ミナミン シンジャロカイタウ ユーテカウ オ  
 ー お前 「南の 衆のた'らうよとやら 言っ 親

ヤジカ スカ ホシラ オマエ イキナリ マー コカーナ  
爺が から として お前 いきなり まあ 「こんど

ウタガ ムカシ ジャッタニ ウター キーテ クレチューテ  
唄か 昔 たったから 唄(モ) 聞いて 奥へと言っ

(174)  
ウタイソメタラ ミンナ オマエ ビーックリシテ キテカラ ハ  
歌い初めたら 皆 お前 びっくりして 来た 「は

(175)  
ーッテ カッコ ホンニナ オマエ シマイマテ キカナンダラ  
あって 恰好 本当にね お前 (まいまで 聞かなかったら

ワレイトモーシ。(笑) モー ホテ イノートモーダラ マヒトツ  
悪いと思うし。 もう そして 往のう と思つたら 「まーっ

(176)  
アレンジャ。 コレモ アレンジャ シューテ ヤリソメダラ ホタラ  
あるのだ。 これも あるのだ」と言つて ヤリ初めたら そしてら

カ カンコーキャクラガ キタ。 アリャー チョット イカレ  
xxx 観光客等が 来た。 「あはは 一寸 いかれ

イカレタ ヤツラ ウカレテ。(笑) フローオライヨ。(笑) マ  
いかれた 奴等(か) 浮かれて。」 笑つているわいよ。 ま

ッコト カッコクソ ワルカッタセ。 ホンマニ。(笑) ソレジャ  
こくに 恰好(か) 悪かったせ。 本当に。 それで「お  
(177) (178)

ーナ キカニャー オレリャー センシ シュートデ イネルモン  
て 聞かぬは 居れば しない 途中で 往来るもの

ジャ ナーシノーラ。 ヒトー マー ウター ウトータリ ハナ  
では 無いしねえ。 人(か) まあ 唄(モ) 歌つたり 話を  
(179)

シュー シテ クレルノニ。 マッコト ホンボクセナンダ。ホンマニ。  
して 奥れるのに。 まこくに ほんぼくしなかった。 本当に。

§ ホイジャ マー イサオー キョーワ コレデ オワローカ。 オ  
それでは まあ 一応 今日は これで 終わらうか。

一キニヨ。 ドーモ アリカトー ゴザイマシタ。 ドーモ。  
大きにわ。 ほうも 有難う ございまして。 ほうも。



## 注 記

(1) ナカブラは中村。m・bの交替例の一つ。同様例としては、後掲(注記111)のムイブサク(無為無策)などがある。中村は話し手Kの家名である。この地方では家名が盛んに行われている。四村区だけを見ても次のように同姓が多いからだろう(『十津川』に依る。( )内は同姓数。なおここに示されている大字の戸数は現状とかなり異なっていると思う)。

|            |          |         |         |
|------------|----------|---------|---------|
| 平 谷 (173戸) | 栗 栖 (13) | 滝 本 (5) | 鎌 塚 (4) |
| 箱 田 (3)    | 津 賀 (2)  | 上 北 (2) | 谷 向 (2) |
| 植 村 (2)    | 杖 本 (2)  |         |         |
| 込之上 (48戸)  | 谷 向 (6)  | 丸 田 (3) | 西 垣 (3) |
| 北 村 (2)    |          |         |         |
| 檜 原 (30戸)  | 松 実 (17) | 西 垣 (2) | 原 田 (2) |
| 那知合 (15戸)  | 後 木 (3)  |         |         |
| 谷垣内 (29戸)  | 和 田 (7)  | 東 (5)   | 上 垣 (3) |
| 田 花 (2)    |          |         |         |
| 山 手 (32戸)  | 東 (3)    | 上 中 (3) | 表 谷 (3) |
| 千 葉 (2)    | 乾 (2)    | 孫 入 (2) | 佐 吉 (2) |
| 猿 飼 (28戸)  | 新 谷 (7)  | 森 (6)   | 津 賀 (5) |
| 畑 山 (2)    |          |         |         |
| 桑 畑 (43戸)  | 岡 (7)    | 東 (4)   | 横 倉 (3) |
| 中 島 (3)    | 岩 本 (2)  | 大 家 (2) |         |
| 七 色 (37戸)  | 藤 森 (8)  | 知地理 (4) | 大 前 (3) |
| 井 向 (2)    | 中 上 (2)  | 下狩谷 (2) | 中 野 (2) |

また、話し手A・B・Cの家名は、Aミナミ、Bマツヤ、Cアタラシヤである。

(2) 自然談話の中で、各話し手とも、しばしば語末を引いて発音をする傾向が見られた。そのため、「カイコー…カイオル」が「蚕…飼って

いる」なのか「蚕を…飼っている」なのか、はっきりしない。そこで逐語訳では「蚕(を)…」のように示した。以下、一々注記しないが、同類の例は同じ示し方をした。

(3) カイオルは又、カイヨルとも現れやすい。現在進行を表す。結果存続を表すのには～トル(～ドル)を用いる。その例、

エキン フリョール。 現在進行  
スキン ツンドル。 結果存続

しかし、自然談話の中でこの二つはしばしば混同されるかのようである。

(4) コーテは「飼って」。テ・タ(デ・ダ)などに続く時、いかゆるハ行・バ行・マ行五段動詞はウ音便形をとる。その例、

ウトーテ(歌って) トーデ(飛んで) ヨーデ(読んで)

また、au:0:については別項「十津川村那知合・谷垣内の言語」も参照していただきたい(以下、特に断らないかぎり、この項を別項と称する)。

(5) ジャはいかゆる指史の助動詞、ジャはよくヤの系列でも現れる。

(6) ノーラは十津川の特徴的な言語要素である。間投助詞的にも間投詞的にも用いられる。ノラとも。

(7) オレは第一人称代名詞でワシとともに上下の隔てなく使う。Cの発言は時々ワタシが出てくるが、これは改まった言い方と言ってよい。接辞ラは複数、例示、婉曲などを示すようであるが、各例についてどれが妥当するか、はっきりしない。例えば次のように用いられる。

A (Bに向かっ て) ジーサンラグライ ヨー シxxx xxx ットローガ。  
オマエラ。(109ページ)

S アノ ユリネラワノー マルッキリ アノ モッタラ ショー  
ヒンカチカ ナイト。(94ページ)

S サシズメ ホシタラ コノ タニウケラヤッタラ マー スギ  
ヒワ マー コレワ マー ベッカクト シテ オイテ ……  
(92ページ)

A …… アノ トキラ モー タイラ イチバン オクンジャー  
シ …… (100ページ)

(8) ノは又、ノーとも。(6)のノーラに同じ。

(9) 注記 (3) を参照していただきたい。

(10) 注記 (48) を参照していただきたい。

(11) 形容詞の言い切り形が適用修飾に用いられている。同様例。

A …… ウンテンが カイテンが ハセイノーラ スル タメニ  
ワ …… (92ページ)。 29ページ5行目のチカも同類例か。

なお、*ai: ai:*については、別項の音韻の解説を参照していただきたい。

(12) 話し手 A の家名。

(13) コッチナはあるいはコッチラかもしれない。不明確。

(14) ヒッタテは急斜面。急斜面を耕作した畑の意。

(15) 間投詞的に用いられる。

(16) ホテは又、ホシテ、ホッテとも。サ行音とハ行音との交替は接続詞に多く見られるが、他にも (91), (138) などの例がある。

(17) イテは「行って」。テ・タなどに続く時、カ行五段動詞はイ音便形をとるが、「行く」は例外的にイテ・イタなどのようになるのが普通。

(18) 間投詞的に用いられる。

(19) ソリカーニは「そんなに」の意。ソレカーニ、ソンカーニ、ソカ  
ーニなどとも。

(20) 林業のため、山中に泊ること。

(21) 着替え、簡単な食器類など入れて背負う袋。

(22) シブッコに入れる食器類などの総称。

(23) アカーテは「明かして」。テ・タ(テ・ダ)などに続く時、カ行・ガ行・サ行五段動詞はイ音便形をとる。また、*ai: ai:*の一例でもある。が、すぐ下のイブツテのように、サ行五段動詞の場合、促音便形をとることもある。

(24) メシューは「飯を」。i0: ju:の一例。

(25) 第二人称代名詞。上下男女の別なく用いる。

(26) ホデは又、ホンテとも。(16) を参照していただきたい。

(27) スィリは「知り」。自然談話中、*si: si:*はこの一例だけで、あるいは誤用例か。

(28) ナは又、ナーとも。(6) ノーラ、ノウ、(8) ノ、ノーに同じ。

この三者について、土地の人は、ノウに最も親しみを感ずる、ノヒナとの間に上下関係などの差は無いが、ノの方が本来的な土地こヒのよりに思うと語った。

(29) ムッカチは又、ムホカチとも。「麦搗ち」つまり、麦の脱穀作業のこと。

(30) カブレサンカーテは「気触れ涼して」。～サカスは、「一面に～する」の意の動詞後項要素。「一面にかがれて」の意。別項音韻の解説および(23)も参照していただきたい。

(31) 大野寿男此はガンナ コト ナー (がいな事無い六丈(た事無い。ナイ：ナーはa1:a2の例として、自然談話中、しばしば現れている。)とも聞こえるとするが、今は文字化したようにとって置く。

(32) スカニは又、スカとも。(117)のシカもこれと同じかと思う。言い切り形に続いて、理由原因を示す。同類の働きを示すものとして、他にサカイ・サカ(59)、ヨッテニ(164)、ニ(65)が認められた。

(33) ンは又、ノとも。言い切り文の中でも主語を示す。又、ダレンカウシガイナ(85ページ)のように疑問文の中でも用いられる。

(34) クワ コーテは、「蚕を飼って」の言い誤りか。

(35) 話し手Bの家名。

(36) このあたり、特に不明確。カワン トシワ か。

(37) 「蚕を飼わなかったのは、終戦の春、一回だけだ。」の意。

(38) 話し手Aの前言を受けている。

(39) 「俺だけ……」の意。オンはこの自然談話中、一例だけ。

(40) (は(は、休詞的に用いられる。

(41) 五条市に近い吉野郡北部の地名。

(42) 産里を主な大字とする十津川村七区の内の一。

(43) 注記(107)、(144)のように「～に対して、～に向か、て」の意で用いられる。

(44) 「飼うことをする」の意。

(45) テキトル キトルケンドの箇所、「蚕を飼う人ができてきているけれど」の意の言い込み。

(46) キボ一モ ナニシの箇所、「希望も持って」の意か。

(47) このあたり、言い直し、言い込みがある。

(48) ワカは又、ワンカ、ワンカとも。「自分」に相当する反射代名詞。

話し手Aは(10)のようにジブンを用いているが、これは多分に改まった言い方だと思う。話し手Bの(90)も同様だと思う。

(49) ユージャーは、動詞の言い切り形に指定の助動詞ジャ(5)が直接続いた形。なお、このあたりは、他者発言の引用が複雑している。

(50) 養蚕の種紙について話している。

(51) 注記(49)を参照していただきたい。

(52) カカリソメテは「手掛けは(めて)」の意、～ソメルは「～しはじめる」の意の動詞後項要素。この自然談話中、(174)、(176)の例が拾われる。

(53) ツ口は過去推量を示す。ここでは不適切な用い方のように思うが、(74)、(84)などの例がある。

(54) 大野寿男氏の解説に依れば、このあたりの典型的な住居形式は下図のようであって、奥の間が寢所であり、又、養蚕所ともなった。そのためこのような発言や、後出の話し手Aの発言も出てくる。なお、この話し手Bの発言の中の「……ニンゲンカイコカウダッタラ……」の圈点の箇所は、共通語との混濁形かと思う。

(55) フデコは話し手Cの名。ネ一は年上の女性に対する親称。

(56) 注記(7)を参照していただきたい。

|    |     |     |
|----|-----|-----|
| 台所 | 中の間 | 奥の間 |
|----|-----|-----|

(57) m:bの交替例。

(58) 「手を加える、世話する」の意。

(59) サカはサカイとも。注記(32)を参照していただきたい。なお、この自然談話中、サカ、サカイの系列は、話し手Cの発言にのみ認められた。ひとことすると、この土地本来のものではないかもしれない。

(60) 共通語「やはり」の相当形は話し手B・Cではヤッハリである。他の話し手ではヤッハリである。ただし、B・Cの現住地は、Bは那知合、Cは谷垣内である。

(61) ソマーノとも聞こえるように感じられるが、今は記録したように

受けとれた。ソマーノであれば「私の≒木伐り出し職の」であろう。

(62) 職人の意。

(63) この自然談話中、休詞的に教箇所出てくるが、土地こくばとして第二人称代名詞としての語勢は決して無い。

(64) ヒトネヤは「一閨」。一つの寢床の意。なお、場所を示すのには、この例のように助詞エを用いるのが普通である。

(65) 注記(32)を参照していただきたい。同様例としてハロータニノ一(124)などがあるが、この二は共通して文末部に使用されている。

(66) 上簇するの意。

(67) 否定辞と呼応して不可能の意を示す。下に可能動詞は来ない。

(68) 一音節名詞は理性的には長呼しない。

(69) タローは又、タロとも。事物を並立する。(146)、(148)

(70) オキルの命令形オキーに引用を示すテが続いた形。

(71) 注記(65)を参照していただきたい。

(72) オコスの否定的接続形。2i: aの例でもある。

(73) 「甘やか(過ぎる)」の意。m: bの例。

(74) 注記(53)を参照していただきたい。

(75) インダウは「憚(たら)」の意。テ、ダ、ダウ(テ・タ・タウ)などに続く時、撮音便形をとるのはイ又、シ又など、十行五段動詞だけで数が少ない。

(76) タレカツガレテは「垂れられて≒漏らされて」の意。～カツゴは、「悪いこと、気に染まないことを～する」の意の動詞後項要素。受身形で用いられることが多い。

(77) 言い淀みの箇所。

(78) オレリヤは「居れば≒居ることができは」の意。可能動詞オレルの連用形オレリに助詞ワが融合した形。同一例に(177)がある。質問調査によれば、上下一般動詞のラ行五段化の傾向がある。ミル、ネルを例語として、その様子を次ページに示しておく。なお、この自然談話中、ラ行五段化の形はオレリヤ以外に(82)のテローがある。また、(89)も同例である。(118)も同じである。

|    | 未然形                                   | 連用形              | 終止形              | 連体形                | 仮定形               | 命令形                                  | 志向形                                    |
|----|---------------------------------------|------------------|------------------|--------------------|-------------------|--------------------------------------|----------------------------------------|
| 見ル | ミ <sup>ヽ</sup> ン<br>ミ <sup>ヽ</sup> ラン | ミ <sup>ヽ</sup> タ | ミ <sup>ヽ</sup> ル | ミ <sup>ヽ</sup> ルトキ | ミ <sup>ヽ</sup> リヤ | ミ <sup>ヽ</sup> ー<br>ミ <sup>ヽ</sup> レ | ミ <sup>ヽ</sup> ヨ一<br>ミ <sup>ヽ</sup> ロ一 |
| 寝ル | ネ <sup>ヽ</sup> ン<br>ネ <sup>ヽ</sup> ラン | ネ <sup>ヽ</sup> タ | ネ <sup>ヽ</sup> ル | ネ <sup>ヽ</sup> ルトキ | ネ <sup>ヽ</sup> リヤ | ネ <sup>ヽ</sup> ー<br>ネ <sup>ヽ</sup> レ | ネ <sup>ヽ</sup> ヨ一<br>ネ <sup>ヽ</sup> ロ一 |

(79) この箇所、ハラカケニ、ハラタテニなどと聞こえる。土地の人はハ<sup>ヽ</sup>ダカニかとも言うが不明。一応ハラカケニとしておく。尻まくりした裾を腹に掛けるようにして、の意か。

(80) トトイは「弟兄＝兄弟」の意。

(81) セチコーテは「責めて」の意。

(82) 注記(78)を参照していただきたい。

(83) うは文末にあつて他をうながし同意を求める感じ。注記(133)も参照していただきたい。

(84) 注記(53)を参照していただきたい。

(85) 「方法が」の意。

(86) ゴーラは河童のこと。

(87) 特に人体の部位を言うわけではない。大野寿男氏・後木弘氏によれば、水死して肛門の開いた状態を河童のしわざとして、それをシリノネオヌクと言う。

(88) 誰しき氏の姓。

(89) 注記(78)を参照していただきたい。

(90) 注記(48)を参照していただきたい。

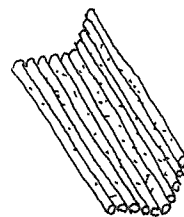
(91) 注記(16)を参照していただきたい。

(92) このあたり、発言内容不明確。

(93) 「傾斜が急でない」の意。

(94) 木材などの運送のための設備の一つ。

(95) 右図のように丸太を並べて溝を作り、そこをくらせるようにして山から木材を搬出すること。



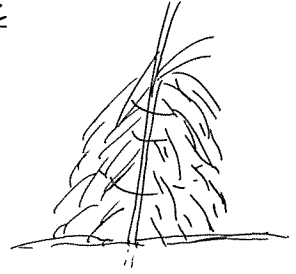
(96) ホボは鋒鋳か。ここでは樹木の末枝の意。

(97) 大野寿男氏はクサラカーと聞く。「痛らし(て)」の意か。

- (98) クサベウのヘラは籠か。
- (99) アレカーナは「あんな」。(19)のソリカーニなどと同類。
- (100) ドカーナケリヤ一。形容動詞(型)の仮定形式はキレーナケリヤ一(奇麗であれば)の如くである。したがって、この箇所、逐語訳的には「どんなであれば」となる。しかし、同一例の(169)、類似例のドカーニナリヤ(101)の用例を合わせて考えると、疑問の仮定形式には、発疑の用法があるのではないかと思う。いわば、「どうなのだろう。」とでも訳すべき。
- (101) 注記(100)を参照していただきたい。
- (102) 大野寿男氏とその同僚である後木氏(那知会現任)も、はじめで聞くと「奴等」と訳語をあてたが、問題が残る。あるいは供等か。
- (103) ㄱ(ク)は助数詞。ナンㄱは、ほぼ「何日」に相当する。
- (104) 注記(61)を参照していただきたい。
- (105) テンキリは「最上・一番上・一番良い」の意。テンキリカセキは「最上の椽き」のこと。
- (106) やや不明確。あるいはムネかもしれない。峯のこと。
- (107) 注記(43)を参照していただきたい。
- (108) 地域を指す。山手川下流の方。話し手Cの現住地である谷垣内は、山手川の上流方にあたる。
- (109) 高滝は、十津川をはさんで谷垣内の真東に位置する大字名。
- (110) 注記(11)を参照していただきたい。
- (111) m: bの交替例。
- (112) 話し手Sの名。
- (113) この箇所、文字化したように聞こえるけれど、どうしても意味不明。
- (114) 注記(11)を参照していただきたい。
- (115) この箇所、文字化したように聞こえるけれど、不明確。文意不明。
- (116) ホーソは柞。コナウ、クヌギ、オオナラなどの総称。
- (117) 注記(32)を参照していただきたい。
- (118) 注記(78)を参照していただきたい。



- (119) 誑(手C)の家名。注記(1)を参照していただきたい。
- (120) ススとは、右図のように、伐り出した木竹を  
 芯として、それに刈草をくくりつけること。
- (121) 誑(手C)に親(…)の家名。
- (122) 見かけ、身体。類似例が(129)にある。
- (123) 誑(手A)の名。
- (124) 注記(32), (65)を参照していただきたい。
- (125) 目をかける、面倒をみる、の意。
- (126) 向こう臍と言うこと。
- (127) 注記(69)を参照していただきたい。
- (128) クソノヘニモ。慣用句か、それとも言ひ誤りか(例えば、「屎の  
 役にも」), その点、下明確。
- (129) 注記(128)を参照していただきたい。クソは貶称の接辞。
- (130) ジェは「で」。(27)と同じく、あるいは誤用例か。
- (131) 「大して」の意。
- (132) 十津川村の四村区の中心的大字名。
- (133) イコーは勧誘の意。同一形式でイコー(134)は意志、シマオー(150)は未来推量をあらわしている。この形式が勧誘の意で用いられる時、  
 ラの続くことが普通だと言つていい位に多い。なお、このうについては、  
 注記(83)を参照していただきたい。
- (134) 注記(133)を参照していただきたい。
- (135) あるいはウセコ=ヤ一の聞き誤りかもしれない。この場合、ウセ  
 は蔑意の接辞として働いている。
- (136) ワローは和郎。蔑称。「野郎」の意。
- (137) ミレは三齢。蚕の成長の一時期を言う。二眠と三眠との間の時期。
- (138) ヒリョーは飼料。ji: siの交替例。
- (139) 谷垣内から西南部に位置する十津川村の大字名。
- (140) ツボネは「粒」の意。
- (141) 注記(11)を参照していただきたい。
- (142) ヌズカネー。大野寿男氏はユルカネーと聞く。それであれば「揺



がない」だ。

(143) 言い淀みではない。間投詞的に働いている。

(144) 注記(43)を参照していただきたい。

(145) ホイモは里芋のこと。

(146) 注記(69)を参照していただきたい。

(147) ヒュー加は芋の品種名。

(148) 注記(69)を参照していただきたい。

(149) 「あれだけ……」の意。注記(39)を参照していただきたい。

(150) 注記(133)を参照していただきたい。

(151) フジヨカミは伏拝。地名。

(152) 山手川流域に点在する那知合・谷垣内・山手の大字を総称して、垣内と言う。

(153) 形容動詞(型)の言い切り形の語尾は、ニサであることを本則とする。連体形と同形である。(154)、(163)、(164)などを参考されたい。

(154) 注記(153)を参照していただきたい。

(155) ホケルは、「鳥がよく囀る」などの意を持つ。ここでは、目慢してよく口にする、の意。

(156) 誰(手以外)の人名。

(157) ここでは、道路の残留物に関する擬態的表現。

(158) S:七の交替例。

(159) 誰(手以外)の人名。

(160) 谷垣内・那知合の北部に位置する十津川村の旧行政中心の大字。

(161) 谷垣内・那知合の北西部に位置する十津川村の大字。

(162) 谷垣内よりも、山手川下流にあたる方。

(163) 注記(153)を参照していただきたい。

(164) 注記(32)を参照していただきたい。

(165) 注記(153)を参照していただきたい。

(166) 元気で、一所懸命に働いている状態を言う。

(167) ラクサケは楽下げ。楽を持つこと。気楽にすること。

(168) 誰(手)の球館の愛称と言う。

(169) 注記(100)を参照していただきたい。

(170)  $\xi_i$  :  $\zeta_i$ の交替例。注記(16)も参照していただきたい。

(171) ソンノムネは地名。孫入の峯とあてる。あるいは注記(106)と関連のあることかもしれない。

(172) アッは感動詞。

(173) フクオカは、平谷のバス発着所そばにある商店名。

(174) 注記(52)を参照していただきたい。

(175) ハーッは感動詞。

(176) 注記(52)を参照していただきたい。

(177) 注記(78)を参照していただきたい。

(178) イネルは「帰れる」の意の可能動詞。

(179) センボクはナー(無い)とともにセンボク ナーの形で用いられることが多い。センボク ナーは、健康がすぐれない、蚊が嫌い、といった意。ここのセンボクセナンタも同趣で、「気分が悪かった」の意。

(付1) モドリは鰻などを採るための竹筒で作った漁具。

(付2) オーニツケは大煮付。ムキノオーニツケとは、米のごく少ない麦粥のこと。

(付3)(付4) クサブツ、クサブツンドともに草藪の意。

## II. 高知県<sup>なんごく</sup>南国市<sup>おこう</sup>岡豊町<sup>たきもと</sup>滝本

収録・文字担当者 土 居 重 俊

## A. 収録地点とその方言について

1. 地点名 高知県南国市岡豊町滝本

### 2. 収録地点の概観

高知県ゆげ中央に高知市があるが、収録地点はその高知市に隣接しており、南国市の中にあっても一番高知市に近い位置にある。近くには国鉄一宮(いっく)駅があり、高知市のセンターはりまや橋から車で約20分かかる。はりまや橋の近くからバスが通っている。(32号線道路) 滝本は32号線道路からすこし入ったところで、四方が山にとりこまれ、盆地と言っている場所である。ここには美しい滝があり、池には朱塗りの橋がかかり、とても美しい観光地となっている。一休南国は古くから開けていたところで、王朝時代に平司(紀貫之ほか)が、ついで守護代が住み、長宗我部元親が現在の高知市に移るまで、土佐の政治、文化の中心として栄えた。昭和34年10月、野中兼山の開いた後免町を中心にして嶺南15か町村が合併し、田園都市たる南国市が発足したのである。岡豊町滝本は戸数約70、人口約2400人。農家が大部分を占め、米や麦を生産する以外にはこれと言った産業は無い。

### 3. 収録した方言の特色

①四国方言の中にあつて、土佐方言は阿讃予方言と対立する方言とされているが、この土佐方言は高知市を中心として安芸郡から高岡郡にわたる地域の方言(仮称東ことば)と中村市を中心として旧幡多郡全域にわたる方言(仮称西ことば)とに大きく分けることができる。東ことばと西ことばとはアクセント体系が異なる(前者は甲種、後者は乙種〔一部は無アクセント〕)が、音韻・語法の面でも小異がある。東ことばに属する地帯は、さうに東部から東洋・佐喜浜地帯、中部・大豊地帯、高知地帯、大川・本川地帯、吾川・仁淀

地区、興津地区、大野見・産川地区などに下位分類されよう。収録  
 地点はもろろ高知地区にけいる。高知地区に隣接する物部・大豊  
 地区や大川・本川地区は、それぞれ阿波方言、伊予方言の影響を受  
 けており、高知地区と比較すると、アクセントや語法などに小異が  
 認められる。何と言、てもやはり高知地区の方言が、中庸を得た、  
 代表的な土佐方言と言えらであらう。

②収録地点のモーラ表を掲げ、高知地区方言の音声的特徴に触れる

N bu pu mu nu ru su zu tu du ku gu hu u

T bo po mo no ro so zo to do ko go ho o

(Q)

R ba pa ma na ra sa za ta da ka ga ha a

be pe me ne re se ze te de ke ge he e

bi pi mi ni ri si zi ti di ki gi hi i

bju pju mju nju rju sju zju tju dju kju gju hju ju

bjo pjo mjo njo rjo sjo zjo tjo djo kjo gjo hjo jo

bja pja mja nja rja sja zja tja dja kja gja hja ja

wa

土佐ではジとヂ、ズとヅいわゆる四ッパを音声学的にも音韻論  
 的にも区別する。ただしほげ40歳以上の人が区別するのであつて  
 、若年層には識別能力は無くなつてゐる。土佐でも一部の地域では  
 識別能力を欠く(40歳以上でも。)が、収録地点ではもろろろ

く区別されている。

タ行とカ行との前の母音に鼻音化現象が認められる。これもほぼ40歳以上の人に適用される。

母音でけうに特色がある。唇が左右から寄って来て、東京方言の [u] とくらべると唇が幾分かき出るし、音も [u] よりは奥まできこえ、私見によれば Jones の cardinal vowel の [u] の音価にきわめて近いと観察される。

母音の無声化現象はほとんど認められない。[arimasu] に対して、[arimau] と発音する人が往々見うけられる。

「ei」に該当するのは [ei] で、[e:] は限られた少数の語（「聲」「姪」など）についてしか発せられない。

「ー」は往々長音化されるが、東京方言に見られるほど顕著ではない。

サ行音の子音 /s/ は舌先を使わずに発せられるようで、[θ] に近く聞こえることもある。

タ行音では [t<sup>s</sup>u] ~ [tu]、カ行音では [d<sup>z</sup>u] ~ [du] の音が普通である。[ti] [di] はあまり聞かれない。

[kwa] [gwa] は欠けている。

母音の前や語末の /n/ は、しばしば [ŋ] である。

アクセントは京阪型の甲種である。

③文法上の特色としては、次のごときものがある。

「動詞（形容詞・形容動詞・助動詞について）のいわゆる仮定形は、「行けば」「よければ」のような「～ば」の形式を取らない。「行たら」「行くと」などとする。

ナ行変格活用として「死ヌル」「往ヌル」の形を、終止形としても連体形としても使用する。「ソナニ首ヲ締メタラモ一死ヌル、死ヌル。」「死ヌルトキ」など。

「書カー」「乗ラー」「用ダラー」などのように、ややざんざいな詠嘆形とでも言え、たゞよさそうな表現法がある。すべての動詞に適用できる。

三モーラの形容詞を強調していう場合、カールイ(軽)カタイ(堅)ナンガイ(長い)の形式を取る。(播磨地方などではカールイ・カタールイ・ナガールイ。)

使役表現として、「ス」「サス」「ラス」「ガス」をもっぱら使用する。「行カス」「締メサス(orラス; ザス)」

可能表現として、「レル」「レレル」「ヨー……スル」「ケニナル」などがある。「起キレル」「起キレレル」「ヨー起キル」「起キケニナル」ケニナルは純粋の可能と言うよりも、事情が許すとも言った場合である。なお不可能をあらわす際、老年層は「エー行カン」の形式を多く取る。若年層はもっぱら「ヨー行カン」である。(老年層も「ヨーセン」の形式は使用することもある。)

否定表現は「ナイ」と使用せず、もっぱら「ン」である。過去否定は「飲マザッタ」「飲マラッタ」「飲マンカッタ」などであるが、「飲マンカッタ」の形式は主として若年層が使用する。もとも女性には宮城県近傍での年配の者が使用しはじめている。

禁と表現はA「<sup>レ</sup>果ナ」「<sup>レ</sup>為ナ」「笑ウナ」B「<sup>キ</sup>果ナ」「<sup>キ</sup>為ナ」「<sup>キ</sup>笑イナ」の二系列がある。Aはぐんぐんな気持 Bはやさしい感じを伴う。

意志表現は「<sup>シ</sup>ー」(しよ)「<sup>ギ</sup>ー」(逃げよ)「<sup>果</sup>ー」(果しよう)が普通。

推量表現は「<sup>書</sup>クロー」「<sup>為</sup>ッロー」(od. <sup>為</sup>タロー)「オコラレルロー」など。「ソーニカーラン」「行くニカーラン」は「多分……らしい」の気持。

命令表現はA「<sup>読</sup>メ」「<sup>果</sup>イ」B「<sup>読</sup>ミ」「<sup>果</sup>ー」の二系列がある。Bの連用形命令の方がやさしい響きを持つ点禁止表現のBとパレルである。

継続態と結果態とを「<sup>降</sup>リヨル」と「<sup>降</sup>ッタル(od. <sup>降</sup>ッ左ー)」で表現する。

接続表現として助詞に「<sup>ケ</sup>ント」(けれど)「<sup>キ</sup>」「<sup>キ</sup>ニ」「<sup>ケ</sup>ン」「<sup>ケ</sup>ニ」「<sup>ケ</sup>」(以上いずれも「から」)などがある。



いわゆる「ト抜け」現象が著しい。「行カンユータ」  
限定表現として「バー」（くろい）がある。「コレバーユータ＝  
マダワカラシカヨ」

#### 4 その他

##### 地点選定の理由

南国市周豊町は方言的に最もニュートラルな、代表的であると思  
われる。選定地点に田島氏という民謡をよく語る人が居ることも好  
条件である。

##### 協力者氏名

田島正実 高橋秀子 森田多賀恵

##### 協力内容

田島氏が私邸を開放してくださり、近所の森田・高橋の両婦人と  
あわせていただく。二人の婦人も録音にこころよく協力してく  
ださった。

#### B. 表記について

- ① ウ はらおむね [u]。従って [u] の調音点よりも後よりで、  
音も奥で聞こえる。
- ② サ・ス・セ・ソ の子音は、やや [θ] に近い。音先を多く使  
用する。
- ③ チ は [tʃi] に近い。
- ④ ツ は [tsu] ~ [t<sup>s</sup>u] と、ト は [tu]。
- ⑤ テ は [d<sup>ʒ</sup>i] ジ は [ʒi] ヅ は [d<sup>ʒ</sup>u] ~ [dzu] ズ は [zu]  
ド は [du]
- ⑥ 鼻音化は コドモ、イゴク のように表記し、それぞれ、  
[kōdomo]、[igoku] に該当する。この鼻音化も強く聞こえる場  
合と弱く聞こえる場合とある。強弱して物を言ふとき、鼻音化も著  
しく聞こえる。強弱いずれの場合も一様に小字のノを用いる。

## C. 収録内容の概説

1. タイトル ①滝の由来と景観 ～ ② 稲の不作

2. 録音年月日 1975年10月12日

3. 録音場所 田島正実氏宅(高知県南国市岡豊町滝本)

4. 話し手の氏名その他

田島正実 男 明、29年生 農業 滝本で生まれ今日に至る。79年間。純粋の方言を保有している。話しずみで話もじょうず。

高橋秀子 女 明、31年生 無職 南国市白木谷で生まれ40年間居住の後滝本に移る。純粋の方言を保有。よく話す。

森田多賀恵 女 大、4年生 無職 南国市久礼田で生まれ22年間居住の後滝本に移る。よく話す。純粋の方言を保有しているが、改まるといふの少し標準語が出ることもある。

5. 録音環境 田島氏、高橋さん、森田さん、土居の4名の同席。話の進行状況・場の雰囲気ともに良好。

6. 各タイトルの概説

① 滝の由来と景観

南国市毘沙門の滝については長宗我部元親に因縁のあること、滝のあり滝本部落が昔は寺町として栄えていたこと、滝おしびせの付近の風景が昔と今ではらっぽく来たことなどについて話している。

② 支那祢様の祭り

支那祢様の祭りでは、初期におおかみがおられたこと、氷や菓子などを買ったが昔はやすかったこと、いろいろの興行があって楽しかったことなどを話している。

③ 夜這い

おばあさんが主役になり、若い頃を回想してスリルに富んだ夜這いの話を中心に、男女の交歓の場であった宵遊、大松明をともした秋祭りの話をしていく。

#### ④ 女房かたぎ

昔の「女房かたぎ」という略奪結婚習俗は、ツケトドケという役が大変だったということを中核にして、その概略を論じ、女房かたぎの具体例をじいさんポー、ばあさんポーとして話している。

#### ⑤ 昔の服装と遊戯

老人の子ども時代は男の子も女の子も着物を着ていたこと、遊戯としては、おてたまなどとしたこと、一般的に言っても昔の子どもはよくいたざらとし、けんかとしたことなどについて語りあっている。

#### ⑥ 小学校時代の思い出

昔の教科書や教育勅諭、成中語者などについて語りあい、昔の教育はきびしかったことをじいさんが迷懐している。

#### ⑦ 迷信習俗

ほとけばあさんのお告げ、神官の祈禱、耳小さぎの風習、社日様・氷口様・おさげい様と言った農事に関する祭礼の話。

#### ⑧ 稲の不作

稲のいもち病にやられて、ほとんど全滅状態におさわり、ひどく難儀したこと、一袋に小鉢人は貧乏したことなどについておたがいに話している。

# 1 滝の由来と景観

話し手

(略号) (氏名) (性) (生 年)

- A 田島正実 男 明治29年生れ  
 B 高橋秀子 女 明治31年生れ  
 C 森田多賀恵 女 大正4年生れ

A オマンラー ツノ ヨンカラ キチューキニ ビン モンノ タキ<sup>①</sup>  
 あなたがたは その ようから 来ているから 毘沙門の 滝  
 ノ ユワレオ ジューブン シルマイノ ガ オンキ ヌラー ハエ  
 の いわれを 十分 知らまいた。 おとさんなどは はえ  
 ヌキノヂーキニ コドモノ オリカラ オヤノゲラーン デン  
 ねさだ から こどもゆ 折から おやどはんの 祖  
 マラーニ ハナシ キーチュ ルンガノー。アノ ビン モンサマ  
 父なんかに 話を 聞いて いるのねえ。 あの 毘沙門様  
 ト ユー モノワ ダイタイ アレワ アノ イクサンガミサマン  
 という ものは だいたい あれば あの 軍 神 様  
 だつて。

B アーソー。  
 ああ そう。

A エライ イクサンガミサマヨネ。 ホンデ ジョーソクガベモトチ  
 えらい 軍 神 様 だね。 それで 長 宗 我 部 元

カ<sup>ク</sup> が アノー オコー<sup>ン</sup> デ シロオ キン<sup>ド</sup> イテ オッタ オ  
親<sup>バ</sup> あめ 岡豊で 城上 さず いて いた 折  
リモ センソーニ デテ ユク ト<sup>ッ</sup>ー オリニヤ ビッ シリ コ  
も 戦争に 出て 行く という 折には いったも こ  
ノ ウン<sup>ダ</sup>ガミ アノー ビ<sup>シ</sup> モンサマエ ソノ オン<sup>ガ</sup>ンオ  
め 氏 神 あめ 毘沙門様へ その お願<sup>と</sup>  
コメニ キテ<sup>ノ</sup>ー。  
こめに 来てねえ。

B  
フーン。  
ふうん。

A イクサニ カツヨーニト ユー イクサンガミサマン<sup>ガ</sup> ツー<sup>ン</sup>ガノ  
いくさに 勝つようにと いう 軍 神 様 だ というのだわ  
ー。  
ねえ。

B  
ソーカヨ。  
そうかぬ。

A ソノ ソレ<sup>ン</sup>デ アノ タキオ ビ<sup>シ</sup> モンノ タキ ビ<sup>シ</sup> モン  
その それで あめ 滝上 毘沙門の 滝 毘沙門  
ノ タキト コー ユワーヨ。  
の 滝と こう 言うのだよ。

B  
フーン。  
ふうん。

A ホンデネー ソノ ビ<sup>シ</sup> モンサマン<sup>ガ</sup>ネー イクサンガミサマン  
それでねえ その 毘沙門様のねえ 軍 神 様  
ヂャニヨッテ アソ ンマニ ノッテ アノ タキオ ノリア<sup>ン</sup>ダ  
であるために あめ 馬に 乗って あめ 滝上 乗り上げ

ヨッ タトッ ズ ガノ一。  
ていたということだわねえ。

B フーン。  
ふん。

A ノリアン ゲヨッ タトコロン ガ ちゅー トン デンマン ガ タオレタ  
乗り上げていたところが 途中で 馬が 倒れた  
ト。  
んだって。

B フーン。  
ふん。

A タオレタキニ ソノ シマンノ タオレタ トコロノ アトン ガ ア  
倒れたから その 馬の 倒れた ところの あと の あと  
ノ ナカノ ダンニ シマンノ ガ ネータ<sup>②</sup> カタチン ガ コーノ  
の 中の 段に 馬が 寝た 形が こう 残  
コッ チョ ラヨ。  
っているよ。

B ソーカヨ。  
そうか。

A ソレカラ アノ一 シマンノ アシアト イワユル ツメアトト ユ  
それから あの 馬の 足跡 いわゆる 爪跡と い  
ー モンガ フタトコロ ミトコロ アラー。 ソノ トツメアト  
う ものが 二ところ 三ところ あるさ。 その 爪跡  
ワ オマンラーモ ショ ちゅー ローン ガヨ。  
は あなたなんかも 知っているだらうさ。

B ソー アタシモネー アノ うエノ ハシノン ダンニネー。  
んん あたしもねえ あの 上の 端の 段にねえ。

A シー。  
んん。

B アシアト<sup>ン</sup>ガ アルト ユー コト<sup>ン</sup>デ。  
足跡が あると 言う こと で。

A シー。  
んん。

B マー イテ ミヨ ユーテ。  
まあ 行って みよ と 言っ て。

A シー。  
んん。

B イテ ヘーカラ クイオ ウッ テネー。  
行って それから 杭と うっ てねえ。

A シー。  
んん。

B ヘーカラ コー クイオ タテタトコロ<sup>ン</sup>ガ マー フカイ フカ  
それから こう 杭と たてたところの まあ 深い 深  
い。 ヘーカラ ヌイテ スンドッ<sup>テ</sup>③ ミヤー イッ<sup>ン</sup>グ<sup>ン</sup>  
い。 それから 抜いて 測って みれば 一 尺  
ゴスソ。  
五 寸。

A ソーン<sup>ン</sup>ヂャロ アシラー<sup>ン</sup>ガ コー。  
そうだろう。 わたくしなんかのこう。

B ソレバー アッ タ。  
それくらい あつ た。

A ヒ<sup>ン</sup>ヂコマ<sup>ン</sup>デ クルバーノ。  
肱 ま で 達するくらいめ。

B アー。  
ああ。

A ツメノ アトノ ガ アラーヨ。  
爪の 跡が あるよ。

B イッ シヤ グ ゴスノ アルヨト ユーテ アタシノ ガ ユータ。  
一尺 五寸 あるよと 言って あたしが 言った。

A アノー トヲ マリ タキオ ンマン デ ノリアノ デタト ユーバー  
あのう っまう 滝上 馬 で 乗りあげたと 言うくらい  
ノ カミサマン ぢゃ。  
の 神様だ。

B フーン。  
ふん。

A イクサン ガミサマン ぢゃ。  
軍 神 様 だ。

B アー。  
ああ。

A モトモトネー。 アノ タキノ モトニワネー。 イマノ タメイ  
もともとねえ。 あの 滝の もとにけねえ。 今の 溜池  
ケニ タッ ぢ ラノー。  
に なっているねえ。

B アー。  
ああ。

A アコニワ ソノ タキモトジト ユー オーケナ オテランガ ア  
あそこにはその 滝本寺と いう 大きな お寺が あ  
ッテネー。  
ってねえ。



B フーン。  
ふうん。

A ソコナ ボーサンガ ヒユート ユー ボーサンガ ッテネー。  
そのめ 坊さんが 非有と いう 坊さんであってねえ。

B フーン。  
ふうん。

A ソノ ヒトワヅ グンガクシノデ ユワユル センソーノ コト  
その 人は 軍学者で いわゆる 戦争のこと  
オ ヨー ショ ヌル ボーサンデ。  
と よく 知っている 坊さんで。

B フーン。  
ふうん。

A ちーゾウ ガベモトナカワ ビッ シリ ソコエ アノー イクサノ  
長宗 我部元親は いつも そこへ あゆう いくさめ  
ホーオ ナライニ キタト ユーゾガネー。  
法と 習いに 来たというのだねえ。

B ソーカ。  
そうか。

A エー ソレデ アコワ ヒジ ヲニ ソノー ナニヨネ アノー  
ええ それで あそこは ひなうに その なんだね あゆう  
エイショ ノ アル トコロ。  
由緒め ある ところ。

B フーン。  
ふうん。

A イマ ミルヤー ナンカー ヘンテトウ モ ナイヨーニ ミエル  
今 見れば 何も 変ったも 無いように 見える

ケンドノー。ソー ユーヨーナ ユイシノ アル トコロ。  
けれどねえ。そう いうような 由緒の ある ところ。

B  
フーン。  
ふん。

A  
ソレカラネー。エー タキモトワ ソノ トージワ ビシビシ  
それからねえ。ええ 滝本は その 当時は 次から次へ  
ソノ オテランガ アッ テネー。  
その お寺が あってねえ。

B  
ン。  
ん。

A  
ソノ ホン ホンドーノ ワキニ ソレソレノー ボート ユーテ  
その 本 本堂の わきに それぞれの 坊と 言っ  
テオ トッケテネー。オテランガ ビシビシ<sup>④</sup>アッ テネー。  
名をつけてねえ。お寺が 次から次へ あってねえ。

B  
ノー。  
んん。

A  
イマ モーテルンガ タッ 左ー トコロ。アコワネー。ナカノ  
今 モーテルが 立っている ところ。あそこはねえ 昔の  
ボート<sup>⑤</sup> ユワーヨ。  
坊と 言うんだよ。

B  
ノー。  
んん。

C  
アー。  
ああ。

A  
イマー エワンヨーニ ナッ タケンドネー ワタシラーノ ワカイ  
今は 言わないようになつたけれどねえ わたしらの 若い

ジラソニヤ アコオ ナカノ ボート ユー。  
時分には あそこと仲の 坊と 言う。

C ハー。  
はあ。

A ソレカラ アテイ' ガ アノ スマイオ シタ コノ ウエノ イ  
それから わたくしは あめ 後まいとした この 上め 今  
マノ スエンクノ トコロ。  
の 末め家め ところ。

B ソー。  
んん。

A ココオネー。 シモノ ボート ユーテネー。  
こことねえ。 下の 坊と 言ってねえ。

B ソー。  
そう。

A オテラン ガ アッ テネー。  
お寺の あってねえ。

B フーン。  
ふん。

C フーン。  
ふん。

A ナカナカ ソノ エウエル テラマチトシテ タキモトワ ソノ  
なかなか その いわゆる 寺町として 滝本は その  
ナソ我 ート サカエヲ ッタ トコロノ我 ト。  
なんだった 覚えていた ところだった。

B ソー。  
んん。

C アー。  
ああ。

A ソンデノー。 アノ タメイケオ スル オリニ アコオ コーゾ  
それでねえ。 あめ 溜池と する 折に あそこと 工事と  
シタ オリニ ソノ ヒワ タン ガヤンモ イトッ ロート オモ  
した 折に その 日は 多賀恵さんし 行ったらうと 思  
うンガ コーゾエネー。  
うが 工事へねえ。

C アー イタ イタ。  
ああ 行った。 行った。

A アンー ホルヤ カーラケヤラ イロイロノ ドキガン デテ  
あめう しろ かわらけや 色々の 土器が 出テ  
キタネー。  
来たねえ。

C デテキタン。 デテキタ。  
出てきた。 出てきた。

A アレノガ アノ テラノ アッタ シルジ。  
あれが あめ 寺の あった しろし。

C アー。  
ああ。

A ソレノ デ アタシラーノ デンマノ イソジト ユー モンノ  
それで あたしらの 祖父の 磯次と いう 者の  
ジンドイニャネー。  
時代にはねえ。

C ンー。  
んん。

A オニオーサマノ コワレタノガオ アノ カーエ ホリコーンデネ  
御仁王様め こわれたのと あの 川へ ぼうりこんでね  
ー。 ソレー スノガッテ ミンドラ オ アビタト ユー コトオ  
え。 それへ すばって 水と 浴びたという ことと  
キーた ーノガネー。  
聞いていらぬだけねえ。

B フーン。  
J. うん。

C アー。  
ああ。

A オーケナ オテラノガ アッテ  
大きな お寺が あって

C アー。  
ああ。

A タキモト ゼンタイノガ ユワユル テラマチトシテ サカエタッ  
滝本 全体が いわゆる 寺町として 栄えてい  
タ トコロヨ。  
た ところよ。

C アー ソーカ。  
ああ そうかい。

B フーン。  
J. うん。

C フーン。  
J. うん。

A ホンデ ソノ タノダ モー スミトラ イチエート ウチノ コト  
それで その た だ もう 住みついていると うちめ こと

ノ 発 キ ナンキ - キンガ トッ カン。ヘンテコノヨーニ オ  
 だから 何も 気が つかない。へんてこのように 思  
 モウケンドノー。ソー ユーヨーナ ユイ治ノ アル トコロノ  
 うけれどねえ。そう いうような 由 緒め ある ところ  
 発 ッタト。  
 だったそうじだ。

B フーン。  
 ぶん。

C アテイラーズ ガ コチラエ ヨメイリョ シテ キタ トキニ ア  
 わたしなんかの こころへ 嫁入りと して 来た ときに あ  
 ノー ビジヤ モンサマワ アノー アノ オタキニ ア ア アシ  
 のう 毘沙門様は あのう あの お滝に あ あ 足  
 ノンマノ アシアトノ ガ アルト  
 の 馬の 足 跡 の あると

A ソー。  
 ぶん。

C ユー コトオ キーテ デ アソコエワズ ドーイタチ イカレ  
 いう ことと 聞いて ず あそこへは どうしても 行っては  
 ンゼヨ<sup>④</sup>。アノー サデコカサレルキニト ユー コトオネー  
 いけないよ。あのう 払い落とされるからと いう こととねえ  
 アノー イーヨッ タン ガネー。  
 あのう 言っていたがねえ。

B ソー アタシラーモ コチ キタ トキニ ソノ ハナシオ キー  
 ぶん あたしなんかの こころへ 来た ときに その 話 と 聞いて  
 ち ー。  
 ている。

C ソー ソー ソー。  
んん んん んん

B アン ガラレント。 ホンデ カキオ シキ ー ッ タネー。 カネン  
あびってはいけないうだつて、それで 垣を してあつたねえ。 金属  
デ コー ズツ ト。  
で こう ず と。

A ソノ アノー タイターネー。 ナトニワ アレエ アン ガツ テ  
その あめう たいていねえ。 夏には あれへ あびつて  
ホリコカサレテ オーケナ ケン ガオ シタリ シンダリ シタ  
ふう落とされて 犬をな けのを したう 死んだう した  
モンガ  
者バ

B ソー ソー シンダ ヒトモ  
そう そう 死んだ 人も

A タクサン アツ タワヨ。  
たくさん あつたよ。

C ソー ぞ ト。  
そう だつて。

A ソー。  
んん。

C アン ダイノ ガクノ センセイモ アン コエ アン ガツ ち ッ タ  
あの 犬 学 ぬ 先生も あそこへ あびつていたの  
ヤイカ。 アノ。  
はいか。 あめ。

A コケタワヨ。  
落ちたよ。

C ソー コケタ ユーテネー。  
んん 落ちたと言てねえ。

A キョー トノ キョー トノ ダイン ガクノ ~~~~~ ネー。  
京都の 京都の 文学の ~~~~~ ねえ。

C ソー ソー ソー。  
んん んん んん。

A コノ ヒタ シンダワ アトゾ デ。  
この 人は 死んだ後 で。

B シンダネー。  
死んだねえ。

C ソーゾ チョ トノー。  
そうだとねえ。

A ソレバー ユワエル マー アラタカナ カミサマ ビシヤ モンサ  
それくらい いわゆる まあ あらたかな 神様 毘沙門様  
マゾ チヤ ネー<sup>⑦</sup>。  
だ ねえ。

C アノー ビシヤ モンサマモ アノ イマワ フーケインガ ウント  
あのう 毘沙門様も あの 今は 風景が うんと  
カワッ タケンド ムカシワ アノー ヨースイイケモ ナクシテ<sup>⑧</sup>  
変。たけれど 昔は あのう 用水池も 無くして  
タギンガ アノー モット コー タコーニ ミエタケンドネー。  
滝が あのう もと こう 高く 見えなけれどねえ。  
アノ イマワ ウント ソノ タギンガ コー スクノー ナッ  
あの 今は うんと その 滝が こう 少なく な  
タヨーニ ミエルケンド ムカシワ コーゴシカッタシガネー。  
たように 見えるけれど 昔は 神々 しかっ たがねえ。



B ソー。  
そう。

C ズット オーケナ ヌンダ スンギ ヒノケンガ ハエシゲッテ  
ずと 大きな 伸びた 杉 ひのきバ はえしげッテ  
アノ シーオ ヒライニ イタンガ アノー オミヤノ<sup>㊤</sup> オミヤノ  
あめ 権と 拾いに 行ったの あめう お宮の お宮の  
ババエネー。 シー ヒライニ イテネー。  
馬場へねえ。 権と 拾いに 行ってねえ。

B ソー。  
そう。

C ヨー シーオ ヒロータ コトノガ アルゼヨ。  
よく 権と 拾った ことバ あるよ。

B アル アル。 アタシヤ ー コチ キテカラモ シーオ ヒライニ  
ある ある。 あたしは こゝろへ 来ておくれも 権と 拾いに  
イタズネ。 シー ヒライニ。  
行ったね。 権と 拾いに。

A アノー ソンゲンオ ハカイシタワ オンチ ンガ トッ ミンガ  
あめう 尊厳と 破壊したのは おじさんバ 罪バ  
アルノ ガノー (笑) アル アノー ババニ ズット 看  
あるのねえ くれは あめう 馬場に ずっと 長  
ーゾ ガベ ジンダイカラノ オーケナ イクマーリモ アル ス  
宗我部 時代からの 大きな 幾まわりも ある 杉  
ギ ヒノケンガ ズット アタケンドネー ホラ。  
ひのきバ ずっと あたしけれどねえ ぼろ。

B アー。  
ああ

A アコエ ヨースイイケオ スルガ タメニ 飛ネー。  
あそこへ 用水池と する の ために だれえ。

B ソー。  
そう。

A ウモルト ユー コトニ ナツタ モンガ キニ ソノ ババノ  
埋めれるという ことになつた ものだから その 馬場の  
キオ キョウ タワヨ。  
木を 切つたのだよ。

B ソー ソー。  
そう そう。

A ホンデ セメテモノ ナンゴリオ トノ ドメヲ カニヤ イカント  
それで せめても の 名残と とどめておかなければ いけないと  
ユー コトノ テ アノ テイボーノ ソトエノ ゲンザイモノゴ  
いう ことであつた 堤防の 外へ 現在も 五  
ロツボノ マンダ  
六本 まだ

B ノコツキ ー。  
残っている。

A アー ユー モンガ ババニ ズーット  
ああ いう ものが 馬場に ずうと

B ソー ソー アッ タ アッ タ。  
そう そう あつた あつた。

A ヒルモ ヒトリノ 飛 イケンヨーナ サビシイヨーナ シンシン  
登も ひとりでは 行けないような 淋しいような 森々

ト シタ トコロン ぢ ッ タ。  
と した ところ だつ た。

C ソー ソー。  
そう そう。

C ヒエリッ ト シテノー。 アノー イマ オモウト アノ ユワ  
冷え 冷えと してねえ。 あのう 今 思うと あの 岩

タキカラ オリタ オナタ ミンジンガ ユワニ クンダケテ コ  
滝から 下りた 落ちた 水 が 岩に くだけて こ

ー ハナニ チッ テ エー ユワト ユワトノ アイダオ ミン  
う 花に 散って ええ 岩と 岩との 間 と 水

ジンガ ナンガレテ ユク コー キヨラカサンガ アッ タンガノ  
が 流れて 行く こう 清らかなが あつ たが

ー。  
ねえ。

B ソー ソー。  
そう そう。

C アノ ジブンワ ヨカッ タワ。  
あの 時分は どの たわ。

B ヨカッ タワ。  
どの たわ。

C イマト チンゴーテ。  
今と 違つ て。

B イマー モー アコワ コー ナニカニ イケンガン デキタキニ  
今は もう あそこは こう なにやいや 池が できたから

C ソー ゼンゼン モー カタチンガ カーッテ シモータキニノ  
そう 全然 もう 形 が 変つ て しまつ たからね

え。

A ソーヨ。モー ナンぢ ノー モーテルンガン デキタキ メン  
キヨ、もう なんだねえ モーテルの できたから あま  
ー シンゲンサワ ノー ャ ャ ノー。(笑)  
り 森 巖さけ 無くなたねえ。

---

### 注記

- ①文法面を考慮して、ビヤ モンとタキを分けて書いてみたが、タキも含め固有名詞として、ビヤ モンノタキと表記した方がよいかのように思う。
- ②「寝る」「着る」「知る(煮る)」など、一般動詞の連用形は、このように長音化することが多い。
- ③この語源は「寸取る」か。
- ④「びっしり」という熟語もやや近い。しかし、ほんとにこの語にびっしりあてはまる共通語は発見しがたいようである。
- ⑤固有名詞的に考えて、ナカノボと表記することも考えられる
- ⑥……ゼヨのゼは、デに非常に近い。
- ⑦ ぢ ャ ャ ネーとも聞こえる。
- ⑧ここは少し改まって標準語的な言い方になっている。
- ⑨このミは、ビと表記した方がよかったか。[b]と[m]との交替現象は中年以上の人に多くあらわれる。

## 2 支那祢様の祭り

話し手

(略号) (氏名) (性) (生 年)

A 田島正実 男 明治29年生れ

B 高橋秀子 女 明治31年生れ

C 森田多賀恵 女 大正4年生れ

A シナネサマ エー シナネサマワ オマサンラーヨリ ワタシガ  
支那祢様 ええ 支那祢様は あなたがたより わたしが  
フルイキニ ソノ ワタシガ フルイ コトヲ ユーキニ  
古いから その わたしが 古い ことを 言うからねえ  
オマサンラーガ ソノ シヤニ コトオ アド デ イーヨ。  
あなたがたが その 知っている ことを 後 で 言ってね。

B ハイ ハイ。  
はい はい。

A アテイラーガ コドモノ オリニャ ネー ツカイセンガン ゴ  
わたしがんかの 子供の 折にはねえ 小づかい銭が 五  
センゼヨ。  
銭だよ。

B アー。  
ああ。

C アー アー。  
ああ ああ。

A ソノゴセンド シーブン (笑) オミヤンゲンが カエタ。  
その五銭で十分 おみやげの買えた。

ネー。イチリンセンオ ツカイヨッ タキニネー。  
ねえ。一厘銭と使っていたからねえ。

B ソーソー。  
そうそう。

C アーア。  
あああ。

A アナアキ ユーテネー。イチリンセン。  
穴あきと言ってねえ。一厘銭。

C マッエト。  
まことに。

A イチリンガ タンイダ 我。イチリンデ オトッブンガ イトッ  
一厘の単位だ。一厘で おっぶの五つ  
トッモ カエヨッ タジダイダ 我 キニネー。  
も買っていた時代だからねえ。

C アーアー。  
ああああ。

A トッカイセンガン ゴセン。  
小づかい銭が五銭。

C フンアー。  
ふんああ。

A ソレデ マー オヤンダラーンが トッレテ イテネー。イタ  
それで まあ おやどなんのば つれて 行ってねえ。行た  
ラ イセイヨーニ ヤリヨッ タワヨ。 コーリウリノガノー。  
と威勢よく やっていたよ。氷売りのねえ。

サー イラッ シイ イラッ シイ。 コーリンガ イッ セン コ  
であ いら しゃ い いら しゃ い。 氷バ 一 銭 氷  
ーリンガ イッ セン。  
バ 一 銭。

B ソー ソー。  
そう そう。

A ヤマモリ イッ セン ヤマモリ イッ セント ユーテ コーリンガ  
山 盛り 一 銭 山 盛り 一 銭と 言ッテ 氷 バ  
イッ センヂャ。  
一 銭 だ。

C イッ セン。 アー。  
一 銭。 ああ。

B イッ セン イッ セン。  
一 銭 一 銭。

C ソー。  
んん。

A ソー ユーヨーナ オンネ ノラーノワ ジンダイノガ ッタト  
そう いうような おじさんなんかのは 時代 だ。 たこ  
ユー コト。  
いう こと。

C アー アー アー。  
ああ ああ ああ。

A ソレン デネー アレワ アノー シナネサマノ モトワ アノ ウ  
それで ねえ あれは あのう 支那 標 様の 元 は あの 浦  
ラノウチノガ モトノ デ アッ テ ムカシワ ソコカラネー。  
の内 ば 元で あッテ 昔 は そこから ねえ。

C ソー。  
んん。

A アノー イクマデ オナバレンガ アリヨッタトネー。  
あめうー 宮まで 御神幸が あつて、たんだつてねえ。

C フン フン。  
んん んん。

A オナバレンガ アリヨッタ トコロデ アノー ナニオ ウトッ  
御神幸が 行われていたところで あめう 何と 宇津  
ノノ ヤマオ ヨル コエテ キョッテ ウトッ ノノ ヤマデ  
野の 山と 夜 越えて 来ていて 宇津野の 山で  
オーカミニ オーテネ。  
狼 に 会つてね。

C アー。  
ああ。

A ソレデ オーカミンガ<sup>ン</sup> デル<sup>ン</sup> デタニ トイテ ミナ<sup>ン</sup>ガ ヒ  
それで 狼 が 出<sup>ル</sup> 出<sup>ル</sup>たに ついて 皆 が 火  
オ ツケート ユー コトデネー。 ソコナ ヘンノ ホーサオ  
と つけよと いう こと ねえ。 そのあ あたりの 小枝の薪を  
ヒライ アト<sup>ッ</sup>メテ ミンナー テニ テニ アカリオ トッ ケタ  
拾い 集めて 皆 手に 手に あかうと つけた  
トネ。  
たんだつてね。

C ソー。  
んん。

A ソレンデ オーカミワ ソノ エー オンワザッ タト。  
それで 狼 は その 襲う ことが できなかつたのか。



B フーン。  
ふうん。

A ソレオ ツタエテ イマノガ イマニモ ホラ オナバレト エ  
それと 伝えて 今が 今にも ほら 御神幸と 言  
ー オリニヤ カナラズ タイマト、オ  
う 折には かならず 松明 と

C タイマト、オ タフ。  
松明 と たく。

B アー ソー ソー。  
ああ そう くん。

C アー ソー ユー ユワレノガ アッ タカノー。  
ああ そう 言う いわれの あつたのかねえ。

A ソレノデン ゲンザイノデモネー。  
それで 現在 でもねえ

C ソー。  
くん。

A オナバレノ オリニネー。  
御神幸の 折にねえ。

C ソー。  
くん。

A ソーネー ババノ 左 - カン ホトリノ ヒノガシラン ガーニネ  
そうねえ 馬場の 中間の (まじりの 東 側) にね  
ー オーケナ ズギノ コノ キノ モトニ ちよ ットシタ コ  
え 大きな 杉の この 木の もとに ぽつとした こ  
ー オミヤオ オイぢー ラーヨ。  
う お宮と 置いてあるよ。

ソコエ タユーサンガ サキ マーッ ぢ ッテネー。  
そこへ 神宮さんの 先に 立わって いてねえ。

C  
ンー。  
んん。

A  
ソノ オミコシサンガ ソノ ムコーオ トール オリニワ ソノ  
その おみこさんの その 向うを 通る 折には その  
タユーサンガ オーオート ユーテ オーカミノ ナク コエオ  
神宮さんの おうおうと いて 狼 の 鳴く 声を  
シヨラーヨ。  
しているよ。(出しているよ。)

C  
マー ソーカ。  
まあ そうかい。

B  
ソノ ユワレオ  
その いわれと

A  
ソノ ユワレオ ズーット コー  
その いわれと ずっと こう

C  
アー アー  
ああ ああ

A  
トッ タエテ キヨル トコロ。  
伝えて 来ている ところ。

C  
ソーカ ソーカ  
そうかい そうかい。

A  
ホンデ マー ワシラーノ オリニヤ オナバレット ユー オリニヤ  
それで まあ わしんかの 折には 御神幸と いう 折には  
ソノ カミサマノ ゴガゴオ ウケニヤ イカン モンガ  
その 神様の 常加護を 受けなければいけないものだ

キニ アノ ババエ ヨンレトッ バーニ ズーット ミンナーン  
から あの 馬場へ 四列くらいに ずうと 皆 が  
ガ ナニヨ ウン ドッ クマッ テネー。  
あれだ うずくまっ てねえ。

B ンー  
んん。

A ソノ ウエオ オミコシサンガ コー カイテ トールヨーニ シ  
その 上を おみこしさんの こう かついで 通る ようにし  
テネー。 ミンナー ソノ シタエ モチコミヨッ タゼヨ。  
てねえ。 皆 その 下へ ばいりこんでいたよ。

B ンー。  
んん

C ンー。  
んん

C アテイラモ ソノ アノー オナバレオ オノ ガミニ イキトーテ  
わたしたちも その あのう 御神幸を おびみに 行きたくて  
ソノ レトッ ノ ナカエ スワッ タジネ。  
その 列 の 中へ 坐ったのだよ。

A アンタラーモ スワッ タ ーカネ。  
あなたも人も 坐っているのかね。

C スワッ タ スワッ タ。  
坐った 坐った。

A ソーカヨ。(笑)  
そうかね。

C スワッ タ。  
坐った。

A イマーン ドンナニ ヤリユー。ワタシ一 モー  
今は どんなに 持っている。わたしは もう

B イマーン デモ  
今 でも

A シバラク イタ コタ ナイ。  
しばらく 行った ことは 無い。

B アタシモ コンネン モー ナカッ タキネー。  
あたしも 今年 もう 無かったから ねえ。

A ンー。  
んん。

B ホンデ エー イカザッ タケンド キョ ネンカ オトシドシニ ナ  
それで 行くことができたから けれど 去年の、おとしに な  
ルローカ アタシ一 イテ スケタヅネ オナバレオ。  
るだらうか わたしは 行っ 抜けたので、 滞神幸と。

A アー アノ ババオ ヤッ パリ ズーット ウンドウ クマリヨルカ  
ああ ああ 馬場と 揚げう ずうと うづく まっているの  
ヨ。  
ね。

B アー イマモ。  
ああ 今も。

A ソーカヨ。  
そうかね。

B イマモ 知ント ナラン 誰一 ズネ。  
今も ちゃんと ならん ているのだよ。

A フーン。  
J. うん。

○ アテイラーンガ コンドモノ トキニヤ シナレサマ ユータラ  
わたしたちが 子供の時 には 支那祢様と言った

モー ヒロハツチー シラン モンガ ナカッタキーノー。  
もう 広い範囲で 知らない者が 無かったからねえ。

ホンデ モー ヨイジナレエ イク。 ヒルワ エー イカン モ  
それで もう 宵の支那祢祭へ行く。 昼は 行くことが出来ぬも

ン我 キニ ヨイジナレエ イクト ユー モンデ タマールカ  
のだから 宵の支那祢祭へ 行くという もので 大変だ

モー アノ コンドモノ トキナラ ナンゾ タノシムヨーニ ア  
もう あの 子供の ときなら 何か 楽しむように あ

ノ ヒルカラ ユニ イッテ ヒルネオ シチ ラニヤ ツレテ イ  
ぬ 昼から 湯に入っ て 昼寝を してなければ 行

ち ランゼヨ ネブトー ナルキニト ユーモンデ ヒルネオ シ  
てやらぬよ ねむく なるからと いうもので 昼寝を し

テ

フ

B ンー。

んん。

○ サー ユニ イッテ カマエテ ソノ トキニ チリメンノ オコ  
さぬ 湯に入っ て 用意して その ときに ちりめん の 腰

巻 ヨ コシラエテ クレテ ウレシクテ ウレシクテ ソレオ  
巻と こしらえて くれて 嬉しくて 嬉しくて それと

ヨトッ ミノ キモノエ チリメンノ オコシテ シテ ヒスッギョ  
四つみの 着物へ ちりめん の 腰巻として <sup>x x x x</sup>ひすぎ

ヒスッギョ <sup>x x</sup>キョ <sup>x x</sup>デ<sup>①</sup> ソイトー ハッテ カラゲテ クレタワ。  
<sup>x x</sup>ひすぎ <sup>x x</sup>さ <sup>x x</sup>て それと けいっ て いらげて くれたわ。

B ソー。  
んー。

C スソー カラデテ クレテ イキヨッ タトコロゾガ アー オジジ  
裾と かしげて くれて 行って いたところが ああ お地蔵  
一サマ オジジ一サマノ トコロニ ミセヤヅガ アッテ ソコノ  
様。お地蔵様の ところに 店屋が あって そこ  
デッ ダレルト ミナヅガ ヤスンデ ナニカト コーリオ タベ  
テ 疲れると 皆が 休んで なにかと 氷と たべ  
タリ アー イロイロ タベテ マター トッギエ イテカラ  
たり ああ いろいろ たべて また 次へ 行ってから  
アスミ ヤスミシテ シナレサマエッ ドーセ エー カサノ カ  
休み 休みして 支那様へ どうせ ええ 釜の 川  
一ノ\* オジジ一サマト カサノ カーノ ムカシノ カサクサンク  
の お地蔵様と 釜の 川の 昔の 佳作さんと  
ノ ハタト オノト タキモトト ソレバー アノー ムカシ  
ころの はたと 小野と 滝本と それくらい あのう 昔  
アレワ アー ススミンダイノ 釜 ススミンダイノガ 釜  
あれは ああ 涼み台だ 涼み台が 出て  
ッテ ソコデ ヤスンデ シナレサマエ イタ コトヤッダ  
いて そこで 休んで 支那様へ 行ったことだた  
ガ。 ソノ ジランニ コノドゥ カイセンオ ナンボ モロータロ  
ガ。 その 時分に 小づかい 銭と いくら もらたら  
ー。 ドーセ サンジッ センバー モロータローカ。 サンジッ セ  
う。 どうせ 三十銭くらい もらたらうわ。 三十銭  
ンモ モラーン釜 ナカッタローカト オモウヅガ。 イッセン  
も しらわれないのではなかつたらうかと思うわ。 一銭

ノ オカネデ オカシ カイニ イタキニ ホリャ。  
メ おかねで お菓子を 買いに 行たから ぼら。

B ソー ソー。  
そう そう。

〇 ホイデ ニセン ゴセンデ オカシ カウヂ 一 ユー コ  
それで ニ銭 五銭で お菓子を 買うなどと いうこ  
タ ナカ、タキニ。  
とはなからたから。

B ナイ ナイ。  
無い 無い。

C エー イッ センデ。 ソレンデー シナレサマエ イテ エー  
ええ 一 銭 で。 それで 支那様へ 行って ええ  
オカーヂ ンオ イジツテカラ コーリオ コーテ モロータニ  
おのあさんに ねだつたから 氷と 買って もらったが、  
オーケナ ナシツガ ヤスイノ ガツガ アツタ。 ソデ アレオ  
大きな 梨が 安いので あつた。 それで あれと  
コーテ ユーテ サー コータ。 ソリヤ ソノ ナシツガ トテモ  
買ってと言つて さま 買った。 それは その 梨が とても  
ヤスカッタ。 ヤスーテカラ コリヤ ヤスイノー ユーテ サー  
安かつた。 安くつたから これは 安いねえと 言つて さま  
モー オマイリモ シテ モンドツテ キタンガ モー ヨルノ  
もう おまいうも して もらつて 来たの ば もう 夜の  
ジ ーニジ コイヲ ッタロート オモウツガノー。  
十二時を 越して、ただらうと思つたねえ。

B タマー。  
まあ。

C ソノ アクルヒ ソノ シナレサマカラ コーテ キタ ナシオ  
 それで 翌日 その 支那祿様から 買って 来た 梨と  
 ハイダトコロが フトイ コトワ フトカク タケンド ソレツ  
 は、だところの 大きい ことは 大きかたけれど それ  
 コソ タベレーンデ タベテンガ ノーテ トクエノ シタンデ  
 こそ 食べられなくて たべる人の 無くて 机の 下 で  
 イクカモ コロンダヨーナ オモインデンガ アラーヨ。  
 幾日も こゝろだような 思い出 の あるよ。

A オマンラー ソリヤ (笑) シナネサマエ ソノ シンジンニ イ  
 あなたなどは それは 支那祿様へ その 信心 に 行  
 クノヤ ナイ。(笑) トマリ ナシヤラ コーリヤラ クイトー  
 くのては ない。 つまら 梨 や 氷 なども 食いたく  
 テ イタゾガヨノー。  
 7 行ったというわけはねえ。

C ソリヤ イクモンカ。ソーヨ。ゴンドモノ トキン我 モノ。  
 それだけ だめ だめ。そうよ。子供の 時 だ も の。

B ソーヨ。  
 そうよ。

C シンジン我 ユー コトワ アタマニ マンダ ナイ トキン我  
 信心 だなんていう ことは 頭に まだ 無い とき だ  
 モノ。  
 もの。

B アルモンカ。ウン。  
 あうものか。うん。

A ソンナラ ナニカヨ。アノ レイノ シマノ チンポモ<sup>②</sup> コーダ  
 それなら 何のね。あの 例の 馬の さんぽも 買った



カヨ。

のわね。

C ソーヨ。 ソノ トキニヨ。  
そうよ。 その 時によ。

A ンー。  
んん。

C ソノ トキニ <sup>ネーヤン</sup> <sup>ホッ</sup> <sup>ケ</sup> <sup>ネーヤン</sup> <sup>ガ</sup> イヲ ッタワヨ。  
その 時に <sup>××××××</sup> 姉さん <sup>××</sup> 長 姉 <sup>××××××</sup> の 行っていたわ。

A ンー。  
んん。

C デ アノー ナニシヤ一ヨ。 シナレサマデ アカイ フトイ  
で あのう なんだね。 支那祿様で 赤い 太い  
マンマルイ モンガ オサトーノ トイタ モンガデ ぢヲ ッタ  
まんまるい ものが お砂糖の ついた ものが 出していた

キニ ンマノ チンポシヤ ユー モンモ シラン モンギ キ  
から 馬の らんぽだといふ ものも 知らない ものだか

ニ アレオ コーテ ユーテ コーテ ソレオ コータトコロニガ  
ら あれと 買って 買って 買って それと 買ったところの

アリ ムカシワ シナレサマ ユータラ ワカイシモ ムヌメモ  
あの 昔は 支那祿様と言ったら 若い衆も 娘も

ウント イク トコロシヤ ッタワヨ。  
うんと 行く ところだわね。

B ソー ソー。  
そう そう。

C ソイタラ アノー ホッ ケネーヤンガ ムヌメシヤ ッタ モンギ  
それなら あのう 長 姉 の 娘 だつ た ものだ

キニ オー<sup>③</sup> ツイテ<sup>④</sup> ミンナーンガ ワカイシエ モ キョウタ。  
 から おう ついて 皆の 若い衆も 来ていた。  
 ソノ ソマノ チンポオ コーテ モロータトコロンガノ ドット  
 その 馬の さんぽと 買って 来たところの どの  
 ユワレテ (笑) マンダ ソレカラ オカシーンガ ナイカ。(笑)  
 言われて まだ それから おかしいのではないか。  
 ソノ ソマノ チンポ シラン モンガ キ カタイト オモエテ  
 その 馬の さんぽを 知らないものだから 堅いと思つて  
 スネンデ オロート シタトコロンガ (笑) ワラレタ。ワラ  
 すねで 折らうとしたところの 笑われた。笑  
 レタ。 オッケネーヤンニ ドカレタノガ チノガウ。モン  
 われた。長 姉に うんとしかられた。も  
 ドツテ キテ コシテ ントノ ドカレタノガネー。ソノオ オモ  
 だつて 来て 徹底的に しかられたがねえ。そんな 思  
 インデンガ アラーヨ。  
 い 出の あつた。

B ソー。  
キウ。

A オーケナ ソマノ チンポオ ウリヨウ タキニノー。(笑)  
大きな 馬の さんぽと 売つて、いたからねえ。

B アタシラー シラキンダニニ オッ タキニ シラキンダニカラ コ  
わたしのどは 白木谷に 居たから 白木谷から こ  
ノ ヤマオ コシテ キタキニネー。  
の 山と 越して 来たからねえ。

C ソー。  
んん。

アノ ビシヤ モンノ タキノ ヒン ガシラエ オリテ キテ  
あゆ 毘沙門の 滝の 東側へ おりて 来て

C  
ンー。  
んん。

B アコソ デ モー ナンギー アノ コンドモオ オーケッ テモ  
あそこでもう なんだ あゆ 子供と 負っていても

コンドモオ オロイテ スズンデ  
子供と おらして 涼んで

A キンガエオ シトラ ローソガヨ。  
着替と したらうさ。

B キンガエモ シタ。  
着替も した。

C  
アー。  
ああ。

B アコマンデ ワラジーリト ユーテネー、  
あそこまで わら草履と 言ってねえ。

A ソー。ソー。  
そう。んん。

B ワラソデ ツクッタ ジーリョ ハイテ キテ  
わらで つくた 草履を はいて 来て

A ソー ソー ソー。  
んん んん んん。

B アコエ マンダ ソノ ジーリオ イ<sup>⑤</sup> カエリニ ハカチャ イカ  
あそこへ まだ その 草履と い 帰りに はかねばいけ  
ソキニ ヤマエ オシコーソダ イテ  
ないから 山へ おしこんでおいで

C フーン。  
ふうん。

B ツレカラ オマサン アキ ゴムウラト ユー モン ゴムウラ  
それから あなた あれば ゴム裏と いう もの ゴム裏  
ン袋 ナイ アサウラト ユー モン。  
では ない 麻 裏と いう もの。

A アサウラ ネー。  
麻 裏 ねえ。

B アサウラオ ダシテ ハイテ アコソデ タ ント キンガエオ  
麻 裏と 出して けいて あそこで 孫と 着替を  
シテ アサウラ ハイテ セーカラ シナエサマエ イウ トコ  
して 麻 裏を けいて それから 支那祿様へ 行く とこ  
ロソ袋 。 サー イタトコロソデ コソドモワ ソル コノ  
らだ。 まあ 行ったところを 子供は それを こめ  
ビシ モンノ ミナミニ ナニガ コソドー ミセ ユーテ アッ  
毘沙門の 南 に 行く 近藤 店と 言って あ  
タワヨ。  
たわよ。

A アッ タ。  
あ た。

B アノ ミセデ ヤスンデ イコー。 モー ダレタワ。 シラ  
あの 店 で 休んで 行こう。 もう 疲れたわ。 白  
キンダニカラ キタキ。 ダレタギニ アコソデ ヤスモー ユー  
木谷から 来たから。 疲れたから あそこで 休もうと 言  
テ マー シナエサマソデ イカニ イカン。 カエリ カエ  
て まあ 支那祿様まで 行かなければいけない。 帰らだ 帰らだ

リト ユータケンド コンドモンガ タマラン。ノドモ カー  
と 言ったけれど 子供が おさまらない。のども かわ  
イタ ユーテ ソラ アソコニ ヒヤイ ミンドウガ アツタネー  
いたと言っ て から あそこにつめたい 水バ あったねえ

。セカラ コーリモ ウリヨツロー。  
それから 氷も 売っていただけ。

A トコロテンモ ウリヨツタ。  
ところてんも 売っていた。

B トコロテン。  
ところてん。

C トコロテン。トコロテン。ソー ソーヨ。 トコロテン。  
ところてん。ところてん。そう そうど。 ところてん。

B ウン ソノ トコロテンガ ウント アコノ ミンドウガ ヒヨ  
うん その ところてんが うんと あそこ 水バ つめ  
ーテ  
たくて

A ソー。ソー。ソー。  
そう。そう。そう。

B ソノ トコロテンガ ヒエウツテ オイシカッタノー。  
その ところてんが ひえていて おいしかったねえ。

C マコト ソー。ソー。ソー ユー コトノガ アツタ。アツタ。  
まことに そう。そう。そう いう ことバ あった。あった。  
マコト。  
ほんとに。

B アレオ コーテ コンドモニモ タベライテ ジブンモ タベテ  
あれを 買って 子供にも たべさせて 自分も たべて

ソレカラ シナネサマエ イテ シナネサマデ ソレコソ サー  
 それから 支那祿様へ 行って 支那祿様で それこそ さあ  
 ナジガ ヤスイ ナジガ ヤスイ サー オインデ オインデ  
 梨の やすい 梨の やすい さあ おいで おいでと  
 ユーテ テオ タタイタ ク= ウリヨラ。  
 言って 手を たたいた ところに 売っているさ。

C エ  
 え

B ウリユートコロガ イエマデト イエマデ ソエテ オーナ  
 売っているところの 家まで と 家まで 添えて 犬の  
 ナ ナジガ タ タノ (笑) イ セン イ セン ユーテ テ  
 な 梨の たたいた 一銭 一銭と 言って 手  
 オ タタイテネー ウリヨラー。 ソノ ナシオ コーテ  
 と たたいてねえ 売っているさ。 その 梨を 買って

C アー  
 ああ

B マッ コト ヨケモ ヨー カウモンカ。 ソレコソ アタシ一  
 ほんといに たくさん 買えるものか。 それこそ わたしは  
 オ デイサンガ ウント カンル クナ ヒトゾグッタキニ  
 おどいさんの うんと 節約 家 だ たから

C アー。  
 ああ。

B カンル クンダ ト ユー ウチ=④ マエワ ソンナ モンダット  
 節約 だ と 言う けれど 前は せんや ものだら  
 口。  
 ろう。

C ンー。  
んん。

B コンドモ ツレ左一キ モー 飛 ト ホシカ、 タケンド ニジ  
子供をつれているから もう 少し (手)からたけれど 二十  
セノホカ クレガ、 タキニ (笑)  
銭しか くれなから

C アーアー。  
ああああ。

A ニジッ セン モロータラ タイシタ モンヨ。  
二十銭 もらたから たいした ものよ。

B ンー。 ニジッ セン。  
んん。 二十銭。

C タイシタ モンタ オ。 エー。 ネー。  
たいした ものだらう。 ええ。 ぬえ。

B コンドモ ツレ左一キニト エーテ ニジッ セン クレテ ン  
子供をつれているからと 言って 二十銭 くれてや。  
レオ モ、 テ イテ  
れを ちて 行って

A アッー  
わたくしは

B ダイブ カエタゼヨ。  
たいぶん 買えたよ。

A トッゾー ニジッ セン アッ タラ ソル タクサンヨ。  
合計 二十銭 あたり すれば たくさんよ。

B カエタ。 カエタ。 タカデ カエテ。  
買えた。 買えた。 たくさん 買えた。

A アヤ ノー シナネエ イタラノー カウヨリノー アノ ノゾ  
わたくしはねえ 支那線へ 行つたらねえ 買うよりねえ あの のぞ

ギン ガ ラント スギン デノー。  
さあがねが うんと すきでねえ。

B ソレ ソレ。  
それ それ。

A アー サンプノ イチノ トーキョー デート テオ タタイテノ  
ああ 三軒の 一の 東京 でと 手を たたいてね  
え。

B アラッ ドゥ コイショ ト ユーテ ヤリヨッタノー。  
あら どうこいしょ と 言つて やつていたねえ。

C ヤリヨッタ。 ヤリヨッタ。 ノジキオ ヤリヨッタノー。  
やつていた、 やつていた。 のぞさあがねを やつていたねえ。

B ノジキワ ナンギ ヨ。 オカネオン ダイテ ノゾクニ ヨーバ  
のぞさあがねは あれだ。 お金を 出して のぞく必要はな  
い。 タッテ ソノ ウタ キクンガ オモシローテ。 ワタシ  
は。

A ンー。  
んん。

B タッテ テ キータ フトノ ガ アル。  
立つて 聞いた ことが ある。

A アリヤ アンー キリカエ キリカエ トンギ トンギ ユー  
あれは ああう 切り替え 切り替え 次 次 こう



エワ カエテ イテノー。  
経は 替えて 行ってねえ。

B ソー ソー。  
やう やう。

C アリヤ。  
あれ。

A アレノガ イッセン ノジキチンガ イッセン。  
あれが 一銭 のぞき賃が 一銭。

B ソノ イッセン。  
その 一銭。

C ソノ ノジキノ イッセンオ エー エーノ ダサン モンギ キ  
その のぞき賃の 一銭と よう よう 出さないものだから。  
。

B ソレヨ。 ニジッ センホカ エー モローチ ラシ モンギ キニ  
それよ。 ニ十銭しか もらうことができていないものだから。  
。

C アノ ハタン デ ミテカラ キキユーヨ。  
あの はたで 見てから 聞いているよ。

B ソーヨ。  
やうよ。

C ハタン デ ミテ  
はたで 見て

B アノ ノジキノ ウタン ガ オモシロテネー。  
あの のぞき賃の 歌が おもしろくてねえ。

- C エー エー ソーン 希 ネー。  
ええ ええ そうだねえ。
- B ソリョ キータ。  
それと 聞いた。
- C マッ コトヤ。  
ほんとは。
- A サー オハイリ サー オハイリ。 イマンガ ち ら ー ドノ バ  
さあ おはいいり さあ おはいいり。 今が ほう どのの 場  
ーイ。 ち ら ー ドノ バーイ。  
合。 ほう どのの 場合。
- B ソー。 ソー。  
そう。 そう。
- A ケンロ ーワ ミテノ オカエリノ トキト (笑) ユーテ ヤリ  
見料は 見ての お帰りの 時と 言って やて  
ヨッ タワヨ。  
いたよ。
- B ヨー オボエ左 ー。 ソー。 ソー。  
よく 覚えている。 そう そう。
- A アレンガ ウント スキンガ ッ タキ アタシ ー。  
あれが うんと 好きだよ だから わたくしは。
- B アタシモ アレンガ イチバン スキンガ ッ タ。  
あたしも あれが 一番 好きだよ。
- C オモシロカッタ。 ウント ソレンガ ニンキョ トリヨッ タゼヨ。  
おもしろかった。 うんと それの 人気と 取っていたのだよ。
- B トリヨッ タチ。  
取っていたよ。

C うん うん<sup>x</sup>ト トリヨッ タ。  
うん<sup>x</sup> うん<sup>x</sup>と 取っていた。

A ケンド ツノ トージワ ソレンガ コノ ウエモ ナイ タノシ  
けれど その 当時は それが この 上も ない 楽し  
ミゴト<sup>ン</sup>ダ<sup>ン</sup> ーッ タ モン若 キニネー。  
みごと だ た ものだからねえ。

B ソー ソー。 アレンガ イチバン ヨカッ タ。  
そう そう。 あれが 一番 良かった。

A マチカネヨッ タキニノー。 シナネサマノ クルオ。  
待ちかねていたからねえ。 支那祿様の 乗るのと。

B マチカネヨッ タ。 シナネサマエ イク~~~~~  
待ちかねていた。 支那祿様へ 行く

C ソレカラ ホルヤ。  
それから ほろ。

B シナネサマエ イテ ノゾキオ ミヨート。  
支那祿様へ 行く のぞきあひねを見ようと。

C ソーヨ。  
そうよ。

B ~~~~~ タノシミヨッ タ。  
楽しんでいた。

C ソレカラネー アノー ミセモノ<sup>ン</sup>ガ アッ タヤイカ。  
それからねえ あのう 見せもの が あつたのではないか。

A ソー ソー。  
そう そう。

C アノ ロウロクビ ユーテ  
あの ろくろ首と 言つて

- A ソー。  
そう。
- B ソー。  
んん。
- C ロクロクビノ ミセモン<sup>券</sup> ユーテ  
ろくろ首の 見せものだと 言って
- B ソーヨ。  
そうよ。
- C カンバンエ<sup>ズ</sup> デ<sup>カ</sup>ッ タゼヨ。  
看板へ 出ていたのだよ。
- B ソー デ<sup>カ</sup>ッ タ。  
んん 出ていた。
- A ヌビヨル ヌビヨル ヌビヨル ユーテ<sup>ズ</sup> デヨッ タ<sup>ズ</sup> ガネー。  
伸びてる 伸びてる 伸びてると言って 出ていたがねえ。
- C ソー ソー。  
そう そう。
- B ソー。 ミセモノモ アッタ。  
んん。 見せものも あった。
- A ケンド イマ オモ<sup>テ</sup> ミ<sup>リ</sup>ヤ オカシー<sup>ヨ</sup> ナケンド ナツカ  
けれど 今 思って みれば おかしいようだけれど なつか  
シーネー。  
いいねえ。
- B ナツ<sup>カ</sup> カシー。  
なつかしい。
- C ナツ<sup>カ</sup> カシイ<sup>ノ</sup>。 マ<sup>ッ</sup> コト ナツ<sup>カ</sup> カシー。  
なつかしいねえ。 ほんとに なつかしい。

注記

- ① 帯などを後が房に垂れるように結ぶこと。 / hisugoki /
- ② 菓子名。固有名詞的にツマノチンポと一づきに表記した方がよかつたように思われる。
- ③ 感謝詞めいたものか。
- ④ ワカイシ モ ツイテ キチョッタ というのがノーマルな順序であらう。分離動詞的発想とも言えようか。
- ⑤ 偶然入てきたもの、意味は悪い。
- ⑥ ウチニは、接続助詞とも認めたいようだ。なお後考を待たせ。  
\* 分かり書きにしたが、カサノカーと表記した方がよかつたか。

### 3. 夜 遠 い

話し手

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生 年)   |
|------|-------|-----|---------|
| A    | 田島正実  | 男   | 明治29年生れ |
| B    | 高橋秀子  | 女   | 明治31年生れ |
| C    | 森田多賀恵 | 女   | 大正4年生れ  |

- A オカーラーノ ジランニワ ヨバイト ユー モンガ アリヤ  
あなたのため 時分には夜遠というものが ありは  
セザ、タカヨ。  
しなのたかぬ。
- B アッ タ。アッ タ。 アッ タワヨ。ソノ ヨバイ<sup>ン</sup>ガ。(A<sup>ン</sup>ー。  
あつ た。あつ た。 あつ たわよ。その夜遠<sup>バ</sup>。(A<sup>ん</sup>ん。  
) サー トモンダチ<sup>ン</sup>ガ ミンナー キンゾ ノ ムスメラー<sup>ン</sup>  
) さあ 友 達 の みんな 近所の 娘<sup>ら</sup>ど  
が アトゥ モ、テ キテ ワタシノ サトエ (A<sup>ン</sup>ー。) サト  
に 集 まつ て 来て わたしの 里へ (A<sup>ん</sup>ん。) 里  
ノ デ ミンナー カズカズ カルタ トツタリ (A<sup>ン</sup>ー。) ショ  
で みんな 教 々 カルタ と たり (A<sup>ん</sup>ん。) して  
ッタラ ヨイニネー ヨイアソビト ユーテ キタゼヨ。(A<sup>ン</sup>  
いたら 宵にねえ 宵遊 と 言つ て 来たのだよ。(A<sup>ん</sup>  
ー。) ヨバイヨリ ウチニ ヨイアソビ ユーテ アッ タワヨ。  
ん。) 夜遠より 先に 宵遊 と 言つ て あつ たわよ。

(A ンー。) ヨイニ キタラ オヤン ガリナサイマセ ユーテ  
(A くん。) 育に 来たら およりなさいませと 言ッテ  
サー ワカイシト ムスメトノ ガ アトラ モッテ オマサン ホン  
とあ わかいしと 娘 との 集 まッテ あなた ほん  
トー ログノ 指ーノ マノ ガ ケン ドラ レルト<sup>①</sup> ユーテ (笑)  
とに 六 置 の 洞 の 削られていたむと 言ッテ

ナニヨ オヤン デン ガ ユー タキニネー。 (A ンー。) オト  
あれた おやじ の 言ッたからねえ。 (A くん。) おと  
ーサンガ ケン ドラ レルン ガト ユー タケンド ソレデモ マー  
うさんの 削られていたむのだかと言ッたけれど それでも まあ  
ワカイ モンモ アトラ カーニャー イカン ユーテ オカーンガ  
若い 者も 扱わねば なるまいと 言ッテ ああさんの  
アテーノ (A ンー ンー ンー。) オカーンガ アトラ カーニ  
わたしの (A くん くん くん。) ああさんの 扱わねば  
ヤ イカン。ソナイニ オトーサンガヨナ コト ユー タチ イカ  
いけな。そのようにおとうさんの(言ッ)ようなことと言ッたッテ いけ  
ノ。イカン。  
ない。いけな。

A ソリヤ ノー。 ワカイシノ ガ クルン ガンガ ユウユル ニンキト  
それはねえ。 わかいし の 来る の が いわゆる 人気  
ーヒョーノ アノ (B ンー。) ニンキンガ.....  
投票 の あめ (B くん。) 人気 が.....

B オカーンガ ラント アタシヨリ オカーンガ ナニヨ。  
ああさんの うんと あたしより ああさんの あれた。

A ドコノ オカーモ コミコーン デ ホントー カカリアイソ チャッ  
どこの 母親も 精を出して ほんとは 競争 だ。

タキニノー。

にからねえ。

B コミコンデ。 ナント シテムスメノコオ<sup>②</sup> ウラン ナラン  
精を出して。 なんとでもして 娘 を 売りださねばな  
キ。  
らねえ。

A ソー。ソー。ソー。  
そう。そう。そう。

C ソレゾガ アノー (B カカリコンデ キンジョゾガ) アテイ  
それの あのう (B 張り合って 近所が) わたし  
ラゾガ モー アノー アトデ キキー ソレゾガ イセイ  
なんかの もう あのう 後 で 消けば それの 威勢  
ゾガ ッタラゾガ イカ。 (B ソー。ソー。) エー ワカイン  
だっ たというのじゃないか。 (B そう。そう。) ええ わかい  
ガ ウント キテクレルゾガ イセイゾガ ッタ。  
の うんと 来られるの。 威勢 だっ た。

B オカーノ オカー ワタシノ オカーノ サトノガ ミセンガッ  
~~×××××~~ ~~×××××~~ ~~×××××~~ ~~×××××~~  
かあさんの かあさん わたしの かあさんの 里 の 店 だっ  
た。 (A フン。) ミセンデ アノ イナリンゾガ ッタンガノ  
た。 (A ふん。) 店 で あの 一厘 銭 だっ た のね  
ー。 (A ンー。) オカシオ コーテ キテ ソノ イナリンオ  
え。 (A はん。) お菓子を 買って 来て その 一厘と  
イトデ トラナイデ コー ウエー テンジューエ ナー ヒ  
糸 で つない で こじ 上へ 天井へ 縄 ~~×~~  
ッ トラナ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~ ~~×~~  
網 と びら ばら ち おいて つりさげてねえ。 (A ンー。) (A はん。)



B ソレデ コー ヤッテ アシオ コー オサエテ スネンデ ア  
それで こう して 足と こう おさえて すね で 歩  
ルイテ イテ コー ヤッテ ツリングイン 哉。(A ンー。)  
いて いて こう して 釣 食いだ。(A んん。)  
ソレオ シタ。ソレモ ナニヨ。ワカイ モンワ ソレガ オモ  
それと した。それも あれた。若い 者は それが おも  
シローテ キテ クレタワ。(C アー。)  
しろくて 来て くれたわ。(C ああ。)

A ホンナラ オカーワ ナニカヨ ソノ ヨバイニ コラレタ クミ  
それなら あなたは あれかね その 夜送に 来たれた 組  
カヨ。  
かね。

B イーダ ソー。ヨバイワネー。(A ンー。) マッ コトノ コト ヽ  
はい。そう。夜 送はねえ。(A んん。) ほんとめ ことと云  
ワニヤ イカンノー。(笑) ヨバイワネー。  
わねば いけないうねえ。 夜 送はねえ。

A モー モー ムカシノ コト 哉 キ マッ コトノ コト (B ンー。)  
もう もう 昔 の ことだから ほんとめ ことと(B んん。)  
ハナシテ ミーヤ。  
話して みなさい。

B ソーヨ。カマウカノー。  
そうさ。かまうものかねえ。

A カマウ モンカ。  
かまう ものか。

B アノ キンジョ ノ ムスメノ ガ ショ ジニン キテ クレタワ。  
あの 近所の 娘 が 四五人 来て くれたわ。

(A ンー。) ムスノ<sup>ン</sup>ガ キテ クレテ アタシト ホリヤ マー  
(A んん。) 女 郎 が 来 て くれ て あたし と ほし まあ

ゴロクニ<sup>ン</sup> オッ ツロー。(A ンー。) オッ タトコロデ ワ  
五六人 い たらう。(A んん。) い た と こ ろ で わ

カイシモ カズカズ クラーヨ。(A ンー。) うトーテ サー  
かいしも 教 へ 来 る の だよ。(A んん。) 歌 っ て さあ

ウチ<sup>ン</sup> デ キキヨッ タトコロガ サー カルタ トッテ キキヨッ  
うち で 聞 いて いた と こ ろ の さあ カルタ と 取 っ て 聞 いて い  
たら うたい<sup>ン</sup> ダイタ。うたい<sup>ン</sup> ダイタケニ<sup>ン</sup> ドー<sup>ン</sup> デ コリヤ  
た ら 歌 い だ し た。歌 い だ し た の ら ど う せ こ れ は

マタ ワカイシ<sup>ン</sup> ガ キューゼヨ ユーテネー。(A ンー。)  
また わかいし が 来 て いる の だよ と 言 っ て ねえ。(A んん。)

ミンナー<sup>ン</sup> ガ キキヨッ タトコロ<sup>ン</sup> ガ タカン<sup>ン</sup> デ<sup>ン</sup> ドラ<sup>ン</sup> ラ<sup>ン</sup> ド  
みん な が 聞 いて いた と こ ろ の さあ ず ら ず

ウラ<sup>ン</sup> ドラ<sup>ン</sup> ドラ<sup>ン</sup> ドラ<sup>ン</sup> ワカイシ<sup>ン</sup> ガ シ<sup>ン</sup> ゲクラ<sup>ン</sup> <sup>③</sup>ヘンカラ  
ら ず ら ず ら わかいし が 重 倉 の あたり<sup>ン</sup> か

(A ンー。) ニュー<sup>ン</sup> ジョー<sup>ン</sup> <sup>④</sup>シ<sup>ン</sup> ゲクラ<sup>ン</sup> ガ キタキ (A ン  
(A んん。) 入 定 重 倉 が 来 た の ら。(A ん

ー。ンー。ンー。) キテ カズモ カズモ<sup>ン</sup> ガ カルタ シタリ  
ん。んん。んん。) 来 て 誰 も べ れ も が みん な カルタ と し たり

ナイ<sup>ン</sup> ダリ シテ アソ<sup>ン</sup> ン<sup>ン</sup> ダワヨ。(A ンー。) アソ<sup>ン</sup> ン<sup>ン</sup> デ セ  
な ど し て 遊 んだ わよ。(A んん。) 遊 ん で そ

ーカラ モー アノ オ オト<sup>ン</sup> サンガ ユー コト<sup>ン</sup> ナ モー  
れ<sup>ン</sup> か ら も う あ の <sup>x</sup>お <sup>x</sup>と <sup>x</sup>う <sup>x</sup>さん が 言 う こ と に は も う

ナン<sup>ン</sup> ね ムッ ソ オソ<sup>ン</sup> マ<sup>ン</sup> デ オキ<sup>ン</sup> ね ッ タラ アシタ シ<sup>ン</sup>  
ん だ あ ま り お そ く ま で 起 き て いた ら あした 仕

ゴト = ナランキ = アノー うチノ モンモ シンゴト = ナラ  
 事に ならないから あのう うちの 者も 仕事に 入ら  
 ず。ネレンキ =。(A ンー。) イソツガシ ヲテ。セーカラ マ  
 ない。寝られないから。(A くん。) いそおしくて。 それから ま  
 タ オマエラーモ ちト ナニカニ セニヤー イカンキニ モ  
 た おまえも すこし 別にやめや しなければいけないから も  
 ー ジュー イチジンガ キタラ カエッテ モラオート ユーテ  
 う ノノ 時 が 来たら 帰って もらおうと 言っ  
 ユー ヲト = シカッタ。(A ンー。) ソンデ ミンナーンガ  
 言う ことに していた。(A くん。) それで みんなが  
 ー ガテンガ イチーキニ フンダンニネー。(A ンー。) ジュ  
 合点の いていから 普通にねえ。(A くん。)

ー イチジンガ キタラ モー カエロー ユーテ ミンナーンガ  
 // 時 が 来たら もう 帰ろうと 言っ て みんなが

マー ホントー スミマセンヨ ユーテ ユーたら スマソコソツガ  
 まあ ほんとに すみませんよと 言っ たら すまね こと が  
 アルカヨ。オソー ナッタ オソー ナッタ ユーテ ミンナーンガ  
 あるかぬ。おそく 来た。おそく 来たと言っ て みんなが  
 イヌル。(C ンー。) インダケニ モー インダケニ エー モン  
 帰る。(C くん。) 帰るから もう 帰るから いい もの  
 ト オモッテ (C アー。) オヤラーワ サキ ネヨル。(C アー  
 と 思っ て (C ああ。) 親たちは さきに 寝ている。(C ああ  
 ー) ネユーケンド アタシ - モー トジマヨ シカ イテ  
 ー) 寝ているけれど あたしは もう 戸締りを しておいて  
 ネニヤー イカン。モー ミンナー インダト オモッテ ネー  
 寝なければいけない。もう みんな 帰ったと 思っ て 寝

夕。ッレオン ゴン ゴン アノ テ= アーン ガンガ ノコ  
た。それと ごそ ごそ あの 手に 負けない のが 残っ

ッ 船 ッテカラ= キキヨッタ モン爺。(A ンー。) ドコエ  
て い てからに 聞いていたものだ。(A くん。) どこへ

ハイッ テ ネルロー。オモテン デ ネルローカ。オクエ イクロ  
はいつ て 寝るだらう。表の間で 寝るだらうか、奥の間へ 行くだ

ーカ。ドゴン デ ネルロート ユー コトオ キオ ッケヨッタ  
らうか。どこで 寝るだらうという ことと 氣と つけていた

モン爺 ネー。(A ン。) ソーゾギ ナケルヤ ー エー コンケン  
ものだねえ。(A くん。) そうで なければ 乗ることができな

ド。セカラ キンゾ ノ ムスメンガ ヒトリネー (A ンー。)  
いけれど。それから 近所の 娘 が ひとりねえ (A くん。)

ナン爺ン デキ= キンゾ ノ ムスメンガ ヒトリ (C トマ  
なんだ すぐ 近所の 娘 が ひとり (C とま

ッタカ。) トマライテ クレー ユーテ トマッタ。(C トマリヨ  
ったか。) とまらして くれと 言。て とまった。(C とまてい

ッタカ。) トマッタトコロがネー ソノ シンゲクラノ ダレワ ユ  
たか。) とまったところがねえ その 重 倉 の 誰とは言

ワレンケンド シンゲクラノ ワカイシン ズンガノー。(A フン。)  
われないけれど 重 倉 の わかいしだがねえ。(A ぶん。)

ソレンガネー アノ キンゾ ノ ムスメワ アタシヤ ー ヒンデ  
それがねえ あの 近所の 娘 は あたしは 秀

コ キンゾ ノ ムスメワ ケイコサント ユー。(C アー。)  
子 近所の 娘 は 桂子さんという。(C ああ。)

ソノ アタシノ ハタエ キテカラ ソノ オトゴンガ クライロ  
その あたしの はたへ 来てから その 男 が 暗いだ

ー。(C アー クライ。) デンキンが アルン ぢ ナン。  
 らう。(C ああ くらい。) 電 燈 が ある け なし。  
 (C エー。) ランプ ケシ ぢ イテ ネルキニ (C アー ソーン  
 (C ええ。) ランプを 消しておいて 寝るから (C ああ そう  
 ぢ。) ホラ ホンデ クライキニネー。(C エー。) ソレエ ハ  
 だ。) ほら それで くらいから ねえ。(C ええ。) それへ は  
 イッ テ キテ ナン ぢ アタシノ ミミニ クイトイイテ フトイ  
 いって 来て あれだ あたしの 身に くらついて 大きい  
 コエ シタラ オヤンガ オキルキ (笑声) (C ンー。) アタ  
 声と たてたり 親 の 起さるから (C んん。) あた  
 シノ ミミニニ クイトイイテ ケイコサン ケイコサン イーユー  
 しの 身に くらついて 桂子さん 桂子さんと言っている  
 カノー。(C アー。) アタシニ オカシニ テ タマランケ  
 かねえ。(C ああ。) あたしは おおしく て たまらない  
 ンド (C エー<sup>⑤</sup>。) ケイコサン ぢ ナイト ユワント オッチ  
 けれど (C ええ。) 桂子さんでは ないと 言わないと おつて  
 ヤオト オモテ<sup>⑥</sup> ダーマツ テ コーヤツ テ ネイッ ぢー ソー  
 下らうと 思って だまあって こうして 寝入っている 様子  
 シタニ ートコロ<sup>⑦</sup>ガ (C アー。) コリヤ コリヤ ケイコサ  
 をしているところが (C ああ。) こら こら 桂子さ  
 ン ケイコサント ユーテ ユスリオコスカノー。(C アー。)   
 人 桂子さんと 言っ て ぢすりおこすかねえ。(C ああ。)   
 オマサン ヒト マチ<sup>⑧</sup> ガイン ぢ ナイカネト ユータトコロ<sup>⑨</sup>  
 あなた 人間 違 ぢは ないのかねと 言っ たところ  
 ガ タカ<sup>⑩</sup>デ ソノ オトコ<sup>⑪</sup>ガ ビッ クリシテ (C アー。)   
 が ひどく その 男 が びじくりして (C ああ。)

サー アタシノ ハタエ キネ ッテ イッ ポーエ ハイル ワケ  
下あ あたしめ はたへ 来ていて 一方へ 入る わけ  
ニモ イカンロー。(Cイカン。) ホリャ ショーニ ワリート  
にも いけないだらう。(Cいけない。) ほら 妙に 悪いと  
オモートロ。(Cイイイイ。) ソノ オトゴン ガン デテ  
思ったらう。(Cいいい。) その 男 が 出て  
インダ。(Cエー。) サー アクル バンモ オンナジ コト。  
帰った。(Cええ。) さあ 翌 晩も 同じ こと。  
ソノ ワカイシガ (Cアー。) カズカズ ソノ コエンデ  
その わかいし が (Cああ。) 教 々 その 声 で  
アタシガ ワカッ ぢーキニ ホリャ。(Cアー。) アノ ヒ  
あたしが わかっているから ほら。(Cああ。) あの 人  
トッ 我 ッ タノト ユー コトワ アタシガ コエンデ ワカッ  
だ。 たの という ことは あたしが 声 で わか  
ぢーキニ。 ソレンガ マタ アクルヒ フルローカ クマイカ  
ているから。 それが また 翌 日 来るだらうか 来まいか  
ト オモエテ オモイヨッ タトコロガ (Cアー。) マタ ア  
と 思って 思っていたところが (Cああ。) また 翌  
クルバンモ (Cキタ。) マーター ヨイカラ キテ (Cエー。) 翌  
晩も (C来た。) また 宵から 来て (Cええ。)  
トッ リン グイ シテ アソーンダワ。(Cアー。) アソーンデ  
釣 食として 遊んだわ。(Cああ。) 遊んで  
コンバンワ イヌルローカ ドー スルロート オモエテ ア  
今 晩は 帰るだらうか どう するだらうか 思って あ  
タシモ オモイヨッ タ。 オヤニモ ユーモンカ (Cイイイイ。)  
たしも 思っていた。 親にも 言うものか (Cいいい。)

オヤニモ ハンドゥ カシーキニ (C イー。) コナイシテ キ  
 親にも 恥ずかしいから (C はい。) このようにして 来  
 タン 発 ユーモンカ。 (C ユーモンカ。) コダント トジ  
 ためだと 言うものか。 (C 言うものか。) きらんと 戸  
 マリョ シテ イテ ネヨト エワレチュ ン ガン 発 キ (C ア  
 締りを しておいて 寝ると 言われているのだから (C あ  
 - アー。) ユーモンカ。 セーカラ アクルバンワ ン ドー  
 あああ。) 言うものか。 それから 翌 晩は どう  
 発 ロト オモーテネー (C アー。) オモイヨッタラ アクルバ  
 だらうと 思ってねえ (C あああ。) 思っていたら 翌 晩  
 ノワ ソンデモ (C アー。) ハイッテ コガタ。 (C アー。)   
 は それでも (C あああ。) はいって 来たから。 (C あああ。)   
 アクルバンワ ソノ (C アー。) ケイコサント ユー ヒドガ  
 翌 晩は その (C あああ。) 桂子さんと言う 人が  
 アタシク<sup>⑥</sup>デ (C アー。) トマラタタキ。 (C アー。)   
 あたしとこで (C あああ。) とまらなから。 (C あああ。)   
 ホンデ カエッ タキニ (C ン。) ホンデ ケイコサンクエ イト  
 それで 帰ったから (C ン。) それで 桂子さんといへ 来た  
 ヲ ロージノー。 (C アー— ソーカ ソーカ。) ソンデネー  
 だらうねえ。 (C ああああ そうか そうか。) それでねえ  
 ヨク アタシヨリ ソノ ケイコサンガ ヨカッタ モン発。  
 よく あたしより その 桂子さんが 良かったものだ。  
 (C ヨカッタカ。) ノー。 (C ソーカ ソーカ。) (笑) アタ  
 (C 良かったか。) ねえ。 (C そうか そうか。) あた  
 - (C アー—) ソンナ コトガ アッタ。 (C アー—)   
 は (C あああ) そんな ことが あった。 (C あああ)

A ソンナラ オバーワ バーレタ クミン 我 ナカッ タカ。  
そんなら ばばさん(あなた)は奪い合われた組では なのたの。

B バーレタ クミン 我 ナイ。(C ホンナ。)  
奪い合われた組では ない。(C そんな。)

A ウソー イーナヨ。(笑)  
うそと 言いなさるなよ。

B キラーレ者 ッタ。(笑) ソル ケイコサント ユー ヒトワネ  
さらわれていた。 それは 桂子さんと 言う 人はね

ー キレーナ ヒトノ者 ッタ。(A ソー。)(B ソー。)  
アタシ え きれいな 人 だつ た。(A そう。)(B んん。) あたし

ヨリ ズット キレーナ ヒトノ者 ッタ。(C アー。)  
アタシ より ずっと きれいな 人 だつ た。(C ああ。) あた

シ ヲ ドノダイ イカン。(笑) キレーニ ナイケンド ア  
しは 全く いけない。 きれいに ないけれど あ

タシ ヲ コンナ クチタクキン 我 キニ ホルヤ。(A アタ<sup>①</sup>)  
あたしは こんな おしゃべり だ のら ぼろ。(A あた<sup>②</sup>)

アソビニャ キテクレタケンド~~~~~。

遊びには 来てくれたけれど

A アタシワ ヨバイト ユー コトワー 治ッ ぢー キータケン  
わたしは 夜遊と 言う ことは しょらぢう 聞いたけれ

ドノー (B エー。) イタ コトノガ ナイ。(笑) ヨバイエワ。  
どねえ (B ええ。) 行った こと が 無い。 夜遊へは。

(B イカンカヨ。) マー ヨアソビト ユー コトワ ヤッ タワ  
(B 行かないかね。) まあ 夜遊と 言う ことは やたん

ヨ。ソルヤ ヤッ タ モンヨ。  
だ。それは やた ものよ。



B タキモトカラワネー アタシラークエモ キタ モンワッ ダレッ  
滝本からけねえ あたしにちめとにらへも来た者 は 誰

ぢー ナイ。マ- ニューズ ぢー ジンゲクラブー。  
も 無い。まら 入 定 重 倉 くらい。

A アタシラー ホリャ アノ ショ-ブエ<sup>㊤</sup> イタ。 ショ-ブノ ア  
わたしなどはほら あめ 葛 蒲 へ 行った。 葛 蒲 の あ  
ノ ナンダカイ (B タイマツノ) ソー。(笑)  
め 名 高い (B 松 明 の) んん。

B アノ スモエ キタカ。  
あめ 角カへ 来たか。

A ソー。 ショ-ブマデ イタケンド ソリャ ソレンガ アノネー  
んん。 葛 蒲 まで 行ったけれど それは それが あめねえ  
ベッ ピンオ オフエテ ヨアソビワ シタケンド イカンナンガラ  
別嬪と 送かして 夜遊は したけれど いかんやばら  
ヨバイワ エー セザツタ。  
夜遊は することができなかつた。

B オーケナ オーダイマトウ オ シテノー。 ショ-ブンダニノ  
犬をな 犬松明と ついてねえ。 葛 蒲 谷 の  
ホーカラ。 ソリャ ナンダカクタゼヨ。 イマー イマー ソノイ  
方 から。 それは 名高かつたのだよ。 今は 今は そのよう  
ニ センニカーランケンドネー。 マエワ ホントー マコト コノ  
に しないらしいけれどねえ。 前は ほんとに 真実 この  
ザノ ミたーロー。 コノ ザノ イッパイバーオ グルリッ  
座め 見ているだらう。 この 座め いっぱいくらいと ぐるり  
ト マルメタバーノ タイマトウ ぢー タノー。 ソレオネー  
と 丸めたくらいめ 松 明 だ。 たねえ。 それをねえ

タイマトラ オ ツケテ イテ スモ-オ トッ タキニ。(A ン-)。  
松明 と つけておいて 角カを 取ったから。(A 人ん。)

スモ-オ トル=。

角カを 取るのに。

C ソリヤ ナトマ マトラ リカナンヅカノ。  
それは 夏 祭り かなんぞかぬ。

B アー ソレノ ガネー クンガトラ ノ ナンヂャ アキマトラ リンヂ  
ああ それ が ねえ 九月 の あれだ 秋 祭 り だ。  
ヤ。(C アキマトラリカ。) オンガンホドキ<sup>9</sup>デ (C ン-)。  
(C 秋 祭 りか。) 序 願 ほどきで (C 人ん。)

オンガンホドキノ バン= (C ン-)。 スモノガ アタ  
序 願 ほどきの 晩に (C 人ん。) 角カが あった。

レ-ブ (C ン-)。 アタシノ ソマレタクニネー。(C ア  
葛 蒲 (C 人ん。) あたしめ 産まれたところねえ。(C あ

-ア。) アタトコロデ ソノ タイマトラノ ガ サー ヒト  
ああ。) あたところ で その 松 明 が さあ ひと

リ フタ-リン 柴 ナカナカ イゴカンキ= カズセニヤ 一  
り ふたり では なかなか 動かないから 大勢でしなや

イゴカンキ= (C ア-)。 ホンデ タイマトラノ ガ タイマ  
動かないから (C ああ。) それで 松 明 が 松

トラノ igit ユ-テ イシカケオ トラ イテ タイマトラノ igit  
明 台 と 言っ て 石 垣 を つい て 松 明 台

オ コシラエ者 ウキ イシカケヲ トラ イテ。 シタ-トコロ  
と こしえているから 石 垣 と つい て。 しているところ

デ ソノ タイマトラノ ガ シサッ タラ ヒトリ フタリン 柴  
で その 松 明 が 後 退したから ひとり ふたりでは

テコニ アーンキニシゴジツケンゴジツ - サンデンカシラン  
手に 負えぬから 五十軒 五十三軒かしら

アッタ。シ - ブノ ブラックンガ。ソコノ セイネンガ ミンナー  
あた。葛蒲の部落だ。そのの 青年の 皆

ノ デキ - キニネー タイマトウ オ コシラエテ ヒオ トクテ  
出ているからねえ 松明 と こしらえて 火を つけ

ルヨ - ニ シテ セイネンガ ヤッ 左 - キニ ソノ タイマトウ  
るようにして 青年の 抱えているから その 松明

ノ ガ シサッ テモ セイネンガ ミナ アッタ モラニヤ イカンキ  
の 後退しても 青年の 皆 集まらねば いけぬの

ニ サ - シ - ブノ ヒトワネー セイネンガ セイネンカイチ  
し であ 葛蒲の 人ばねえ 青年の 青年 会長

ユート ユー モンガ ヨーダ。タイマトウノ ガ シサッ タラ タ  
と いう ものが 呼んだ。松明 の 後退した

イマトウノ ガ シサッ タキニ ミナ コイユート ユーテネー (笑)  
松明 の 後退したから 皆 来いよと 言っ てねえ

(C ア ア ア) コチノ ヒタ マネシタ。アタシノ ガ キタ  
(C あ あ あ) このの 人ば 来ねした。あたし の 来た

トキニ。  
ときい。

A ケンド ムカシワ ソー ユー オマトウ リオ スルト オマトウ  
けれど 昔は そういう お祭りと すると お祭  
リオ シタラ ソコエ ワカイシト メッ ピントノ ガ ヨリアウ。(B  
りと したら そこへ わかいしと 別嬪とが 寄り合う (B  
アー。) ソコカラ コイノ ガ メバエトウ ローノ ガヨ。  
ああ。) そこから 恋の めげえたらうさ。

B ソーヨ ソンナ ヌトゾ ガ アツタワヨ。(笑)  
そうさ そんな ことが あったわよ。

---

注記

- ① ケツド、レルは、「すりされる」と標準転写した方が、いっそう、さりしたかもしれない。
- ② ムスメノコで *daughter* の意であるから、ムスメノコと→ゴミに表記してみた。
- ③ } とともに地名。
- ④ }
- ⑤ [せ:]くらい。
- ⑥ アタシクの「ン」は、「ぬ」に該当する。「ク」は「うち」「家」であるが、アタシクと常につづけて発音され、クを切り離して発音することはない。一般的に言えば、クガ、クワ、クニ、クモ、クカラ……などと、クだけで独立して使用されることが無く、常にその前に連体修飾語を伴う。このような見地から、「ク」は切り離さずに表記してみた。しかし一面文法面から何問題となる表記でもある。[せ]せん分節物から音素は音声面と文法面との接点をどこに置くかに悩みを感じずる部分がある。
- ⑦ アタシワと言おうとしている。
- ⑧ 地名。/sjORbu/
- ⑨ 神社などに願ひかけ、誓約とし、その願ひがなれば、感謝の気持とあらわし、誓約と解く習俗。/ogaNhodoki/

#### 4. 女房かたぎ

話し手

| (略号) | (氏名)  | (性) | (生 年)   |
|------|-------|-----|---------|
| A    | 田島正実  | 男   | 明治29年生れ |
| B    | 高橋秀子  | 女   | 明治31年生れ |
| C    | 森田多賀恵 | 女   | 大正4年生れ  |

- B ショーブノ スモトリ ユータラ ナンダカカッタ。(A ンー ソ  
菖蒲の 角カ取りと 言たら 名高かった。(A くん そ  
ンチャネー。) カタングニョーボン<sup>①</sup>ガ エライ モンヨ。アタ  
うドねえ。) かたぎ女房が すごい ものよ。あた  
シャー コンドモノ トキニヤ ヒトンガ ニョーボオ カタイン  
しは こどもの ときには 人が 女房を かつい  
ダ ユー。マー アノ オーケナ モノオ(笑) ヨー カタイン  
ドという。まあ あの 大きな 者を よく かつい  
デ イタ モンチャート オモータキニ。  
で 行った ものだ と 思っ た(から)
- C アリャー マッコト カタングノンガンチャオカ。  
あれは ほんとに かつぐ め だらうか。
- B カタング モンガ ツイテ イカーヨ。  
かつぐ 者が ついて 行くのさ。
- C ツイテ イクノンガカヨ。  
ついて 行くの かね。

A ソリャーノー。(C アー。) (B トゥイテ イカー。) アシラー  
それは ねえ。(C ああ。) (B ついて 行くさ。) わたしなど”  
イッケン ソノ ニョーボカタンギノ クンレン ヤツタンガノー。  
一件 その 女房かたぎの 訓練をやったがねえ。

B カタング ユータラ マコト カタインデ イタカト オモータン  
かつぐと言ったら (ほんとに) かついで 行ったかと思つた  
デヨ。  
のさ。

A オモワノー。(C ンー。) ジョーリンジノ<sup>②</sup> メツピンオ タキモト  
実はねえ。(C んん。) 常林寺の 別嬪を 滝本  
ノ ワカイ モンガ カタインダンガノー。(B ンー。) ソラ  
の 若い 者が かつい だのだがねえ。(B んん。) それは  
マー ムスメトワ ナイナイノ ヤクソカン デキチューケント  
鞠 娘 とは 内々の 約束は できているけれど  
(B ンー。) オララーワ ソコエ ヤラント カマエチョルンガ  
(B んん。) おれたちは、そこへ やらないと かまえているの  
ンチャキノー。(B アー ンー。) ダカラン ゴロクニン イテ  
だから ねえ。(B ああ んん。) だから 五六人 行つて  
マー ヨアソビニ イテングジャン グジャン グジャン グジャン ホ  
まあ 夜遊びに 行つて ぐじゃ ぐじゃ ぐじゃ ぐじゃ け  
カノ ヤトゥンガ ハナシヨル マニ ソノ (B ンー。) ムスメ  
かの 奴 が 話している 間に その (B んん。) 娘  
ノ インドオ<sup>③</sup> ヌイテ (B ンー。) ワカイ モンガ、ニサンニン  
それ自身を 抜いて (B んん。) 若い 者が” ニ三人  
トゥイテ (B ンー。) ツレテ モンドツテ クルンガヨ。(B ン  
ついで (B んん。) つれて もどつて 来るのだよ。(B ん

一。)サー モーン デタゾト オモータラ ワカイモナ ネンゴロ  
ん。) さあ もう 出たぞと 思ったら 若い者は 全部  
ヒキアゲテ モンドツテ クルトネー (B ンー。) ソーシテカ  
いぎあけて もどって 来るとねえ (B んん。) そうしてか  
ラ ツレテ キタ ニョーボワン ドコカエ カクシナョ イテネー  
ら つれて 来た 女房は 何処かへ 隠しておいてねえ。  
(B カクス カクイテ ソノ イエー オカント。) オカンドウフ  
(B 隠す 隠して その 家へ 置かないで) 置かないま  
ニネー。ソコエ ヤッパリ ヨメサント ムコサント オイチョイ  
にしてねえ。そこへ や、ぱり 嫁さんと 婿さんとを 置いておい  
テ (B ンー) ソノ ミハリワ マタ ワカイ モンガ シンゴニ  
マ (B んん) その 見張りは また 若い 者が 四五人  
ン チャント トウイチョラヨ。(B ッー ソレカラ) ソーシチョ イテ  
ちゃんと ついていよ。(B せう それから) そうしておいて  
ソノ アトシガ タマラナーヨ。(B ンー。) ソーシテネー シ  
その後が たいへんだよ。(B んん。) そうしてねえ し  
タラー ワカイ モンノ ナカカラ ツケトンドケト ユーテネー  
たら 若い 者の 中から つけと どけと 言ってねえ  
(B ソー ソー。) オマサンクノ ムスメワン ダレソレンガ  
(B そう そう。) あなたとこの 娘は 誰れそれ が  
モライマシタト ユー コトオ ユーテ イカニヤ イカン。  
もらいましたと いう ことを 言って 行かなければ いけない。

B ソー ソー。トウケトンドケンガ イカニヤ イカン。  
そう そう つけと どけ が 行かなきゃ いけない。

A トコロシガ ソレンガ イタラー トテモ オヤラーシガ オコル  
ところが それが 行ったら とても 親たちが おこる

モンチャネー。(B オーンゴトヨ。) ジョーリンジエ アタシ  
 ものぢねえ。(B たいはんぢよ。) 常林寺へ わたし  
 ヤー イカザッタンガ トモンダチンガ イタトコロンガ (B ン一  
 は 行かなか、たが 友達 が 行、たところガ (B んん  
 。) ソノ ムスメノ アニンガ オコッテ オーケナ カキボー  
 。) その 娘の 兄が おいて 大きな 早き棒  
 オ サンゲテ (笑) ブチコロスト ユーテ オワエラレテ (B  
 を さげて ぶち殺すと 言って 追っかけられて (B  
 アトッラエル モンカ モー。) イノチカラソガラ ニンゲテ モ  
 そう注文どおりたぢかぬものかも。) いのちから ばら 逃げて も  
 ソドッテ キタ ユーテノー。  
 ど。て 来たと 言ってねえ。

C アリヤ ユーチョ イタラ プット モンドラニヤ イカザッ タツヤ  
 あれば 言っておいたら。 さっと もどらねば いけなかつたん  
イカ。  
 だつて。

A プット モンドラニヤ イカン。 オコッチョッタラ ~~~~~  
 さっと もどらねば いけない。 おいていたら

C グズン グズシヨッタラ トウカマッタラ シマイ シマイ コトヤ  
 ぐずぐずしていたら つかまったら たいはん たいはんなことぢ  
キ。  
 から。

B グズン グズシヨッタラ トウカマッタラ シマイヨ。  
 ぐずぐずしていたら つかまったら たいはんよ。

A ソリヤ オマサン ヒトノクノ ムスメオ (B ン一。)(C ン一。)  
 それは あなた 人の家の 娘を (B んん。)(C んん。)



ムサタンデ ヌスンデ クルンガン チャキニ。(°ンー ンー ン  
挨拶もしないで 盗んで 来るのだ から。(°んん んん ん  
一。)アノ ツケトンドケノ ヤクンガ イチバン エズラシカッ  
ん。)あの つけとどけの 役が 一番 つらかつ  
た。(°アー。)  
た。(°ああ。)

B ソレノガ ウント アッタワヨ。  
それが うんと あつたわよ。

A ソレカラノガ エーフヨ。ソレカラノガネー。サー アッチャノ  
それから が いいよ。それから がねえ。まあ あちらの  
オヤワ オコッチョル モンチャキニ コンドラ ヒトオ タテテ  
親は おこっている ものだから 気度は 人を 立てて  
イロイロ イロイロ コーショ ーシテ (°ンー。) モラウヨー  
色々 色々 交渉 して (°んん。) もらうよう  
ニ セニヤ イカンロー。(°ソー ソー。) ソノ アインダ  
に しなければいけないだろう。(°そう そう。) その 間  
ンガン ドーシタチ ムトツカシカッタラ イツカモ ムユカモ  
が どうしなって むずかしかったら 五日も 六日も  
イッシューカンモ カカルロー。コーショ ンガ。(°ソー  
一週 間も かかるだろう。交渉 が。(°そう  
ソー ソー。) ソノ アインダ ワカイ モノワン ゴチソーオ  
そう そう。) その 間 若い 者は 御馳走を  
シテ モローテ(笑) (°ソーヨ。) ギッチリ トックキリ  
して もらって (°そうよ。) きっちり つめきり  
ンデ ナニヨン ゴチソーニ オーテ  
で あれだ 御馳走に なるて

C コーテ モロータカ。  
飼って もらったか。

B コーテ モロータワ。ニョーボ カタイン タクニ カーニャ イカ  
飼って もらったわ。 女房を かつい だどとに 飼わねば" いけ  
ソ。  
ない。

C カイケツスルマ<sup>ン</sup> デ カ<sup>カ</sup> カーニャ イカンカ。  
解決 するま だ<sup>カ</sup> <sup>×××</sup> <sup>×××××</sup> 飼わなければ" いけない。

A ソリヤ チャント サケ サカナ<sup>ン</sup> デ チャント カーニャ イカ  
それは ちゃんと 酒 さかな だ<sup>カ</sup> ちゃんと 飼わなきゃ" いけ  
ソ。(C アー。) (B ンー。)  
ない。(C ああ。) (B んん。)

B フータイナ モノヨ。ニョーボカタ<sup>ン</sup>ギ ユーテ。  
費用のかかる ものよ。 女房 かたぎと 言って。

A ソレ<sup>ン</sup>デネー エー<sup>ン</sup>ガ<sup>ン</sup> チャッタラ クレタケンドネー (C ン  
それ だ<sup>カ</sup>ねえ。 よい の だ<sup>カ</sup>、たら くれたけれどねえ (C ン  
一。 ) ナカナカ ムトゥカシー<sup>ン</sup>ガー ソノヨーナ フシンダラ  
ん。) なかなか むつかしいのは そのような ふれだら  
ナ ムスメワ オヤ<sup>ン</sup>デモ ナイ コ<sup>ン</sup>デモ ナイキニト ユーテ  
な 娘は 親 だ<sup>カ</sup>も ない 子だ<sup>カ</sup>も ないからと 言って  
カンドー スル。  
勘当 する。

C カンドー カンドーサレタカ。  
<sup>×××</sup> <sup>××××</sup> <sup>×××××</sup> 勘当 勘当 されたか。

A カンドーサレタ。(B ソー ソー。) (C アー。) サー ソノ  
勘当 された。(B そう そう。) (C ああ。) さあ その

カンドーサレチョッテモネー サー コンド ナニヨ チクト オ  
 勘当 されていても ねえ さあ 今度 あれだ すし お  
 ナカンガ フットッテ コンドモンガン デキタト (B コンドモ  
 なか が 大きくなって ことども が できたと (B ことども  
ンガン デキタ。) コー ユー コトニ ナツタラネー (B マ  
 が できた。) こう いう ことに なるならねえ (B ま  
 タ ショイ。) ジョット マタ コーショーニ イキンダイタラ  
 ね 容易だ。) じいっと また 交渉 に 行きだしたら  
 ネー モー オララーモ ショーコトンガ ナイキ (B オヤモ  
 ねえ もう おれたちも しかた が 無いから (B 親も  
アキラメテ) アキラメテ アノ ゲマショート ユー コトニ ナッ  
 あきらめて) あきらめて あげましょうと いう ことに なる  
 テ ソコンデ メン デタシ メン デタシデ ハジメテ コンレイ  
 て そこの めでたし めでたしで はじめて 婚礼  
 オ シタワヨ。(C ソー ソー。) (B ソー ソー。) ソレンデ  
 を しなのさ。(C んん そう。) (B そう そう。) それで  
ヤリヨッタ。  
 やっていた。

C ニョーボカタンギ ユータラ アー アテイノ オケネーヤンチャ  
 女 房 かなぎと 言ったら ああ わたしの 大きいねえさんだ  
 。 オケネーヤンガ アノ ムリカタンギオ ヤラレタト。(B ソー  
 。 大きいねえさんが あの 無理かなぎを やられなかった。(B んん  
ン。) ソノ フターリンガ アノー エー ナカン チャッタラ シ  
 ん。) その 二人が あのう よい 仲 だ。 たら たら  
 ッカト エーケンド (B ムリカタンギ。) ムリカタンギ ヤラ  
 しかた よいけれど (B 無理かなぎ。) 無理かなぎを やら

レタトゥンガネー。(B ンー。ソナノンガ アッタ。) ソレン  
 れんたんで、ねえ。(B んん。そんなのが あ、た。) それ  
 ガネー オケネーヤンガ ヤマシダエ カイコ カイニ イチョツ  
 がねえ。大きいねえさんが 山田へ かいこを飼いに 行、てい  
 タラシー。(B ンー。) ソノ トナリノ オトコニガ ニョーボ  
 たらしい。(B んん。) その 隣の 男 が 女房  
 モ アリ コモ アッタト。(B アリヤ。) オケナ シラン  
 も 有り 子も あ、たんで、。(B あら。) 大きな 白  
 ギクカシラン ユー スモトリン チャッタニカーランノー。(B  
 菊 かしら 言う すもとり た、たらしい ねえ。(B  
 ンー。) ソレンガ チャント<sup>(4)</sup> オケネーヤンニ マヨータ モン  
 んん。) それが たまたま 大きいねえさんに 迷、た もの  
 ヨ。ホラ。(B ンー。) ホインデ カイコカイワ ムスメノ カ  
 よ ほら。(B んん。) それ？ かいこかいほ 娘の か  
 イコカイ ユータラ ワカイシガ キテ テトゥンドーテネー。  
 いこ飼いと 言、たら わかいしが 来て 手伝、て ねえ  
 (B ンー ンー。) アノ カイコオ コクソ カエタリナインダ  
 (B んん んん。) あの かいこを 蚕糞を 変、えたり なん  
リ ソイトー テトゥンドーテ クレヨッタ ホラ。  
 か そいつを 手伝、て くれ、ていた ほら。

B コクソカエタリ テトゥンドーテ。 シー。  
 蚕糞を 変、えたり 手伝、て た。 んん。

C ケンド オケネーヤンワ ウント マシダ ソノ トキン ドーセ  
 けれど、大きいねえさんは、うんと、まだ、その、とき、どうせ  
 ジューロク ジューロクシチバーヤッタニカーランノー。  
 十 六 十 六 七 くらい、たらしい ねえ。

A イロケンガ ナカッタカ マンダ。  
色気が 無か、なか まだ。

C ンー。ソナ ソナ コター ゼンゼン<sup>⑤</sup> シラソソノガヨ。ソ  
んん。そんな そんな ことは 全然 知らない のよ。そ  
ノ キテ クレヨウソノガモ ドンナニ シテ キテ クレヨル  
の 来て くれてる のも どんなに して 来て くれてる。

ヤラ ソラ ゼッタイ シラザッタ ワケヨ。ジューブソニヤ (ヤ  
ら、それは 絶対 知らなかつた わけよ。十分 には (

ンー。) シラザッタ ワケヨ。ホリヤ。(ンー。) サー  
んん。) 知らなかつた わけよ。ほら。(んん。) さあ

カイコカインガ スンデ モンドッテ キテ ヤマソダエ イト  
かいに 飼いが すんぞ もどって 来て 山田へ 糸を

トリニ イキヨッタソノガネー。(ンー。)ホイテ トモンダチャ  
取りに 行っていたのだからねえ。(んん。)そして 友達に

サンニン ムスメソノガ イキヨッタトコロソデ(ンー。)サー  
三人 娘が 行っていたとどうぞ(んん。)さあ

ヤマソダノ アノ ヤマ ウワノハンデ(ンー。)カタンガ  
山田の あの 山 上野辺ぞ(んん。)かっか

レタト。ソノ オーケナ オトコソノガ キテカラ タカソデ マ  
れなぞって。その 大きな 男が 来てから まあ ほ

ッコト<sup>⑥</sup>カタイソデ イタト。ヨコッシャニ カカエテネー。(  
んん)かっか 行、なぞ。横側ニ かかえてねえ。(

ンー。)ソイトウソデ トモンダチソノガ ミソナー タスケテ  
んん。)そのことぞ 友達が みんな 助けて

クレー タスケテ クレー ユーテ タイテ ヒセツタケソドソ  
くれ。助けて くれと 言、て 随分 叫んだけれど、そ

コナヘンニ タンボシューケンドン グレッチャー ンガ キテ フ  
 このあたりは 農耕しているけれど 誰 も が 来て く  
 レンラシーワ ホラ。(B ン一。) ホンデ トモンダチンガ ホ  
 れないらしいわ ほら。(B んん。) それで 友達 が ほ  
 ントー ブット ケイサトウエ ユーテネー。 デ ケイサトウ  
 んとい さつと 警察 へ 言っただえ。 で 警察  
 が キテ クレタ トキャ ハチオージサマオ<sup>⑦</sup> アノー チョット  
 が 来て くれた ときは ハ王 手様を あのう ちよと  
 ビンガシエ コイタ トコロンチャッタト。(B ン一。) ちらり  
 東 へ 越した といろ だ、なそうだ。(B んん。) ちらり  
 ット オケネーヤンノ メー ミエタト オモータラネー (B ン  
 一) 大きい姉さんの 目へ 見えたと 思っただえ (B ン  
 一。) ハヤ オサエチョッタツンガネー。(B ン一。) ホンデ  
 ん。) 早くも つかまえていたん だ、だえ。(B んん。) それで  
 マーソー ユー ホリヤ ナカヨシヂャ ナカッタキニ (B ン  
 一) あ そう いう ほら 仲よし だは なかったから (B ン  
 一。) ホンデ モ <sup>xxx</sup> <sup>xxxxxxx</sup> ドッテ キタ ワケヨ。(B ン一 ソー  
 ん。) それで も <sup>xxx</sup> <sup>xxxxxxx</sup> もどって 来た わけよ。(B んん そう  
 か。) ケンド ソノ カイジャンガネー アノー ウチエ カイシ  
 か。) けれど その 会社 が ねえ あのう 内へ 会社  
 ヤエ キチュー アイダワ セキニンオ モッテ マモル コト  
 へ 来ている 間は 責任を 持って 守る こと  
 ワン デキルケンド (B ン一 ソトデワ) ン一 イキシモンド  
 け できるけれど (B んん 外 では) んん 往復  
 リヤ マモレンキニ ホンデ ニシノ ハタニ アノー ソノ オ  
 は 守れないから それで 西の 幡多に あのう その お

一ケナ セイシンガ アルキニ (B ン一。) ホンデ ソコエ イ  
おきな 製糸工場が あるから。 (B んん。) それで そこへ 行  
ケト ユー コトシデネー。 (B ン一。) ソコマン デ ニンゲチヨ  
けと いう こと だねえ。 (B んん。) そこまで 逃ゲマ  
ツタト ユー コトオ チチカラ キカサレタワヨ。 (B ン一。)  
いたと いう ことを 父から 聞かされたわよ。 (B そう。)  
イー⑧ ソンナ ホンデ ムリカタギモ アツタラシー。  
はい そんな それで 無理かたぎも あつたらしい。

B アツタ。アツタ。 ムリカタギモ アツタ。ヨケ アツタセヨ。ム  
あつた。あつた。無理かたぎも あつた。たぶん あつたのだよ。無  
リカタギワ。  
理かたぎは。

## 注記

- ① ニョーボカダギ・カダギニョーボ いずれも要するに略奪結婚に変わりはない。
- ② 地名。
- ③ イドは本来「肛門」。「娘のイドを抜く」で、従って娘自身をひき抜く、かっはらう意。
- ④ この発ソトは、仮に「たまたま」とあてれば、もとよりこの意味だけでは、発ソトの本質は解明されない。「くやしいこと」「残念にも」「ついで、かり」「折悪しく」「熱心に」これらの語の総念されたような気持である。類語に 発ソトがある。「発ソト忘れてしも一た。」「発ソトまた試験に落した。」
- ⑤ 発語者は /zenzen/ と意図しているようだが、[den-dey] に近くなっている。
- ⑥ タカデもマコトも、「たいそう・ほんとに・定に」などの語の副詞。土佐人の会話にはこれらの語が頻出する。強調的に物をおおおうとする、某民性の反映であらう。
- ⑦ 神社名。
- ⑧ 感動詞。



## 5. 昔の服装と遊戯

話し手

(略号) (氏名) (性) (生 年)

- A 田島正実 男 明治29年生れ  
 B 高橋秀子 女 明治31年生れ  
 C 森田多賀恵 女 大正4年生れ

A. ソンナー モット フルイ ハナシニ モッ テ イテノー (B ンー  
 そんなら もつと 古い 話 に もつ て 行つてねえ (B くん  
 。) オマンラーノ コンドモノ オリャン ドンナ カマヨ シチ  
 。) あなたたちのめ こともの 折には どんな 服装をして  
 ョッタゼヨ。  
 い、たかね。

B コンドモノ トキカヨ。(A ンー。) コンドモノ トキニャ ホン  
 ことものめ とかね。(A くん。) ことものめ とぎには ぼん  
 トー ナニヨ。アノ キモノ キーテ オビ ムスンデ ココン  
 とに あれよ。あの 着物と 着て 帯を 結んで ここ  
 デ ククッ テノー マエカケト ユー モノ ソノ サラ サラシダ  
 で くくつてねえ 前かけと いう もの その <sup>xxx</sup>ささ <sup>xxxxxxx</sup>ささ だ  
 カシラン ナニヤロ ユータ サラ アノー ウ ウント (C サラ  
 かしり なんとか 言った ささ あのう <sup>xx</sup>う <sup>xxxxxx</sup>うんと (C ささ  
 サノ オビ。) サラサ サラサ サラサノ マエカケオ アテテ  
 さの おび。) さささ さささ さささの 前かけを あてて

ネー。モスノ オビオ コーテ クレタラ メッソナ モンヨ。  
ねえ。モスの 帯を 買って くれたら たいした ものよ。

A イヤ ソノ マンダ マエカケオ セン コンドモノ オリヨノー  
いや その まだ 前かけた しない ことのも 折だねえ  
。コンドモノ オリニ アタマワ オナゴノコワ ドー シネ  
。ことのも 折に 頭は おんなのこは どうしてい  
ッタ。  
た。

C コンドモノ トキワネー (B コンドモノ トキン ~~チャ~~ )アレ  
ことのも ときはねえ (B ことのも とき ~~だ~~ )あれ  
オネー (A ンー。) アノー ガッ コー イチネンエ ハイ ハ  
とねえ (A んん。) あめう 学校 一年へ はい は  
イッ タラネー ハイル トキワネー カミオ ヌバイテ マー チ  
いッ ~~タラ~~ ~~ネー~~ ~~ハイ~~ ~~ル~~ ~~ト~~ ~~キ~~ ~~ワ~~ ~~ネ~~ ~~ー~~ ~~カ~~ ~~ミ~~ ~~オ~~ ~~ヌ~~ ~~バ~~ ~~イ~~ ~~テ~~ ~~マ~~ ~~ー~~ ~~チ~~  
はいる ときはねえ 髪を のびして まあ 靴  
ヤッ ~~チャ~~ ノ オバキリ エーテ スズメ スズメノ オバ オバ  
うぐいす の しほおりと 言ッテ 雀 雀の しほ しほ  
チミタイナ (B ンー。) モンヨ。 (B ソー ソー。) ヒキシメテ  
みたいな (B んん。) ものよ。 (B そう そう。) ひき締めて  
ウシロテ 左 ント ヒキシメテ ククッ テネー。 ソレテ エ  
うしろで ぶんと ひき締めて くくッてねえ。 それで え  
ー ヨトミノ キモノ キーテ (A ンー。) オコシオ オコシ  
え 四ッ身の 着物と着ッて (A んん。) おこしと おこしと  
セマ イカガッ タキ イマノヨーナ (B ンー。) アノ ズロ  
しなければいけないから 今のような (B んん。) あめ ズロ  
ー スヤ エー モナ ナイキ オコシオ シテ  
ー スだという ものは 学いから おこしと して

B モー オシメオ ノケテ アルキンダイタラ モー オコシオ シ  
 もう おしめを めけて 歩みだしたら もう おこしとし  
 テ  
 ー

C セーカラ ヒズンゴキオ シテネー ヒズンゴキオ シテ ガヨ  
 それから 婦人用のへに帯を結んでねえ 婦人用のへに帯を結んで だが横  
 コオイノ アノー スノデ コシラエタネー カバン袋 。 アレ  
 負いの あめい 布 で こしらえたねえ かばんだ 。 あれ  
 ー (B ンー。 ) ナニカ=オ ツメテ ヨコオイ= シテ イタ  
 へ (B くん。 ) なにもかも ぎゅって 横 負いに して 行た  
 ンガ。  
 ー。

B オマンラー ソノ スノデ コシラエタ カバンデモ (C ンー。  
 あなたなどは その 布 で こしらえた かばんでも (C くん。  
 ) シテ モロータキ= ムソノヨ。(C ンー。 ) アテラノ ト  
 ) して もら たから たいしたもので。(C くん。 ) わたしなどは  
 キヤ オマン アノ フロシキゼヨ。(C ソー 我 ッタトノー  
 きは あなた あめ ぶらしきだよ。(C そうだ たとかね  
 。) フロシキエ キリキリ マイテ (C ソー ソー。 ) セナカ  
 。) ぶらしきへ さらさら 巻いて (C そう そう。 ) 背中  
 エ スット オーテ (C ソー 我 ッタト。 ) イタゼヨ。(C  
 へ さっと 負って (C そうだ たとか。 ) 行たのだ。(C  
 ンー ソー 我 ッタト。 ) (B ンー。 )  
 くん そうだ たとか。 ) (B くん。 )

A アテイラーノ コンドモノ オリワノー オナゾノコモ オナゾ  
 わたしなどは こどもめ 折はねえ 女の 子も <sup>x</sup>女<sup>x</sup>

ゴノ オトコノコモノ一 ツジ<sup>×××</sup>ガミ<sup>×</sup>ギ<sup>×</sup>ギ<sup>×</sup> ッタワヨ コー。 イ  
<sup>×××</sup>の 男 の 子もねえ つじ<sup>×</sup>髪<sup>×</sup> だ たよ。 こう。 人  
 ナマサンミタイニネー。(B ンー ンー。) ミミノ ホトリマン  
 形<sup>×</sup>さん<sup>×</sup>み<sup>×</sup>たい<sup>×</sup>に<sup>×</sup>ねえ (B くん くん。) 耳の (耳とりま  
 デ コー カミオ サン ガッ テ (B ンー。) ソレンデ トゥルリ  
 下<sup>×</sup>こう<sup>×</sup>髪<sup>×</sup>と<sup>×</sup>垂<sup>×</sup>ら<sup>×</sup>し<sup>×</sup>て (B くん。) それで つらり  
 ット コー ナニヨネ アノ一 ツミンロエテ (B ンー。) (C ア  
 ーと こう なんだね あめう 摘みそらえて (B くん。) (C あ  
 ー。) (B ンー。) (C ンー。) セーカラ マンダ コノ ビンタエ  
 あ。) (B くん。) (C くん。) それから まだ この 髪<sup>×</sup>のあた  
 モ コー ノコイテネー。  
 りへも こう 残<sup>×</sup>して<sup>×</sup>ねえ。

B ソー ソー ビンタオ ココエ ビッ ト ノコイテ ソノ ビンタ  
 そう そう 髪<sup>×</sup>のあたりとここへ 少し 残<sup>×</sup>して その 髪<sup>×</sup>のあ  
 オ アタシノ オトコノガ ホラ (A ンー。) アテイヨリ ミッ  
 たりとあたしの 弟<sup>×</sup>が ほら (A くん。) わたしより ミ  
 ツ シタヨ。(A ンー。) アレンガネー コノ ビンタオ モー  
 フ 下<sup>×</sup>よ。(A くん。) あれがねえ この 髪<sup>×</sup>のあたりの毛をも  
 オカー ノケトセ。 <sup>①</sup> <sup>×××</sup>トモンダ<sup>×</sup>チ<sup>×</sup>ン<sup>×</sup>ガ <sup>×××</sup>ワロー<sup>×</sup>タ<sup>×</sup>ト <sup>×××</sup>ユー  
 かあさん ぬけておくれ。 <sup>×××</sup>友<sup>×</sup>達<sup>×</sup>が <sup>×××</sup>笑<sup>×</sup>た<sup>×</sup>と <sup>×××</sup>言<sup>×</sup>っ  
 テ モンドッ テ ユータ コト<sup>×</sup>ガ アルキ。(A オトコノコモ  
 下<sup>×</sup>もど<sup>×</sup>つ<sup>×</sup>て 言<sup>×</sup>た<sup>×</sup> こと が あるから。(A 男の子も  
 ねー。) オトコノコ<sup>×</sup>ギ<sup>×</sup> ~~~~~。  
 ねえ。) 男の子 だ~~~~。

C ガッ コーエ イキユ一 トキニマデ イチネンバーノ トキ<sup>×</sup>。  
 学校へ 行<sup>×</sup>つ<sup>×</sup>て<sup>×</sup>い<sup>×</sup>る と<sup>×</sup>きに<sup>×</sup>ま<sup>×</sup>で 一<sup>×</sup>年<sup>×</sup>くら<sup>×</sup>いの と<sup>×</sup>きは。

B イチネンノ トキ  
一年のとき

A ソル アノー ガッ コーエ イキンダイタラ ビンタワ ノ ノ  
それは あのう 学校へ 行きだしたら 髪<sup>xx</sup>のあたりの毛<sup>xx</sup>は<sup>xx</sup>の<sup>xx</sup>  
ケタケンドノー (C アー。) ガッ コーエ イテモ アクシラー  
<sup>xxxx</sup>けたけれどねえ (C ああ。) 学校へ 行っても わたしなど  
モ イチニネンノ オリワ ツジンガミ (C アー。) ツジンガ  
も 一二年の 折は つど 髪 (C ああ。) つど 髪  
ミヨネー カミワ。(C ンー。)  
↑ねえ 髪は。(C んん。)

B ビンタワネー アテイノ オトトワ~~~~。  
髪<sup>xx</sup>のあたりはねえ わたしは 髪は

C ホンナラ オトコワ フリッ ぢ ッタカヨ。  
それなら 男は パンツをはかない状態だったね。

A フリマロヨ。オトコモ オナゴモ フリマロ。オナゴノコモ  
ノーパンツ。男も 女も ノーパンツ 女の子も  
オトコノコモ フリマロヨ。  
男の子も ノーパンツ。

B パンツは だ ヌー モナ ナカッタ。  
パンツなんかというものは無かった。

A アンビヨルニ コンドモノ ムシンニ アンブ オリ ツツ<sup>②</sup> トッ  
遊んでいるのに こどもの 夢心に [遊ぶ] 折 (しゃ  
クノーデ アンブ オリニャ ミンナー マルミエヨ。(B マ  
バンで 遊ぶ 折には 全部 丸見えよ。(B 丸  
ルミエヨ。)(C アー マルミエヤッタ。)  
見えよ。)(C ああ 丸見えだった。) エーモ<sup>③</sup>  
ええも。

B パンツが ユー モナ ナカッ タキニノ。 パンツだとかいうものは無いからねえ。

A ナイ ナイ。アルモンカ。(B オンナモ。) ソルヤ モー  
無い 無い。有りものか。(B 女も。) それは もう  
ガッ コーエ イキン ダイテネー (C ンー ンー。) ワタシラー  
学校へ 行きだしてねえ (C くん くん。) わたしたち  
ノガッ ガッ コート ユーノ ガッ コーオ ソツノ キョー スル  
が 学校という 学校と 卒業する  
オリモ ヒトトモ。  
折も 少しも。

B ブランコオ シキ ムツ タキニネー ソレデ コー ヤッテネー  
ブランコと 殺けてあったからねえ それで こう 作てねえ  
ギーコン ギーコ コンギヨツタ。 トーット コー ヨコニ  
ぎいこ ぎいこ こいでいた。 ちと こう 横に  
シタ キマンデン アタシラ ウント ミノガ カルカッ タキニ  
した 木まで わたしは うんと 身が 軽いから  
(C アー。) キマンデ ビラント アンガッ テ コー フリヨ  
(C ああ。) 木まで びらんと あがって こう 振って  
ツタンガノー。(C アー アー。) ノー ユー フーナ オシリノ  
いたがねえ。(C ああ ああ。) そういうふうな お尻  
が タコニ アンガッ タラ キモノノガ タコニ アンガッ タラ  
が 高く あがたら 着物が 高く あがたら  
オシキ マルミエヨ。(C アー。) ソルヤ モー ミンナー  
お尻は 丸見えよ。(C ああ。) それは もう みんな  
ナミンガッタキ ハン ドッ カシニ ナカッ タ。(C ンー。ソーカ。  
普通だから 恥ずかしく ないから。(C くん。そういう。)

ソーカ。)

そうか。)

A ミンナー フリマロヨ。

みんな ふりまろよ。

C ソ アタシラーノ トキヤ オコシヨ シタン デヨ。

ん あたしにらぬ ときは おこしよ したのよ。

B ソー オコシヤ シタラ。

んん おこしは していろあ。

A コシマキヤ シタワ コシマキ コシマキ。

腰巻は したて 腰巻 腰巻。

C ソ オコシヨ シタケンド (B ソー。) イマノヨータン キョ

ん おこしよ したけれど (B んん。) 今のような 行

ーキダ シタラ マルミエニ ナラー。(B マルミエヨ。) エー

儀と したら 丸見えに なうわ。(B 丸見えよ。) ええ

.

.

A ソー ユー ソー ユー ナリ。

そう いう そう いう 様子。

B マエワ キレーニ アノ うちン デモ キレーニ ソンデ カシカ

前は きれいに あの うちでも きれいに それで 正座

マラニヤ イカザ タンガノー。

いなければ いけなうたがねえ。

C ソレノ デ アソビ ユータラ ケチビンオ シタリ ヘーカラ カ

それで 遊びと言ったら おぼろきと したり それから エ

ーラケリノ ケンケンオ シタリ ナートビヨ シタリ (B ソー。)

器めいたものを蹴る 片足とびと したり 縄とびと したり (B んん。)

ガ コーデ ソンナ アンピオ シタゼヨ。<sup>④</sup>  
学校で そんな 遊びと したのでよ。

A アンタラーノ ジンダイワ ソノ オジ ミオ ホーッタカヨ。  
あんたたちの 時代は その おてだまと ほうたかぬ。

C オジ ミモ ホーッタ ホーッタ。  
おてだまも ほうた ほうた。

A オンナノコワ オジ ミオ ヤリヨッ タネー。  
女の子は おてだまと やっていたぬえ。

C オジ ミモ ヤッ タワヨ。 オジ ミモ ヤッ テン デ ケンケン  
おてだまも やたわよ。 おてだまも やッ で 片足とび  
オ シタリ エー ナートビョ シタリ (B ソー ソー。) ソン  
と したり ええ 糸とびと したり (B そう そう。) そんな  
ナ コト シテ マンダ ニチンゲトッ ポーズノオトノカズ ユー  
な こととして まだ けん だ ま という  
ソガモ シタ コトノガ アルケンドノー。  
ぬも した ことか あるけれどぬえ。

A ソノネー ケチケチ アノー オジ ミンデ オモインダスンガノ  
そのぬえ おほじき あぬい おてだまて 思いだすぬ  
ー (C エー。) ガッ コー ナンネンキ ーカ シランガ テイ  
え (C ええ。) 学校 何年級か わからないが紙  
ネン幾ッ トロト オモランガ オナゴノコノガ エンエ コ  
昔年だったらうと 思うが 女の子が 縁へ こ  
ー アトッ マッテ ヤリヨッ タンガネー。 コリャ ナワ ユワレ  
う 集まって やっていたぬえ。 これは 名は 言ッては  
ンケンド イタンヅラスル ヤトッガ アッテカラ オナゴノ  
いけないけれど いたずらする 奴が あッてから 女の



コノ ケツオ (笑) シャーット マクッ テネー (笑) サー  
 子の 尻と 下と まくッてねえ さあ  
 ソノ コノガ ナキンダイテ (B ンー。) センセイニドト  
 その子が泣きだして (B くん。) 先生に 叱りと  
 カシタ コトノガ アラーヨ。(笑) 毎ント ホンデ マクッ  
 ばされたことがあつた。(笑) ちゃんとそれでまく  
 タラ イナンガラ ミエヨッ タキニノー ネー。  
 たり そのまま 見えていたからねえ ねえ。

C ムカシノ コンドモノ ワリコトワ ヒンドカッ タラシーキノー。  
 昔の こどもめ いたずらけ ひどかつたらしいからねえ。

B ヒンドカッ タ。ヒンドカッ タ。(A ソーラー~~~~) ワリコトオ  
 ひどかつた。ひどかつた。(A それは~~~~) いたずらと  
スル。  
する。

C ツクエノ シタエ カクレヲ ッテ センセイニ スミヨ トッケ  
 机の下へ おくれていて 先生に 書と つけ  
 たりネー。(B ンー。) ハカマオ ハ ハカマオ ハンダッ タリ  
 たりねえ。(B くん。) はかまと は。 <sup>xxx</sup> はかまを まく たり  
 シタラシーネー。  
 したらしいねえ。

A ヤッ タ。ヤッ タ。ヤッ タンドコロニ 箒 ナイワ。(C トテモ。  
 やつた。やつた。やつたどころでは ないさ。(C とても。  
 ) ツベシガ イナンガラ ミエル モン箒 キニ (B ソーヨ。  
 ) 尻が そのまま 見えろ おめだから (B そいうさ。  
 ) ミンナー ヤッ タワヨ。オナンゴオ。(B ンー。) キョー  
 ) みんな やつためさ。女と。(B くん。) 今日

ワ セ、クノ ツベマクリト ユー ウタンガ ア、タワヨ。 (は 節句の 尻くりと いう 歌 の あったためさ。笑)

B オナノゴノコワ ナキユー。  
女の子は 泣いている。

A ガ、コーノ ジンダイニ ナッタラ アシモ ハッキリ ジレンガ  
学校の 時代に なたら わしも はっきり 自分  
ワリコト シタ コトオ ヨー オボエテ ーンガ マー ワリコ  
いたざらとした ことと よく 覚えているの まあ いたざ  
トノ タイ タイショ ーンガ ノー。 ワリコトノ クミワ タイ  
らの <sup>xxxx</sup>大 <sup>xxxxxxx</sup>大将 だねえ。 いたざらの 組はたい  
テイ ン 左 ルバー アタシモ ワリコト シタ。  
てい 入っているくらい わたしも いたざらはした。

B アタシ ナキミソッテ ヅッタ。(A ソーカヨ。)(笑) アタ  
あたしは 泣きみそだった。(A そうかぬ。) あた  
シ ジンガイ セーンガ タコーテノー。 サキニ ナランテ  
しは 存外 背が 高くねえ。 先の音に ならんで  
ウロー ホルヤ。 セーシニ サキニ アタシガ サキヨ。  
うだらうほら。 背の順に 先に あたしの 先よ。  
ソノ ソノ トッギノ ヒトニガ アトエ ナランテ ヅッタ。  
その その 次の 人が 後へ ならんでいた。  
アタシノ ココオ ビッ シリ ケルニ ヅッテ ノー。 ホント コカ  
あたしの ことと ほんとう 蹴るんだねえ。 ほんとに ここは  
ビッ シリ オマー カサブタニ オッ チョッ タ。 ケラレテ ケラ  
いつも おもに かわぶたに なっていた。 蹴られて 蹴

レテ ソー ビッ シリ ケトバサレテ。(C アレモ。)  
られて そう へっ ちゅう 蹴とばされて。(C あれも。)

A マー トモンダチンドーシシガ ケンカオ シタワ。 イマノ コ  
まお 友達 同志 が けんかを したさ。 今の 子  
ワ ケンカオ センガ フシンギン ぢゃー ト オモワーヨ。  
は けんかを しないのが 不思議だ と 思うゆえさ。

C シケンドリワ<sup>⑤</sup> ヤッパ<sup>⑥</sup> シケル<sup>⑥</sup>。 コンドモノ トキニ ヤッパ  
軽蔑される鳥は やっぱ 軽蔑される。 こども の ときに やっぱ  
リ ナカサレル モノワ ナカサレヨッタワヨ。  
リ 泣かされる 者は 泣かされていたわよ。

### 注記

①「人」と言いかけたものであらう。

②「ツッ」のようにも聞こえる。

③感動詞か。

④このぜは、デに近い。

⑤シケンドリ(od. シケトリ)は、軽蔑され、いじめられ、やりこめられて、劣等感を持っている鳥(おもに、にわとり)の意。

⑥この場合、後の「泣かされる」と呼応させて、「軽蔑される」と訳したのが、本来は「劣等感を持つ」「しりごみをする」くらい  
の意。

カマヨは、カマエ(様子・服装)に動詞「と」が融合した気持。

## 6. 小学校時代の思い出

話し手

(略号) (氏名) (性) (生 年)

A 田島正実 男 明治29年生れ

B 高橋秀子 女 明治31年生れ

C 森田多賀恵 女 大正4年生れ

C ソノ ジブンノ ソノ ジブンノ キョーカガ ヲ ガ アテイラー  
 ノ 時分の ノ 時分の 教科書 の わたしなど  
 ノ ジブンワ ハナ ハト マメ マス ミノ カサ カラカサ  
 ノ 時分は ハナ ハト マメ マス ミノ カサ カラカサ  
 若ッタンガ オマンラーノ ジブンワ ドンナガ マッタ。  
 だった。あんたたちの時分は どんなのだった。

B アテイラー イエ イス。(<sup>レ</sup>イ イエ イス。) ヲ。(<sup>レ</sup>ソ  
 わたしにらば イエ イス。(<sup>レ</sup>イ<sup>xxx</sup> イエ<sup>xxx</sup> イス。) かん。(<sup>レ</sup>ソ  
 ーカ。) ハナ イエ イス イエ イスト。  
 うか。) ハナ イエ イス イエ イスト。

A ダン ガマンラーノ ジンダイニワ ナニカネ キョーイクチ クン  
 多賀恵さんたちの時代には それいね 教育勅  
 ゴワ モー オスエザッタカネ<sup>①</sup>  
 読はしう 教えたかたかね。

C オシエタ オシエタ。ウン オシエタ。オシエタ。キョーイクチ  
 教えた 教えた うん 教えた。教えた。教育勅

ヨ クンゴワ オシ オシエタ。  
読 ば おし おしえた。

A アノ シキノ オリニワ センセイ<sup>ン</sup>ガ コー ショ - ショ オ サ  
あの 式の 折には 先生 が こう 読 書 と  
シアンゲテ コー シキン 指 - エ ハイッ テ キタラ ミンナー  
しあげて こう 式 場 へ 入っ て 来たら みんな  
ンガ サイケイレイオ ショ ラニャ イカガッ タン ガネー。  
が 最 敬 礼 と していなければいけないのがねえ。

C ヤッ タ ヤッ タ ウン ウーン ヤッ タ ヤッ タ ウン。 ソノ。  
また また うん うん また また うん。 その

B ソノ ヤッ 指 - トキニ ヘン ガッ デテ (笑) マッコト  
その やっ ている ときに 尻 が 出っ て ほんとい  
ヒトノ アタマノクエ (笑) コー ウツッ ブイ左 - キニネ  
人の 顔めとこへ こう うつむいているからぬ  
こ。(笑) (A~~~~) コマッタ ワタシ。 (笑) ホントー ソ  
え。 困っ た わたしは。 ほんとい

指 エー ワスレン。 ホンデ オイモワ タベ指 ラレン ユ  
れを 忘れられない。 それで お芋は 食べてはいけな  
ーテ (笑) イーヨッ タ。 シキノ トキニャ テン指 - セトラ  
言っ て 言っ ていた。 式の ときには 天長 節  
指 キンゲンセトラ 指 ユーテノー。(こ ソー ソー。)  
だ 紀元 節 だと言っ てねえ。(こ そう そう。)

マエワ アッ タモ。  
前は あつたね。

A イマワ ハイカノ シンモ ナニモ ナン指 ハイキンデ  
今は 陛下の 写真も 何も 一向 平気で

ミヨルケンドネー アノ ジンダイト ユー モノワ (B アタシ  
見ているけれどねえあの 時代と 言う ものは (B あたし  
ラー)  
にら(ア)

C オノ ガマニヤ イカザッ タキニネー ココロカラ オノ ガミヨッ タ  
おがまなければいけなからたからねえ 心から おがんでいた  
キ。  
から。

B キョー - イク 箱 クンゴオネー シマイ<sup>②</sup> ソレト ボシンノ ショー  
教育 勅 読 とねえ 終い それと 戎 申の 詔  
シト (C ソー。 ) ソレオ エー オボエタラニヤ ソトウシ  
書と (C んん。 ) それと 覚えられていなければ 卒  
業 - サセント ユータキニ (C ソー ソー。 ) キビシカッ タ  
業は させないと言ったから (C そう そう。 ) きびしからた  
せヨ。  
めし。

C ソレオ ナライハジメニ ナニヨー エワサレテ サイサイ ノコ  
それと 習いはじめに なんだあ 言わされて 度々 残  
サレタワ。 ツマツタリ エー ユワザッ タリ シタラ ノコッテ  
されたわ。 つまたり 言えなからたり したから 残って  
ヤラニヤ イカザッ タワヨ。  
やらなニヤ いけなからたわし。

A ショー - シンノ キョー - カショノ イチバン サキエワ 箱 - イク  
修身の 教科書の 一巻 先へは 教育  
箱 クンゴンガ ツクツタネー。 カナラズ ノツクツタネー。  
勅 読 が ぬっていたねえ。 かならず ぬっていたねえ。

エー。  
ええ。

B ソー ソー ソー ノッ チョ ッタ。 ソー ノッ チョ ッタ。 ホンデ  
そう そう そう のって いた。 んん のって いた。 それで  
ソレオ ホンデ エー ヨマンヨーナ モノワ ソトッ ギョー  
それを それで 読む ことが できる。 ふうな 者は 卒 業

ワッ デキント エーテ。(C マッ コト ヲ ダヤ。)  
は できないと 言っ て。(C 全く だ。)

A マー トー ジワ キョー イクワ キビシ ヲ カッタノ。 (B キビシ  
まあ 当時 け 教 育 け きびし かに ねえ。(B きびし  
カッタ。) イモト チンゴーテ。  
かに。) 今と 違っ て。

C マッ コト キビシカッタ。 ソー キビシカッタ。  
まことに きびし かに だ。 んん きびし かに だ。

B アタシラーノ トキ アタシオ サカエ<sup>③</sup>デ キョネンマ<sup>②</sup>デ ヨネン  
あに した らぬ と き あたしを 境 で 去 幸 まで 四年

イテ カマント エー モンガ アタシオ サカエ<sup>③</sup>デ ロクネン  
行っ て かわい といふ 者が あたしを 境 で 六年

= ナッタ。(A ソー ソー ソー。)(C アー ソーカ。) ロクネン = ナッ  
に なつた。(A そう そう そう。)(ああ そう。②) 六年 に なつ

テ アタシラーノ ロクネン イテ (C ソー ソー。②) ヘーカラ マー  
て あたしは 六年 行っ て (C んん んん。) それから まあ

ジゴト<sup>①</sup>ガ コトニ ナランキニ ロクネン イテ マタ アノ ジュ  
仕事。 仕事に ならないから 六年 行っ て 正に あの 十

一 ロクネン イカン。 ゴネン イテネー。(C ソー。②) ジューサン  
×× ×× ×× ×× 六年 行かない。 五年 行っ て ねえ。(C んん。) 十 三

ノ トキニ アノ オカーノ サトエネー イトコノ ニョーボニ  
の ときに あめ かあさんの 里へねえ いとこの 女 房 に  
イケ イケ (C ンーン。) ヤラレテ イヤンデ タマラザッ タ  
行け 行け (C んんん。) やられテ いやデ たまらなかつた  
ケンド オカーンガ ナクヨーニ ユーロー。セカラ オカーンガ  
けれど かあさんが 泣くように言うだろう。それから かあさんが

ムンゴイヨーニ オモテ イタ。 ナニオモワズニ イタワヨ。  
むごいように 思って 行った。深くも考えずに 行ったわよ。

(C ン。) イタケンド ミョートノゴトワ センドウ クンヂ  
(C ん。) 行ったけれど 夫 姉の 手 取りは しないままだ

マッ タ。(C アー。) (笑) ジューサンバーン ぢ モノノー。  
った。(C ああ。) ナ ミ くらい だ ものねえ。

カズエノ。

教え年の。

C アテンクノ キョーニダイワ オンナバツ カリ ロクニン ぢ ッ タ  
わたしとこの しょうだいけ 女 ば かり 六 人 だつ たに

キニノー。(B ンーン。) ビンボノ ナカンデ オンナバツ カリ  
かあねえ。(B んんん。) 貧乏の 中 で 女 ば かり

ロクニン ぢ ッ タキニ サー オケネーヤンラーン ガン ガッ コ  
六 人 だつ たから さあ 大きい 姉 さん たらば 学校

ーエ イクチャネー アノ シタノ シタノ ハシノ コンドモオ  
へ 行くめにはねえ あの ~~XXXX~~ 下 の ~~XXXX~~ 下 の ~~XXXX~~ 端 の こどもと

オーテン ガッ コーエ イタトウゼ。(B ンーン。) ン  
負って 学校へ 行ったんだつて。(B んんん。) んん

オーテン ガッ コーエ イタトウ ガッ コーエ。  
負って 学校へ 行ったとか 学校へ。



B アテモ モンドッテ キテ セカラ マタ シンゴトンガ ユトニ  
 わたしも もどって 来て それから また 仕事ば 仕事に  
 ナランキン ガッコエ イカニ イカン ユーテン ガッコエ  
 なるまいから 学校へ 行かぬば いけないと 言て 学校  
 エ イタンガノ。 (C ン ン。) イタトコロニガ ミンナ  
 へ 行つたが ぬえ。 (C くん くん。) 行つたところが みんな  
 ー セイトンガ ヨメサンガン ガッコエ キタ ユーテ ソレ  
 生徒の 嫁さんが 学校へ 来たと言て それ  
 ンガ イヤンデ タマラインデ (C アー。) モー ケンド  
 ば いやで たまになくて (C あああ。) もう けれど  
 ロクネンワ マー ソトニ キョーシタ。 (C ン。) ソトニ  
 六年は まあ 卒業した。 (C くん。) 卒業  
 ンキョーシテ へーカラ ナニヨシ だキニ シラキンダニエ  
 業して それから なんだあ すぐに 白木谷へ  
 キタ。  
 来た。

注記

- ① /osieru/ に当たるものに [osuetu] のある。7  
 年以上の土佐人が頻用する。
- ② 'しまいまで' の気持であらう。
- ③ サカエ は、個人の語彙的現象であらう。

## 7. 迷信習俗

話し手

(略号) (氏名) (性) (生 年)

A 田島正実 男 明治29年生れ

B 高橋秀子 女 明治31年生れ

C 森田多賀恵 女 大正4年生れ

A メイシントゥーテ トマリ ホトケバーサン我<sup>①</sup> ユーヨーナ  
 迷信と言つて つまり ほとけばあさんだと 言うような  
 コトオ ナ=カヨ キーテ ホトケバーエ キキ= イタ コト  
 ことと なんだね 聞いて ほとけばあへ 聞きに行つたこと  
 が アル ガカヨ。  
 ばあ) のかね。

B アル。(A アルカヨ。)(笑) アンマリ ハヨ= シ ジン  
 ある。(A あるかね。) あんまり 早く 主人  
 ト ハナレタキ= ホルヤ。(A ン=。) シ ジント ハナレ  
 と 離れたから ほろ。(A んん。) 主人と 離れ  
 コンドモンが シ ジンガ ミテテカラ<sup>②</sup> =シ ーク=チブリ=  
 こどもが 主人が なくなつてから 二十九日ぶりに  
 オヤンヅノ コトバーッカシ イーヨッテ シンケイヤミ= ナ  
 おやどの ことばかり 言つていて 神経やみに な  
 タキ=ノー。ホンデ =シ ーク=チブリ= コンドモンが シ  
 ないかえ。それで 二十九日ぶりに こどもが 死

ソドゥロー。ソレデマー ホトケバンバエ イテ トー 奔  
んだらう。それで まあ ぼとけぼとへ 行って 聞いてや  
ロト オモータ イタゼヨ。  
らうと 思って 行ったのだ。

A ホトケバー = キータ コトゾガ アルカヨ。  
ぼとけぼとに 聞いた ことバ あるかぬ。

B イテ キータ。(A ンー。) キータラネー。オヤンゲンガ ン デ  
行って 聞いた。(A んん。) 聞いたらぬえ。おやじの 出  
テ キテネー オヤンゲンガ オマエモ ウルサイケンド コンド  
で 来てぬえ おやじの お前も つらいけれど こど  
モオ ステナヨ コンドモオ セワシテ クレヨト ユー コトオ  
もと 捨てるのだ こどもと 世話してくれよと 言う ことと  
ユータ。(A ンー。) ユータ = トゥ イテ アノ ゴケニ  
言った。(A んん。) 言ったに 就いて あの 後家に  
ナッテカラ コンドモオ トゥ レテ キテモ カマンケニ コマイ  
ならてから こどもと つれて 来ても かまわぬから 小さい  
ンガー トゥ レテ キテ クレンカト ユー モンガ アッタ。  
ぬと つれて 来て くないかと言 者が あった。

アッタケンド コマインガー トゥ レテ フトインガー フテ  
あったけれど 小さいのと つれて 大きいのと 捨て  
て イテ ヨメイリンガ ン デキルカヨ。(C ソーヨノー。) ミ  
ておいて 嫁入りバ できるかぬ。(C そうよぬえ。) み  
ンナー トゥ レテ イク ワケニモ イカナ。カズン ぢゃ ーッタク  
んな つれて 行く わけにも くない。数多くだろ たか  
ニ。(C ソーヨノー。) ホンデネー ヨメイリモ エー セン  
ら。(C そうよぬえ。) それでぬえ 嫁入りも することができ

ドゥ トゥ ニ マー コノ ドモオノ ドーゾコーゾ フトライターガ。  
ないまゝに まあ こどもと どうにかこうにか生長させた。

A ケンド ソリヤ ホトケバーンガ ユー コトノ ガ マコトノ ぢや  
けれど それは ほとけはあが 言う こと が 真実だ  
ート オモータカヨ オバーモ。  
と 思ったかぬ ばあさんも。

B ジッサイ マコトノ コトノ ガ アツタノー。  
實際 真実の こと が あつたぬえ。

\*

A アテイラーノガ コノドモノ オリニャ ノー (B ノー。) 子  
わたしたちが こどもの 折にはぬえ (B ぬん。) 少  
クト ワルカ タラネー タユーサンニゴキトーオ シテモ  
し 具合が悪くたぬえ 神官さんに 御祈禱と しても  
ラーニャ イカント (B アー。) コー ユーテネー (B ノー。) 少  
らぬば いけないと (B ああ。) こう 言つてぬえ (B ぬん。)

ソレン デ アノー ツメザカ<sup>③</sup> ヤマモトト ユー タユーサ  
それ で あめう 詰 坂に 山本と 言う 神官さ  
ンガ アツタワヨ。(B ノー。) ソコエ ツカイニ ヤラレテ  
んば あつたぬえ。(B そう。) そこへ 使いに やられて  
ネー。(B ノー。) タノミニ イタワヨ。(B ノー。) イタラ  
ぬえ。(B ぬん。) 頼みに 行つたぬえ。(B ぬん。) 行つたら

マー ソノ ビョーニシノー ナンノ トシノ イクツオ ユー  
まあ その 病人の 何の 年の いくつと 言つ  
たら タユーサンガ カミサマエ ムカッテ イッテカラ シ  
たら 神官さんが 神様へ 向つて いたつたら

バラクン グジャ ヲグジャ ユーテ イノリヨツテ (B ソー。  
 ばらく ぐじゃ ぐじゃと 言ッテ 祈ッテイテ (B んん。  
 ) ソレカラ ゴット ユー モノオ クレタ。(B ソー ソー。  
 ) それから 御符と 言ッ ものを くれた。(B そう そう。  
 ) ゴッオ オバーモ シ 左 - カヨ。(B シ シュ - シ  
 ) 御符と ばあさんも 知ッテいらぬ。(B 知ッてる 知  
 ッシュ - ) サカキオ ユー (B ソー。) キッ シ イテ ソレ  
 ッてる。) 榊 と こう (B んん。) 切ッておいて それ  
 - スミッデ ナマ - ロ マッ クロー = (B ソー。) カイテ  
 へ 運ッて 何やら 運ッに (B そう。) 書ッて  
 クレテ (B ソー。) コレオ トテ インデ ノマセト ユー  
 くれテ (B そう。) これと 取ッて 帰ッて 飲ッせと 言ッ  
 コトッデネー。(B アローテ。) コレオ アローテ キテカラ。  
 ことぬえ。(B 洗ッて。) これと 洗ッて 来ッて。

C ミッ ドッエ ウカイ シ イテ。  
 水 へ 浮ッておいて。

A シ カエ ソノ スミオ アライ コカイ シ イテ (C ソーヨ  
 盃 へ その 運ッと 洗ッ 落ッておいて (C そうよ  
 ソーヨ。) ソレオ ノマシタネー。(B アー ソー ソー。)   
 そうよ。) それと 飲ッせたぬえ。(B ああ そう そう。)   
 タユーサンノ オカン ゲサマンデ ビョーキッガ ナオリマシタ  
 神宮さんの おかげさまで 病 氣 が なおりましと  
 ユーテ イーヨッ タン ガノー。(B イーヨッタネー。)  
 言ッて 言ッていたぬえ。(B 言ッていたぬえ。)

スミノ シルオ ノマシヨッ タネー。  
墨の 汁を 飲ませていたねえ。

B ノマシヨッ タ。ノマシヨッ タ。  
飲ませていた。飲ませていた。

C ソレカラ ビョーキニ ナッタラ アアテイラー コンドモノ  
それから 病気に なったら ああに<sup>xxxx</sup>あに<sup>xxxx</sup>など こどもの  
トキヤ ヨー オカーキ シカラ ヤリヨッタンガ アー ビョー  
ときは よく ああらんから やっていたの ああ 病  
キニ ナッテ ネットノ デモン デタラ アノ ナニヨヨ カミノ  
気になっテ 熱 でも 出たら あめ なんだ 髪の毛  
ケノ コノ ウシロノ カミノケオ トッテ セーカラ ツメオ  
毛の この うしろの 髪の毛の色と 違って それから 爪と  
ゼンブ ハンシエ アノー キッテ ソレデ ワラスボオ イツ  
全部 半紙へ あのを 切っテ それで わら 巻 五  
ツカ イクツカ コシラエテ ソイ ソリョ スポ ス<sup>④</sup> アノ コ  
つか いくつか こしらえて そい それと 巻 す あのこと  
ー オー スポニ シテカラ ヨトウ トウジエ オイテ ウシロ  
う おう 巻に してから 四つ 辻へ 置いて うしろと  
ミタラ イカン ユーテ (B ンー。) ウシロ ミンドウ トウ  
見たら いけないと言っテ (B んん。) うしろと 見ないで  
モンドラニャ イカン ユーテ (B ンー。) ソイテ ソンナ  
もどきなれば いけないと言っテ (B んん。) そして そんな  
コトオ シタリ シタンガネー。(B ンー。) ソレカラ ヨソ  
ことと したり したのねえ。(B んん。) それから 上を  
エン デテ イケッテン グアインガ ワルー ナッ タラ アノ  
へ 出て い っテ 具合 が 悪く なったら あめ

ホラ ミノエ<sup>⑤</sup> ミノ ユー モンガ アタヤイカ。 (B ソー  
 ほら 黄へ 黄という ものが あたに(や)ない。 (B そう  
 ソー。) サビル モンヨ。 (B ソー ソーヨ。) アノ サビル  
 そう。) 淘汰選別お もめさ。 (B んん そうよ。) あめ 淘汰選別お  
 モンエ ホーテオ イレヲ イテネー ソレンデ アノー ナニ  
 もめへ 鹿 丁を 入れておいてねえ それで あめう んん  
 ヤ ウチラカラ (B サビトッ ロ。) サビテ アオイデ ク  
 だ 内部から (B 淘汰選別(たらう)淘汰選別(て)扇(い)でく  
 レタ。ホラ。 (B ソー ソー。) (A サビタカ。) ソー サビッ  
 れた。ほら。 (B そう そう。) (A 淘汰(た)め) んん 淘汰選  
 別(だ)して。 (B んん。) そう いう ことと したのよ。

B ミチゾ デ ワルー ナッ タラ ナンゾン ガ ツイチュ ル ユーテ  
 道 で 悪く なったら 何か が ついていると 言ッテ  
 (A ソー ソー ソー。)  
 (A そう そう そう。)

C チャント<sup>⑥</sup> ソンナ コト ユータ。  
 ちゃんと そんな ことと 言ッた。

B ミチゾ デ サビタラ アクマンガン デテ イク ユーテネー。  
 道 で 淘汰(た)ら 悪魔(あくま)が 出て 行くと 言ッてねえ。  
 (C ソーヨ ソーヨ。)  
 (C そうよ そうよ。)

A セーカラ コンドモノ ジバンニネー ウナインドシノ コンガン  
 それから こどもめ 時分にねえ おない幸の 子(こ)が  
 ドコカン デ シンダト ユー コト キータラネー アノー ハ  
 どこかで 死んだと 言う ことと 消(く)いたらねえ あめう 釜

ヲ ガマノ フタト ナベノ フタオ オカーンガ モッテ キテネ  
 の ふたと 鍋の ふたを おあさんが 持って きてね  
 ー。(B ソー。)(C ソー。)  
 え。(B んん。)(C んん。) よい ことと 聞け よい こと  
 ト キケ ユーテ ミミオ フサイン ダワヨ。(B ソー ソー。  
 とと 聞けと言っ て 耳 と ふさいだ よ。(B そう そう。  
 ) (C アー ソーカ ソーカ。) ソ ソレモ シ 左 - カヨ。  
 ) (C ああ そうか そうか。) <sup>xxx</sup>ソ <sup>xxxxxx</sup>それも 知っているののね。  
 )  
 )

B シ 左 ー, ソリャ オマン チカクモ ヤッ タ。(C アー。)  
 知ってる。 それはあなたに 最近でも やった。(C ああ。)  
 コナインダネー。(A ソー。)トラキサンガ シンドロ ロンガヨ。(Aソ  
 こないだねえ。(A んん。) 虎 喜さんの 死んだんだらうで。(A ん  
 ソー。) うちノ キンジョ ノ。(A ソー。)トラキサンガ  
 んん。) うらの 近所 ぬ。(A んん。) 虎 喜さんの  
 シンデ サー ハカホリ = イテ モンドゥ テカラン 釜。ソレ  
 死んで さま 墓 掘りに 行っ て も どっ てから だ、それ  
 マンデ トモモ ヨシオモ ホリャ ハカホリ = イテ モンドゥ  
 まで 友も 義 雄も けら 墓 掘りに 行っ て も どっ  
 テ キテ アテクンデ マー イッパイ マー ヤレト ユー リ  
 て 来て わたしとこで まあ 一杯 まあ やれと 言う 理  
 クトッデ (A ソー。) オーケナ コヤー セラレンゼヨ。(A  
 屋 下 (A んん。) 大きな 声は してはいけぬ。(A  
 ソー。) キンジョ ヲ ぢゃ ーキ。(A ソー。) イッパイ ノメ  
 んん。) 近所 だ から。(A んん。) 一杯 飲めと



ユーテ オトノドイノガ ノミユー トコロヨ。(A ャー。)/  
 言ッテ ショウダイハ 飲んではいところよ。(A くん。)/ 飲  
 ミユー トコロノガ オマン ナニヨヨ アテンガ イママン デン  
 んでいるところハ あなたに あれだけ あなたが 今ヲ デ  
 マイマーリヨッタノガ ショント カシカマッ 程 ッタトコロノ  
 歩きまわっていたためハ しっかりと 端坐していたところ  
 ガ タテレナヨ。(笑) アシンガ ホントー ヲーホーノガ  
 ハ 立てれないよ。 足ハ ほんとに 両方ハ  
 コー (A ャー。)/ スンヂー ヒーテ (A ャー。)/ ドシタ  
 コウ (A くん。)/ 筋ヲ らびえて (A くん。)/ どうし  
 テ。イヤ インママン デ マイマーリヨッタニ オマン ナニゼ  
 ても。いや 今ヲ デ 歩きまわっていたのに あなたに あれだけ  
 ヲン ドーイタチ タテレンガ コリャン ドーユー モンヂ  
 ね どうしても 立てれないがこれハ どういう ものだら  
 ロ ユーたら トモンガ アンナ ヒョーゲナ コンヂーキ  
 うと言ったら 友ハ あんな ひょうきんな 子だから  
 ホラ ソルヤ イカン。オカー トラキサノガ ドーモ ツレニ  
 しまし それハ いけない。おあさん 虎喜さんの どうも つれに  
 キューゾ (笑) ユーテ ユートラ ロ。(C アー アー。)/  
 歩いているぞと 言ッテ 言ったらう。(C ああ ああ。)/  
 ショント アター コマッ テネー (C アー。)/ ショウ タラ  
 折悪しく わたしは 困ッてねえ (C ああ。)/ していたら  
 ヲシオンガ ユーたら ナンヂー ニーヨ オカー シンケイヤミ  
 義雄ハ 言ったら なんだ 兄さん おあさんは神経やみ  
 ンヂーキニ ミミフサノギオ オカーノガ シタラ エート ユー  
 だから 耳ふさぎと おあさんが したら さいと いう

コトオ イーヨッタンガ ミミフサヅギンデモ シキ オカ ユー  
ことを 言っていたが 耳ふさぎ でも してやろうかと 言っ  
た。ヨシオ ハヨー シトーセ シトーセ (C アー。) ミミフ  
た。義雄 早く しておくれ しておくれ (C ああ。) 耳ふ  
サヅギ ユータ。(C アー。) アタシヅガ ユータ。(C アー。  
さぎ)と言った。(C ああ。) あたしが 言った。(C ああ。

) ユータラ オマン シラン モンキ一キニ ナベノ フタ  
) 言ったら あなた 知らないものだから 鍋の ふた

バツカリ モンテ キテ ショー ショート ユーキニ ソリ  
ばかり 持って 来て しよう しようと言っから それは

イカンゼヨ ミミフサヅギト ユー モノワ 各 ビンノ フタト  
いけないよ 耳ふさぎと いう ものは しゃびんの ふたと

ナベノ フタトデ スル モンゼヨ。(A ン。) セカラ  
鍋の ふたとで する ものだよ。(A ん。) それから

ドー ユータラ エーゾノート ユーキニ ビョーニンガ ユーチ  
どう 言ったら さいのかねと いうから 病人が 言っや

ラニャ イカン。(笑) ナンヂ シチリ ケツカイ<sup>①</sup> ヨソノ  
なければ いけない。 なんだ 七里 結界 さいその

コト ヨソノ コト モー コンナ コトワ イヤ イヤト ユー  
こと よその こと もう こんな ことは いや いやと 言っ

テ コー ミミエ 各 ビンノ フタト ナベノ フタトデ コ  
マ こう 耳へ しゃびんの ふたと 鍋の ふたとで こ

ー シタラ ソレンデ エーワヨト ユーテ アテンガ ユータ。  
うしたら それで いいわよと 言っ あたしが 言っ た。

(C アー。) ユータトコロンガ ソリョ シテクレタ。(C アー。  
(C ああ。) 言っ たところから それと してくれた。(C ああ。

) マッ コトノ一。(A キータカ。) 志 ヲト ヤスミヨツ タラ  
 ) ほんといにねえ。(A 利いたか。) 少し 休んでいたら  
 ネー。(C タテレタカ。) タテレタ。(C アー。) イヤ ナ  
 ねえ。(C 立たれたか。) 立たれた。(C ああ。) いや 道  
 オツタ。(笑)(C ナオツタ。) ホンデ オカーワ シンケイヤミンヂ  
 った。(C 直った。) それで かあさんは 神経病みだ。  
 ヤ。(笑) ソンナ コト オモウキニ イカン ユーテネー。(  
 そんな ことを 思うから いけないと言てねえ。(  
 C アー。) ムスコノガ ユワーヨ。(A ヨー ヤツタ。)  
 C ああ。) 息子が 言うんだよ。(A よく やった。)  
 マエワ ヤリヨツ タノ ガノー。  
 前は やっていたのねえ。

A アノー ハンガマノ ハンガマノ フタト ナベノ フタオ (B  
 あゆう 釜 の 釜 の ふた と なべの ふたを (B  
 ンー。) モツ テ キテ (B ンー。) ミーヨツタワヨ。(C ツー  
 んん。) 持って 来て (B んん。) 見て いたよ。(C せい  
 カヨ。)  
 いね。)

B トラキカンワ アテト ウナイノ ドシヨヨ。(C アー ソーカ ソ  
 虎喜さんは わたし おない 幸 だよ。(C ああ そうか せ  
 ーか)ソレノ ガ オマン ホント キンヅノ デ シンダ モン科  
 うの) それの あなた すぐ 近所 で 死んだ ものだ  
 キニ (C アー。ー。) アテイモ ビツ クリ シタ。  
 いら (C ああ ああ。) わたしも びつ くり した。

C セカラ コノドモノ デモ ワルー ナツ タラネー ツジウルト  
 それから こども かも 容態が悪く なつたらねえ つじうると  
 ××××××  
 つじうると

ユー モソ ツジウリト ユー モンガ アッ タワヨ。(B ソー  
 いう もの つじうりと いう ものが あつ たわよ。(B そう  
 ソー。) ホラ。(B ショッ タ。) ソノ ツジウリト ユー モ  
 そう。) ほら。(B トていた,) その つじうりと いう も  
 ノワ ソノ ビョーニンノー キンダノ ヒトカ ヘーカラ ウ  
 めは その 病 人の 近所の 人の それから う  
 ちノ シンセキノ モノカンガ イテヤネー。(B ソー。) ホ  
 らの 親せきの 者が 居てたねえ。(B んん。) ヤ  
 ンデ ツジエ タテッテ (B ソー。) ソレハ ヒットリン 我  
 れで 近へ 立って (B んん。) それは 一人では  
 ノーテ<sup>⑨</sup> ニサンニンガ イチ ッタワヨ。ニサンニンガ イテ  
 なくて ニ三人の 行つてたわよ。ニ三人の 行つて  
 タテリヨッテ ホンデ ソノ ツジオ トール サンニンメノ ヒ  
 立つていて それで その 近と 通る 三人目の 人  
 トニ ソノ コドモオ コーテ モラウト モローテ モラウト  
 に その こどもと 買つて もらうと もらつて もらうと  
 ユー。(B ソー ソー。) ソレワ ヤッパリ アー フサーン  
 いう。(B そう そう。) それは やっぱり ああ 相応しい  
 ト イマノ イエワ フサーンキニ ホンデ アノ オヤオ カ  
 と 今の 家は 相応しいから それで あのう 親を 変  
 エルト ユー イミアイン デネー (B ソー ソー。) サンニン  
 えるという 意味合でねえ (B そう そう。) 三人  
 メノ ヒトニ コーテ モローテ (B コーテ モローテ) ソ  
 目の 人に 買つて もらつて (B 買つて もらつて) そ  
 イタラネー サンニンノ ヒトモー サンニンメノ ヒトモ アノ  
 したるねえ 三人の 人も 三人目の 人も あの

- ソレエ アタタラネー アノ コンドラ ソノ ビョーニ  
 う それへ 当たらぬえ あの 今度は その 病人  
 エネー (B ヌー。) キセル ハンダン ギンデモ ナンデモ カ  
 へぬえ (B んん。) 着せる 肌 着 下も 何でも の  
 マン。 (B ソー ソー。) ハンダン ギンデモ キモノデモ (カ  
 まわぬい。(B そう そう。) 肌 着 下も 着物でも (A  
 エー エー。) ナンデモ カマン ソレヨネー アラタニ ヌーテ  
 A ええ ええ。) 何でも かまわぬい。 それとぬえ 新に 縫て  
 ソノ ビョーニニ キセヨタワネ。 (B ソー ソー。) イ  
 その 病人に 着せていたわぬ。(B そう そう。) は  
 ー。  
 い。

A セカラ ソノ ソノ ヒトノ ガ ナオ ツケニヤ イカガタ。  
 それいふ その その 人 が 名を つけぬば いけぬた。  
 (C ソーヨ ソーヨ。)  
 (C そうじ そうじ。 )

B ソノ ヒトノ ガ ナオ カエタワネー。  
 その 人 が 名を 変えたわぬえ。

C イー イー ソノ ヒトノ ガ ナオ カエニヤ イカガタ。  
 いい いい その 人 が 名を 変えなければいけぬた。

A アラタニ ナオ トツケニヤ イカガタ。(B ヌー。)  
 新に 名を つけなければいけぬた。(B んん。 )

C ソレニテ ナオツテネー (B ヌー。) ソインデ ナニヨ オ<sup>(D)</sup>  
 それで なおつてぬえ (B んん。) それで あれだ お  
 モー ソレカラ ネンニ モー オショーニガトツカ アー クレ  
 もう それいふ 幸に もう お正月か ああ 暮

カニワ カナラズ オヤノ モトエ (B ソー ソー。) ネー  
 かにば かならず 親の もとへ (B そう そう。) ねえ  
 ナニカ アノー モッテ (B ンー ンー。) ネー イキヨッタ  
 何か あのう 持って (B んん んん。) ねえ 行っていた  
 ワケンぢゃ オ。  
 わけだらう。

B ソー ソー。 アッパ - シヤ = チ<sup>(11)</sup> シヤ = チヤ ナイ ハツサク<sup>(12)</sup>  
 そう そう。 あれば 社 日 社 日では ない ハ 朔  
 ノ 舞。 ハツサクカ シラソ = <sup>(13)</sup> ン トノ ぢュ - モノ コシラ  
 だ。 ハ 朔かしらに 旦那と 重 物をこしら  
 エテネー モッテ イキヨッタ。  
 えてねえ 持って 行っていたんだって。

C モッテ イキヨッタ。  
 持って 行っていた。

A ソーヨ モッテ イキヨッタワヨ。  
 そうよ 持って 行っていたので。

B モッテ イキヨッタネー。  
 持って 行っていたねえ。

C モッテ イキヨッタ。  
 持って 行っていた。

A アタシクワネー (C エー。) アノー タケハル シラキダニ  
 わたしとこはねえ (C ええ。) あのう 武春 白木谷  
 エ ヨーシニ イチニ ッタ タケハルガネー (B アー。) ア  
 へ 養子に 行っていた 武春 がねえ (B ああ。) あ  
 ノー オッテネー (B ソー。) ケイヤクオヤンガ アノ ヨー  
 のう 居てねえ (B んん。) 契約 親 が あの 用

マンガノ オヤンヂサン (B アー。)(C アー。) ヨーマンクヤ  
馬の おやじさん (B ああ。)(C ああ。) 用馬とこへは

ビッ シリ ソノ ハッサクが キタラ (B ンーン。) オツ  
はっさくが その ハ朔 が 来た (B んんん。) おつ  
カイモノオ ショッタ。  
かいものをしていた。

C オツカイモノ シテモ イキョッタ。  
おつかいものをしても 行ってた。

B ハッサクト エー モナ ドー エー モンデ ハッサクニ ショ  
ハ朔と いう ものは どう いう もので ハ朔に して  
ッ ト ロート オモウ。 ハッサクが 来た  
いたろうと 思う。 ハ朔 だっ た

A ソー ソー。ハッサクニ モッテ イテネー。  
そう いう。ハ朔に 持って 行ってねえ。

B ハッサクニ ナント ショッタ。  
ハ朔に きらんと していた。

A ソー エー コトオ ショッタネー。(B ンーン。) ケンド マ  
そう いう ことを していたねえ。(B んん。) けれど ま  
ー ソノ ミミフサゲン が キキ ナニヨネー エー<sup>(14)</sup> サカキノ  
あ その 耳ふさぎ が 聞き なんだねえ ええ 神の  
キノ スミが キクヨーンが ッタキニネー。(B ソーヨ  
木の 炭 が 利くよう だっ たからねえ。(B そうよ  
ソーヨ。)(笑) トーシフ。  
そうよ。)

B ソリャ マコト キキョッタキニ (笑) ソレガ。 マコト ナオ  
それは ほんとに 利いていたから それが。 真実 なら

ッテ オレイ = イキヨッタ。(笑)  
ッテ 御礼に 行っていた。

C キキヨッタ。ソノ ジブンワ キキヨッタ。(B イー。)  
利いていた。その 時分は 利いていた。(B はい。)

A マンダ アノー ヒャ クショ -ワネーン ドーカト ユータラ ノ  
まだ あめう 百姓 はねえ どうかと 言たら 苗  
-トコノ カシラヤ タユ-サンカラ モロータ オフンダオ タ  
床の 頭へは 神宮さんから もらた 御札を 立  
テテネー (B ソー ソー。) ソレカラ (B ミナクチサマオ。<sup>15</sup>)  
テテねえ (B そう そう。) それから (B 水口 様を。

) ターゴ ヲトイニャ ムシヨケン 哉 ユーテ ナン哉 ノー  
) 田 毎 には 虫よけだと 言って なんだねえ

サン哉 クバーノ タケノ ウエー ソノ オイノ 物 シテ  
三尺 くらいぬ 竹の 上へ その 御祈りを して

モロータ カミオ ビシビシ タテテネー (B ソー ソー ソー  
もらた 紙と びっしり 立ててねえ (B そう そう そう  
ソー。) ムシヨケンネー。トコロガ ヒ=クナ コトニャ  
そう。) 虫よけのねえ。ところが 皮肉な ことには

ソレワ ヨー キテ トンボンガ トマリヨッ タンガノー。ムシ  
それは よく 来て とんぼが とまっていたがねえ。虫

ヨケー トンボンガ キテ トマルキ メッソ ムシヨケンニワ ナ  
いけへ とんぼが 来て とまるから あまり 虫よけには な

ラザッ トッロケンドネー。(笑) ソー ユー コトオ ヤリヨッ  
らなあ たらうけれどねえ。 そう いう ことを やっ っ

た。

た。



B マエワ ヤリヨッタ。  
前は 作っていた。

A ヤリヨッタキニノーゾー。ホンデ マー マエワ ソノ コメ  
作っていたからねえんん。それで まあ 前は その 米  
ノガ スクナカッタ モンヂャ キネー。ホンデ コメ クー モ  
の 少なから た ものだ からねえ。それで 米 食うも  
ノト ユー モノエ ウント ソノ ミンナーンガ アノー  
の という ものへ うんと その みんなが あめう

B ホネ イレテ トウクリヨッタノー。  
骨 入れて つくっていたねえ。

A ソー ソー トウクリヨッタ モンヂャ キニネー。ホンデ マー  
そう そう つくっていた ものだ からねえ。それで まあ  
サクン ガミサマナンカモ ホリャ ナニヨネン ダイジニ シタ  
作 神 様 なども ほか なんだね 大事にした  
モノヨネ。  
もめだね。

B ダイジニ シタ。  
大事にした。

A シニチサマノ ぢナ ハルノ シニチサマ ユーテネー。  
社日様 だつて 春の 社日様と 言ってねえ。

B アキノ シニチチ ハルノ シニチワ アノー タエ タトウ  
秋の 社日と言つたつて 春の 社日は あめう 田へ 立つと  
ユーテノー。  
言つてねえ。

A ソー ソー タノ (B セーカラ。) タオ ヨー タノミマスト  
そう そう 田の (B それい。) 田を よく 頼みますと

ユ一テ。  
言ッテ。

B ソー ソー ソー ソー アキノ アキノ シニチワ ウチエ  
ソウ ソウ ソウ ソウ 秋の 秋の 社日は うらへ  
カエッテ クル (A ソー。) ユ一テ。  
帰ッテ 来ると (A ソウ。) 言ッテ。

A オカノゲサマノデ ホーサクオ ムカエマシタキニト ユ一テ ム  
おかげさまで 豊作と 迎えましたからと 言ッテ 迎  
カエルノガン 爺 ネー。 オハノギト ユ一 モノオ コシラエテ  
えの だ ねえ。 おかげと 言う ものを こしらえて  
ノー。 (B ソー ソー。) ソレオ ソナエテネー (B ソナエ  
ねえ。 (B ソウ ソウ。) それと 言ッてねえ (B 言ッて  
テ。) マトッリヨッタキニネー。 (B ソー ソー。) ソー。  
て。) 祭ッていたからねえ。 (B ソウ ソウ。) んん。

C モ<sup>XX</sup> アテイラーニ ナッテカラワ モー オサバイサマニ<sup>(16)</sup> ナッチ  
<sup>XX</sup> わたしたちに なッてかえら ほう おさばい様に なッて  
ヨッタキネー。 オサバイサマト ユ一テネー。 ホンデ ハルワ  
いたからねえ。 おさばい様と 言ッてねえ。 それで 春は  
ホラ アノー タンボオ ツケテ ノートコオ コシラエラー。  
ほら あめう たんぼと 漬けて 苗床を こしらえるさ。  
イチバン サキニ (B ソー ソー。) ノートコオ コシラエテ  
一番 先に (B んん んん。) 苗床を こしらえて  
ノートコエ モヨ マイタ トキニネー (B ソー。) ソノ  
苗床へ もみを まいた ときにねえ (B んん。) その  
アノー オサバイサマ ユ一テ アリヤ カノドゥラノ カノ  
う あめう おさばい様と 言ッて あれば かずらの か

ドゥラノ ワンヂャ ッタローカ。(B ヌノメカンドゥラ。) シ  
ずらの 轆 だつたらうか。(B ぬのぬのずら。) ん

ー カンドゥラノ ワ<sup>XXXX</sup>ワオ<sup>XXXX</sup> コシラエテネー。セカラ スギ  
ん の ずらの 轆 轆と こしえてねえ。それの 杉

オ タテヨッタロー。(A ッー ッー ッー。) スギオー  
と 立てていたねえ。(A そう そう そう。) 杉 と と

タテテネー (B ンー。) ソレン デ アノーン デ アノー ナ  
立ててねえ (B んん。) それで あめう て あめう な

ニヨ カキモチト ユー モンオ コシラエヨッタヨ。アノ オシ  
んだ のさしと という ものと こしえていたよ。あめ お正

ーガツニネー。(B ッー ッー。) ソノ カキモチオ イッショ  
ー 月にねえ。(B そう そう。) その のさしと 一升

マスエネー (B ンー。) イッパイ ヤク。アノ カキモチオ  
ますへねえ (B んん。) いっぱい 焼く。あめ のさしと

ヤイテネー ソノ イッショー マスエ モリョ ツケタヨーニ モ  
焼いてねえ それ 一升 ますへ 山 盛りみたいに 盛

ッテネー (B ンー。) オサバイサマエ オマイリニ イキヨッ  
ってねえ (B んん。) おさばい様へ おまいりに 行てい

タゼヨ。(B ンー。)

たのよ。(B んん。)

A ソノ モチンデ オモインダシタケンド オショ ーガトッニ ア  
その もろ で 思い だしたけれど お正月 月に わ

タシラー ウシオ ツコーテネー モチョ モローテ マーッタ  
たしなほど 牛と 使てねえ もろと もろて 廻った

コトノ ガ アルノガネー。

ことが あるかねえ。

B シラキンダニエ ウント ウシガ キタワヨ。(A ソーカヨ。  
白木谷へ うんと 牛 が 来たわよ。(A そうかね。

) マー ウント ナカヤマエ ヨケ ナカヤマ = ウ <sup>ウチノ</sup>  
) まあ うんと 牛 山へ たくさん 牛 山に <sup>ウ</sup> <sup>ウチノ</sup>

ウント フトイ イエ = ~~~~~。

うんと 大きい 家 に ~~~~~。

A ウシツカイワ ナンヂャーネー。 アノー ウシノ メンオ コシ  
牛 使いは なんだねえ。 あのう 牛の 面を こし

ラエテ カブッテ (B ソー。) ナカエ フカイ モンガ フター  
らえて かぶっ て (B くん。) 牛へ 若い 者が ニ

リ ハイッテ ウシニ ナッテ イテカラ。

人 入っ て 牛に ぶっ て 行っ てから

B マー コノ ウシ ナンボンデモ モチョ クー ユーテ  
まあ この 牛は いくら でも もらう 食うと 言っ て

A タオレタラ オイシヤ サンガ オッテカラ ミタラン ドーモ ソ  
倒れたら お医者さんが 居てから 診察したら どうも ヤ

ノ クワンガ ツキチョ ルキニ ナンゾ クワンチャラニヤ イカ  
の おなかの おいてぺこぺこだから 何か 食わせてやらなければいけ

ント ユー シンサトッオ シテ オイシヤ サンガ (C ソー。  
ん) と言っ て 診察を して お医者さんが (C くん。

) ナニガ クイタケヤ ート ユーテ ウシニ トータラ モ

) 何 が 食いたいのかと 言っ て 牛に たずねたら も

チンダ ート ユー。(笑)

ら だあ と 言っ て。

B モチョ ナンボンデモ クタ ユーテネー。(笑) (C アー。)

もらを いくら でも 食ったと 言っ てねえ。(C ああ。)

A モチオ モローテ (C アー。 ) (B ウシノガ) ソノ ウシヨー  
 もらて もらて (C ああ。 ) (B 牛 が) その 牛 用  
 ノ カンドゥラワ オーケナ クチョ アケタ カンドゥラン ぢ  
 の かずらは 大きな 口を あけた かずら だ  
 キニネー。 (C アー。 ) ソノ モチョ モロータ。 モロータ モ  
 のらねえ。 (C ああ。 ) その もらて もらた。 もらた も  
 ぢ ソノ ウシノ クチカラ コー サシコーンダラ ナカノ  
 らは その 牛 の 口から こい さしこんだら ぢの  
 ヤトウノガ ぢ ャント フツクロエ イレチョ ルヨーナノガヤキニ。  
 奴 の ぢんと じとこらへ 入れているようなのだから。  
 (C ッーヨ。 ) ソー ユー コト シテ (B アー。 ) モチ  
 (C ぢいじ。 ) ぢい じい こととして (B ああ。 ) もら  
 ョ モローテ マーッタ コトモ アル。 (C アー。 )  
 と もらて 廻つた ことも ある。 (C ああああ。 )

B イロイロ ヤッ ぢー。  
 いろいろ やつて いる。

## 注記

- ① ホトケバーサンは、霊媒の意。
- ② ミテル(なぐさ)は、人の場合にも器物の場合にも言う。「竹ボーキワ アリマスローカ。」「シャント ソレガ ミテヲリマ斯拉。」(店頭風景)
- ③ 地名。
- ④ スポの不完全な形。
- ⑤ ミノは、「箕(み)」の誤りに気づかずに言っているものと解される。
- ⑥ この場合のシャントは、「うん、そうだ」「たしかにそのとおりだ」といふような気持。
- ⑦ 「結界」は、仏語で区域を制限する意とある。シチリケツカイは、七里以内の区域の意であらう。
- ⑧ 音(おん)も意味もは、こりしない。
- ⑨ このテは[~de]に非常に近い。「デ」と表記した方がよからう。
- ⑩ ヨを形成する母音の残存。
- ⑪ 春分・秋分に一番近い戌の日。土の神を祭り、春は穀物の生育を祈り、秋は収穫と感謝する。
- ⑫ 陰暦8月1日。農家でその年の新しい穀物を取り入れて祝う。
- ⑬ ハツサクカシランニ と一ツクみに書くことも考えられる。
- ⑭ エー 感謝詞。
- ⑮ ミナクチサマは、「水口祭」に該当する。農事を始めるとき、苗代田の水口に木の枝などを挿し、焼酎を煮込んだものや神酒などを供える行事。
- ⑯ オサバイサマ 田のおせに祭る稲作の神。

8. 稲の不作

話し手

(略号) (氏名) (性) (生 年)

A 田島正実 男 明治29年生れ

B 高橋秀子 女 明治31年生れ

C 森田多賀恵 女 大正4年生れ

B マー イネンガ ムシニ クワレタ ユータラ  
まあ 稲 が 虫 に 食われたと言ったら

A ソーネー アレンガネー  
そうねえ あれがねえ

B スノドーシツチネー イネンガ ムシニ クワレタワ。  
螟 虫 だねえ 稲 が 虫 に 食われたのは。

A ショーワノニジューゴネンヂャ ッタト オモウンガネー。コ  
昭和の二十 五年だと思ふがねえ。こ  
レワシ ダイイモチンデネー。イモチビョーニガシ ダイハツセイ  
れは 大いもろでねえ。いもろ病 が 大発生  
ンデネー ホトンド ゼンメトッ ヤッタワネ。  
でねえ ほとんど 全 滅 だったね。

B ソー ソー (A エー。 ) イモチンデネー (A エー。 ) ユー  
そう そう (A ええ。 ) いもろでねえ (A ええ。 ) う  
ント ヤラレタ。  
んと やられた。

A ホトンド センメトッ デネー。(C ンー。) アタシラーモ  
 ほとんど 全滅 でねえ。(C くん。) わたしなども  
 ナンダンモネー ホトンド コメノ トレン タンボン ガン デ  
 何段もねえ ほとんど 米の 取れない たんぼが  
 キテネ。  
 きてね。

B イモチノ コン アノー ~~~~~。  
 いもちの 米ん あぬう ~~~~~。

A マエワ アノー イモチ イモチ ユーテンド マエワ シジレル<sup>①</sup>  
 前は あぬう いもち いもちと 言うけれど 前は 「しじれる」  
 ト ユーテネ。  
 と 言うてね。

C シジレルト イーヨッタ。マコト マッコト シジレル (B イ  
 「しじれる」と 言っていた。ほんと ほんとい 「しじれる」 (B 今  
 マリヤ。 ) イネンガ シジレタト イーヨッタ。 シジレテ シ  
 は 。) 稲 が 「しじれた」と 言っていた。 「しじれて」 し  
 モータト。(C ンー。) ソリャー ヒンドカッタデス。 ホ  
 またと。(C くん。) それは ひどかったです。ほ  
トンドノ ナンユクシ ゼンイキンガ ヤラシマシタワ。  
 とんどの 南 国 市 全 域 が や ら れ ま し た で。

B ~~~~~ シジレタト イーヨッタ。 モー ソー キタラ コンド  
 ~~~~~ 「しじれた」と 言っていた。 もう そう 来たら 今 度  
 カエリノ ホンガン デタチー イカザッタネー。  
 返りの 穂 が 出ても だめだったねえ。

A ソノ トーシワ セカラ タマランゼー。 ジランクノ タンヂャ  
 その 当時は それから たまらな。 自分ところの 田では



ナイ ヒトノクノ タオ カッチュートネー (B ソー。) カ  
 ない 他人のところの 田を 借りていとねえ (B はん。) 借  
 リチンガ<sup>ン</sup> ドー ナツタラー イツタンブ<sup>ン</sup> デ シヒョーカラ  
 貸 ば どうだと言え ば 一 反 歩 で 四 俵 かり  
 シヒョーハン (B ソー。) マンダ エー タンヂャーッ タラ  
 四 俵 半 (B はん。) まだ よい 田 だッ た<sup>ら</sup>  
<sup>ン</sup> ゴヒョー<sup>ン</sup> ギヌシエ オサメニャ イカザ<sup>ン</sup> タキ<sup>ニ</sup>ノー。  
 五 俵 半 地主へ 納めなければいけなかつたからねえ。

C コサクシチュー モナ ソーヤッタネー。ソレ<sup>ン</sup> デ (B ソー。  
 小作している 者は そうだつたねえ。それで (B はん。  
 ) ロッピョー トレタラ イツピョー<sup>ン</sup> グライシカ ジブンノ ク  
 ) 六 俵 取れたら 一 俵 ぐらいいい自分の食  
 イリョー<sup>ン</sup> ガ ナカッ タキ<sup>ニ</sup>ノー。(B ソー ソー。) ソレ<sup>ン</sup> デ  
 う食糧 ば 無<sup>い</sup>からねえ。(B そう そう。) それで  
 ソー ユー フサクニ ナツテ キタラネー モチロン ギヌシエ  
 そう いう 不作に なつて 来た<sup>ら</sup>ねえ 勿論 地主へ  
 タイシテモ モー ヤローチ コミヤ ナイ。(B ソー。) ネ  
 対しても もう やらうたつて 米は 無い。(B そう。) ね  
 ー。ジブンモ ヒトト<sup>ッ</sup>モ クー コミヤ ナイ。(B ソー。  
 え。自分も 少しも 食う 米は 無い。(B そう。  
 ) コー ユーヨーナ ジョーキョー<sup>ン</sup> ギャッタ。ネー。  
 ) こう いう ような 状 況 だつた。ねえ。

B アノ イモチワ タマラン。イモチンガ キタト ユータラ。  
 あの いも<sup>ら</sup>は たくさんない。いも<sup>ら</sup> ば 来た<sup>ら</sup>と 言<sup>つ</sup>た<sup>ら</sup>。

A ソレワ アノ ニ<sup>シ</sup><sup>ン</sup>ゴネンワ ジト<sup>ッ</sup>ニ ヒンドカッタワネ。  
 それは あの ニ十 五年は 實に ひどかつたね。

B ヒャクジョーワ アンナニ ムシニ ヤラレタリ イモチンガ キ  
 百 姫 は らんごに 虫 に やられたり いもろ の 来  
 タリ シタラ マツ コト マツ コト トウ クツ テモ ウルサイワネ  
 たり したら ほんごに 全 く つくつ ても 難 儀 だ ね  
 一、  
 え。

A マー ヒャクジョーノ ハナシニ ナツ タキニ チョット アテイ  
 主 姫 の 話 に 出 た から ちよっと わたし  
 ノガ ハナスケンドノー ジョサイ ソノ ナニエ ヘイネンサ  
 バ 話 す け れ だ ね え 実 際 その 何 へ 平 年 作  
 クオ ムカエテモ ソノ トー ジワ ホーサク ト ホーネント ユ  
 と 迎 えて も その 当 時 は 豊 作 と 豊 年 と 言  
 一 トシデ シチヒョーノヂャネー。(B ンー。) マンドウ  
 一 年 で 七 俵 だ ね え。(B んん。) ま ず  
 へいネンガ ロッピョー (B ンー。) チョット ヘタ ウッ  
 平 年 の 六 俵 (B んん。) ちよっと 下 年 と し  
 タラシ ゴヒョーシカ (B ンー。) タントー ナカッ タキノー  
 たり 五 俵 しか (B んん。) 反 当 無 だ っ た ら ね  
 。 ヴレンデン ゴヌシエ シヒョー ナイシ ゴヒョー ハロ  
 。 それ で 地 主 へ 四 俵 乃 置 五 俵 払  
 一 タラネー (B ンー。) コサクガ クー モノワ イッピ  
 たり ねえ (B んん。) 小 作 人 が 食 う 者 は 一 俵  
 ヨーカ ソコラカシカ ナカッタ。(B ンー。) ヘイネンサク  
 か そ こ ろ しか 無 だ っ た。(B せう。) 平 年 作

ゞ デ アッ テモヤネ。ゞ ダカラネー タキモトノネー アタジャー  
で あっ てもだね。 だからねえ 滝本のねえ わたしは

ヨソノ ブラックワ ヨソノ クミワ アマリ マ<sup>㊟</sup>クワシュー  
よその 部落<sup>x x x x</sup>は よその 組<sup>x x x x</sup>は あまり 良くわしく

ナイキ エワンケンド コノ アタシラーノ カミン グミノネー  
ないから 言わないけれど この わたしだけの よ 組のねえ

(<sup>B</sup> ンー。) ヒャクショ ーデネー (<sup>B</sup> ンー。) イチネンヂュ  
(<sup>B</sup> んん。) 百 姓 でねえ (<sup>B</sup> んん。) 一年 中

ー フチマエオ クイトッ ドク ヒャクショ ーガ ナカッ タ。  
扶持米を 食い つなぐ 百 姓 には 無かった。

フサク トージワ。

不 作 当 時 ね。

B ソー ジャ ロネー。フサク 我 ッタラ アル モンカ。  
そう だらうねえ。不 作 だっ たら ある ものか。

A フサク ト キタラ タイシタ コトワ ナイ。 ネ。 (<sup>B</sup> ンー。  
不 作 と 来 たら たいした ことば ない。 ね。 (<sup>B</sup> んん。  
) ダカラ マー ソノ トージ ワタシ ンガ ジャッカン アノー  
) だから まあ その 当時 わたしは 若 干 あのう  
タモ ヨケ トク クッ チョ ッタキニッ ドーニカ コーニカ ア  
田も たくさん つくって いたから どうにか こうにか あ  
ノ カゾク ンガ クイトッ ナン グン ダケノ コメオ モッチョ ッタ  
の 家族 には 食い つなぐ だけの 米を 持 っ て いた  
ンガネー。 (<sup>B</sup> ンー。) ソノ ナトッ ノ ハザカイキンガ キ  
ばねえ。 (<sup>B</sup> んん。) その 夏 の 臨 境 期 ば 来  
タラネー (<sup>B</sup> ンー。) キンショ ノ ヒト ンガ チクト シン  
たらねえ (<sup>B</sup> んん。) 近 所 の 人 には 寸 じ 新

マエノ が トレルマノ デ カシテ クレンカト ユーテネー。(B  
 米 の 取れら まで 貸して くないか)と 言っ てねえ。(B  
 ンー ンー。) ソー ユーヨーナ ジョーキョーノ ぢゃ ッタネ  
 んん んん。) そう いう ような 状 況 だっ たね  
 ー。(B ンー。) マエノ ホンデ ヒャクショーノ ヒトノ  
 え。(B んん。) 前 の それで 百 姓 の 人の  
 タンボオ カッテ ショル ヒャクショーワ ソレワ ミジメナ  
 田 圃を 借りて やていら 百 姓 は それに みじめな  
 ミジメナ モンぢゃ ッタワヨ。(B ンーノ ぢゃ ットッロ。)  
 みじめな もの だっ たのさ。(B そう だっ たらう。)

C ムカシワ コジ ント ビンボシタ ワケヨネー。  
 昔 は 随 分 貧 乏した わけよねえ。

B ビンボシタ。  
 貧 乏した。

C コジ ント ビンボシタ。  
 むごく 貧 乏した。

B ビンボシタ。  
 貧 乏した。

### 注記

- ① 稿などの生長をとめて、赤くなりさむ。
- ② 「土居」の短縮形。

III. 長崎県<sup>にしそのき</sup>西彼杵郡<sup>きんかい</sup>琴海町<sup>おとごうこぐち</sup>尾戸郷小口

収録・文字化担当者 愛宕八郎康隆

## A. 収録地点とその方言について

### 1. 地点名

ナガサキケン ニシノボクケン キンカイチマ オトゴウ コグチ  
長崎県 西彼杵郡 琴海町 尾戸郷 小口

### 2. 収録地点の概観

(位置) 西彼杵半島中部東岸に突出している尾戸半島突端に位置している。

(交通) 村岸の長浦(ナガラ)へ、日2便、倉吉丸が運行しているがすきない。ほかに、スクールボートが朝と夕方、長浦へ通っている。土地人は、自家用船(小型)を利用して長浦へ渡る。なお、陸路は、尾戸半島基部を遠廻りしなければ長浦へ行けず不便である。

(地勢) 三方、海に囲まれ、背後は小高い山地である。田地は乏しく、畑地もそれほど多くない。

(行政区画の変動)

藩政時代、尾戸郷の中の他の部落(名筆・琴海・中央など)は、大村藩家老兒玉氏に治められたが、小口部落のみは、藩主によって統治されていた。明治以降、長く、小口は、

西彼杵郡 長浦村 尾戸郷

に属していたが、その後、昭和44年の行政改革により、琴海町所属となった。ちなみに、琴海町は、旧長浦村と村松村の二村の合併によって成ったものである。

(戸数・人口)

小口部落の戸数は81戸、人口395人である。ちなみに琴海町の戸数2176戸、人口は8853人である。〈1976.6.1現在〉

(主な産業)

半農半漁形態の部落であるが、それも、大方は兼業形態である。例えば、専業農家は4戸にすぎず、また専業漁家も10戸程度である。農業では、米作のほか、主なものに、密柑や西瓜作りなどがあり、漁業では、立て網漁、海老網漁、真珠養殖などがある。

(宗教) 全戸、日蓮宗である。

### 3. 収録した方言の特色

#### ① 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

小口方言は、もとより、肥前方言に包括され、肥前方言の特徴を内具しているが、これを今少し微視的に見ると、小口方言は、方言区画的には、西彼杵方言(西彼杵半島域の方言、ちなみに、この方言は、例えば、島原半島方言や長崎半島方言、北松方言などと対立する)に属し、その中で、当方言(小口方言)は、<sup>外</sup>海方言(日本海側)に対する<sup>内</sup>海方言(大村湾西側)に所属する。ただ、小口は、大村湾西岸に突出している尾戸半島の突端にあり、大村を対岸(東方)に臨むことができるところにあり、すでに、2.収録地点の概観の項でもふれたように、古く、大村藩に属し、船での行き来もかなり盛んであったこともあり、いくばくかの大村方言とのかかわり合いを否むことはできない。これは、ひとり小口方言に限らず、大村湾西岸域の、例えば子々川方言(時津町)についても、土地の古老が、その点を指摘しているのは傾聴に値しよう。殊に小口は、<sup>マダベ</sup>近隣諸部落(旧部落名で言えば、又兵衛・松尾・<sup>ハツタ</sup>張岳・<sup>ナクシ</sup>名串)が大村藩家老、児玉氏の治めるところであったのに対して、小口部落のみは、藩主直轄の地であったと言われる。そのような差異が起ったのは、藩が、小口漁民(農民も船を持つ)の船の利用価値を認めてのことだったと言われている。小口と大村地方とのかかわりの深さを思わせる。

## ②音韻上の特色

[ モーラ表 ]

|    |    |    |    |    |     |     |     |      |     |
|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|------|-----|
| u  | o  | a  | e  | i  | ju  | jo  | ja  | (wo) | wa  |
| hu | ho | ha | he | hi | hju | hjo | hja |      |     |
| ku | ko | ka | ke | ki | kju | kjo | kja |      | kwa |
| gu | go | ga | ge | gi | gju | gjo | gja |      | gwa |
| su | so | sa | se | si | sju | sjo | sja |      |     |
| zu | zo | za | ze | zi | zju | zjo | zja |      |     |
| cu |    | ca | ce | ci | cju | cjo | cja |      |     |
|    | to | ta | te |    |     |     |     |      |     |
|    | do | da | de |    |     |     |     |      |     |
| nu | no | na | ne | ni | nju | njo | nja |      |     |
| ru | ro | ra | re | ri | rju | rjo | rja |      |     |
| pu | po | pa | pe | pi | pju | pjo | pja |      |     |
| bu | bo | ba | be | bi | bju | bjo | bja |      |     |
| mu | mo | ma | me | mi | mju | mjo | mja |      |     |
|    | N  |    | T  |    |     |     |     |      |     |

[ 音声的特徴 ]

上表に従って、順に説明する。

- /e/ に当るところに、老人中心に、[je], [j<sup>h</sup>e] (例えば [jentsji], [jentsji] わか家) があらわれるが、これは /e/ と解釈される。
- 「き」格助詞のところは、ふつう「バ」であるが、時として「ラ」 ([wo]) であることがある。か、これは恒常的に実現するものではない。(wo) としたゆえんである。
- wja, kwi は表示していないが、部分的に、[nagategawja:] (流れ川に), [nawja:tot:e] (なおしてあいて) などが見られることがあり、また、[kwi:mon] (食べ物) のように [kwi] が見られることがある。



- kwa は [kwaʃi] (菓子), [kwai] (会), ɣwa は [ɣwanʒitsu] (元田) など, 主として老年者に見られる。
- ɣu, ɣo, ɣa, ɣe, ɣi, ɣju, ɣjo, ɣja 各モーラの音声的実現は, それぞれ, [ɣu], [ɣo], [ɣa], [ɣe], [ɣi], [ɣju], [ɣjo], [ɣja] であって, [ɣ] は, 語中, 語尾にもあらわれることはない。
- se, ze では, [ʃemba] (しなければ), [ʃe:ɣo] (せいでく鱈の小型のもの), [kaze] (風) のようになり, 口蓋化が全般に見られる。
- zu, zi に関連して言えば, [du] [dzu]・[di] [dzi] と [zu]・[zi] とを区別しない。

[注目すべき特徴的事象]

(A). 母音関係

(1) [~i] > [~u]

タグサトル (田草取り), ヨッタル (4人), アルオッタ (あっていた), トルオッタ (取っていた), スルオッタ (摺っていた)

などのように, [ɾ] が [ɽ] となるのが多く見いだされる。この場合, ラ行子音は [ɾ] となりやすい。

フトバン (一晩), フトツカン (一掴み), フッタチ (人達),  
フキー (引き)

など, [ɸ] が [フ] となる ([ɸi] > [ɸu]) のも, 比較的よく見いだされる。ほかに, 「シヌオッタ」 (死んでいた) の [ni] > [nu] も見られる。

(2) [~i] > [~e]

デケン (できない), オケテ (起きて), ヘーシテン (一日),  
〜バカーレ (〜ばかり)

(3) [o] > [u], [~o] > [~u]

オミ (海), ヤボイシャ (藪医者), ヨガマス (ゆかめる)

(A). 連母音関係

(1) 今日、共通語で、[O:]のところが[U:]と実現されるものが目立つ。

[u:ka] 多い, [u:kaze] 大風, [u:mizu] 大水, [go:ju:] の儀,  
[nigiraju:] 握られよう

(2) [ai] の同訛

[mja:ban] 毎晩, [ip:ja:] 一杯, [tja:te] 炊いて, [ʃa:te] 注いで,  
[nagja:te] 流して

このように、多く [~ja:] に実現されるが、時々、[so:te:] (総体) や [~gura:] (〜ぐらい) となることがある。

(3) [oi] の同訛

[he:te] 干して, [ke:da] 扱いた

などのように、[oi] の相互同訛 [e:] が、時々あらわれる。

(4) [ui] の同訛

[ʃi:ta] 好いた, [tʃi:tari] 付いたり, [ni:de] 貫いて

などのように、[ui] の溯行同訛 [i:] が、時々あらわれる。

(B). 撥音化現象

当地では、撥音化現象が目立ちしい。すなわち、

主格の「の」……カヅクン ウーカ 家族が多い

連体格の「の」……オミンナカ 海の中, フツカンヒ 二日の

日, タンクサ 田の草

「に」格 …………… ビョーキン ナレバ 病気になれば

連体詞のうえに …… コン フネ この船, ソン コラ その頃

は, アン フト あの人

助詞「でも」「ど

も」「なれども」

のうえに …………… ~デン, ~ドン, ~ナイドン

以上のほかに、「カンサマ」(神様), 「アン」(綱), 「ト  
ニサン」(殿様), 「ナンカ」(長い)やラ行音節「リ」(ト

ンノクツ 取り除ける), 「ル」(ドギャン スン ナー。どうするねえ。), 「レ」(クンロ くれろ)など幅ひろく見出しされる。

### (C). 促音化現象

当地の促音化現象も, 先の捲音化現象と並んで目立ちしい。ラ行音節の「リ」「ル」「レ」, カ行音節の「カ」「ク」, タ行音節の「ト」などに, よく見られるが, 「リ」「ル」「レ」に関しては, Dで述べる。

アッカ イロ 赤い色, タツカ ヤマ 高い山, ワッカ フト 若い人, サルキニツカ 歩きにくいなどのように, カ語尾形容詞での「カ」「ク」が, 促音化する傾向が目立ちしい。また,

○ミカンバ ウエライタツター。密柑を植えられたんよ。

○～ホシオライタツター。～ 干しておられたんよ。

のように, 文末詞(転成の)の「トター」の「ト」が促音化するのを始め, 「ナカツジャ ナカ」(ないのではない)のように, 文中の準体助詞「ト」が, 音環境によって促音化する。また, 「～フツタチ」(～人達)などにも「ト」の促音化が見られる。

### (D). ラ行音節の変容

当地のラ行音節は, さまざまな変容を示す。

#### (1) 促音化傾向

「リ」……～ヨツカ ～よりか, クツジャツタ <リ(縁)だった

「ル」……ハツタ 春田, スツトワ するのは, ノミオツト ユート 飲んだりしているという

「レ」……ダツテロ 誰かが

#### (2) 捲音化傾向

「リ」「ル」「レ」に見られることは、すでに、Bで述べた。

### (3) 長音化傾向

ラ行音節部分が、前接母音の長音にかわる現象が、比較的よく見い出される。

フトー 一人、ナマコトー なまこ採り、ナッター スル  
なったりする、ヒバンシー 干葉の汁

### (4) 脱落

イマヨカ 今よりか <「リ」の脱落>  
トッコテン ところてん <「ロ」の脱落>

## (E). 音便

### (1) イ音便

カエルオライタ 帰っておられた

コギオライタ 扱いておられた

など、限られはするが、「～オラシタ」の「シ」のところに、  
いわゆるイ音便があらわれる。

### (2) ウ音便

ツツーデ 包んで ヌーデ 飲んで

これらは、老年者に見られる。

## (F). 短呼現象

長音部が、短呼されるものが見られる。

サンチョ 3丁, イッシュカン 一週間, ナゴマデ 遅くまで

## (G). 特徴的な長音

当地には、文表現の語部のうえに、特異な長呼現象があらわれる。同一形態の語部であれば、きまって当該長呼現象があらわれるとは限らないが、わりと固定しているものもある。(例、  
バッチンメーシ) いずれにせよ、長呼の起る場合、長音部の

前後音節に高音があり、長音部で、しゃくるように下降する。

クール くり(縁), ミャーク 脈, イーク 行く,  
シェーズ しなくて, タブル 食べる, シャニチガーシ  
しゃにち漸し, バッチンメーシ 薯飯, ソイカール それか  
ら, イットキバカーリ しばらくの間

#### (H). 文アクセント傾向

当地の文アクセント傾向については、今少しくわしく述べるべきであるが、ここでは、もっとも特徴的な文アクセント傾向(つまりは、文アクセントの型)を指摘するにとどめる。その型というのは、語部上に見られる「        」である。

- ～ イマゴラー アノ スジバー ……。
- ～ カクリサレ カクリサレトレバー ……。
- ～ ユーナベー タジゴロマデー ……。
- アー ハ ヨンジューネン オマエタチー イク ジブン  
ナー テカッタジャッタロー。ああ、は 40年(前)お前  
たちが行く頃はなかったんだだろう。

### ③文法上の特色

#### (1)注目すべき表現法

- ～ シェンバ デケン。 ～ しなければいけない。
- ～ シェンバジャロー。 ～ しなければいけないんだらう。
- ～ シワエン。 <不能の表現> ～ できない。

#### (2)文末詞法

ナー・ネー・ノー / ヤー・ヨー / ザー・ザイ・ゾー  
/ カー・キャー  
トー / テー / モン / バン / サー

ザイナー, カナー, トカナー, モンナー, トナー, バナ, ト  
バナ

ザイナー、カネー、トバイネー、トネー、モンネ、タネー、  
ダイニヤ

カノ / トヨー、バヨー、トバヨ / トゾー、トザー、トザ  
イ / トカ、トキヤー / トバ / トテー / トサー / タ  
ー、トター、モンタ / タイレ、タイロ / ダー、ダイ、ダ  
ーイ / トコレ・トケー

当地の文末詞では、「ノー」がふるわず、「バイ」が見られない。  
い。

### (3) 敬語法

「シャル」系の「ス」(未然形「サ」、連用形「シ」)が盛んで、ごく軽い隣人敬語。並んで「ラス」も見られる。また、「ナサル」からの「ナル」,「ナサリマス」からの「ナス」(実際には、未然形「ナッセ」「ナッシエ」、連用形「ナシ」、命令形「ナッシエ」があるのみ)があるか、「ナス」か上に立つ。いわゆる丁寧の助動詞としては、「デス」「マス」があり、あらたまった表現に用いられる。「マス」の命令形は「マッシエ」である。

### (4) 接続法

#### a. 接続詞

いわゆる順接のものとしては、

ソリカラ・ソッカラ、ソシテ、ソッデ・デ(それで)、  
ナラ(それなら)・ナロ(それなら)・アロ(それなら)

などがあり、逆接のものとしては、

ソンジョン(なけども)、アッテ(なつて)

などがある。

#### b. 接続助詞

「テ」「ケン」「バ」は、順接のものであるか、逆接のもの  
としては、

ナンドン・ナンドンカー、タイドン、ドーン・ドンカ、ナ  
ンジョン・ジョン、トニ

などがあり、多彩である。なかで「ナンドン」「タイドン」は、それぞれ「ナレドモ」「タレドモ」に発するもので、古態の事象である。

#### (5) 進行態叙法

多く、「～オル」が用いられるが、時に「～ヨル」もあらわれる。両者に用法上の差異はない。

#### (6) 断定法の助動詞

主に、「ジャ」（現実には、連用形の「ジャッタ」、推量形の「ジャロ」があるのみ）が用いられ、「ヤ」は、その推量形「ヤロ」とともに、若年者に見られからである。断定の推量には、「ジャイロ」もよく用いられるが、時に「ヤイロ」も聞かれる。「ジャロ」「ジャイロ」両者は、用法上ほとんど差らない。また、当地には、「である」からのものと考えられる「ジャル」が、きわめて盛んで、特に「～モンジャルケン」が慣用形式として頻出する。

#### (7) 助詞法

主格表示の「ノ」（または「ン」）が盛んであるが、時に「ガ」もあらわれる。連体格の「コドンガ トキ」（子供の頃）の「ガ」も見られる。「を」格は、多く「バ」で表現されるが、若年者では、時に「ヲ」も聞かれる。「へ」格は、「ニ」であらわされることが多く、「サミヤ」「サニヤ」「サネ」も用いられる。格助詞の「から」は、当地でも「カラ」であるが、「カ-カラ カマレタ。」（蚊に喰われた。）、「フネカラ イキオッタ。」（船で通っていた。）などの用法がある。また、準体助詞「ト」は、きわめてよく行なわれている。

係助詞「は」は、次のように内在形をとる。

ムカシャー 昔は、テザキアタリヤー 手崎あたりは、  
イマゴラー 今頃は

なお、「イェン今ヘンナ」（わか家では）は、連声形のものである。

ほかに注目すべき助詞としては、「テロ」(ダッテロ カエル  
オッ バヨ。誰かが帰っているわよ。), 「チャ」(イク  
トキチャ 行く時でも), 「ギャ」(モライギャ イク。貰い  
に行く)などがある。

#### (8) 用言

動詞には、「ウウッ」(植える), 「タブッ」(食べる), 「  
オクッ」(起きる)のように二段活用のもので、よく行なわれ  
ている。また、形容詞、形容動詞は、終止、連体形は「タツカ」  
(高い), 「キューカ」(急な)のように、「カ」語尾一形で統  
一され、区別がない。なお、「クル」(来る)は、共通語での  
「行く」に当る。

#### (9) 接辞

キヤークサレテ 腐ってしまって  
ヒッチゴート 違って  
ヒンヨガメギャータリ ゆかませたり  
ヒットデテ とび出して  
フキスエトツテ そのままにしておいて  
などの「キヤー」「ヒッ」「ヒン」「ヒット」「フキ」が見ら  
れる。

## 4. その他

[地点選定の理由] 長崎県陸地部の方言状況を代表する、有力な一  
地点とすることが出来るから。加えて、部落の規模、まとまり  
が恰好で、当地出身の方言専攻の学生の協力を得ることができ  
るから。

[協力者の氏名] 平尾美和子氏, 平尾幸太郎氏

[協力内容] 平尾美和子氏は司会役としての協力のほか、生活語  
としての、当方言の内面的な解説で協力を得た。平尾幸太郎氏  
は、平尾美和子氏の父で、生粋の土地人で、農・漁業を経験し  
ており、やはり、方言の内面的な解説で協力を得た。



## B. 表記について

- (1) 長音の「ー」で半長音的な事象をもあらわすことにした。
- (2) イエの表記には、[je]のほか、[jɛ]に近いものも含めた。
- (3) [ai]の同訛音を含んでの、チャー、ミャー、ギャー、ピャーなどは、それぞれ、[tʃa:], [mjɑ:], [gja:], [pja:]の音をあらわし、チャーは [tɕ:] をあらわす。
- (4) 「キーモン」(食べ物)の「キー」は、[kwi:]に近く聞こえるが、クィであらわすのに抵抗があったので、注記でことわった。
- (5) 一応、ア段音表記をとったが、たとえば、「サンボー」(その棒)、「サイ」(「それ」と思われる)の「サ」は、単純な[sɑ]ではなくて、[sɑ]と[sɔ]の中間音とも聞こえて微妙である。注記では[sɔ]としているが、この種の音が、テープのあちこちにあらわれる。

## C. 収録内容の概説, 注記

1. タイトル 「譚作りの話」 ～ 「恋愛・結婚の話」

2. 録音年月日 昭和51年(1976年)4月11日

3. 録音場所 溝口誠治氏宅応接間

4. 話し手

| (氏名) | (性) | (生年)  | (職歴・役職歴) | (居住歴) | (言語的特徴)     |
|------|-----|-------|----------|-------|-------------|
| 溝口誠治 | 男   | 大正4年  | 農業・町会議員  | 外住歴なし | 方言保有度かなり高い。 |
| 尾上サミ | 女   | 明治30年 | 農業       | 外住歴なし | 方言保有度高い。    |

5. 録音環境

録音環境は、静かな応接間(と言っても、くだけた雰囲気)で良好であった。ただ、時に車が通るので、心を使った。同席者は愛宕、平尾美和子(司会者)の2名である。話題の展開に、もっとも心をくいだいた。方法として、あらかじめ、当地に合った話題表を作り、これを話し手の一人、溝口誠治氏に渡し、事情をよく説明し、会話をしてもらった。しにがって、平尾美和子さんは、司会者とはいうものの、文字通りのそれではなく、会話の流れがスムーズに運ぶよう、見守り役のような立場をとって貰った。平尾さんは、土地人で、溝口氏とは遠戚に当る。尾上さんとも、じゅうぶん面識がある。また、愛宕は、現場を体験すべく同席したか、ほとんど発言しないように努めた。もとより、愛宕は、録音に臨む前に、話し手となじみ親しむ時間を設け、場が堅くならないよう配慮した。

1. タイトル 「正月の話」 ～ 「食生活の話」

2. 録音年月日 昭和51年(1976年) 6月6日

3. 録音場所 竹中ユエさん宅居室

4. 話し手

| (氏名)    | (性) | (生年)  | (職歴・役職歴) | (居住歴) | (言語的特徴)             |
|---------|-----|-------|----------|-------|---------------------|
| 山崎政右衛門男 |     | 明治30年 | 農業・教育委員  | 外住歴なし | 方言保有<br>度かなり<br>高い。 |
| 竹中 ユエ 女 |     | 明治24年 | 農業       | 外住歴なし | 方言保有<br>度高い。        |

5. 録音環境

同席者は、愛宕、平尾美知子(司会者)の2名。話題の展開にもっとも心をくだいた。方法として、あらかじめ、当地に合った話題表を作り、これを話し手の一人、山崎政右衛門氏に渡し、事情をよく説明し会話をしてもらった。したがって、平尾美知子さんは、司会者とはいうものの、文字通りのそれではなく、会話の流れがスムーズに運ぶよう、ほんの折々に発言をしてもらうようにした。平尾さんは、土地人で、山崎氏とは親戚である。竹中ユエさんとも、じゅうぶん面識がある。また、愛宕は、現場を体験すべく同席したが、ほとんど発言しないように努めた。もとより、愛宕は、録音に臨む前に、話し手となじむ時間を設け、場が堅くならない配慮した。

# 1. 薯作りの話

話し手

(略号) (氏名) (姓) (生年)

A 溝口 誠治 男 大正4年生れ

B 尾上 サミ 女 明治30年生れ

A マ イチバーン イマワ マー <sup>(1)</sup> シーカツクリガー ハタケジャー  
ま 一番 今は まあ 西瓜作りか 畑では

マ シューカクガ アルケンカー モ <sup>(2)</sup> イモノー  
ま 収穫が あるから もう 甘藷を

B <sup>(3)</sup> イモノー  
甘藷を

A ンー ナ ツクランケン。  
うん 作らないから。

B <sup>(4)</sup> テ ツクラ ………  
作ら

A ソンドン ヤッパリー ムカシワ マー イモツクリガ  
だけど やっぱり 昔は まあ 甘藷作りか

B イモガ  
甘藷が

A シェンモンジャッタケン ナー。  
専門だったからねえ。

B アー イモツクリガ シェンモンジャッタケン イモガー  
ああ 甘藷作りか 専門だったから 甘藷か

A イモデン<sup>xxxxxxx</sup> イモデー<sup>xxxxxxx</sup> モー ソノ ノーカワ<sup>(5)</sup> ケイザイバ イチネ  
 甘藷でも 甘藷でも もう その 農家は 経済を 一年間  
 ンカンノ ヤツワ コメヨリモ イモジャッタトジャリケン ナー。  
 の ヤツ(経済)は 米よりも 甘藷だったのだからねえ。

B イモジャッタト。  
 甘藷だったんよ。

A ソシテ<sup>(6)</sup> イマモダー ソー ナカッタケン コリヤ<sup>(7)</sup> ココン エン  
 そして 今まででは そう なかったから これは この 家  
 チノ マエモー エー ナンガー アリヤ  
 の 前も ええ 何か あれば

B オーサカカラ フトカ フネノ オーサカフネノ キテー。  
 大阪から 大きな船が 大阪船が やって来て。

A オーサカカラ フトカ ダンベブネノ キテー フトカ フネノ  
 大阪から 大きい 団平船が やって来て 大きい 船が  
 ダンベブネノ キテー。  
 団平船が やって来て。

B キタ キタ。  
 やって来た やって来た。

A アリヤ ミノスケジューツテ イーヨッタロー ダー。 オンドンガ  
 あれば 蓑助爺と 言っていただろうよ。 私たちが  
 コマカ ウチノ ( B ミノスケジー ) アギヤントワ  
 小さい時の ( 蓑助爺 ) あんなのは

B アー。  
 ああ。

A ミノスケジューノ ミドコロ<sup>(8)</sup> コケ ビツタリ キヨツタケン ナー。  
 蓑助爺が ここに いっぱい 来ていたんだからねえ。

B ン キヨッタ トー。 ココン。  
うん やって来ていたんよ。 ここに。

A コケー ヤー。  
ここに かねえ。

B ココン サカヤン ハナニャ ヨンニユ ツケオッタ ト。  
この 酒屋の 先には たくさん (船か) つけていたんよ。

A ココノ コノ ハナン ドコラ アオアオシテエテ ショコワ ワ  
この この 先の 所は 青々としていて 底は わ  
カラシヤッタトジャル モン。 イマコソ コガン アソシナッ<sup>(9)</sup>  
からないのだったんだから。 今こそ このように 浅くなって  
トレドン モー チョット イマカラー ワシドンガ ワシガ コ  
いるけれども もう どうして 今から 私たちが 私が  
ドンガ トキチャ ゴジューネンマエ。ゴジューネンモ スレバ  
子どもの 時でも 50年前。 50年もすると

(10)  $\left( \frac{B \text{ ゴジュー } - \text{ ゴジュー }}{50} \right)$  アシヨ ナッ。  
浅く なる。

B ウーン。  
うん。

A アオアオシテ ミエンジャッタ ト。 ヨイヨー モ シロモー  
青々して (底か) 見えなかったんよ。 ほんとに もう 広くも

アッタ ト。 ソースリャ オーキナ マ イモツクリガー イチ  
あったんよ。 そうすると 大きな ま 甘藷作りが ー  
バン エー マ オモナ サクマツ<sup>(11)</sup> ンージャッタトジャラー。ソ<sup>(12)</sup>  
番 ええ ま 主な 作物 だったんたろう。

ー スレバー ツノ ダイタイ イモツクンノ コテッチーテー ア  
そうすると その だいたい 甘藷作りの こととって あれば

ラ タネイモバー シオッタ ト。 アラー ノー ナエトコッテ  
種 蒔 作り(の仕事)をしていたんよ。 あれば ねえ 苗床、と

イーオッタロー。 ヤッパー。  
言っていただろう。 ヤっぱり。

B (笑) イモドコッテ イーオッタ。  
蒔 床、て言っていた。

A イモドコッテ イーオッタ タイノー。 イモドコー。 イモドコ  
蒔 床、て 言っていたよねえ。 蒔 床。 蒔 床を

ヲ フシェーテー ア フシェトケバ ドンクリャバカー スレバ  
作って あ 作っておけば” どの程度くらい すると

アリガ イモバ シャーテ ヨカゴト メダチオッタロ カー。  
あれが 蒔 を さして よいように 芽が出ていたのだろうか。

B アッテー シ<sup>xxx</sup> モー シグツツゴロー スレバー イマ サストジャ  
ほら もう 4月頃に すると 今 さすんだ

ル モン。  
もの。

A<sup>(14)</sup> ウーン タウエアガリー。 ロクグワーツ。  
うん 田 植えあがり。 6月。

B ンー。  
うん。

A ヤッパ ニカゲツモ カカリオッタロ カ イモトコン ナカニ。  
ヤっぱり 2か月も かかっていただろうが 蒔 床の 中で。

B<sup>(15)</sup> ドー (笑) イモワ ソギャン ハヨ モエン モー。 イマ<sup>xxxx</sup>  
どうして 蒔 は そんなに 早く 蒔 えない もの。

イマゴロンゴト ( A ンー。 ) カブシェモンバ シェンケン。  
今頃のように ( うん。 ) 覆いものを しらないから。

A イマゴロンゴト ソノ ビニルバ カブシェンケン ナー。 シー。  
今頃のように その ビニールを 被せないから ねえ。 うん。

B ソギャン シオッタ ト。 <sup>(16)</sup> タウエ ( A ソースリヤ ソルラー )  
そんな していたんよ。 田植 ( そうすると それを )

ハヨー デケレバ タウエマエー シャー タール ( A ンー )  
早く できると 田植前に さしたり ( うん )

<sup>(17)</sup>  
アノー シオッタ ト。  
あの していたんよ。

A ハヨー デクレバ タウエマエー <sup>(18)</sup> オスカラー タウエノ スギテ  
早く できると 田植前に 遅いと 田植が 過ぎて  
カラ サシオッタ タイナー。  
から していたんなよねえ。

B サシオッタ ト。  
していたんよ。

A <sup>(19)</sup> イマサシガ シンドー ジャッタ ター。  
サシが 苦勞だったよ。

B イモヲ <sup>xxxxxxx</sup> イモヲ シャーテー ソシテカラ タウエアガリ ( A ウ  
サシを して それから 田植えあかりに ( う

<sup>(20)</sup>  
ン ) ビンタヲシテ  
ん ) 土かぶせをして

A マ ナント ユーテモ <sup>xxxxxx</sup> ソン ソン トージワ スイカヨリカ イ  
ま なんと 言っても その 当時は 西瓜よりも  
今バン シュナ サクモツトシタラ <sup>(21)</sup> イモツクール <sup>(22)</sup> ムギツクール。  
一番 主な 作物としては 甘藷作り 麦作り。

B ウン。  
うん。



A ムギバ ヤッパリ ソノ モー シトビュー ナッテカラ コゲー  
夢を やっはり その もう 4斗俵に なってから こんなに  
ドクジッピョー トッタ コトノ アッタ ゴー。  
60俵 とった ことが あったよお。

B ウン。  
うん。

A アノ アノ <sup>(23)</sup> タビノキモ オマエタチノ ウエバ アスコバ ハッ  
あの あの タビノキモ あんたたちの(煙の)上を あそこき 8  
タン ツクットッタテ イモバ。  
反 作っていたが 儲を。

B ウーン。  
うん。

A ココノ ブラックジャ イチバン タイショヤッタ テー。  
この 部落では 一番 大将だったか。

B ウーン。  
うん

A ニバンガ ナオオンジヤッタ モンナー。 <sup>(24)</sup> (B ン) エ イマー  
ニ番か 直おじ たらたものねえ。 (ん) え 今

ハタラキオッタケン。 ワシガ ヘイタイ イクマエジャッタ  
働いていたから 私が 兵隊に 行くまでだったか。

テー。 サンマントー サンマン サッサッサ サンマーン ゴシ  
3万と 3万 3万

ンカ イクラカ ゴシエンエントカ イモバ ウットッタ。  
54か いくらか 54円とか 儲を 売っていた。

B ソーソー。 ソギャン ウリオッタ ト。 ムカシャ。  
そうそう。 そんなに 売っていたんよ。 昔は。

## 注記

- (1) 「シーカ」の「シー」は、[ui] の溯行同訛。
- (2)(3) 「イモノー」の「ノー」は、主格「が」に対応するが、文脈上、これを「を」に訳した。
- (4) 言いさしの表現。
- (5) 「ケイザイバ」と「を」格に表現しているが、文脈上は、「は」とあるべきところ。「ケイザイ」は、「収入」に近い。
- (6) 「イマモダー」は、「イママデワー」の縮形。
- (7) 「ココン エンチノ マエモー」は、溝口誠治氏宅の前も、の意で、そこが海路の一角に当たっていて、大阪の団平船が停泊した。これらの船は、当地に甘藷を買い付けに来たもの。
- (8) 「ミロコレ」とも聞こえる。意味不明。
- (9) 「シナットレドン」の「シ」は接頭辞。
- (10) 「アショ」は「アソ」の拗音化。
- (11) 「サクマツ」の「マ」は [mɔ] に近く聞こえる。
- (12) 「ソースレバー」は、以下にも多出するが、話者（溝口氏）の個人的傾向と見られる。
- (13) 「スレバ」と「イマ」との間は、ことばの省略がある。「4月頃にはさすと芽を出す。だから、今さすんだもの。」の意。
- (14) ここに、一見唐突に「タウエアガリ」とか「ロクグワーツ」が出ているかに見えるのは、話者が、藷の芽出す時期を、ふと、勝手に頭に宿したからであろう。
- (15) 「ドー」は「ドーシテ」を言いかけたもの。
- (16) 「タウエ」は、後出の「タウエマエ シャータール」を言い出そうとしたものと思われる。
- (17) 「アノー」は間投詞。
- (18) 「オスカラー」は、「オソカリャ」（遅ければ）の音変化。
- (19) 「イマサシガ」の「マ」は [mɔ] に近く聞こえる。
- (20) 「ビンタ」は、土かぶせのことで、「ビンタウチ」とも言う。
- (21)(22) 「イモツクール」、「ムギツクール」などのように、下降調

に長音化するのは、特徴的である。既出。

(23)「タビノキ」は地名で、琴海町利根原御タブノ木。

(24)「ン」は、かすかに聞こえる。

## 2. 麦こぎ・麦すりの話

話し手

(略号) (氏名) (姓) (生年)

A 溝口 誠治 男 大正4年生れ

B 尾上 サミ 女 明治30年生れ

B ウン ムギスーリ (Aアーン) ムギスーリヤ イッチジャ ス  
うん 麦すり (ああ) 麦すりは 一番

カンジャッタ。

嫌いだった。

A アノ ナツ ナツノ アツカサカリ (Bアツカ) ムギソリテ  
あの 夏の 暑い さかりに (暑い) 麦すりといって

ムギバ アノー (Bン) ソイバ シェンバデ ケーデ ゴー。  
麦を あの (うん) それを 千歯で 抜いてなよ。

B シェンバデ ケーデー  
千歯で 抜いて。

A ハタケンクリ モッテ イタトッテー シェンババ アノ シェン  
畑の端へ 持って 行っておいて 千歯を あの

シェンバノ (Bン シェン シェン シェンバデ) ヒックリ  
千歯が (千歯の) 千歯で ひっくり

カヤランゴト シトッテ アシバ キビツケトッテ ソーシテ  
返らないように しておいて (千歯の)脚を 結びつけておいて そうして

B ハタケン クリカラ ケーデ イノテキテ  
畑の 端から 抜いて 担ってきて

A ソーソー。 <sup>(3)</sup> ハラ アスコン <sup>(4)</sup> トミー アノー <sup>(5)</sup> ナンバ カゲガ  
 そうそう。 あら あそこの ~~~~~ あの どこよりも 日陰か  
 ヨカ モンジャルケン ハジエノキノ シタノ ナンノッテ キノ  
 よい ものたから はせの木の下 何のと言って 木の  
 カゲー (B 笑) ハタケン クルリ オッテ ナー。 ハタケン  
 陰に ( ) 畑の まわりに おって ねえ。 畑の  
 ハシン トコ オッテ サー。 ムギバ トイヨス モナ トイ  
 端の ところにおって ねえ。 夢を 取り寄せる 者は 取り  
 ヨス。 <sup>(6)</sup> アー シェッテ コギオッタ ター。  
 寄せる。 ああ 競って 扱いでいたんよ。

B シェッテ コギオッター。 ケーデ モッテキテ ヘーテ <sup>(7)</sup> シノシ  
 競って 扱いでいた。 扱いで 持ってきて 干して 突にして  
 テー ホンナコテー アギャン  
 ほんとうに あんなに (つらい仕事はなかった。)

A ソイデ ソノー ムギヲ ケーデー <sup>(8)</sup> (B ソギャンシカ シヤエン)  
 それで その 夢を 扱いで ( そんなにしか できない )  
 アン <sup>(9)</sup> ハシカノ ヌカッパ アノー <sup>(10)</sup> ムギバー ジガジガ ス  
 あの 扱ぎかすか ささるのを あの 夢を ジガジガ する  
 ットバー カマスン ナキャ ツメクデー サー。  
 のを かますの 中に 詰めこんで ねえ。

B カマスン ナキャ ツメクデー <sup>(11)</sup> ~~~~~  
 かますの 中に 詰めこんで

A ソイバ エンチャン モッテキテ アゲテー ソルバ アノー ン  
 それを 家へ 持ち帰って 上げて それを あの ン  
 ー ムギスッテ ユーテ ムギスッキカイツテ ユテ アッタ ター。  
 夢すりといって 夢すり機械といって あったんよ。

B アッター。

あった。

A ホンナ <sup>(12)</sup>アレナンカ (B笑) ハバノ <sup>(13)</sup>イクラバカ アッタ。  
ほんとは あれなんかは ( ) 中か どのくらい あった。

ハバノ コゲンナ ヒロ ナカッタロー。 コノ ハンダイノゴタ  
中か こんなには 広くは なかったろう。 この 飯台ぐらいだ。  
ー。

B ソギャンマデワ ヒロ ナカッタ。

そんなにまでは 広くは なかった。

A ハバノ サン ハバノ ニシャクゴスンバツカリ アッタロカ。  
中か 3 中か 2尺5寸くらい あったろうか。

ニシャクゴスンバツカリ アッタロゴタッタ。 <sup>(14)</sup>ナガレノ オーカ  
2尺5寸くらい あったようだった。 長さが およそ

タ イッケンバカリ アッタ モンナー。

一間くらい あったものねえ。

B アッタ。

あった。

A オーカタ イッ <sup>xxxx</sup>イッケンマデワ ナカッタロ。 オーカタ イッ  
およそ 一間までは なかったろう。 およそ 一

ケン チコー アッタ。

間 近く あった。

B イッケン チコ アッタロー <sup>(15)</sup>ガ。  
一間 近く あったろうか。

A ゴシャクバカリ アッタロー。 (B ンー。) ゴシャクバカリ シヤ  
5尺くらい あったろう。 (うん。) 5尺くらいだろう。

B リョーホンヲ <sup>(16)</sup> ~~~~~  
西方を

A マー ヤク サンジャク ク サンジャクニ サンジャクニ ゴシヤ  
まあ 約 3尺 <sup>xxxxxxx</sup> 3尺に <sup>xxxxxxx</sup> 3尺に 5尺

ーク <sup>(17)</sup> コレガ タダノ サンジャク サンズンジャケ サンジャク  
これが ただの 3尺 3寸だから 3尺に

ニ ゴシヤクバカー アッタ。 ソレニ ココントコロワー (B  
5尺ばかり あった。 それに この所(当地)は

笑) ナツノ アツタカッ サカッジャルケン ハシカノ ノドサ  
夏の 暑い 盛りだから 極ぎかすか 喉へ

ン イッテコンゴト タオルデ コー クチバ コー キビッテ  
入ってこないように タオルで こう 口を こう しばって

(B笑) ソシテ アシェワ ダラダラ シトッテ ア <sup>xxx</sup> アミガサ  
そして 汗は たらたらと 流していて 編み笠

バ カブリオッタ タイナー。  
をかぶっていた よねえ。

B アミガサバー  
編み笠を

A アン <sup>(18)</sup> ジミガサバー。  
ああ ジミ笠を。

B アーン。 ジミガサバッカシャ  
ああ。 ジミ笠ばかり

A オトコッテ オトコッチャ オーカタ ジミガサバ (Bウン。)  
男とって 男でも たいてい ジミ笠を (うん。)

カブッテ

かぶって

A ソーシテ アルバー ムギスリデー エー ムキヲ フトール  
そして あれを 夢すりで ええ 何いと 一人

コッチ フトール

こっちに 一人

B ムキオートツテ

向きあっていて

A ムキオートツテ ソシテ アルバ ウエバ コー ニギットツテ  
向きあっていて そして あれを 上を このよりに 握っていて

ゴリッゴリ ゴリゴリ アツテ コーシテ スツテ ソシ <sup>(19)</sup> <sup>(20)</sup> スリア  
ごりごり ごりごり ほら こうして すって そして すり

エテ サー。 ソシテ カミサン デァータラ マタ イレテ ス  
あげてねえ。 そして 上の方へ 出したら また 入れて す

<sup>(21)</sup>  
テ アンクライ マタ バカナ シゴトツテ アル モンナ。 マ  
て あのくらい また 馬鹿な 仕事って ある ものね。 ほ

ター。

んとは。

B アゲン バカナ シゴタ ナカ。

あんな 馬鹿な 仕事は ない。

A アレガ イチバン ツラカッタ ナー。

あれ(夢すり)が一番 つらかった ねえ。

B ツラカッタ。

つらかった。



## 注記

- (1)「シェンバ」は、稲藁などの穂を抜く鉄貝。
- (2)「キビツケトツテ」は、「キビリツケトツテ」で、[リ]の脱落。
- (3)感声語。
- (4)「トミー」と聞こえるが、意味不明。
- (5)「ナンバ」は、「何でも」に当り、「どこよりも」と意訳した。
- (6)感声語。
- (7)「シノシテ」は、終止形は「シノスル」で、穀類などの表皮と突とを分離するの意。
- (8)「シヤエン」は、「しは得ん」。
- (9)「ハシカ」は、脱穀時に空中に舞う、のぎなどの細かな屑。
- (10)「ムギバー」は、後の「ツメクーデ」にかかっている。
- (11)次の「ソイ」と重なることもあって、音声不明瞭。
- (12)「アレ」は、藁すり機械をさす。
- (13)「イクラバカ」は、「イクラバカリ」の[リ]の脱落。
- (14)「ナガレ」は、長方形、長方体の物の長辺の長さき言う。
- (15)語者は、「ガ」は発音していないと言うが、これが聞こえる。
- (16)音声聴取不能。
- (17)「コレ」は、目の前の飯台をさす。
- (18)「ジミガサ」は、藪草で編んだ、山型の笠。
- (19)「ソシ」は、「ソシテ」の言いさし。
- (20)「スリアラエテ」とも聞こえるが、「スリアエテ」だろう。「スリアゲテ」からのものと考える。
- (21)「アンクライ……………アルモンナ。」は、反語表現。

### 3. 西瓜作りの話

話し手

(略号) (氏名) (姓) (生年)

A 溝口 誠治 男 大正4年生れ

B 尾上 サミ 女 明治30年生れ

A マ ソン ジブンカラー シーカワ ツクリオッタ モンナー。  
 ま その 時分から 西瓜は 作っていた ものねえ。  
 ヤッパー。  
 やっぱり。

B シークワワ ツクリオッタ。 シークワワ シークワワ (A シ  
 西瓜は 作っていた。 西瓜は 西瓜は ( 西  
ーカワ シーカワ ) イッタンバカリズツァー シ ツクリオッ  
瓜は 西瓜は ) ー反くらいすつ 作ってい  
タ。  
 た。

A ウン。 シークワワ イマンゴト セジナ モ ジキマキバカリジャ  
 うん。 西瓜は 今のよう<sup>(2)</sup>に しないで もう 直蒔きはかりだっ  
ッタ モンナー。  
 た ものねえ。

B ハー ジキマキジャッタ ト。<sup>(3)</sup>  
 ああ 直蒔きだったんよ。

A アリヤ シグワツノー シー ヤッパリ アノー ジキマキデー  
 あれは 4月の やっぱり あの 直蒔きて

ツクッテー イマワ モ <sup>(5)</sup> ジ アノー オンショ—デー エー ソ  
 作って 今は もう あの 温床で ええ そ  
 ン <sup>(6)</sup> カボ— ン アノ カボチャトカ ユーゴトカニ ツイデ <sup>(7)</sup> イ  
 の 株を あの 南瓜とか 冬瓜とかに 接いで  
 ヤジ キロテ レンサカー デケンジャッタ モンナー。  
 連作を嫌って 連作は だめだった ものねえ。

B デケンジャッタ ト。 カヤッテ ツ克蘭バ。  
 だめだったんよ。 替えて 作らなければ。

A キャー カレテシマイオッタ モン。  
 木は 枯れてしまっていたもの。

B ウン。  
 うん。

A ツズケテ ツクレバ イヤジ キロテ。 <sup>(8)</sup> ナンドン ムカシャ ヨ  
 続けて 作ると 連作を嫌って。 だけど 昔は  
 カー シーカノ オンドンガ <sup>(9)</sup> トビゼ ヨカ トケー ツクッタ  
 よい 西瓜が 私たちが 「トビゼ」の よい 所に 作った  
 トキャー ワシガ <sup>(10)</sup> ヘイタイ— イタラ ン— イク <sup>(11)</sup> マエヤッタ  
 時は 私が 兵隊に (行かない) うん 行く 前だったろう。  
 ラー。 アー イッチョガー ニジュッキンモ <sup>(12)</sup> ニジュー ニジュ  
 ああ 一個が 20斤も 20

—ナナキン <sup>(13)</sup> アル シーカマデ トッタ テー。  
 27斤 ある 西瓜まで とったか。

B ン—。  
 うん。

A アリヤ アノ <sup>(13)</sup> マンダラジョ—ダケノ アノ トビゼノ ハタケー  
 あれば あの 「マンダラジョ—ダケ」の あの 「トビゼ」の 火田だった

ジャックケン サー。

から ねえ。

B オガ<sup>(14)</sup> シェデ イタテカラワー アノ アカシマデ ヨカ シーカ  
私が 瀬戸に 嫁入ってからは あの 赤島で よい 西瓜を  
バ トッター。  
とって。

A ウン。

うん。

B イマ ヘイオンジガ<sup>(15)</sup> ホシ アノー コーテ。 (A ウン。) ナ  
今 平おじか あの 買って。 (うん。) 貯  
ヤテ ウエテ<sup>(16)</sup> クサレキャーテ。  
蔵して 植えて 腐らかして。

A (笑) ナヤテ ウエテ。

貯蔵して 植えて。

B アギャン コトモ アッタ トゾ。

あんな ことも あったんだよ。

A ウン。

うん。

B アンマイ ヨカ シーカテ

あまりに よい 西瓜って

A ヨカ シーカテ ホレテ タコ コ<sup>xx</sup> コーテ<sup>xx</sup> ソン<sup>(17)</sup> キャークサレ<sup>(18)</sup>  
よい 西瓜って 惚れて 高く 買って 腐って

テ ソンシタ ワケ ター。(笑)

損をした わけよ。

B ソンシタッ ター。(A 笑)<sup>(19)</sup> トー ヨカ シークワッチテ ホ  
損をしたんだよ。 どうして よい 西瓜といって 寝

メテ<sup>(20)</sup>

めて

A マー シーカモ イマノゴト ミチガー イマワ モー ノードガ  
まあ 西瓜も 今のように 道が 今は もう 農道が

デケテ スグー ウ ハタケノ グルッカラ マ ジェンブッテ  
できて すぐル 畑の まわりから ま 全部という

ワケジャ ナカッドン ツミコーデ<sup>(22)</sup> イクケン シンドーモ ナ  
わけでは ないけれども 積みこんで 行くから つらくも なん

ンモ ナカトジャケード<sup>(23)</sup> ヤハー ソリョー イノーター<sup>(24)</sup> カガリ  
とも ないんだけれど やっはり それを 担いで 入れものに

ー フトカ シーカラ ミッツズツ イレオッタ ナー。 カガリ  
大きい 西瓜を 3個ずつ 入れていた ねえ。 入れもの

ー。

ル。

B アー。 ミッツズツ<sup>(25)</sup> フテニャー<sup>~~~~~</sup> イニャ オランジャッター。  
ああ。 3個ずつ 担いでは おらなかった。

A コマカト ヨッツモ イッツモ ウエ マタ ノセテ ヤッテキョ  
小さいのを 4個も 5個も 上に また 載せて やってきてい

タンドン ナー。

たけれど ねえ。

ドーシテ コロベバ モー ビッシャル<sup>(26)</sup> イックッ ナガラ ウチワ  
どうして 転ぶと もう おしつぶれて 一荷 全部 割れて

レオッタ モン。

しまっていたもの。

ニジッ<sup>xx xxxxx</sup> ニジッキン アル シーカノ フトカトン ツレナレバー  
20斤 ある 西瓜の 大きいものの 仲間になると

カガンノ カタホーニ ミッツ <sup>(27)</sup> イウエバ ロクジュッキンジャ  
入れものの 片方に 3個 入れると 60斤だろう。

口。デー ツヨカ モンデ ナカラー イナイキラン モンナー。  
だから 力の強い者で なければ 担ぎえない ものねえ。

B イナイエン。

担ぎえない。

A コー フトカ シーカー。 ソルバ マタ フネニ <sup>(28)</sup> ツ キズバ  
このように大きい西瓜は。 それを また 船に 傷を

ツケンゴト シテー フネニー <sup>(29)</sup> ツンデキテー ソーシテ ソン  
つけないようにして 船に 積んできて そうして その

ジブンナ ソノー コヤッテユーテ イマンゴト モー ヤッパリ  
時分は その 小屋とって 今のように もう やっぱり

リョーシワラノ <sup>(30)</sup> コグチワ モタン モンジャルケン イエン  
漁師部落の 小口部落は 持たないものだから 家の

ナキャ タタンバ <sup>(31)</sup> ヒャーデ イエン ナキャー シーカバ ナラ  
中に 畳を 取り除けて 家の 中に 西瓜を 並べ

ベオッタ タ。ズート。

ていたんよ。 すらりと。

B オー イエン ナカノ イエンノッテ イエンニー (A イエン  
おお 家の 中の 縁のって 縁に ( 家の  
ナカニー フトカ シーカバー ) ナラベオッタ。  
中に 大きい 西瓜を ) 並べていた。

A ウン オーカタ イエンノ イエン ナキャノッテ ユーテ イタ  
うん たいてい 縁の 家の 中のって 言って 板張 <sup>xxxx</sup>

バリ <sup>xxxx</sup> ( B イタバリー オキオッタ。 ) イタバリー アノ オ  
りに ( 板張りに 置いていた。 ) 板張りに あの

ーッ シキモンバ シテー。 (B アン。) ナゴ オクトワー  
敷物を して。 (うん。) 長く 置くものは

コリャ イッチョー ナゴ オカンバテ オモウトワ シキモンバ  
これは ひとつ 長く 置かなければと思ふもの(西瓜)は敷物を

シテー シンノ クサレンゴト ナー。 マゴバ シーテ (B  
して 尻が 腐らないように ねえ。 蓮を 敷いて

シーテ) ソシテ イタバリー <sup>(32)</sup> アノー オキオッタ モンナ。  
敷いて) そして 板張に あの 置いていた ものね。

B オキオッタ ト。 <sup>(33)</sup>  
置いていたんよ。

A ソン ジブンノ シーカノ シュルイテ ユートワ ドギヤントノ  
その 時分の 西瓜の 種類って いうのは どんなものが

アッタ カナー。  
あんな かねえ。

B ドギヤントテー コーンナ フトカ ホーブラジークワッテ ユー  
どんなのって こんな 大きい 南瓜西瓜って いう

トモ <sup>(34)</sup> アール。 モー アノー アリャ タネ バッキヤイオッタ  
のも ある。 もう あの あれば 種を 奪い合っていた

モンナー。  
ものねえ。

A ホー。  
そう。

B ウン。 ヨカ タネバー カエバ アッテ ヨカ。  
うん。 よい 種を 買うと ほら よい。

A シマジークワッテ ユートモ アッタ ターイ。 ソノー (B シ  
縞西瓜って いうのも あったんよ。 その

マジークワモ アッター。 ) シマノ トーッタ フトカ シーカ  
縞西瓜も あった。 縞の ついた 大きい 西瓜

ノ ナー。  
の ねえ。

B アルオッター。 ホンナー タケン タッカ ヨカ コロンヨカ  
あっていた。 ほんとに 丈が 高い よい 程よい

シークワノー デケオッタ トー。  
西瓜が できていたんよ。

(35)  
A イロイ ソン ジブンナ カホーズイカッチューテ ー アリヤー  
いろいろ その 時分は 嘉穂西瓜っていつて あれば  
(36)  
ン カホーワ クマモトーケン カナー。 アスコカラ ゴマ  
うん 嘉穂は 熊本県 かねえ。 あそこから 胡麻

ン タネノゴト コマーカ タネバー トッター アノ シーカバ  
の 種のように 小さい 種を 取り寄せて あの 西瓜を

( B アノ ) ツクッタ コト アール。  
( あの ) 作った ことがある。

B タネノ コマカトガ <sup>xxxxxx</sup> ウマカ ウマカリオッタ。  
種の 小さいのが うまかった。

(37) A フニ イマモ (38) アロンドン フート ムカシャ コマーカト アメ  
ほんとに 今も あるだろうけど ずっと 昔は 小さい西瓜の アメ

リカジーカテ サイベリアアッテ ユートノ ( B ハー アーモ アッ  
リカ西瓜って サルデニヤって いう西瓜が ( ああ あれも あ

タ ト。 ) キオッタ モンナー。 (39) ウリー ニタ シーカモー。  
たんよ。 ) 入って来ていたものねえ。 瓜に 似た 西瓜も。

B ウリー ニタ シークワノ <sup>xx</sup> アルオッタ ト。 ナンカトノ  
瓜に 似た 西瓜が あっていたんよ。 長い西瓜の



ジキ フレヤスカトノ。

すぐ 割れやすい西瓜が。

A アリワ ユー フレオッタ ター。

あれは よく 割れていたんよ。

B ハー。 ユー <sup>(40)</sup> フレオッ ヤスカッタ。

ああ。 よく 割れていた 割れやすかった。

A <sup>(41)</sup>  
~~~~~ アメデモ フレバ アメデ フレオッタ モンナー。  
雨でも 降れば 雨で 割れていた ものねえ。

B アメデモ フレオッタ ト。

雨でも 割れていたんよ。

## 注記

- (1) 「シ」は、「シークゥ」を言い出そうとしたものと思われる。
- (2) 「ジキマキ」は、種を苗床に蒔いて、後に移植するのでなく、直接、畑に種を蒔くこと。
- (3) 「ト」は、[tɔ]に近く聞こえる。
- (4) 「シー」は吸気音。
- (5) 「ジ」は、「ジキマキ」の言いさしと思われる。
- (6) 「カポー」は、「カブヲ」の縮形。
- (7) 「イヤジ」は、厭地で、連作によって作物の育ちが悪くなり、収穫がおちること。
- (8) こゝに、やや長い間がある。
- (9) 「トビゼ」は地名。
- (10) 「イタラ」は、「イタラン」(行かない)の言いさしかと思われる。「イタラ」の次に「ニー」の、愚案を示す間投詞が来ている。
- (11) 「マエヤッタラー」の「ラー」は、[ɾɔ:]に近く聞こえる。
- (12) 一斤は、600gだから約16kgに当る。「キン」は、「ケ」に近い。
- (13) 「マンダラジョーダケ」は、地名。
- (14) 「シェテ」は「シェドニ」(瀬戸に)の縮形。
- (15) 「ホシ」は「ホシテ」の言いさしと思われる。
- (16) 「クサレキャーテ」は笑い声。
- (17) 「ソン」は、「ソンシタ」の言いさしと思われる。
- (18) 「キャークサレテ」の「キャー」は接頭辞。
- (19) 「ドー」は、「ドーシテ」の言いさしと思われる。
- (20) こゝに、やや長い間がある。
- (21) 「マー シーカモ イマノゴト」と切り出して、「昔はいかなくて……」と続ける構えであったが、話は、現在の西瓜作りのことになり、再び昔の西瓜作りの話にもどり、(23)の、「ヤハー……」に続いていく。

- (22) 「ツミコーデ」は、いわゆるウ音便。
- (24) 「カガリ」は、担い棒の両端にさげる、藁製の入れもの。
- (25) 「フテニャー」は、音声も不明瞭で、意味も不明。
- (26) 「イックワ」は、担い棒による、一担ぎ分の荷。
- (27) 「イウエバ」と聞こえる。「イルレバ」からのものだろう。
- (28) 「ツ」は、「ツンデ」（積んで）を言おうとしてのものと思われる。
- (29) 「ツ」は、[tʃi] に近く聞こえる。
- (30) 小屋を持たないの意。
- (31) 「ヒャーデ」は、「剥いで」。
- (32) 「アノー」は問投詞。
- (33) ここに、やや長い間がある。
- (34) 「アール」は、特徴的な長音。
- (35) 「イロイ」は、「イロイロ」の言いさし。
- (36) 「カホー」は、福岡県嘉穂郡で、話者は、熊本県と記憶違いをしている。
- (37) 「フニ」は、「ホンニ」出自か。
- (38) 「アロンドン」は、「アロードモ」の音変化。
- (39) ここに、やや長い間がある。
- (40) 「フレオッ ヤスカッタ」は、「フレオッタ フレヤスカッタ」を言おうとして、こうなったと思われる。
- (41) 音声の重なりもあって聴取不能。

## 4. 遊 び の 話

話し手

(略号) (氏 名) (姓) (生 年)

A 溝口 誠治 男 大正4年生れ

B 尾上 サミ 女 明治30年生れ

A ソースレバー オマイタチノー コドンガ コローノー マ オト  
 そうすると あんたたちの 子どもの 頃の ま 男  
 コンコー オナゴンコワー ンー ダイタイ ドギャン シテ エ  
 の子 女の子は ん たいたい どんなに して ええ  
 ー マ ア アスビオッタ カナー。  
 ま<sup>xx</sup> 遊んでいた かねえ。

B ドギャン シテッテー。  
 どんなにしてってえ。

A ソン テマッドン チータン ナシタ<sup>ン</sup>ン  
 その 手毬なんか っいたり 何したり

B テマッドン チーターリ (A ンー。 ) ナシターリ。 <sup>(1)</sup> イガ<sup>~~~~~</sup>  
 手毬なんか っいたり ( うん。 ) 何したり。

A イマノ ゴミデマリノ アッタロ カー。  
 今の ゴム手毬が あったろうか。

B アッター。  
 あった。

A ゴミデマ<sup>(2)</sup>ッノ ソン ジブンナ コマカウチ アッター。 オマイ  
 ゴム手毬が その 時分は 小さい時 あった。 あんた

タチノ一。

たちの。

B アー アッター。

ああ あった。

A ウーン。 オシトモ アッタロ ダー。

うん。 お手玉も あっただろうね。

B オシトモ アッター。

お手玉も あった。

A オシトモ ツクッテ。

お手玉も 作って。

B シオッター。(笑)

していた。(お手玉を作っていた。)

A ソン ジブンカラ オトコンコドマ ソン タカンマワー アッタ

その 時分から 男の子どもたちは その 竹馬は あった

ロ カー。

ろうか。

B タカンマノ アッタ ター。

竹馬が あったよ。

A オー ソン タカンマモ オマイタチノ コマカウチモ アッタ

おお その 竹馬も あんたたちの 小さい時も あった。

一。

B アッター。

あった。

A ン一。<sup>(3)</sup> ナロ クート ムカシカラ タカンマワ <sup>(4)</sup> ハヤットン モ

うん。 それなら ずっと 昔から 竹馬は はやっている

ンター。  
ものよね。

B シアー ムスコンコドミ タカンマ ノツタリ ナ。 <sup>(5)</sup> コマシタ  
ん ああ 男の子どもたちは 竹馬に 乗ったり ね。 独楽を  
り (A ンター。) シオッタ トター。  
したり (うん。) していたんよ。

A ンター。 <sup>(6)</sup> コマヲ マワイター。  
うん。 独楽を まわした。

B ンター。  
うん。

A コマヲ ワガッテ ツク ツクッテ マワシオッタ モンナー。  
独楽は 自分で <sup>xxxx</sup> 作って まわしていたものねえ。

<sup>(7)</sup> ウタゴマツト ワガッテ シータゴト フトー ツクッテ ナー。  
自分で 好きなように 大きく 作って ねえ。

B <sup>(8)</sup> ワガッテ <sup>(9)</sup> ウーン。  
自分で うん。

A ホイデー <sup>(10)</sup> キシェゴマツテ エーター。 <sup>(11)</sup> \*  
それで ぶっつけ独楽って いって。

B <sup>(12)</sup> ドン チータン ナシタリ。  
なんか ついたり 何したり。

A イマン <sup>(13)</sup> マエカタデー オナゴドマ テマリヲ ツーク。 テマン  
今の 女たちは 手毬を つく。 手毬の

ノ ホカニャー アンビワ ナカッタロ カ。  
ほかに は 遊びは なかったらうか。

B <sup>(14)</sup> テマンノ ホ  
手毬の ほかに

(15)  
A カルタンゴトアッタ シオランジャッタ。  
カルタのようなものは していなかった。

B ンーニヤ。 ソギャン コタ シオラン。  
いいや。 そんなことは してあらん。

A ンー。 ンー マ オンモ テマーリ オトコワー アノ コマー  
うん。 うん ま おもに 手毬 男は あの 独楽

(16)  
( Bハハー。 ) ヤッタロー。  
( そうそう。 ) だったらう。

B ジャッタ トー。  
そうたらたんよ。

A ニ タカンマ ナー。  
それに竹馬 ねえ。

B ンー。  
うん。

(17)  
A ワーマワシャ シオランジャッター。  
輪まわしは していなかった。

B ワーマワシモ シオッタ。  
輪まわしも していた。

A ウーン。  
うん。

B ムスコンコドンモ ナンーゾ カンゾシテ アスビオッタ ト。  
男の子どもたちも 何や かやして 遊んでいたんよ。

A ウーン。 フエン ナレバ ヤッパリ ユキダルマモ ツクッテ  
うん。 冬に なると やっぱり 雪 たるまも 作って

アスビオッタロ カ。  
遊んでいただらうか。

B ハー ユキダルマモ ツクリオッタ。<sup>(18)</sup>  
ああ 雪たまるまも 作っていた。

A <sup>(19)</sup> ユキダルマガッ シェンデー オトコト ユ アルバ ソルバ ナゲ  
雪合戦で 男と よく あれを それを 投げ  
<sup>(20)</sup> オーテ ケンカ アгент シタ コタ ナカッター。  
合って 喧嘩 あんなことした ことはなかった。

B ンー。  
うん。

A ンー。  
うん。

B <sup>(21)</sup>  
~~~~~ シタ コタ ナカッター。(笑)  
した ことは なかった。

A (笑) ンー。<sup>(22)</sup> ソノー オトコノゴジャ サ。 ワシドンガ コマカ  
うん。 その 男の子ではね。 私たちが 小さい  
ウチニャー コマヲー ミンナントヨッカ トクベツ フトー ツ  
時には 独樂を 皆のよりか 特別 大きく  
クッテ サー。  
作って ねえ。

B ウン。  
うん。

A <sup>(23)</sup> ソッテ ブチテ ユーテ コー マワストヲ ソノ オデー (B  
それで むちって いて こう まわすのを その 緒で  
オーデ ノーテ) オデ ノーテー ソシテー ソリバ ソメワケ  
緒で 縋って) 緒で 縋って そして それを 染め分け  
テ サー。 コマモ ブチモ アノ アオノ アカノッテ ユーテ  
て ねえ。 独樂も むちも あの 青の 赤のって いて



キレー ソメワケテー イロバ ツケテー。  
きれいに 染め分けて 色を つけて。

B ウン。

うん。

- A <sup>(24)</sup> ソンテ ソノー オーキュ ツクッター コマーアニャー アリヤ  
そして その 大きく 作った 独楽には あれは  
アノー クギノ カワリニ フトカ イギッデ アスコオ ホ  
あの 釘の 代りに 大きい 錐で あそこを  
ギャテ <sup>(25)</sup>ゾー。 ホッデ<sup>(25)</sup> フナクギラー アッタ モン。 ムカシヤ  
穴をあけてたよお。 それで 船釘を あった もの。 昔は  
フナクギノー。 フナクギノ フトカトラー アー サキバ ホ  
船釘か。 船釘の 大きいのを ああ 先を 細  
ソー シテー <sup>(26)</sup>モトバ アノー <sup>(27)</sup>ハンマデ<sup>(26)</sup> テャテ <sup>(27)</sup>ビッシャーデ<sup>(27)</sup>  
く して 元を あの ハンマデ<sup>(26)</sup> 打って つぶして  
ソルヲ <sup>(28)</sup>ハバヒロ シテエテ <sup>(28)</sup>ヨイウェ <sup>(28)</sup>ヨイヨンゲンテ ユー  
それを 中広く しておいて 「ヨイウェ <sup>(28)</sup>ヨイヨンゲン」て 言っ  
テ <sup>(29)</sup>サー。 <sup>(29)</sup>ヨキノ カワリニ <sup>(29)</sup>ソン <sup>(29)</sup>ヨ <sup>(29)</sup>ソン <sup>(29)</sup>コマバ <sup>(29)</sup>ウチワ  
て ねえ。 斧の 代りに その その 独楽を 打ち割  
ト <sup>(30)</sup>デス <sup>(30)</sup>ヨ。 <sup>(30)</sup>ソッデー。 <sup>(30)</sup>ソン <sup>(30)</sup>フトカトバー <sup>(30)</sup>クラワシェテ<sup>(30)</sup>。  
るのですよ。 それで。 その 大きいのを 打ち当てて  
ソースレバ <sup>(31)</sup>ネー。 <sup>(31)</sup>フノ <sup>(31)</sup>ヨカ <sup>(31)</sup>トキヤー <sup>(31)</sup>ムコーノ <sup>(31)</sup>コマ  
そうするとねえ。 運のよい 時には 相手の 独楽が  
マッフタチ <sup>(31)</sup>パラット <sup>(31)</sup>ウチワットデス。 <sup>(31)</sup>ソリガー。 (B 笑)  
真ふなつに はらっと 打ち割れるのです。 それか。
- A <sup>(31)</sup>ソッデ<sup>(31)</sup> ソルヲ <sup>(31)</sup>ウチワッテ <sup>(31)</sup>キリキリ <sup>(31)</sup>マウ <sup>(31)</sup>トー。 <sup>(31)</sup>ソギャン  
それで それを 打ち割って きりきり(自分の独楽か)まわるんよ。 そんな

アソッバ シオッタトデス<sup>(32)</sup> ヨー。 オマラー アギヤントモ アッ  
遊びを していたのですよ。 あんたたち あんなのも あっ  
タロ ダ。 タコアゲモ アッタロ ダー。 オマイタチン ジブ  
ただろう。 尻あげも あっただろう。 あんたたちの 時分  
ンカラー。  
から。

B アッター。  
あつた。

A ウーン。 ヤッパ オモイダシエバ サー。  
うん。 やっはり 思い出せばねえ。

B ウーン。  
うん。

A タコアゲワ アッタ<sup>(33)</sup> ハ  
尻あげは あつた

B タコアゲモ アッタ トー。  
尻あげも あつたんよ。

A ン。 タコアゲデー アルバ ケンクワ サシエチャ アンビオラ  
ん。 尻あげで あれを 喧嘩 させては 遊んでいな  
ンジャッタ タイ。<sup>(34)</sup> ビードロンノッテューター ガラスン ナン  
かつた ねえ。 ビードロのって いて ガラスの 何の  
ノッテ ユーテ アノー シブノッテ ツケター。  
て いて あの 漆のって つけて。

B ンー。 ドギャンジャツ<sup>(35)</sup> ~~~~~。  
うん。 どんなたつただろう。

A ヌシャー ソギャン コター ヤッパリ<sup>(36)</sup> ソノ シオランジャッタ  
あんたは そんな ことは やっはり その していなかったた

ロー。

ろう。

B ンー。 ソギャン コタ シオランジャッタ。 アン ソン カソ  
うん。 そんな ことは していなかった。 あの その 火葬  
ーバマデ イタテ マー トバシヨッタ モン。  
場まで 行って まあ (風を) 飛ばしていたもの。

A ウーン。 ソコン カソーバツテ ソコン ウエ ター。  
うん。 そのの 火葬場って そのの 上よあ。

B アン。  
ああ。

A ンー。 <sup>(39)</sup> ズーッ タッカ トコレ イタテ トバサンバー トバン  
うん。 ずつと 高い 所に 行って 飛ばさなければ飛ばな  
ケーン。 (B笑) ンー。 <sup>(40)</sup> カルタン ナンノッチャ ナ ナカッ  
いから。 うん。 カルタの 何のって は <sup>xx</sup> なか  
タ。 ワシドンガ コマカ (Bアアア。) トキモ ナカッター。  
た。 私たちが 小さい (ああ。) 時も なかった。

コケニャ。

ここには。

B ナカッタ トー。  
なかったんよ。

A ンー ソン カルタン ナンノッチャ ヤッパ コリヤー (Bア  
うん その カルタの 何のって は やっぱり これは (あ  
ーリヤー <sup>(41)</sup> マチカラ <sup>(42)</sup> アノ ハヤッタ コトデー。  
れば ~~~~~) 町から あの はやってきた ことぞ。

B イマー イマゴロン モンノ スルバッカリ。  
<sup>xx xxxxx</sup> 今頃の 者か するだけ。

A マ ハナフダノ一 ハナフダノ一 ハヤッタ コトワ マー ヤッ  
 ま <sup>xxxxxxx</sup> 花札 か はやった ことは まあ やっ  
 (43) (44)  
 パ ココノ ブラクニャー ムカシャ アノ マサエミジードミヤ  
 はり この 部落には 昔は あの マサエミ爺 どもは  
 ムカシカラ アッタツジャッタロ。 イッパンテキナー ア <sup>(45)</sup>  
 昔から あったのたろう。 一般的な あ そ  
 ノ アラ アンビデガ カ カケテ ハナフダ シトットジャ モ  
 の あれは 遊び手が (金と)賭けて花札を しているのだ  
 ン。  
 もの。

B ン一。  
 うん。

A ソレ アン ジョロキヤー ナカマノ一 アノ <sup>(46)</sup> ウタガタカラ ウ  
 それあの 女郎買い 仲間の あの  
 シマツオンジニ イレズミ シタ アッ アノ ゴロンゴト イレ  
 牛松おじに 入墨をした あの ごろつきのように入  
 ズミ シタ ウシマツオンジニ ( B ン一 ) マサエミオンジー。  
 墨をした 牛松おじに ( うん ) マサエミおじ。

コン ナカマノ一 ヤッパ ジョロキヤー ナカマガー ヤッパ  
 この 仲間の やっぱり 女郎買い 仲間か やっぱり  
 ル アンビテナカマガ ソノ ハナフダヲ カケテ シオッタラシ  
 遊び手仲間か その 花札を (金と)賭けて していたらし  
 カッタ。  
 かった。

B ソギャン シオッタツジャロ。  
 そんなに してあったのたろう。

- A <sup>(47)</sup> ナンドン ワシドンガ コマカウチニャー ハナフダワー ゴク  
 たけど 私たちが 小さい時には 花私は ごく  
 ココニー ハナフダアソビノ ハヤッタ コタ モ コリモ シュ  
 ニニ 花私遊びが はやった ことは もう これも 終  
 ーシェンゴジャッタ モン。 ワシドンガ コドンガ ジベンナ  
 戦後たった もの。 私たちが 子どもの 時分は  
 ハナフダモー ミタ コタ ナカッタ。 <sup>(48)</sup> ナンドン ホントーニ  
 花私も 見た ことは なかった。 たけど ほんとうに  
 ソノ ハヤル コター ソーエーナ アソビテノ ナカマジャ イ  
 その はやる ことは そのような 遊び手の 仲間では  
 クレカワー イナ イナカッテ ユータケンチャー アル イチブ  
 いくらかは <sup>xxxx</sup> 田舎って いても ある 一部  
 ジャ ハヤッタラシカ。  
 では はやたらしい。
- B <sup>(49)</sup> ハヤットツ トタラー。 ムカシモ。  
 はやっているんよねえ。 昔も。

## 注記

- (1) 音声、意味ともに不明。
- (2) 「ジブンナ」は、連声現象。
- (3) 「ナロ」は「ソレナラ」の「ナラ」の音変化のものか。
- (4) 音声不明瞭ではっきりしないが、「ハヤットン モンター」に聞こえる。
- (5) 「コマシタリ」は、「独樂をまわしたり」の意。
- (6) 「マワイタ」は、イ音便。
- (7) 「ウタゴマツト」と聞こえるが、意味不明。
- (8) (9) 音声を重ね、聴取不能。意味も不明。
- (10) 「キシエゴマ」は、まわっている相手の独樂に対して、こちらのまわした独樂をぶっつけて倒す遊び。「キシエル」(ぶっつける、かぶせる)の動詞がある。
- (11) テープのA面からB面に移るところで、若干の欠如がある。
- (12) 音声、意味ともに不明。
- (13) 「マエカタデー」とは聞こえるが、意味不明。
- (14) 「ホ」は、「ホカニ」の言いさしと思われる。
- (15) 「カルタンゴトアッタ」の「タ」は、「トワ」の縮形。なお、「カルタンゴトアッタ シオランジャッタ。」は、問いかけ文。
- (16) 「ハハー。」は、かすかに聞こえる。
- (17) 「ワーマワシ」は、竹の輪を、針金でまわして歩く遊び。なお、「ワーマワシャ シオランジャッター。」は、問いかけ文。
- (18) 「オ」は、「ウ」に近く聞こえる。
- (19) 「ユキダルマガッシェン」は、「ユキダルマ」と「ユキガッシェン」とが結びついたもので、「ユキガッシェン」の言いあやまり。この一文も、問いかけ文。
- (20) 「ケンカ」と、次の「アゲント」との間に、ことばの省略がある。すなわち、「……喧嘩をするというような、あんなこと……」と考えられる。
- (21) よくは聞き取れないが、「オンダ ソギャン ケンカ」(私は

そんな喧嘩)とも聞こえる。

(22) ここに、やや長い間がある。

(23) 「ブチ」は、紐状のむちのこと。

(24) 「ソシテ」は、「ソシテ」と同じ。

(25) 「フナクギヲー」とあるが、「フナクギガ」とあるべきところ。

(26) 「テャテ」は、「タタイテ」の縮形。

(27) 「ビッシャーテ」の終止形は、「ビッシャグ」。

(28) 「ヨイウエ ヨイヨンゲン」は、掛け声と思われる。

(29) 「ヨ」は、「ヨキ」を言おうとしたものか。

(30)(31)(32)に「テス」が続出するのは、話者が、特に、同席者の筆者に話しかけようとする意識が働いたためと考えられる。

(33) 「ハ」は、「ハズ」を言おうとしたものか。

(34) 「ビードロ」は、ガラスのことであるが、ここでは、ガラスの粉で、尻あげの「ヨマ」(糸)に、これをつけたり、柿渋で、糸を強くして、相手の尻の糸を切るのを競った。

(35) よく、聞き取れないが、「タイロ」が予想される。

(36) 「ソノ」は、間投詞。

(37) 「ソン」は、間投詞。

(38) 「マー」は、間投詞。

(39) はっきり聞き取れないが、「ズーッ」と聞こえる。

(40) ここに、やや長い間がある。

(41) 音声不明瞭。

(42) 「アノ」は、間投詞。

(43) 「ブラクニャー」は、少しあとの「ムカシカラ アッタッジャッタロ。」に続く。

(44) 「ムカシャ アノ マサエミジードミヤ」は、連想的に挿入されたことば。

(45) 「ソノ」は、間投詞。

(46) 音声か、よく聞き取れない。「ウタガタカラ」の意味も不明。

(47) 「ナンドン」は、「ナレドモ」出自。

- (48) このあたり、若干、自動車のエンジン音が入る。
- (49) 「トタラー」は、「トタナー」からの文末詞か。



## 5. 恋 愛・結 婚 の 話

話し手

| (略号) | (氏 名) | (姓) | (生 年)   |
|------|-------|-----|---------|
| A    | 溝口 誠治 | 男   | 大正4年生れ  |
| B    | 尾上 サミ | 女   | 明治30年生れ |

A <sup>(1)</sup> マ ケッコノ ハナシー ムカシモ ヤッパリ マ <sup>(2)</sup> ケッコンナ  
 ま 結婚の 話は 昔も やっぱり ま 結婚は  
 ー イマノゴト <sup>(3)</sup> ジューナ ナカッタ。エー <sup>(4)</sup> ジューケッコンデ  
 今のように 自由には なかった。 ええ 自由結婚で  
 オラ アレ シートルケン アルバ モラワンバー <sup>(5)</sup> アスケ シー  
 私は あの人を 好んでいるから あの人を 貰わなければ あそこを 好い  
 トッケン アスケ イカンバッテ ユー コタ ムカシヤ デケン  
 ているから あそこに 行かなければっていうことは 昔は だめだっ  
 ジャッタ トタイナー。 オヤガ チャーント モー イカスッ  
 たんですよねえ。 親が ちゃんと もう (嫁に) 行かせる  
 トコレ ニヤーテ カルワレテ イタッ ナシタリ シオッタトジヤ  
 ところに 泣いて 背負われて 行ったり 何したり していたのだ  
ルケン ナー。 <sup>(6)</sup> (B笑) ソリヤー ムンナ シゴトジャッタロ。  
 からねえ。 それは 無理な しわざだったろう。

ムカシン モナー。

昔の 人は。

B <sup>(7)</sup> ナーンノ ムカシモ シータ モナー シートッタ トターイ。  
 何が 昔も 好いた者は (親に背いても) 好いていたんだよ。

A ンーニャ <sup>(8)</sup> シー  
い いや

B ココン <sup>(9)</sup> ココントン ココノ <sup>(10)</sup> ミチャー アノ <sup>(11)</sup> ショ <sup>(12)</sup> シーテ コ  
ココ(当家)の人も この 家は あの 女子いて(嫁入

ライタッジャー。(A笑) オンドンガ <sup>xx xx xx xxx</sup> オンドッガ <sup>xx xx xx xxx</sup> ジダイニャ  
って)来られたんだ。 私たちの 時代には

(A笑) オ <sup>xx</sup> オ <sup>xx</sup> オ <sup>xx</sup> オリャ <sup>(13)</sup> シータ モナ イッチェテ <sup>xx</sup> イ  
私は 好いた人(恋人)は 残しておいて

<sup>(14)</sup> タ イタトナンドン。(A笑) (笑)  
<sup>xx</sup> (嫁に)行ったのだけれど。

A <sup>(15)</sup> シータ モナ イッチェテ イタ。(笑) ンーニャ ムカシャ  
好いた人は 残しておいて(嫁に)行った。 い いやまあ 昔は

<sup>(16)</sup> カワイ <sup>(17)</sup> ゲマカラ カンガエレバ <sup>xx xx xx xxx</sup> カワイソー <sup>xx xx xx xxx</sup> カワイソーナ  
かわいそうなもので 今から 考えると かわいそうな

モンジャッタ トサ。 オンモ オボエトットテ イカンチュート  
ものだったんよね。 私も 覚えているんだが (嫁に)行かないと

バ カルテイタテ ゲタワ ヨノモンノ モッテイタテ ソン イ  
いうのを 背負って行って 下駄は 他の人が 持って行って その 行

カンテ ユーテ ナクトバ カルテイタテ ソシテ ヤッテ サ。  
かないって言って 泣くのを 背負って行って そして(嫁に)やってね。

(Bアッ 笑) ンーニャ ムリナ シゴトデモ アリモ スッ  
あっ いやまあ 無理な しわざでも ありも する

タイネー。 イマ カンガエテミットユート ンーニャ ホンナ  
んだねえ。 今 考えてみるというと いやまあ ほん

コトー。

とね。

B (笑) シータ モンドーシモ ナーリ イカンテ ユートバ ヤッ  
好いた 者 同士も いっしょになり (嫁に)行かないっていうのさ

ターリ スル モンモ ア アッタ トー。

(嫁に)やったりする者も あったんよ。

A ン モー ソリヤ モ ソーソー シータ ムカーシデモ ヤッ  
うん もう それは も そうそう 好いた 昔でも ヤッ

パリ ( Bン ムカシデモ ) ジェンーブ スカン トコレ ソノ  
はパリ ( ン 昔でも ) 全部 嫌いなところに その

カルワレタリ ナシタリ シテ キョーシェイテキ ヤラレタッ  
背負われたり 何したり して 強制的に (嫁に)やられた。

テ ユーコトデワ ナカ トサー。 ソラー。

て いうことでは ないんよねえ。 それは。

B ナカ ト ナカ ト。

ないんよ ないんよ。

A ン ムカシモ ヤッパリ ジユーケッコンヲ シテ シータ モノ  
ん 昔も やっぱり 自由 結婚をして 好いた 者と

ート イッション ナッタ モンモ マ イクラカワ ヲール。

いっしょに なった 者も まあ いくらかは いる。

ソノ タイハンワ ム ムカシン モナ スカンテ ユータケン~~チ~~  
その 大半は <sup>xx</sup> 昔の 者は 好かないって言ったからって

オヤノ アスケ ヤローテ オモエバ ソケ ニャーッデモ イカ  
親が あそこ(嫁に)やろうと思ったら そこに 泣いてでも 行か

ンバ ションナカッテ ジダイジャッタ トター。

なければ しょうがないっていう時代だったんだよ。

B アスケー イケバー <sup>(20)</sup> アノー ニンゲンモ スクナイシー <sup>(21)</sup> アノ  
「あそこ(嫁に)行けば あの 家族も すくないし あの

ー ヒャ<sub>xxxx</sub> ヒャクショーモ スクナイシー ヤサシカ ザイテ<sup>(22)</sup> ユ  
百姓仕事も すくないし 生活しやすいよ」と言。

ーテ ヤツタリ ナシタリ シオライタ トタ。 ムカシャ。 オ  
て (嫁に) やったり 何したりしておられたんだよ。 昔は。 お  
ンジ バッチノ キニイッテ。  
じさんや小姑の気に入って。

A ンー ソギャンモ アッタロケド アスコワ カネモチケーン ヨ  
うん そのようにも あっただろうけれど あそこは 金持ちだから よ  
カ<sup>(24)</sup> トコルケン シンドワ シタケンチャ アスケ ヤランバツテ  
い 家だから 辛苦は しても あそこは (嫁に) やらなけれ

ユー ヨクテユー モンガ ニンゲンワ ツンヌードル モンジャ  
ばという 欲という ものが 人間には つれそっているものだ

<sup>(25)</sup> カラ サー。 ( B笑 ) ソイデ イカンチュートバ ヤッター。  
から ねえ。 ( ) それで (嫁に) 行かないって言うのを (嫁に) や

イマワ ソルガ ハンタイジャ モン。  
った。今は それが 反対なものの。

B ソルガ ハンタイ。  
それが 反対。

A ヨンニュ モッタ トコレ イケバ シンドスルケンカー ソン  
たくさん (財産を) 持った家に行けば 辛苦するから その  
イマワ ヤランテ。 ヒャクショーバ ゴーギ スツ トコレ ヨ  
今は (嫁に) やらないのに。 百姓仕事を ひとく する 家  
メコワ オラン トゾ。 イマワ。  
嫁は おらないんだよ。 今は。

B (笑)

A マ ジダイノ ズート コー カワッテ キタケン ネー。  
ま 時代が ひとく こう 変って きたから ねえ。

B (笑)

A マ ソノ ジダイッテ ユー<sup>(26)</sup> ネ。 ニンゲンノ カンガエツ  
ま その 時代って いう ね。 人間の 考えて  
テ ユー ユー コトワ ジェンブ。  
xxx いう ことは 全部。

B ソーシテ シテモー ヤッパ ムカシャー ヨソソ モントワ<sup>xx</sup>  
そんなにしても やっはり 昔は 他所の者とは  
<sup>(27)</sup> <sup>(28)</sup>  
アノー アギヤント フーフニャ ナランテ ユーター (Aソ  
あの あれ 夫婦には ならないと言って う  
ー) トコロ ド ドシデ ナカルバツテ シオツタトナドソ  
ん) 地の者 同士で なければと言って (結婚を)していたんだけ

イマワ ヤッパル (Aソ ヨ<sup>xx</sup> ヨソソ モンデー。) コグチカ  
れど今は やっはり (ん 他所の者で。 ) 小口から

<sup>(29)</sup> <sup>(30)</sup>  
ラワ ヨソサニャ イーク ヨソ<sup>xx</sup> ヨソソ モンワ コグツツアニャ  
は 他所へ (嫁に)行く 他所の者は 小口に

<sup>(31)</sup>  
モラウ ス スル (Aソ<sup>xx</sup> ニ。) ヨソ ナッタ。 ヨソナキヤ  
貰い する ようになった。(そのような)世の中に

ナッタ モンジャッケン (Aソソ<sup>(32)</sup>。) クラット シツチゴトツ  
なった ものだから (そうそう。) ころっと 違ってしまった

トジャン モンナー。 (Aソソ<sup>(32)</sup>。) オンドンガ ワッカ ウ  
ているのだものねえ。 (そうそう。) 私たちが 若い頃

チニャ ソギャンジャッタ ト。 トコロドシ ナランバー<sup>xx</sup>ジャッ  
には そんなだったんよ。 地の者同士いっしょにならなければいけ

夕。

なかった。

A. ソナラー オマエタチノ<sup>(33)</sup> ソノ ワッカ ジブンナー<sup>(34)</sup> ソノ  
 それなら あんたたちの その 若い 時分は その  
 マ オナゴノ ワガ シータ オトコン トコレ アスビ バンニ  
 ま 女が 自分が女子いた男の 所に 遊びに 晩に  
 イク モンモ オッタロンドーン<sup>(35)</sup> マ ダイタイガ<sup>(36)</sup> マ オトコ  
 行く 者も あつたろうけれども ま 大方か ま 男か  
 ガ オナゴン トコレニヤ ヤッテ イクヨーン ヤッパリ<sup>(37)</sup> ソノ  
 女の 所には (遊びに) 出かけて行くように やっはり その  
 マー ニホンノ フーシュワ ( Bソギャン<sup>(38)</sup> ) ナッ  
 まあ 日本の 風習は ( そんなに ) なっ

トットケン ノー。

ているから ねえ。

B ウーン ウーン。

うん うん。

A ソリヤ オナゴワ ヤッパリ ジュドーテキ アクマデ<sup>(39)</sup> ソノー  
 それは 女は やっはり 受動的 あくまで その  
 マツミ。 ソースット オトコワー<sup>(40)</sup> エー ヤッパリ<sup>(41)</sup> ソノー マ  
 待つ身。 そうすると 男は ええ やっはり その ま  
 ー ハツドーテキナ アギヤントジャリケン モトカラ<sup>(42)</sup> デ<sup>xx</sup> デ  
 あ 発動的な あんなのだから もとから 歩い  
 グデ ヤッテ イク モンガ オーカッタロ<sup>(43)</sup> ムカシャ ヨ  
 て やって 来る 者が 多かつたろう 昔は 夜  
 ビヤッテ ユートノ ハヤリオッタロ ダー。  
 這って いうのか はやっていたなろうか。

B ハヤリオッター。 オッドンガ ワッカ ウチニャー。  
はやっていた。 私たちか 若い 頃はは。

A ウーン。  
うん。

B ホ ホンナー ヨビャーン ゴロゾロ ゴロソロ<sup>(44)</sup> ツンヌーデ<sup>xx</sup>  
ほんとい 衣 遠い ぞろぞろ ぞろぞろ 連れだって  
サルキオッタ ト。 オトコドンガー。  
歩きまわっていたんよ。 男たちか。

A ドギャン シータ モンノ ネシエンカッテ イタッテキタ ト  
どう 好いた着か (いっしょに)寝させないかってやってきた  
キャ ヤッパリ<sup>(45)</sup> マー (B笑) ハラワ タタン ウレ ウレシ<sup>xx xx</sup>  
時は やっぱり まあ 腹は 立たなくて 嬉し  
カッタロドン ワガ スカン<sup>(46)</sup> ヨーユ モー<sup>(47)</sup> ソノー ケムシノゴ  
かったろうけれど自分か好かない ほんといもう その 毛虫のよう  
ト<sup>(48)</sup> キロカ キロタ モンノ<sup>(49)</sup> アリヤ スカン ザイテ ユートノ  
に 嫌いな 嫌った 着か 「あれは 好かないよ」って言う着か  
ヤッテキテ ジェタッテデ<sup>(50)</sup> トマラシェロッター ユーテ ソケ  
やってきて 口説いて 「泊ませろ」って 言って そこで  
ジェタッ トキャ ヤッパリ ウスバラン タチオッタロ ダー。  
口説く 時は やっぱり むかつ腹か立っていたらうか。

B ウスバラン タチオッター。 ソギャン モンノ オッタ バン。  
むかつ腹か立っていた。 そんな(好かないのにやってくる)着かあったよ。  
ムカシャー。  
昔は。

A ソギャン トキャ アシデ ケリオッタ ナー。 ジキー。 アシ<sup>(51)</sup>  
そんな 時は 足で 蹴っていたんかね。 すぐは。 足

デ コソコソ ヤッター。 (笑)

で ミセミセ やって。

B <sup>(52)</sup> ~~~~~ (笑) (A 笑) <sup>(53)</sup> アシデモ テーデモ ケランジャッタ  
足でも 手でも 蹴らなかつたけ

イドン ショーヨー イカンバツテ ユテ タツテ スゲテー (   
れども 小便に 行かなければって言って立って 逃げて )

A オー ) カゴミオッタ。

おう ) 隠れていた。

A オー ショーベンシーギャ イカンバツテ ユーテ モー タツテ  
おう 小便しに 行かねばって 言って もう 立って

スゲテ カゴミオッタッター。

逃げて 隠れていたんだって。

B カゴミオッタ。

隠れていた。

A ン ソリャ ソージャロ。 スカン モントワ ドーシテ ( B ン  
ん それは そうだろう。 好かない者とは どうして )

ー ンサー。 ) <sup>(54)</sup> ハナシモ シューゴタ ナカ モンノー。  
うんほんとにね) 話も したくはない ものねえ。

B ドーシテ ( A ウーン。 ) オッドンガ ジダイワ オ オ ( A  
どうして ( うん。 ) 私たちの 時代は                       )

ムカシン モンチャ イマン モンチャ オナシ コッ ザ。 )  
昔の 者でも 今の 者でも 同じ ことだよ。

オナゴノ スクノーシテー オトコノ <sup>(55)</sup> ヨンニュー×カッタトジャル  
女が すくなくて 男が 多かったのだから

モンナー。

ねえ。



A ソッテ バカワレタ トター。  
それで (女が) 奪い合われたんだよ。

B バカワレオッタ トサー。  
奪い合われていたのよね。

A ンー。  
うん。

B ヨーユ モー <sup>(56)</sup> オイオ ゴロゴロ サルキオッタ ト。  
ほんとに もう ~~~~~ そろそろ 歩きまわっていたんだよ。

A ウーン。  
うん。

B <sup>(57)</sup> ニ アノ オナゴドンガ スクナカッタ トー。 <sup>(58)</sup> ニサンニ コグ  
あの 女たちが すくなかったんだよ。 小口

チー ニサンニン オッタロ カニヤー。  
に 2.3人 いたんだろうかねえ。

A イマワー ウーカンドン ナー。  
今は 多いけれどもねえ。

B ハー。  
はい。

A ンー。  
うん。

B イマワ アノ オナゴドンガ ウーカンドン。 オッドンガ ジ  
今は あの 女たちが 多いけれども。 私たちの 時  
ダイニヤー オナゴドンガ スクノーシテ <sup>(59)</sup> (A ンー) ホンナ  
代には 女たちが すくなくて (うん) ほんとに  
バカワレオッタ トー。 コッチャン コヨッテ。  
奪い合われていたんだよ。 こっちに 来いって。

A シー ソ ソラ ソー ジャッタロ。 ドーシテ スカン モンノ  
うん それは そうだったろう。 どうして 好かない 者が  
ジェタッ トキャ ヤッパ ウスバラモ タチオッタロ。 ハヨニャ  
口説く 時は やっはり むかっ腹も 立っていたらう。 早くねえ。

ー。コヤツバ ドギャン シテ カヤソー カナッテ (B ハヨー)  
こいつを どんなに して 帰そう かなと思って (早く)

ヌゲテミタッ ナシタリ シオッタトジャロ ダー。  
逃げてみたり 何したり していたんだらう。

B ヌゲテ カゴミオッ<sup>(60)</sup> タ。  
逃げて 隠れてい……………。

A ムカシン モンモ イマモ オナシ コト タイノー。 ソースレ  
昔の 者も 今(の者)も 同じ こと よねえ。 そうすれば。  
バ。 オトコト オナゴッテ ユートワ ナンノー。  
男 と 女って いうものは 何が。

B オナシ コト オナシ コト。  
同じ こと 同じ こと。

A ムカシモ イマモ<sup>(61)</sup>。 マ ムカシャ<sup>(62)</sup> ヨメゴモリヤッテ ユー  
昔も 今も。 ま 昔は 嫁貰いって いう  
トガ イマワ マ ヨメゴモリヤワ タッタ フトバンニ<sup>(63)</sup> トーカ  
のが 今は ま 嫁貰いは たった 一晩で 遠い

トコレドン (B ハー) イタ トキャ<sup>(64)</sup> エー ソノ オー  
所以でも (はい) 行った 時には ええ その

ハナシモ<sup>(65)</sup> トブギレ トリキメテ<sup>(66)</sup> エー チャモ イ モロテ<sup>(66)</sup>  
話も 取り決めて ええ お茶も 貰って

チャモ イレテ<sup>(66)</sup> (B ソー ソー。) ソシテ エー マター  
お茶も 入れて(貰って) (そう そう。) そして ええ また

ムコイール ヨメモ ツレテ イクトユー コトモ モ カンタ  
 婿入る(ことも) 嫁も つれて 行くという ことも もう 簡単  
 ンニ ヨノナカノ スステ<sup>(67)</sup> ナッテキタトン ムカシヤ ソージャ  
 に 世の中が 進んで なってきたけど 昔は そうでは  
 ナカッタ モンナー。  
 なかった ものねえ。

B ハー。

はい。

A ムカシ イクラバンバカイ ヤッテ<sup>(68)</sup> ソン イチバン ナンカ  
 昔は 幾夜 ぐらい 出かけて その 一番 長い(場合)  
 イッシューカンバカルモ。

は一週間ばかりも(出かけていたろうか。)

B ソギャン イッシューカンモ<sup>(69)</sup>。

そんなに 一週間も (出かけてはいなかった。)

A ソギャンナ<sup>(70)</sup> ア ソノ モラギヤ<sup>(71)</sup> イタテ (B ンー。) アノ  
 そんなには あ その (嫁を)貰いには 行って (うん。) あの

ミャーバンテ イカンジャッタ ナ。 ダイタイ ミバンバッカリ  
 毎晩とは 行かなかった ね。 およそ 3 晩 ぐらい

イケバ デケオッタ ナ。

行けば (話が)まとまっていたね。

B ミバン<sup>(72)</sup> ミバンナー。

3 晩 3 晩は。

A ナンカ<sup>(73)</sup> トコルガー。

長い 所が。

B ハー。 ミバンナ イキオライタ ナー。

はい。 3 晩は 出かけておられたねえ。

A ンー。 ハヨ クルレバ ヤッパ ネウチン ナカッテ  
うん。 早く(嫁を) くれると やっぱり 値打が ないって (

B 笑) ア ソノー カンガエト ッタ ッジ ッタ ロ カー。 (B  
あ その 考えていたのだったろうか。

ドーギャン) ムカシヤ。  
どんな) 昔は。

B ドギャン <sup>(74)</sup>  
~~~~~  
どんな

A エーッ ソギャン カンタンニ クルエバー  
ええ そんなに 簡単に (嫁を) くれると

B カンタンニ <sup>(75)</sup>  
ヤッ  
簡単に (嫁に) やる

A <sup>(76)</sup>  
ムシコ ナサルッテ ヤッパリ カンガエテエター  
されるって やっぱり 考えておいて

B ハー カンタンニ <sup>(77)</sup> ヤッ (Aウン。) <sup>(78)</sup> アノ ヤッチャ イーオ  
はい 簡単に やる (うん。) あの (嫁に) やるとは 言って  
ラレンジャッタ ト。  
らっしやらなかったんよ。

A ヤッタカ ヤロテ オモトッタケンチャ ヤッパ ミバンバカリヤ  
(嫁に) やりたい やろうと思っけていても やっぱり 3 晩 ぐらいは  
<sup>(79)</sup> <sup>(80)</sup>  
ー ソノ コヤシェオッタ トター。  
その (相談話に) 来らせていたんだよ。

B ソー。 (笑)  
そう。

A ンー。 ムカシン モナ ヤッパリ ソースット イェラカ ネー。  
うん。 昔の 昔は やっぱり そうすると 偉いねえ。

イマン モンヨリカー。 (B笑) ンー。  
今の 着よりか。 うん。

B イマゴロワ ヤサシ <sup>(81)</sup>  
今頃は 簡単

A モラオーテ オモタ モナ <sup>(82)</sup> イッシューカンチャ コンバジャ モ  
(嫁を)貰おうと思った者は 一週間でも やって来なければだめ  
ンネ。 モー ドーアッテ モラオーテ オモエバー。  
だものね。もう どうしても 貰おうと思えば。

B モラオーテ オモエバ イッシューカンモ <sup>(83)</sup> カヨー カヨーテ キ  
(どうしても)貰おうと思えば 一週間も 通って  
オライタッ ター。  
来てらっしゃったよ。

A <sup>(84)</sup> ソースレバー <sup>(85)</sup> マー エ ソーノ マ ケッコンシキテ マ シュ  
そうすると まあ え その まあ 結婚式というのはまあ 祝  
ーギノ コト ター。  
儀の こと よお。

B ウン。  
うん。

A ムカシャー シューギャー ソースットユート ハデカッタロ カ  
昔は 祝儀は そうするというと 派手なかつたろうか。  
一。 <sup>(86)</sup> オマエタチン ワッカ ジブンノター。  
あんたたちの 若い 時分の結婚式は。

B ハデン ナカ。 ハデニャ ナカッタ ト。  
派手ではない。 派手には なかつたんよ。

A ソン ジブンノ <sup>(87)</sup> ジェ ジェンデ イクラバカーリ。 ブッカモ  
その 時分の <sup>xxxx</sup> お金で いくらぐらい。 物価も

ヤスカテ イモノー ソン トージャー

安いので 落か その 当時は

(88)

B ドーシテ イクラバカリジャイロ シランドンカ ナーンモ ソギヤ  
どうして いくらぐらいだろうかと 知らないけれども 何も そんな  
ーン イマンゴト ソギヤン (A ンマー) ハデン スン モン  
なに 今のようになん んな ( 今 ) 派手にする もの

カナー。 ( A サケ ショーチュー )  
かねえ。 ( 酒 焼酎 )

A マチデ スッチュー コタ ジェンジェン ナカトルケン ナ。  
町で(結婚式を)するということは まったく なかったから ね。

B ンー。 ワガワガエデ。  
うん。 自分自分の家で。

A ワガワガエデ。  
自分自分の家で。

B サケーワー ケ ケンブツニンガー ヨンニュ ノミオッタ トタ  
酒は <sup>xx</sup> 見物人か たくさん 飲んで"いたんだ"  
ー。 オキャクサンヨリカー。 ケンブツニンニ デヤーテ ノマ  
よ。 お客さんよりも。 見物人に (酒を)出して 飲ま

シェオッタ モーン。

せていたもの。

(89)

A ナンノトキジャッタ ナー。 オリヤ ワッカ ジブンニ オボエ  
そうだった ねえ。 私は 若い 時分に 覚えて

トッター。 ケンブツニンニー サケ ショーチューヲ デヤータッ  
いて。 見物人に 酒 焼酎を 出したり

<sup>(90)</sup>  
ソーメンヲ カシタリ シオッタ ズ。 ムカシヤ。

そうめんを 食べさせたり していたんだよ。 昔は。

B ソー ソー ソギャン シオライタ。  
そう そう そんなに しておられた。

A クジラヲ カマシエター。  
鯨(の肉)を 食べさせた。

B ウーン。 サカナ<sup>(91)</sup>  
うん。 肴

A ソースレバ アスコノ シューギャー ヨカ シューギジャッタ<sup>(92)</sup>  
そうすると あそこの 祝儀は よい 祝儀だったと

テ ヨンニユ ゴツツオン<sup>(93)</sup> テャー トコン シューギャ ホメテ  
たくさん ご馳走を 出した 所の 祝儀は ほめて

ゴツツオン デン トコラ クソングト ユーテエテ<sup>(94)</sup> アラ ヤ  
ご馳走が 出ない 所は くそのように 言っておいて あれば

ブレシューギノー アンドマ ツマランテ ユーター ワガ ハラ  
みすばらしい祝儀とか あの人は つまらないと言って 自分が 腹

イッピャ ソーメンノー クジラノー (B笑) ナンノッテ ユ  
いっはい そうめんとか 鯨とか 何のと 言っ

ター<sup>(95)</sup> ソン ズンブン エテ クタ<sup>(96)</sup> トコンノタ ヨカ シュー  
て その 腹いっはい 貰って 食べた 所の祝儀は よい 祝儀

ギジャッタッテ ユーテ ホメテ ノー。 ソン ケンブツニンノ  
だったと言って ほめて ねえ。 その 見物人が

サー。 (Bソー ソー ソ。) カッテナ モンジャ モン。  
ねえ。 (そう そう そう。) 勝手な ものだ もの。

ニンゲンノ ヨノナカワー。  
人間の 世の中は。

B ソギャン シオッタ ト。  
そのように していたんよ。

A ンー。 エ ソリケーン ソノー ヨカ シューギッテ イワルッ  
うん。 え そうだから その よい 祝儀と 言われる  
タメニヤ シェッカクー ソン シェンバケンカッテ ユーテ  
ためには わざわざ その しなければいけないと 言って  
ヤッパ ソノ ゴッツォバ シオッタ トター。 ユー イワレン  
やっはッリ その ご馳走を していたんだよ。 (人から)よく言われ  
バッテ ヤッパ オモテ ムカシノ コトジャアルケーン。 (B  
なければとやっはッリ 思っ 昔の ことであるから。 (B  
笑) <sup>(97)</sup> ソー <sup>(98)</sup> ソー ソートー ヨンモ シェン。 ソート オッ  
そう そう 呼びもしない。 外に お  
テ ゴッツォ ウケタ モンガ ヨンニユ ショーチュバ <sup>(99)</sup> ヒンノ  
て ご馳走をして貰った 者が たくさん 焼酎を 飲んで  
マッ トゾ。 ソコデ <sup>(100)</sup> スベッアガッテ キタッ ナシタリ シテ  
しもうんだよ。 そこで じわじわと(家)に上ってきたり 何したり して  
エター (笑) (B笑) ソーシテエテ ケンカ シデキヤータッ  
おいて そうしておいて 喧嘩を してかしたり  
ナシタリ シテ。 ムカシワ <sup>(101)</sup> ンーニヤ ホンナコテ サー。  
何したり して。 昔は いや ほんとうに ねえ。

B (笑) ソギャン シオッタ ト。  
そんなに していたんよ。

A モー ソノー トリシマッモ ナンモ ナカッタ トサー。 ソト  
もう その 取り締まりも 何も なかったんよねえ。 外  
デ <sup>(102)</sup> ゴッツォ ウケトー。 イチバン ハジメニ ネー。 ヨンニ  
で ご馳走を 受け取る。 一番 初めに ねえ。 たくさ  
ユー ショーチュヲ ヌーダーリ ソーメンヲ クタリ スットユ  
ん 焼酎を 飲んだり そうめんを 食べたり するとい



トー <sup>(103)</sup> エシノ ハニヤ イテ クタリ ナシタリ スレバ <sup>(104)</sup> ハツ  
うと 縁の 端に いて 食べたり 何したり すると 恥

カシカロガー ヤッパリ ノマン ウチニヤ ダッデモ ニンゲン  
かしかりうか やっはり 飲まないうちは 誰でも 人間

ジャリケン。 ソリケン フルカブリバ シテー (B笑) ヨン  
たから。 そうたから ほうかぶりを して ( ) たく

ニュー スーダリ クタリ スル モナー チャーント モー シュ  
さん 飲んだり 食べたりする 者は ちゃんと もう 祝

ーギン トキャ ワーガエカテ メシヤ クーアン トゾー。 ( )  
儀の時は 自分の家で 飯は 食べないんだよ。

(105) (106)  
B笑) ド ハラバ スケ ゴツツォジャルケン。 ワーガエテ  
腹を ご馳走たから。 自分の家で

(107)  
イモバ ゴーヨリカ ヨカ モンネー。 ソーメンノ ナンノッ  
蕎麦を 食べるよりか よいものねえ。 そうめんやら 何やら

テ ショーチュノッテ アットジャッケン サー。 フルカブリバ  
て 焼酎やらって あるのたから ねえ。 ほうかぶりを

シテ チャーント カマエテエテ ヘンソーシテ イタトッ ト  
して ちゃんと 用意しておいて 変装して 行っているん

ゾ。 (B笑) ナンドン ソン <sup>(108)</sup> ワレドンノー ゴーギ ヒンヌ  
だよ。 ( ) たけども その 自分達が しこたま 飲ん

(109) (110) (111)  
ーデ トナリノ アッテ トーソー フーカブリヤ オットッテエ  
で 隣の ほら トーソー ほうかぶりは 取ってしまっ

テ ザシキサン ドンドン ドンドン ワーガエノゴト (笑)  
おいて 座敷へ とんとん とんとん 自分の家のように

(112)  
アガッテ イタテエテ。 ソノ ウチャ ナンノ アッテ ミンナ  
よって 行っておいて。 その うちには 何か ほら 皆の

ントバ トッテ <sup>(113)</sup> イチクタリ ナシターリ シテエテ (笑)。  
ご馳走を取って 食べたり 何したり しておいて。

B ソギャーン シオッタ トター。 (A笑) (笑) <sup>(114)</sup> オヨクンザ  
そんなに していたんよお。

ー オー <sup>(115)</sup>  
~~~~~

A <sup>(116)</sup> オ ワシエ オボエトーッ。 ソルバー。 (B笑) ファーッテ  
お 私も 覚えている。 それを。 わあーって

ゴーギー ソトカラ オメテ ヨカ シューギ ヨカ シューギ  
ひとく 外から 叫んで <sup>xxxx</sup> <sup>xxxxxxx</sup> よい 祝儀と

<sup>(117)</sup>  
テ ゴッツォン ヒンナッタッテ ハラノ フクレタグリャノ ハ  
言っ て ご馳走に なって ほら 腹が ふくれたという位の

ナシジャン モーン。 ソトデ ウタバ ウタウトモ オル ナー。  
話た もの。 外で 歌を 歌う者も いる ねえ。

(B笑) <sup>(118)</sup> モー 又シドンバツカリ ヨッパローテ サー。 ソ  
もう 自分たちはばかり 酔っぱらって ねえ。

トデー。 デ ニギヨータ トナー。 イマヨリカー。  
外で。 それで にぎわってたんよねえ。 今よりか。

B ニギヨーッタ ト。  
にぎわっていたんよ。

A ン。  
うん。

B イマドン <sup>(119)</sup> シューギャ <sup>(120)</sup>  
今では 祝儀は

A <sup>(121)</sup> ムカシャ ナロー イマノ シューギャ アギヤントバ スレドン  
昔は だったら 今の 祝儀は あんなの(衣裳)を するけれど

カ ムカシャー ツノ ハナヨメーサンノ イショーガ 今ゴトツ  
も 昔は その 花嫁さんの 衣裳が 違って  
タロー。

いたろう。

B イショーワー 今ゴトツタ タ。 アッテ。  
衣裳は 違っていたよ。 ほら。

A シー。 カミヤ ドギャン イーオッター。  
うん。 髪は どんなに 結っていた。

B ヤッパー マルマゲー。  
ヤッは<sup>○</sup>リ 丸髷。

A マルマゲー。  
丸髷。

B アー。  
ああ。

A ツノカクシテ ユートワ ナカッタッジャロ。  
角隠して 言うものは なかったのたろう。

B ナカッター。  
なかった。

A ムカシャ マルマゲ<sup>バ</sup>カリ (B アー。) ジャッタロー。  
昔は 丸髷ばかり (ああ。) だったろう。

B マルマゲ<sup>バ</sup>ッカー。  
丸髷ばかり。

A マルマゲ ユータ シャシンノ オルゲノ オッカントノ ドケジャ  
丸髷を 結った 写真が 私の家の お母さんのか どこだか  
口 <sup>(122)</sup>アッタテ ネー。 モー イマ (B シー。) ミシケダシャ  
に あったのに ねえ。 もう 今 (うん。) 見つけ出すこと

エンドーン。ワッカ ウチー (Bアッタロ。) ナンシタト  
はできないけれども。若い頃 (あつたろう。) 何したのか。

ノー。カカヤンノー マルマゲバ ユータ シャシンノー ドケ  
お母さんの 丸髷を 結った 写真が どこだ

(123)

ジャイロ アッタテー。

かに あつたのに。

B ムカシャ マルマゲ<sup>(124)</sup>リンジャッタ ト。  
昔は 丸髷 だったんよ。

A ソースレバ イマ ヨーフクナンドーン ソノー ムコドンモー  
そうすると 今は 洋服だけけれども その 婿さんも  
ワフクバカッジャッタ モン。

和服ばかりだったもの。

B ン。  
うん。

A ヨーフクテ イツクヨン ハヤラン<sup>(125)</sup>ジャッタケン。 (Bハー。)  
洋服って ちっとも はやらなかったから。 (はい。)  
マーダ。  
まだ。

B ヨーフクジャ ナガッタ ト。 ワフクジャッタ ト。  
洋服では なかったんよ。 和服だったんよ。

A ヤッパ ソノー サンサンクドノゴトアットワー イマト カワラ  
やっぱり その 三々九度のようなのは 今と 変らなかつ  
ンジャッタロ カ。  
たのたろうか。

B カワラン。 (A ンー) ヤッパリ アノー  
変らない。 (うん) やっぱり あの

A ヤッパリ オナゴノ <sup>(126)</sup> ホンカラ ハヨー ヨメゴノ <sup>(127)</sup> ホンカラ ハ  
やっぱり 女の 方から 早く 嫁さんの 方から 早

ヨー ( B ンー。 ) サカズキバ ヤッテー。  
く ( うん。 ) 盃を やって。

B ンー。  
うん。

A ソルカラ オトコン ホーン ヤッテー。  
それから 男(婿)の方へ やって。

B ンー。  
うん。

A ソッデ ズーットー <sup>(128)</sup> ソノー ソ マー サンミズツ アギヤント  
それで ずっと その そ まあ 3回ずつ あのよう

シテー サンサンクドバ シオッタ トタ。  
して ミタカ度をしていたんだよ。

B ソー ソ <sup>(129)</sup> シュッタ。  
そう そ していた。

A ソイデ ソイバー <sup>(130)</sup> サシテシヨー ジャカラ ヤッパ <sup>(131)</sup> チョーニンガ  
それで それを やっぱり 1中人が

ー ミトドケテ ( B ハー。 ) ソッデ イチバン <sup>(132)</sup> サキ イチ  
見届けて ( はい。 ) それで 一番 先 ー

バン オワリ <sup>(133)</sup> ワガー アノ ヌーデー ( B ハー。 ) ソッデ  
番 終りに 自分(仲人)かあの 飲んで ( はい。 ) それで

コー オキ オッタ ト。  
こんなに 置いていたんよ。

B ソー。  
そう。

A イマンゴト ナ。  
今のようね。

B ン。  
うん。

(134)  
A            ト オナシ コト ター。  
同じことよ。

B ハイ。  
はい。

A ンー。  
うん。

B ソン サンサンクドワ <sup>(135)</sup> オナシ コトジャロ。  
その ミタ九度は (今も昔も) 同じことだろう。

## 注記

- (1)「マ ケッコンノ ハナシー」は、「ま、結婚の話と云えば」というようなニュアンス。
- (2)「ケッコンナ」は、連声現象。
- (3)「ジューナ」は、「ジューニワ」の縮形。
- (4)「エー」は感声語。
- (5)「アスケ」は、「あそこ」に当るが、文脈上、「を」格に訳した。
- (6)「シゴト」は、「仕事」の意ではなく、「しわざ」に当る。
- (7)「ナーンノ」は、「いやいや、どうして何が」のニュアンスである。
- (8)「シー」は、「シートル」とか「シートツタ」を言おうとしてのもので考えられる。
- (9)「ココントン」は、「ココノトモ」で、「ト」は準体助詞。「ここの奥さんも」の意。
- (10)「ウチャー」が、こう聞こえる。
- (11)「ショ」は、何かの言いさしか。
- (12)「コライタツジャー」の「コライタ」は、「コラレタ」からのものではなく、「コラシタ」のイ音便と考えられる。
- (13)「イッチェテ」は、「イッチョク」が終止形。「放っておく、そのままにしておく」の意。
- (14)「イタトナンドン」の「ナンドン」は、「ナレドモ」出自。
- (15)「シータ モナ イッチェテ イタ。」は、笑い声での表現。
- (16)「カワイ」は、以下に表現の省略が考えられる。
- (17)「ゲマカラ」は、「イマカラ」の言いあやまりか。
- (18)「ナーリ」は、「いっしょになり」の意で、略形。
- (19)「シータ」のところで表現が切れた形になっている。
- (20)(21)「アノー」は間投詞。
- (22)文初から、文末詞「ザイ」までは引用文。
- (23)(24)の「ケン」,「ケン」の接続助詞は、体言承接で特異。

- (25) 「カラ」は、方言表現では、ふつう用いない。「ケン」が常。
- (26) 音声不明瞭で聴取難。
- (27) 「アノー」は間投詞。
- (28) 「アギヤント」は、この場合、間投詞的に用いられている。
- (29) 「ヨソサニヤ」の「サニヤ」は、方向の「へ」に当る格助詞。
- (30) 「コグツツァニヤ」は、「コグツサニヤ」の音変化。
- (31) 「モラウ」と次の「スル」とのことは続きは、「……貰う、そうするよりに……」と考える。
- (32) 「シツチゴトットジャン」の「シツ」は、接頭辞、「ジャン」は、「ジャル」の音変化。
- (33) 咳が入る。「ソノ」は間投詞。
- (34) 「ソノ マ」は間投詞。
- (35) (36) (37) いずれも間投詞。
- (38) 音声が重なって不明。
- (39) (40) (41) いずれも間投詞。
- (42) 「デクデ」は、「歩いて」の意。
- (43) 音声がはっきりしない。
- (44) 咳が入る。
- (45) 「マー」は間投詞。
- (46) 「ヨーユ」は、「イヨイヨ」出自と思われる。
- (47) 「ソノー」は間投詞。
- (48) 「キロカ」は、「キライカ」の縮形。
- (49) 「アリヤ スカン ザイ」は引用文。
- (50) 「トマラシェロ」は引用文。
- (51) 「アシデ コンコン ヤッテー。」は、笑い声での表現。
- (52) 音声不明瞭。
- (53) 「アシデモ ………ショーヨ」の部分に、話者Aの笑い声が伴う。
- (54) 「シューゴタ ナカ」は、「したくはない」に当る。動詞の未来形(意志形)に、助動詞「ゴトアル」、「ゴタル」が接すると、願望の表現となる。例えば、「行コーゴトアル。」(行き



たい。)

- (55)「ヨンニュカッタ」は、「多かった」に当る。「ヨンニュ」は、ふつう、「たくさん」の意の副詞に用いられるが、これを形容詞(カリ活)化したもの。
- (56)「オイオ」と聞こえるが、はっきりしない。意味不明。
- (57)(58)いずれも、後出の「ニサンニン」の言いさしと思われる。
- (59)かすかに聞こえる。
- (60)音声不明瞭。
- (61)ここに、やや長い間がある。
- (62)「マ ムカシャー ヨメゴモリヤッテ ユートガ」と、昔の嫁貰いの話を切り出しているが、次下には、現在の嫁貰いの話への移行が見られる。
- (63)「フトバンニ」は、「トリキメター」に続く。
- (64)「エー」は間投詞。
- (65)「トブギレ」は、次の「トリキメ」の言いあやまりと思われる。
- (66)「イ」は、「イレター」の言いさし。
- (67)「ナッテキタトン」の「トン」は「トニ」(のに)で、接続助詞。
- (68)「ヤッテー」(出かけて)の次に、「いたたろうか」に当ることばが略された形になっている。
- (69)音声を重ねて、よく聞き取れないが、「イキオランジヤッタ」が予想される。
- (70)「ソギャンナ」は、「ソギャンニフ」の縮形。
- (71)「イタテ」の次に、「いなかった」に当ることばが略された形になっている。
- (72)「ミバンナー」は、連声現象。
- (73)「トコル」の〔ル〕は、〔口〕 > 〔ル〕のもの。
- (74)音声を重ね、聞き取れない。
- (75)「ヤッ」は、「ヤル」、「ヤレン」などの「ヤ」と考えられる。
- (76)「ムシコ」は、意味不明。

- (77) 「ヤッ」は、あとの「ヤッチャ」の言いさし。
- (78) 「アノ」は間投詞。
- (79) 「ソノ」は間投詞。
- (80) 「コヤシェオッタ」は、「コラシェオッタ」の音変化。
- (81) 音声が重なって、聞き取れない。
- (82) 「コンバジャ」は、「来なければだめだ」に当るが、接続助詞「バ」に、断定の助動詞「ジャ」が接する「〜バジャ」の特異な形態が注目される。
- (83) ここに、やや長い間がある。
- (84) 「ソースレバ …… シューギノ コト ター。」の文表現は、話題を、結婚式に移す表現。
- (85) 「マー エ ソーノ マ」は、間投の表現。
- (86) 「ジブンノター」の「ター」は、「トワ」。「ト」は準体助詞で、ここでは、結婚式を表わす。
- (87) 「イクラバカニリ」は、特異な長音。
- (88) 「ドーシテ …… スン モンカナー。」は、反語表現。
- (89) 「ナンノトキジャッタ ナー。」は、想起の表現。
- (90) 「カシタリ」の「カシ」は、「クワセ」(食わせ)の縮形。
- (91) 音声が重なり、聞き取れない。
- (92) 「〜 タッテ …… トコラ クソン」この部分は、笑い声での表現。
- (93) 「チャー トコン」は、「チャータ トコノ」の縮形。
- (94) 「アラ」は、「アレワ」の縮形。
- (95) 「ソン」は間投詞。
- (96) 「トコンノタ」は、「トコロノトワ」で、「ト」は準体助詞。ここでは、祝儀を表わす。
- (97) ここに、やや長い間がある。
- (98) 「ソーテェ」とも聞こえる。「外に」の意味にもとれるが、不明。
- (99) 「ヒンノマッ」の「ヒン」は、接頭辞。

- (100) 「スベッアガッテ …………… ホシナコテ サー。」この部分は、笑い声での表現。
- (101) 「ニーヤ」は、この場合、間投詞的用法のもの。
- (102) 「ウケトー」は、「ウケトル」の音変化。
- (103) 「エ」は、[<sup>j</sup>e] に近い。
- (104) 「ツ」は清音。
- (105) 「ド」は不明音。
- (106) 「スケ」は、「スカイテ」の「スケーテ」などの言いさしか。
- (107) 「コーヨリカ」の「コー」は、「クー」の音変化。
- (108) 「ワレドン」は、「おのれ達」、「ワッドン」とも言う。
- (109) 「トナリノ …………… ナシターリ シテエテ」この部分は、笑い声での表現。
- (110) 「トソー」と聞こえるが、意味不明。
- (111) 「オットッテエテ」の「オッ」は、接頭辞。
- (112) 「ソノ ウチャ …………… ナシターリ シテエテ」の部分は、早口のうえ笑い声での表現のため、音声は、はっきり聞き取れないが、いちおう、このように聞こえる。
- (113) 「イチクタリ」の「イチ」は、接頭辞。
- (114) 「オヨクンザー」と聞こえるが、意味不明。
- (115) 音声を重ねて、よく聞き取れない。
- (116) 「オ ワシモ オボエトーッ。 ソルバー。」は、笑い声での表現。
- (117) 「ヒンナッタッテ」は、「ヒンナッテ アッテ」の縮形。「ヒン」は、接頭辞。「アッテ」は、「ほら」に当る間投詞。
- (118) 「モー ヌシドンバッカリ ヨッパローテ サー。 ソトデー」は、笑い声での表現。
- (119) (120) とも、音声を重ねて、よく聞き取れない。
- (121) 「ナロー」は、あとの「イショーガ チゴトッタロー。」に続く。
- (122) 「アッタテ」は、「アッタトニ」からのもの。

- (123) 「ジヤイロ」は、「ジャロ」と同意のもの。「ジャーロ」からのものか。
- (124) 「リン」と聞こえるか、意味不明。
- (125) こゝに、やや長い間がある。
- (126)(127) 「ホン」は、「ホー」(方)の音変化。
- (128) 「ソノー ソ マー」は、間投的表現。
- (129) 「ッタ」の部分、音声かはっきりしない。
- (130) 「サシテシヨージャ」と聞こえるか、はっきりしない。意味不明。「(盃を)さしてしまってから」ともとれるか。
- (131) 「中人」のことであるか、「フョーニン」と聞こえる。
- (132) 「サキ」(先)と言っているか、言いあやまり。
- (133) 「アノ」は間投詞。
- (134) 音声か、よく聞き取れない。
- (135) 音声か、はっきりしないか、「オナシ コトジャロ」とも聞こえる。

## 6. 正月の話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 山崎政右衛門 男 明治30年生れ

B 竹中ユエ 女 明治24年生れ

H 平尾美知子 女 昭和30年生れ <司会役>

A オトナワー アー ショーガツノー (B ~~~~~) (B サルー)<sup>(1)</sup>  
大人は あ 正月の

グワンジツン アサワー イケバン ハジメワ ダンナンサマエー  
元日の朝は 一番 始めは 且 那樣に

カンサミャー サンケイバ シテ ダンナンサマエ ヨッテ<sup>(2)</sup>  
神様に 参詣をして 且 那樣の家に 立寄って<sup>(3)</sup>

ソシテ イッケン イッケン アノー  
そして 一軒 一軒 あの

B ハツノーデッ<sup>(4)</sup> (A ハツ  
初詣 (A ハツ  
初

A ハツノーデッテ ユーテ オメデト アケマシテ オメデトー モー  
初詣と 言って おめでとう 明けまして おめでとう 申し

シマスツト ユーテ イッケン イッケン サルキオライタ ト。<sup>(5)</sup>  
ますと 言って 一軒 一軒 歩きまわってらっしゃったよ。

B イッケン イッケン サルキオッタ ホンナコテ。ソーデァ モン。<sup>(6)</sup>  
一軒 一軒 歩きまわった ほんとうに 全部 もう。

(A アー。  
ああ。)

A ホットユトー オー ソッ オメキバ ダサルッ モンジャルケン<sup>(7)</sup>  
そうすると おお そう 御神酒を 出される ものをから

カー<sup>(8)</sup> モー ヨッター オメキバ ノミオットユトー ( B シー  
もう 立寄って 御神酒を 飲んだりしているという (酒が)  
タ モナー シータ モナー ヨカ ) イチバン  
好きな着は 好きな 着は よい 一番

サイゴニャー モー ヘグラッスルゴト シテ カエルオライタ<sup>(9)</sup><sup>(10)</sup>  
最後には もう 暗くなって (家へ) 帰っておられた  
ト。 イマワー ダッテロ<sup>(11)</sup> カエルオッ バヨーッテ ユーコト。<sup>(12)</sup><sup>(13)</sup>  
よ。 今は 誰かが 帰っているわよって言うよ。に。

H ムカシノ ショーガツガ ナンジャラ ゴーカナゴトアル。  
昔の 正月か 何やら 華やかなようだ。

A アッ ソシ……。  
あ そし

B ショー ショーガツノー アギヤント アッテ<sup>(14)</sup> モー ジキ モー  
xxxxx xxxxx  
正月の あの ほら もう すぐ もう  
グワンジツトー フツカジャイローマデ<sup>(15)</sup> アスベバッター<sup>(16)</sup> ジキ  
元日と 二日だかまで 遊ぶと ほら すぐ  
ニ<sup>(17)</sup> ハタケン フツジャッター。  
に 火田の ふちだったのよ。

A ハタケン クール<sup>(18)</sup> フツカモ アンソ モン カナー。  
火田の ふち 二日も 遊ぶ、もの かねえ。

B フツキヤー アンソ<sup>(19)</sup> アンソ……。  
ニ日 xxx xxx

A アノー ジキ×アミー モットル モナー  
あの 地引き綱を 持っている 着は

B ソー アノ  
そう あの

A フツカノ ハッゾメッテ ユーター。  
ニ日の 初仕事って 言って。

B ホンナコッテ。  
ほんとうに。

A エーッ。  
ええ。

B ソー ジャッタ。  
そうだった。

A アギヤントバ シオッタジャ モン。 アンカラ デテイタター<sup>(20)</sup>  
あのようなことを していたんだ もの。 網で 出て行って

サカナバ トッテキター。 ソシター  
魚を とって来て。 そして

B フツカ マー ハッゾメッテ ソコンノ マエー シェーゴドンガ<sup>(21)</sup>  
ニ日 まあ 初仕事って その前 せいごなどか

コッダマ シタリシター<sup>(22)</sup>

A ソー ソー。  
そう そう。

B トルオッタトター。 イマゴラ ソギヤンタ ナカッ。 ソギヤン  
とっていたのだから。 今頃は そんなのは ない。 そんな

トモ オラン タイ。<sup>(23)</sup> イオノ。<sup>(24)</sup>  
のも いない よ。 魚が。

A アッテー ヨノ モナー アミ ノラン モナー ナマコトー  
ほら 他の 者は 網(船)に乗らない 者は なまことり

B ナマコ サー。  
なまこ ねえ。

A フツカンヒカラー ソン カワリー フツカンヒニャー アノー  
二日の日から その かわり 二日の日には あの

ヒルマデバッカリーニャ カイッテキオッタ ナー。<sup>(25)</sup> (B オーン)  
昼までぐらいいは 帰って来ていたねえ。 (おあ。)

B オーカタ フツカー タッタ カラタタ アスブ コター グワン  
たいがい 二日 たった それっきり 遊ぶ ことは 元

ジツノ アサノー ヒシテージャッター。 ムカシワ。  
日の 朝の 一日だった。 昔は。

H ムカシン ヒトワ キバツテカラ。  
昔の 人は 精出してね。

B コグチン モナー ヨソン ヨソン モンヨッカ ゴーギ キバツ  
小口の 者は <sup>xxxxxx</sup>余所の <sup>xxxxxx</sup>余所の 者よりも ひどく 精出し  
トリケン。<sup>(27)</sup>  
ているから。



## 注記

- (1) 意味不明
- (2) 「ダンナンサマエ」は「旦那様へ」ではなく、「旦那様の家」の意である。ちなみと当地には、「へ格」は少なく、共通語での「へ格」に当るところは「に格」で表現されることが多い。
- (3) 「イチバン ハジメワ ～ ヨッテ」には言い誤りがある。つまり、一番始めは、神様に参詣し、その後、旦那様の家に立寄るといふ順序である。
- (4) 「ハツノ・デ」は、「初詣」で、[mo:] > [no:]。
- (5) 「サルク」(終止形)は、「歩く」というよりは、「歩きまわる」に当る。
- (6) 「ソ・デア」は、「全部」の意の副詞。
- (7) 「ジャル」は、「である」出自のもの。
- (8) 「ケンカー」は、接続助詞(順接)、「ケンカラ」出自。
- (9) 「カエル」は、「カエリ」の音変化。[リ] > [ル]は、当地に、比較的よく見られる。
- (10) 「オライタ」は「オラシタ」の音便形。
- (11) 「テロ」は、ふつう「テロノ」の形で用いられる。副助詞。
- (12) 「バヨ」は、文末詞。「イマワー ～ バヨ」までは、引用文。
- (13) 「ユ・コト」の「コト」は、ふつう、「ゴト」と実現される。
- (14) 「アッテ」は、「ほら」に当る間投詞。よくあられる。
- (15) 「ジヤイロー」は「ジャロー」と同意。
- (16) 「アスベバツテ」は「アスベバ アツテ」。
- (17) 「ジキニ ハタケン フジヤツタ」は、直訳すれば、「すくぬ煙のふちだつた」であるか、言いかえれば「すくぬ煙で働くのたつた」である。
- (18) 「クール」は「クリュ(ふち、端)で、ここにも、[リ] > [ル]が見られる。また、「クール」のような長音化現象も当地には、時折見られる。

- (19)「アツ」は、「遊ぶ」とか「遊び」とかを言おうとしたもの  
と思われる。
- (20)「イタテー」は、「行って」に当る。「到りて」出自のもの。
- (21)「シェーゴドン」の「ドン」は「ドモ」の音変化。「シェー  
ゴ」は、「鱸」の小型のもの。
- (22)「コツダマエ タシテー」とも聞こえる。意味不明。
- (23)「タイ」は文末詞。
- (24)「イオノ」の「ノ」は、「か」に当る主格表示の格助詞。
- (25)「ナー」は、「ネー」よりは上に立つ。待遇品位の高い文末  
詞
- (26)「カラタタ」は、ふつう「カラタテ」で、「それきり」の意。
- (27)「キバットリケン」の「トリ」は、「トル」の音変化。

## 7. 米作りの話 <もみ種のこと>

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 山崎政右衛門 男 明治30年生れ  
 B 竹中ユエ 女 明治24年生れ  
 H 平尾 美和子 女 昭和30年生れ <司会役>

A モミダネワー アッテー ムカシャー アノー  
 もみ種は ほら 昔は あの

B イッシューカンズツモー ツケ  
 一週間ずつも (水々) 漬け

A イッシューカンモ マットモー  
 一週間も もっと

B マットモー ナガレガワー<sup>(1)</sup> モッテイタッテー  
 もっと 流れ川に 持って行って

A ナガレガワー モッタッテ<sup>(2)</sup> ツケオッタ トター。  
 流れ川に 持って行って 漬けていたんよ。

B ヨッタトナンドン<sup>(3)</sup> イマワー フロエー フタバഞ്ジャイロ イレ  
 (昔は) 選んだのだから 今は 風呂へ 2晩たか 入れ  
 テ モヤサッ トター。<sup>(4)</sup>  
 て 登芽ねはるんよ。

A アー。  
 ああ。

B ホシテー  
 そうして

A ホシテ アッテ ムカシャー イッシュカンモ ニシュカンモ  
そして ほら 昔は 一週間も 二週間も

サンシュカンモ ツケテ ( B ナーン。 )  
3週間も 漬けて 何……。

B ソギヤーン シテ  
そのようにして

A エー アノー ソー スレバ ナゴー ツケレバ オクッシカ  
ええ あの そうすれば 長く 漬ければ 不良の

(5)  
モミ モミヤー キャークサレテ  
xxxxx xxxxx  
もみ もみは 腐ってしまった

B ハー。  
はあ。

A コゲンカ<sup>(6)</sup> ヨンニュバカーリ アノー スジモミバ シオッタ  
こんな たくさん あの 種もみを して(選んで)いた

トタイ。 ( B アーン。 )  
んですよ。 はい。

B ヨンニュ スジモミバ シオラ シオ  
たくさん 種もみを してお……。

A ハー ソシテ メダタンジャッタ ト。  
はあ そして 発芽しなかったんよ。

B ホシテ アッテ イマ ヤッパ キカイジャ シェーズ<sup>(8)</sup> テデバッ  
そして ほら 今 やはり 機械では なくて 手でば

(9)  
カリジャッタケン ヒマ イリョッタ ター。 レッチャ ナンチ  
かりなつたから 時間かかっていたんよ。

(10) ヤー。 モー ナンゴト アギヤントワ セイデ ナ。 テ キカ  
もう 何ごとも あんなことは なくて ね。 そして 機  
(11)

イア シェーズ アツテ。  
械では しなくて ほら。

H イツコロ イツコロカラ  
いつ頃 いつ頃から

A ンー。  
うん。

B モー ナンネンバッカリン ナロ カー。  
もう 何年ぐらいいか なろうか。

A イツゴロカラ モヤシオツタジャロ カツテヤー。  
いつ頃から 発芽しておっただろうかってかねえ。

H アー。  
はい。

A シャニチガーシッテ<sup>(12)</sup> シャニチニャー カシオツタ トタ。(B笑)  
「しゃにち<sup>ち</sup>漸<sup>し</sup>って 「しゃにち」には 漸<sup>し</sup>ていたんよ。

アノー トーリヤー イレテ ナガレガウヤー<sup>(13)</sup> モッソケー ス  
あの 俵に 入れて 流れ川に<sup>xxx</sup> そこに し

テ ソシテエター ウーカジェン<sup>(14)</sup> ウーミズノ<sup>(15)</sup> フットユートー  
て そうしておいて 大風か 大雨か 降るといふと

キヤーナギヤーテ<sup>(16)</sup> オミン ナカサニャ<sup>(17)</sup> キヤーナギヤータリ ナ  
流してはって 海の中へ 流してしまったり な

シタリ シオツタ トー。(B笑) (H笑) ホッ ソリカラ  
んかして していたよ。 そっ それから

マゴメンカワノツテユテ<sup>(18)</sup> ナー。  
馬込の川のって言つて ねえ。

B ハーッ。 オーカタ マゴメンカワジャツタ トター。  
はい。 たいかい 馬込の川だったんよ。

A ソシ<sup>(19)</sup>チャー。ソコム<sup>(20)</sup>ケニヤ スジモミガ<sup>(21)</sup>フツテユートノ アッ ト  
そうしてねえ。そこの向いには 種もみ川っていう川か ある ん  
ター。 アンドリガ<sup>(22)</sup>チャー。  
よ。 あんどり川ね。

B <sup>(23)</sup>モ一ノ チャー。  
もうの 田ね。

A アー トンサン ムカシノ ココノ ダナンサマン チャ ( B  
ああ 殿様 昔の この地の 旦那様の 田ね )  
ウタッ ウタッ )

B ダンナンサマン<sup>(24)</sup> チャー アラー アッタ トター。 ソー シャ  
旦那様の 田ね あれは あったんよ。 そう す  
<sup>(25)</sup>レバ モー ドンクノー ガスガスガスガス イーヨッタ<sup>(26)</sup>ンドン。  
れば もう 蛙か かすかすかすかす 鳴いていたけれども。  
イマン ドンクドマ イッチョ<sup>(26)</sup>ン ガスガサ ユワン ター。  
今の 蛙たちは ちっとも かすかすは 鳴かんよ。

(笑) (A笑)

A (笑) ドンクドンワ オメカンヤッター。  
蛙たちは 大声で鳴かなかった。

## 注記

- (1)「ナガレガワ」は、流れ川であるが、当地では、これと区別される「カワ」がある。これは湧水個所の水たまりをあらわす。また、いわゆる「井戸」を「イドカワ」と言う。
- (2)「モッタッター」は「モッテイタッター」からのもの。
- (3)「～ナンドン」は「～ナレドモ」(古語法)からのもの。
- (4)「モヤサッ」は「モヤサス」と考えられる。「モヤサ」は「モヤス」(萌やす)の未然形。「ス」は「シャル」系の尊敬の助動詞。
- (5)「キークサレテ」の「キーク」は、強めの接頭辞。したがって、訳を「腐ってしまっ<sup>て</sup>て」とした。
- (6)「コゲンカ」は、ふつう「コギャン」、「コゲン」。
- (7)「メダタン」は、「芽立たん」。
- (8)「シェーズ」、このような長音化が時折見られる。
- (9)「ター」は文末詞。
- (10)「レッチャ ナンチャー」は意味不明。
- (11)「テ」は、「手」と言いかけたとも考えられるが、接続詞の「テ」と考えた。
- (12)「シャニクガーシ」は、「しゃにち」の行事が行なわれる頃に種もみを蒔くこと。「しゃにち」は、当地の民俗行事で、「シャニツァマ」と、ふつう言う。旧暦、2月上旬に行なわれる「かわ祭り」で、当日は、「イドカワ」をさらえて清め、「カワ」に、だんごや御神酒を供え、「カワノカミサマ」を祭り、疫病や災難よけを願う。
- (13)「モッ」は、「持って」を言いかけたものか。
- (14)、(15) しばしば、[O] > [U]となる。
- (16)「オミ」のように[U] > [O]となることは少ない。
- (17)「サニヤ」は「へ」に当る格助詞。
- (18)「マゴメンカワ」は「流れ川」である。
- (19)「ソシチャー」は「ソシテ ヤー」からのものか。

- (20) 「ソコムケ」は「そこ伺い」で、対岸にある、小さな島をさす。「ウシエジマ」という。
- (21) 「スジモミガワ」は、固有名詞ではなく、「種もみを選ぶ川」の意。
- (22) 「アンドリガワ」は、対岸の「ウシエジマ」の田のふちにある湧水個所。
- (23) 「モー」は、人名の略呼称かと思われるが不明。
- (24) 「アラー」は、「あれは」であるが、「あれ」は、種もみの発芽させる所。
- (25) 「シャレバ」は、ふつう「シェレバ」である。
- (26) 「～タンドン」は「～タレドモ」（古語法）からのもの。



## 8. 米作りの話 <苗代のこと>

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 山崎政右衛門 男 明治30年生れ

B 竹中ユエ 女 明治24年生れ

A ナワ ナワシロワー アッテー ツクルオッタ トターイ。 ミツ<sup>(1)</sup>  
xxxx xxxx  
 苗 苗代は ほら 作っていたんよ。 水

コエッテユーテ シモゴエバ ヤッテ ナー。  
 肥っていった 下肥を やって ねえ。

B ハー。  
 はい。

A シモゴエバ ヤッテー (B ~~~~) ソシテ ソルバー<sup>(2)</sup> テデ  
 下肥を やって ( ) そして それを 手で  
 ナデター。  
 撫でて。

B ハー。  
 はい。

A ソシテ ムカシャー コノー タンザクガタニャー シェテ ナー。  
 そして 昔は この 短冊型には なくて ねえ。  
 イッピャ コー ナデテ ナー。  
 いっぱい こう 撫でて ねえ。

B ナデテバツカリ<sup>(3)</sup> ナー。 イタデャ シェ アゲントー。 (A アー。)  
 撫でてはっかり ねえ。 板では しないで あんな仕事は。 ( ああ )

A ソー スレバー (B w~~~~) タンザクガタン シェンバ ナラン  
そうすれば 短冊型に しなければ ならない

テュー トキモ シェロツテ ユワル コター シェデ ナー。  
という時も せよって 言われることは しないで ねえ。

ヤ ホシテ ジュンササンカラ ソンコラ ジュンササンジャッタ<sup>(4)</sup>  
や そして 巡査さんから その頃は 巡査さんだったんだ

ツジャル モン。 (B 笑) ジュンササンカラ ツカマエラレテ<sup>(5)</sup>  
もの。 巡査さんに 捕えられて

ー エー バッキンデ バッキン ヤレツテ ユワレタ<sup>(6)</sup> コトノ  
ええ 罰金で 罰金を よこせて 言われた ことが

アルオッタッデス ヨー。  
あっていたのですよ。

B ムカシタ イマワ ドーシテ ドー<sup>(7)</sup> ゴーギ ヒッチゴーテエテ<sup>(8)</sup>  
昔とは 今は どうして どう たいへん 違っていて<sup>(9)</sup>

A ホシテ アッテー オーカター  
そして ほら おおかな

B w~~~~<sup>(10)</sup> ナカ ヨ。  
ない よ。

A イマノー ナガシエン イッテカラ ウエオッタ モンナー<sup>(11)</sup>。(B  
今の 梅雨に 入ってから (苗を) 植えていたものねえ。)

ハーン。) ターワ。  
はい 田は。

B ナガ<sup>xxxx</sup> ナガシノ<sup>xxxx</sup> イッテカラ ナー。 ナガシエノ サメタ トキ  
梅雨が (シーズン)に入ってからねえ。 梅雨が あかった 時

サメタツチャー ウエチエ<sup>(12)</sup> シマワンバ ト。  
あかっても 植えて しまわなければよ。

A ホシター モー  
そして もう

B モー ~~~~~。  
もう

A ナゴマデ カカッター ウウル モンノトワ <sup>(13)</sup> イッカブシエッテユ  
遅くまで かかって 植える 人の田は 「イッカブシエ」と  
ーター モ ウエテシモタ モンノー ソーテァー <sup>(14)</sup> イッカカッテ  
いって ばう 植え終った 者が 全部 とりかかって  
ー (B笑) ウエテ <sup>(15)</sup> クレオッタ ト。 (B ~~~~~)。  
植えて やっていたよ。

B ハー ソギャン シオッタ。  
そう そんなに していた。

## 注記

- (1) 「ミツ」の〔ツ〕は清音。
- (2) 「ソル」は「ソレ」の音変化。
- (3) 「シェ」は、話者の気持では「シェーズ」を言おうとしたもの。
- (4) 「ソンコラ ジュンササンジャッタ」は、「その頃は、警官などととは言わず、巡査さんと言っていた」の意。
- (5) 「ジュンササンカラ ツカマエラレテ」の「～カラ～ラレ」の表現法が窺われる。
- (6) 「バッキン ヤレット ユワレタ」は、いかにも唐突に聞こえ、文意の理解がむづかしいが、文意はこうである。苗代を短冊型に作らねばならないという時代になっても、「シェロツテ ユワル コター」(きまり通りにせよと言われること — この場合、田に石灰を撒かないようにせよという連し、それを守らないで、違反のかどで、巡査さんにつかまって、罰金をよこせと言われたという意)。
- (7) 「ドーシテ ドー」は「どうして、どうして」の意。
- (8) 「ヒッ」は接頭辞。
- (9) 「～テエテ」は「～テオイテ」の縮形。
- (10) 音声微弱で聴取不能。
- (11) 「モンナー」は文末詞。
- (12) 「ウエチエ」の「チエ」は、単純な〔テ〕ではなく、〔tʃe〕に近く聞こえる。
- (13) 「イッカブシェ」は「大勢の人々が集って、作業に力を集中すること」。
- (14) 「ソーテァー」は副詞で、「総体」出自かと考えられる。
- (15) 「クレオッタ」は「やっていた」の意で、「クルッ」(クルル)は、「やる」の意に当る。

## 9. 米作りの話 <田植えのこと>

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 山崎政右衛門 男 明治30年生れ

B 竹中 ユエ 女 明治24年生れ

A アッテー タウエノー コト<sup>xxxxxx</sup>ー コトワ<sup>xxxx</sup>ー アノー ソン アゲン  
ほら 田植えの こと ことは あの その

ト<sup>(1)</sup>ー ナガシノ イッテクッ イッテカラー ア ソノー オーカ  
梅雨が(シーズン)入って 入ってから あ その おおかな

タ キョードーシテ ウエオッタ ナー。  
共同して 植えていた ねえ。

B ハー。 キョードーシテ ウエオッタ ト。  
はい。 共同して 植えていた よ。

A ア ソノー フト<sup>(2)</sup>ー オ<sup>(3)</sup> ワガエンター<sup>(4)</sup> ワガ フトッジャー  
あ その 一人 お 自分の家の田は 自分 一人では

ウエーデ ナ。 ( B ウエーデ ナ。 )  
植えないでね。 植えないでね。

B ニケンジャイロー サンゲン サイバツチュー<sup>(5)</sup> キョーダイツチュ  
2軒なか 3軒 兄弟(姉妹)全部

ー アッテー ウエオッタ トター。 ( A ニケン。 )  
ほら 植えていたんよ。 2軒。

A ホシテー モー ジキー タバー ウウットユートー ムカチャー  
そして もう すぐ 田を 植えるというと 昔は

エット ハヨー ウエレバ ムシノ イッカカッテユーテ ナー。  
あんまり はやく 植えると 虫が どっついてしまうと言って ねえ。

アー ソノー イマンゴト クジョヤクン ナカ モンジャルケ  
ああ その 今のように 駆除薬が ないものだから

ンカー タッター アブラノー ココン ニキジャー クジラノ  
たった 油が こから辺では 鯨の

アブラージャッタ モン。 ( Bクジラノ アブラー ) ムシコロ  
油だった もの。 鯨の 油 殺虫剤

シヤ。  
は。

B クジラノ アブラドン クジラバ コーテキテ シェジター ホシ  
鯨の油 なんか 鯨を 買ってきて 煎じて そして

ター コー シャーテ サルイテ コロシオッタタイ。 ターン  
こう (田に)注いで 歩きまわって 殺していたんだよ。 <sup>xxxxxx</sup> 田の

ターノ ナキャ ホンデ イマ アッテ クジョーバ サレン  
<sup>xxxxxx</sup> 田の中へ たけども 今 ほら 駆除が できないん

(6)  
バイ。 スン~~~~。  
だよ。

A ソースレバ エット ハヨ ウエレバー ア ソノ アレガ サカ  
そうすると あまり はやく 植えると あ その あれ(虫)が 勢い

(7)  
ッテクルオン モンジャルケン タガー ソレバカリ ムシノ  
づいてくるものだから 田が そればかりに 虫が

(8)  
イッカカッテ ヨー アブラドンデー ヤル モンジャルケン  
どっついてしまっよう 油なんかで やる(駆除する)ものだから

(9) (10)  
ヨーイナ コッジャン イッペン イッカカレバー トンノキャ  
簡単な ことでは 一度 たらと(虫が)つくと 駆除は

エントジャル モン。

できないんだもの。

B ムカシャ アッドン<sup>(11)</sup> ユー シヌオッタ バイナー<sup>(12)</sup>。  
昔は だけども よく (虫か)死んでいたんだよねえ。

A (笑) シニャ シオッタ。  
死ぬは していた。

B アブラグラデー マー。  
油ぐらいて まあ。

A ソリケ<sup>(13)</sup> ソリカラ  
そうだから それから

B ナーンガ ナッテ<sup>(14)</sup>

A ヒシテ ソリカラ アッテ モー タンダー<sup>(15)</sup> フト ナレバー  
一日 それから ほら もう だんだん (稲か)大きくなると  
ハツカ スレバ ハツカガキッテユーテ タグサトルバ シオッ  
20日 すると 20日掻きと言って 田草取りを していた  
タ トター。  
んよ。

B タン クサトリガー アン シオッタ トター。 ニドモ サンド  
田の 草取りか あの していたんよ。 2度も 3度も  
モズーット  
ずっと。

A サン<sup>xxxx</sup> サン<sup>xxxx</sup> (Bイヤ。) サンバン<sup>xxxx</sup> イチバンクサー ニバンク<sup>xxxx</sup>  
いや。 3番 一番草 2番草  
サー (Bニバンクサーッテユーテ) サンバンクサーッテユーテ  
2番草と言って 3番草って言うて

ヤノー <sup>(16)</sup> シオッタ トター。  
あの していたんよ。

\*

A スッ <sup>(17)</sup> ナエ タワー イチバン ( B タワ ネー。 イーッテ )  
苗 田は 一番 田は ねえ。

ムカシャー  
昔は

B タケバー タケン ボーバ タテター ( A アノー )  
竹を 竹の 棒を 立てて あの

A ホッポーウエ <sup>(19)</sup> コー ウエテ サルキオッタトッチュータ。 オッ  
「ほっほう植え」 こう 植えて 歩きまわっていたんだそうた。 だけど

ドン ソノー ジョーギウエッテユートガー アノー シェンバ  
その 定規 植えて言うのか あの しなければ

<sup>(20)</sup>  
デケンテユーコター ナッテター ( B ウーン。 )  
いけないと いうことになって うん。

B オッドマー ホッポーウエン トキヤー モー <sup>(21)</sup> ウエン トバー。  
私たちは 「ほっほう植え」の 時には もう 植えないんだよ。

マードー。  
また。

A ウン。 ソシター  
うん。 そして

B タケバ ~~~~~ ナッテカラ ウエタ ト。  
竹を ってから 植えた よ。

A ジョーギウエッテユーコトラ シター <sup>(22)</sup> ナッゲターワ マッカクイ  
定規 植えと いうことを して 田は まっ 4 角で



ナカ モンジャルケン ココネキントワー カネンテッテユエテ<sup>(23)</sup>  
ない ものだから この辺の田は 「金の手」と言って

マーカル カネンゴトー キデ<sup>レ</sup> コー コシラエテ ホシテ ナ  
曲っている金(つまり曲尺のこ)のように木でこう(定規を)作ってそして

ワヲ コー ハッテ ソシテ<sup>レ</sup> デ<sup>レ</sup> ソレエ アノ タケデー  
繩を こう 張って そして で それへ あの 竹で

エー ロクスン<sup>ニ</sup> ジャイロー ロクスンゴブヤイローニ ソノ  
ええ 6寸だか 6寸5分だか<sup>レ</sup> その

クイヲ タテテ<sup>レ</sup> シタン ナガレン<sup>(24)</sup> ナンカ タケバー カタゲ  
板を 立てて 下の 長さが 長い 竹を かついで

テ<sup>レ</sup> イキオッタ ト。 ソシテ<sup>レ</sup> ジョ<sup>(25)</sup> タケニ コー アテテ  
行っていたよ。 そして 竹に こう 当てて

ー ウエテ アトサニヤ スザリオッタ ト。 ( B ウン。 )  
植えて 後へ 退っていたよ。 ( うん。 )

B オースワ ボー<sup>xxxx</sup> ボーヲ<sup>xxxx</sup> モー タテテ<sup>(26)</sup> サンボーン トコレー  
後では 棒 棒を もう 立てて その棒の ところに

コー ウエオッタ ト。  
こう 植えていたよ。

A ア ボーン トコレー ソシテ<sup>レ</sup> モー ドーシテ カネンテッテユ  
あの 棒の ところに そして もう どうして 「金の手」と言って

ーテ<sup>レ</sup> エ ダイブン コー アギヤントー ヤルオッタトナンド  
え だいぶん こう あんなのを やっていたんだけれ

<sup>(27)</sup>  
ンカー。

とも。

B ヨガマシ  
ゆかまし

A ヨガ<sup>xxxx</sup> ヨガ<sup>xxxx</sup>マキヤータッ ナシタリ シテエテ ドシテモ ソギヤ  
 ゆが ゆがませたり 何したり しておいて どうしても そのよ  
 (28)  
 ン スル モナー ターット キノキータ ハノー タイショカブ  
 うね する 着は 少し 気がきいた 派の 大将株の  
 ン ホージャ モン。 (B笑)  
 方な もの。

B フン。  
 ふん。

A (笑) スーツ<sup>(29)</sup> ソシター アノー ヒンヨガメキヤータリ ナシ  
 ( ) そして あの ゆがまかせたり 何か  
 タシ シテエター モンクガ タータリ ナシターリ シオッタ  
 しておいて 文句が っいたり 何したり しておった  
 ト。  
 よ。

B ホン。<sup>(31)</sup> イマワ モー イワレン イワレン。  
 今は もう 言えない 言えない。

A ソー シェンバー ソノ タンクサ トッ トキー サルキニッカ  
 そう しなければ" その 田の草を 取る 時に 歩きにくい  
 モンジャルケンカー ソンドン モー イマゴラー アノー  
 ものた"から た"けど" もう 今頃は あの  
 スジバー コー ヒッパッテ ソン タケワ マイッチョー コー  
 糸を こう 引っぱって その 竹は もうひとつ こう  
 (32)  
 ウエテイタッテターテ コー スットワ メンドカ モンジャルケ  
 植えて行っておいて こう するのは 面倒な ものた"から  
 ン イマワ モー コーシター モンデ" コー スジバー ヒッパッ  
 今は もう こんなにしたもので" こう 糸を 引っぱって

(33)  
テ タナリー アノー スットガ マター イマ キカイデー  
田の形のままであの するのが また 今 機械で

ハツタバ オコス トキモー オコシヨカ モンジャンルケンカー  
春田を 耕す 時も 耕しやすいものだから

スジバ ヒツパツテ ソレー コー チョッ チョッ チョッ  
糸を 引っぱって それに こう ちょっ ちょっ ちょっ

チョッ モ ウエテ サルカッ ト。  
ちょっ もう 植えて まわれるよ。

B ハヨー コニャー マカレイテ ネ。(34) ホシター イクター ~~~~~  
はやく ~~~~~ そして 行くのは  
~~~~~ハツ ~~~~~。

A ムカエ ムカシャー タウエワー タウエワー アトサニャッテ  
(35) ~~~~~ ~~~~~ ~~~~~ ~~~~~ ~~~~~  
昔は 田 植えは 田 植えは 後へって

イーオッタトナンドン  
言っていたのだけれども

B イマワー モー サキサ  
今は もう 先へ

A イマワ モー サキサニャ コー ウエテ コー イカット。(36)  
今は もう 先へ こう 植えて こう 行かれるよ。

( B笑 )

B サキサニャ ウエテイダ。(37) ( A ハー。 ) イヤ マーダ アッド  
先へ 植えて行った。( A はい。 ) いや まだ たけど

ン ヨソワ テレビバ ミレバ アトサネ ウエテ キ サルク  
(38)  
余所は テレビを 見れば 後へ 植えて 歩く

トコノ サルク トコノ アッ トナー。  
所が 歩く 所が ある のねえ。

A ウーン。 ソギャン トコノ アッ トナー。  
うん。 そんな 所が ある のねえ。

## 注記

- (1) 「クッ」は「来る」を言おうとしたものか。
- (2) 「フトー」では、[Gi]>[至U]とラ行音節[ti]が、前接母音[O]の長呼に、取ってかわられている。
- (3) 「オ」は間投音。
- (4) 「～ター」の「ター」は、「トワ」からのもので、「ト」は準体助詞。この場合、「ト」は、「田」をあらわす。
- (5) 音声ははっきりせず、意味不明。
- (6) 音声ははっきりせず、意味不明。
- (7) 「サカッテクルオン」の「オン」は、「オル」の音変化かと思われる。ふつうは、「サカッテキオル」となるところであるが「クル」(来る)と連体形を用いている。
- (8) 「ヨー」は間投詞。
- (9) 「コッジャン」の「ン」は、「コッジャー」の長音からの変化。
- (10) 「トシノキヤ」の「ン」は、ラ行音節[ti]の撥音化。
- (11) 「アッドン」は「アレドモ」からのものか。
- (12) 「バイナー」は文末詞。
- (13) 「ソリケ」は「ソリケン」(接続詞)を言おうとしたもの。
- (14) 「ナーンガ ナッター」は、意味不明。
- (15) 「タンダー」は「だんだん」の意。
- (16) 「ヤノー」は「あの」。この話者に、時折「ヤノー」があらわれる。
- (17) 「スッ」は吸気音。
- (18) 「イーッテ」は意味不明。
- (19) 「ホッポーウエ」は、苗を整然と植えるのではなく、粗雑に植えること。
- (20) 「デケン」は、形式は不能表現であるが、意味は「いけない」。
- (21) 「モー」は間投詞で、副詞ではない。
- (22) 「ナットゲ」は、意味不明。
- (23) 「カネンテ」は、大工の使う曲尺。

- (24) 「ナガレ」は、「長さ」。
- (25) 「ジョ」は、「定規植え」の「ジョ」を言いかけたものか。
- (26) 「サンボーン」は「その棒の」で、頭音節は〔SO〕に近い。
- (27) 「ナンドンカー」の「カー」は、「カラ」出自のものと考えられる。
- (28) 「ハノー」の「ハ」は、「派」。
- (29) 「スーッ」は吸気音。
- (30) 「ヒン」は接頭辞。
- (31) 「ホン」は「ホンナコテ」(本当に)を言おうとした「ホン」かとも考えられる。
- (32) 「〜テ〜テ」は「〜テオイテ」からのもの。
- (33) 「タナリー」は「田の形のままで」の意。「ナリ」は「まま」。
- (34) 「コニャー マカレイテ ネ」は、「コミャー マカ ウエテ ネ」とも聞こえる。意味不明。
- (35) 「ムカエ」は、「ムカシ」を言おうとして、こうなったものか。
- (36) 「イカッ」は「イカス」の「ス」(尊敬の助動詞)が促音化したもの。
- (37) 「イヤ」は「イエ」とも聞こえる。
- (38) 「キ」は意味不明。

## 10. 米作りの話 <もみすりのこと>

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 山崎政右衛門 男 明治30年生れ

B 竹中 ユエ 女 明治24年生れ

H 平尾 美和子 女 昭和30年生れ <司会役>

- A ソギャン シテ ケーダトワー シーッ<sup>(1)</sup> ン アッテ<sup>(2)</sup> マタ  
 そのように して 扱いたのは ン ほら また  
<sup>(3)</sup>  
 ハーテ<sup>(3)</sup> ソシテ<sup>(3)</sup> イナガキノ ウエ ハーテ<sup>(3)</sup> ソシテ<sup>(3)</sup>  
 干して そして 稲架の上へ 干して そして  
 イットキバカーリ ソイガー アイナカデ シゴトバー イモホリ  
 しはらくの間 それが 途中で 仕事を 暮掘り  
<sup>(4)</sup>  
 ヤナーンカヲ シェンバジャルケン ムキツクリヲ。 ソシテ<sup>(4)</sup>  
 やなんかを しなければならぬので 麦作りを。 そして  
 スンデカラー アー トオウスッテユーター エー テデ コー  
 終ってから ああ 唐臼って言って ええ 手で こう  
 コー コー コー オシ スットデ ヤノー スルオッタ トナー<sup>(5)</sup>  
 こう こう こう 押し 摺るので あの 摺っていたんよね。
- B ハー テー ソシテ コメナ シオッタ トタイ。  
 はい 手 そして 米には していたんよね。
- H ソラ イツコロマデ ソノ テデ シオッター。  
 それは いっ頃まで その 手で していた？
- A ソルモー モー コン キカイノ ハヤラン ハヤル マエニヤー  
 それも もう この 機械が はやらない はやる 前は

シューシューンゴ コリヤ<sup>(6)</sup> キカイヤー コギヤン オーカター  
終戦後 これは 機械は こんなに おおかな

アノー ドーロクノ キカイヤ ハヤッタッジャルケン。  
あの 動力の 機械は はやったのだから。

( B アア ) アノー  
ああ あの

B アッテ コワイ<sup>(7)</sup> スル モー イネコギモー オナシ モネ ナッ  
ほら する もう 稲扱きも 同じものになっ

た モンジャルケン アッテ ハヤカッタ。  
たものだから ほら はやいんよ。

A ソリケンカー ~~~~~ マエンゴタ ヘーシテン ゴヒュー<sup>(8)</sup>ノー  
そうだから 以前には 一日に 5俵の

イクランテユーテ スルオッタ ト。 ( B ~~~~~ )  
いくらとか言って 摺っていたよ。

ゴヒューノ ハタヒューノッテユーテ。  
5俵の 8俵のと言って。

B オンドマーア テザキ<sup>(10)</sup> アキオリ<sup>(11)</sup> イタッテ ユーナバー クジ  
私たちは 手崎の 杖おりの 行って 衣なべの 9時

ゴロマデー クジ ジュージゴロマデ ゴットル コー スルオッ  
頃まで 9時 10時頃まで いつも こう 摺って

ター。 キーデー。 イマ スリオッタ<sup>(12)</sup> ター オッコヤン  
いた。 木で。 小屋に

<sup>(13)</sup>  
フキスエトッテ ミャーバン ソノ ヒ ソノ ヒン モー ケー  
そのままにしておいて 毎晩 その日 その日に もう 扱い

デ<sup>(14)</sup> シ<sup>xxx</sup> シマウ<sup>xxx</sup> ザイッテユーゴト コギオライター。 △カシワ  
で し ほうよって言うほど 扱いておられた。 昔は。



A ~~~~~ テザキ アタリヤー ユーナベ シオッタ トナー。  
手崎 辺は 夜なべに していたんよねえ。

B ソソソ ソソソ ソソソ <sup>(15)</sup> モー ムカシ アッテ ウーザクビンジャ  
その その その時 もう 昔 ほら 大作 人だっ  
ッタケン ナー。 アキアンノー ヨッタルモー ヒトトコレー  
たから ねえ。「秋おり」の 4人も 一軒の家に

イク エター シオライタケン。  
行く ことは しておられたから。

A ソースレバー ヤッパリ ア トーウスジャルケンカー コメワ  
そうすれば やっぱり あ 唐臼だから 米は

クダケテデス ナー。 チッター。 ソースール。 オロ オロス  
砕けてですねえ。 少しは。 損をする。 <sup>xxxx</sup> おろ <sup>xxxx</sup> おろす

トギヤー アノ アギヤントー (B笑)\* コー テデ コー コ  
時は あの あんなのを (こ)う 手で (こ)う (こ)

ー ゴロンシテ オロシテ オロシオッタッデス ター。 ソシテ  
う 転はかして <sup>xxxx xxxx</sup> おろして <sup>xxxxxxx</sup> おろして いたんですよ。 そして

<sup>(16)</sup>  
ソルガー スキテカラ シェンゴクオロシッテユートノ ウエ  
それが 過ぎてから 千石おろしと 言うものか 上の

ケツコカラ ザラーッテ コー ナガレテキター エー コメバ  
方から ざらっと こう 流れて来て ええ 米を

エリワクッ キカイノ <sup>(17)</sup> スーッ アッ シェンゴクオローシッテ  
選り分ける 機械が あ 千石おろしと

イーオッタ ナー。  
言っていたねえ。

B ハー シェンゴク ~~~~~。  
はい 千石 ……………。

## 注記

- (1) 「ケーダ」は、[koida] > [ke:da]で、[oi]の相互同化。
- (2) 「シーッ」は吸気音。
- (3) 「ヘーテ」は、[hoite] > [he:te]で、[oi]の相互同化。
- (4) 「ムキツクリ」の「キ」は清音。
- (5) 「トナー」は文末詞。
- (6) 「コリャ」は間投詞的。
- (7) 「コワイ」は意味不明。
- (8) 「ゴビュー」の「ヒュー」は、[sjo:] > [sju:]。
- (9) 「スル」は、[ti] > [ʔu]。
- (10) 「テザギ」は地名。
- (11) 「アキオリ」は、土地の女の人（主に未婚者で、一部主婦も）が、近隣の農家の農事の手伝いに行って労賃を貰うこと。
- (12) 「イマ スリオッタ口 ター」は意味不明。
- (13) 「フキスエトッテ」の「フ」は、[ʃi] > [ʃu]。「フキ」は接頭辞。
- (14) 「ザイ」は、引用文での文末詞。
- (15) 「ソンジ」は、「ソンジブン」（その時分）を言おうとしたものの。
- (16) 「ヨッタル」の「ル」は、[ti] > [ʔu]。
- (17) 「スーッ」は吸気音。

# 11. 病気・医者の話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

- A 山崎政右衛門 男 明治30年生れ  
 B 竹中ユエ 女 明治24年生れ  
 H 平尾美和子 女 昭和30年生れ <司会役>

A <sup>(1)</sup> ソルカラー ムカシー キリャビーキッテユーター エー ソノー  
 それから 昔 さらわれ病気と言って ええ その  
 デンシェンビョーノー ハヤレバー  
 伝染病か はやると

B アカハラテロノ チブステロノ  
 赤痢とかの チブスとかの

A アーソッカー ソノ クミノ フッタチノ ミズバ クンデー  
 ああ そこから その 組の 人達が 水を 汲んで  
 エー アノー ヤッテクレオライタッタ。<sup>(2)</sup>  
 ええ あの (運んで)やってくれておられたんよ。

B アカハラ  
 赤痢

A カクリサレ カクリサレトレバー ソコン イエノ モナー ジュ  
 隔離され 隔離されていると その 家の 者は (外に)出  
 ーヨー ナカケン<sup>(3)</sup>  
 ることかできないから

B ムカシャー ア<sup>(4)</sup> アカハラデロノ <sup>(5)</sup> チビステロンテイテ キリャー  
 昔は ~~xx~~ ~~xx~~ 赤痢とかの チブスとかのと言って さらわれ

ビョキノ アッタ モンネー<sup>(6)</sup>。 イマゴラ イッチョ<sup>(7)</sup>ン コリヤ  
病気が あった ものねえ。 今頃は 少しも くれは  
ナカッター<sup>(8)</sup>。  
ないんよ。

A (笑)

B ドーユー ワケジャイロー。  
どういうわけだろうか。

A ドーユー ワケワー スーッ<sup>(9)</sup>  
どういう(ことかという)わけは

B イー<sup>(10)</sup> キーモンノ<sup>(11)</sup> ヨカッチャロ<sup>(12)</sup> ナー。  
食べ物が 良いのたろうねえ。

A イ キーモンノ ユー<sup>(13)</sup> ナッター ミズガ ヨカ ミジ ナッター  
食べ物が よく なった 水が 良い 水に なったり  
スルケンジャロ<sup>(14)</sup> ダーイ。 (B ヨカッタ。) スイドーデ。  
するからたろう よねえ。 ( 良いんよ。 ) 水道で。

B ソージャロー ダイ。  
そうたろうよねえ。

H ソゲン ビョーキン ナレバ オイシャサン オランジャッター。  
そんな 病気に なれば お医者さんは おらなかった?

B オイシャサンノ キオライトッター。  
お医者さんが 来ておられたんよ。

A オイシャサンナ<sup>(15)</sup> アスケー ムライサンテユーター エ アスケー  
お医者さんは あそこへ 村井さんと言って え あそこへ  
オライタ<sup>(16)</sup> トター。  
おられたんよ。

B ヤボイシャ<sup>(17)</sup>  
藪 医者

A ワンノエノー ミカンノキバタケン トコレー シオタレノー<sup>(18)</sup>  
おまえの家の 蜜柑の木畑の 所に 塩壘の

B ~~~~~ ミカン ミカンノキバタケガ アシコガ イシャドンノ<sup>(19)</sup>  
xxxxxx xxxxxx  
蜜柑 蜜柑の木畑が あそこか お医者さんの

ヤシキ ターイ。 ムライサンノ ヤシキッテイテ。 アスコバ  
屋敷 たよ。 村井さんの 屋敷と云って。 あそこを

ワンノイエ コータラ ミカンバ ウエライタッター<sup>(20)</sup>  
おまえの家が 買うと 蜜柑を 植えられたんよ。

A ヤボイシャサンノ オライタ トター。  
藪 医者さんか おられたんよ。

H (笑) キキオランジャッタトヤロ カー。  
( ) 交かかなかったのたろうか。

B ア イマゴラー  
あ 今頃は

A イヤ ジョーズジャッタ トー。 コノ アカハラノ ナンノッチ  
いや 上手な<sup>た</sup>よ。 この 赤痢の 何の<sup>と</sup>いう

ユ モナ ジョーズッテ イーヨッタ トー。<sup>(21)</sup>  
ものは 上手な<sup>と</sup>言っていたよ。

B イマゴラ イマゴロン フッタッチャー イマゴロン フッタチャ  
xxxxxx xxxxxx  
今頃は 今頃の 人達は 今頃の 入達は

ネー。 アノ チヲー チヲ トツタリ ナンシタリ サレンバー<sup>(22)</sup>  
ねえ。 あの 血を 血を 採ったり 何したり されなければ

シラレンドン ムラ ソン イシャドナ ミャークデー チビス  
<sup>(23)</sup> <sup>(24)</sup>  
(病気が)わかられないけれど、村 その お医者さんは 脈で チフス

チャ アカハラッチャ ミワケオライタッヅー。<sup>(25)</sup>  
でも 赤痢でも 見分けておられたんだよ。

A (笑) スーッ

B ヤボーイシャッテユータッチャ ミャークバ ミテ チビスバ シッ  
数医者とは言っても 脈を 見て チフスを 知っ  
トルオライタ トー。  
ておられたよ。

H ミャークー。  
脈？

B オン。 ミャークッテイエバ ココバ コー イシャドンノ ニギ  
おう。 脈と言えは ここを こう お医者さんが 握  
ラリュエ<sup>(26)</sup>ダー。  
られるだろうかね。

A (笑)

B イマゴラ イシャドンタチャ メッタナー ニギラレン ター。  
今頃は お医者さんたちは めったには (手首を) 握られんよ。

(笑)

A (笑)

B ミャクドマー。  
脈なんかは。

## 注記

- (1) 「ソル<sup>・</sup>カラー」の「ル」は、[ɽe] > [ɽu]。
- (2) 「～オライタッタ」は、「～オラシタ トタ」からのもの。
- (3) 「ジューヨー ナカ」は、「ジュー」が「<sup>ズ</sup>出る」、「～ヨー ナカ」は「したくてもできない」の不可能の意をあらわす。
- (4) ここでは、「テロ」が「デロ」と実現されている。
- (5) 「～テイテ」は「～と言って」。
- (6) 「モンネー」は文末詞。
- (7) 「コリャ」は間投詞的な用法。
- (8) 「ナカッター」は「ナカ トター」からのもの。「トター」は文末詞。
- (9) 「スーッ」は吸気音。
- (10) 「イー」は感声的なことば。
- (11) 「キーモン」の「キー」は、[kwɪ:]に近く聞こえるが、クィとは表記しなかった。
- (12) 「ヨカッチャロ」は「ヨカトジャロ」からのもの。
- (13) 「ユー」は、[jo:] > [ju:]。当地では、[o] > [u] が、よく見られる。
- (14) 「ダーイ」は文末詞。
- (15) 「オイシャサンナ」は連声現象。
- (16) 「オライタ」は「オラシタ」の音便形。
- (17) 「ヤボイシャ」は、[bu] > [bɔ]。当地では、[u] > [ɔ]はあまり見られない。
- (18) 「シオタレ」は地名。
- (19) 「イシャドン」の「ドン」は「殿」。
- (20) 「ウエライタッター」は、「ウエラシタ トター」からのもの。
- (21) 「イーヨッタ」は、ふつう「イーオ<sup>・</sup>ッタ」となり、「ヨル」は「オル」にくらべて、用いられることが少ない。
- (22) 「ムラー」は、ふつう「ムバ」で、「ま」格は、「バ」で表現することが多い。

- (23) 「～ドシ」は「～ドモ」の音変化。
- (24) 「ムラ」は「村井」を言おうとしたもの。
- (25) 「ミワケオライタツゾー」は「ミワケオラシタ トゾー」からのもの。「トゾー」は文末詞。
- (26) 「ニギラリユー」は「ニギラレヨー」からのもの。



## 12. 食生活の話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 山崎政右衛門 男 明治30年生れ

B 竹中 エエ 女 明治24年生れ

H 平尾 美和子 女 昭和30年生れ <司会役>

B シュショクニワ サイ<sup>(1)</sup> ソン イモニツトヨ一 バツチンメーシ<sup>(2)</sup>  
 主食には それ その 薯練り 薯飯

バツチンテ イモバ キツテ コシテ ヘーテ一 ソシテエテ ソル  
 「はっち」といって 薯を 切つて こうして 干して そしておいて それ

バ テア一テ ネットクツテ ソシテ タベオッタ トヨ一。  
 を 炊いて 練りませて そして 食べていたんよ。

イモン トキヤ一 イモバツカー。

薯の時期には 薯はっかり。

A ナンドンカー コンゴラー モー イモワ ナカ ウチジャルケン  
 なげどねえ この頃は もう 薯は ない方だから

オナゴ マ マカニヤ一 スツター スイジ スル モナー モ  
 女が まあ まかないを するって 炊事と する 者は もう

ー ドー<sup>(3)</sup> アサカラ ハヨ一 オケテ ソノ バツチンメシコネモ  
 どうして 朝から はやく 起きて その 薯飯練りも

ー フトカー コー シャモジデー (B笑)  
 大きい こう しゃもじて

B ソリヤ一 カナドンガ  
 それは 家族か

A カナエドンガ ウーカ モナー  
家族が 多い者は

B ウーカ トコラー ハダカン ナットッテー ハダカン ナットッ  
多い 所は 裸に なっておいて 裸に なっておいて  
テ コネオライタ トゾー。バ<sup>(4)</sup> アノー バッチンメシバ テャー  
練っておられたんたよ。 あの 薯飯を 炊いて  
テ

A ソシテ ソーケテユーテ タケデ コー クンダトン トッテ  
そして 「そうけ」といって 竹で こう 編んだのは 取って  
ソースレバ コー コー アルオッタ トター。 (B シー イマ  
そうすると こう こう あっていたんよお。 ( うん 今  
ン) (笑)  
の)

B ヤマンゴト ヤマンゴト アルオッター。 (笑)  
山のように 山のように (薯飯か) あっていた。

H ウーン バッチンメシ ドガン シテ ツクリオライタ トカー。  
ううん 薯飯は どのようにして 作っておられたのか。

A バッチンメシ イモバ キッテ  
薯飯は 薯を 切って

B イモバ キッテ ヘーテ カレキヤーテ サー。 (A ヘーテ カ  
薯を 切って 干して 乾燥させて ねえ。 ( 干して  
レキヤーテ) カメン ナカノー アー ドケンテ イレトッテ。  
乾燥させて) 窟の中や ああ どこに 入れておいて。

A トー トーリヤ<sup>(6)</sup>ー イレテ  
依に 入れて。

B トーリヤ イレタリ シテ  
俵に 入れたり して

A イェンソリヤ コー アゲター シテ<sup>(7)</sup> ムシアレ アレモ ムシノ  
家の屋根へ こう 上げたりして 出 あれ あれも 出が  
ツッケン。  
つくから。

B ムシノ ツクケン カミヤ イレレバ ツキオランジャッタケン  
出が つくから 甕に 入れると つかなかったから

カナエ スクナカ モナー カミヤドミヤ<sup>(8)</sup> イレトルオッタトナ  
家族が 少ない 者は 甕 などに 入れておいたけれども

ンドン カナエ オーカ モナー カミヤ<sup>(8)</sup> イレタツチャー  
家族の 多い 者は 甕に 入れても

タラン モンジャルケン アッテ<sup>(8)</sup> カナエ オーカ モナ トー  
足りないものだから ほら 家族の 多い 者は 俵に

レ ナンバ<sup>(8)</sup> ナンビュッチャー ホシオライタッター。  
何俵 何俵 でも 干しておられたんよ。

H イマゴラー ツクラン モンナー<sup>(9)</sup>。  
今頃は 作らない ものねえ。

B イマゴラー モー オクッシノゴト アッ トヨー。 ホン<sup>(10)</sup>。  
今頃は もう お菓子のように ある んよ。 ほんどね。

(A ~~~~~) モー イマゴラー バツチンメーシノ イモンテ  
もう 今頃は 暮飯の 暮のって

タケバ モー シータ モナ モー オカシンゴト アラス トー。  
炊けば もう 好きな 者は もう お菓子のように あるんよ。

オマエノヘンノゴッ モ トーチャンダチャ ドー<sup>(11)</sup> シータ モナ  
お前のところのように もう とうさんたちは どうして 好きな 者は

— (笑) バッチンメーシ テアートッテイエバー (笑)  
 暮飯を 炊いておると言うこと

A ソシテ ミソツテ ミソモー ワガデー イマモ ヤッパリ  
 そして 味噌って 味噌も 自分で 今も やっぱり

シワ スレドンカー ミソバー シトダリー サンチヨノ シチヨ  
 作りは するけれど 味噌を 4斗樽に 3丁の 4丁

ノッテ ユーテ カゾクン ウーカ モン ツキオッタ ト。 (B  
 のって言うて 家族の 多い者は 搦っていたよ。 (

シチヨノッテ ナー。)  
 4丁のってねえ。

B ハー。  
 はい。

A ソシテ ソノー ミソバー アー シャンネン<sup>(12)</sup> ミソノー イクラン  
 そして その 味噌を ああ 3年味噌の いくらって

テ モットル モンガー ソノー ジマンバナシジャッタ ト。  
 持っている者が その 自慢話だったよ。

B (笑) ブゲンシャドンジャッタ トナー。  
 ( ) 金持ちさんだったんよね。

A アッ アッ ミソノ シロカト<sup>(13)</sup>ーバー ナメサスル モナー スー  
 あっ あっ 味噌の 白いのを 嘗めさせる 者は

ッ モー ツマラン ベーヤッタ ト。 (B アッ) (B ~~~~~)  
 もう 下の下 だったんよ。 ( あっ ) ( ~~~~~ )

(笑)

B ホンナコテ。 ソギヤ<sup>(13)</sup> ンジャッタ ト。 (A ~~~~~)  
 ほんとうに。 そうだったよ。

H ナルバ バックナントワ ナンバ キーオライタ<sup>(14)</sup> トカー。 オカ  
そしたら 薯飯とは 何を 食べておられたのかね。 おか  
ズワ。

ずば。

A オーッ。  
ええ？

B オカズワ サー ヒバンシー ヒバテユーテ  
おかずは ねえ 干葉汁 干葉っていつて

A ヒバテユーテ ダイコンノ ハー  
干葉っていつて 大根の 葉

B ダイコンノ ハバ ホシテ ネー。 ツリヤー カケテ ズーット  
大根の 葉を 干して ねえ。 蔓に かけて ずっと

ハーテ ヤマン ナカノ コン イエノ ノキンテユーテ カケ  
干して 山の 中の この 家の 軒にいつて 掛け

テー ソシテエテ ソルガ バリバリン ナッタトッ キビッテ  
て そしておいて それか はりばりに なった時 しぼって

ナウ<sup>(15)</sup>トッテー ソルバ イギヤーテ カワン クリ アノー  
しまっておいて それを ゆでて 川の 端に あの

ツケトッテー ソシテ ターンドグ テヤーテ タベオッタ トター。  
漬けておいて そして おいおい 炊いて 食べていたんよ。

オンドンガー コマカ ウチマジヤー。  
私運か 小さい 頃までは。

A ソイカール<sup>(16)</sup> ホシデァーコッテユーテ  
それから 干し大根といつて

B ホシデァーコッテユーテ<sup>(17)</sup> ダイコンオ キッテ<sup>(17)</sup> ハーテ  
干し大根といつて 大根を 切って 干して (A エー)  
ええ

A ダイコンヲ キッテ ヘーテ  
大根を 切つて 干して

B イマワー イギャテ ホシエドン ネー。 ムカシャ モー ソノ  
今は ゆでて 干すけれども ねえ。 昔は もう その  
ママ イガキモ ドーモ シェジナ ヘーテ トリクデー  
まま ゆでも どうも しないで 干して 取り込んで  
~~~~~ シオッタ ト。  
していた よ。

H ヨルワ ナンバ キーヨライ タトヤロ カ。  
夜は 何を 食べておられたのだろうか。

A アー  
ええ?

H ヨルー  
夜

B ヨルモ<sup>(18)</sup> オナシ コト ター。  
夜も 同じ こと よお。

A ヨルモ オナシ コッター。  
夜も 同じ ことよお。

H ヨルモ ヒババ キーヨライ タ<sup>(19)</sup> トカ。  
夜も 干葉を 食べておられたのか。

A ヨルモ バッチンメーシ  
夜も 薯飯

B ヨルモ バッチンメーシ イモドキャー イモ  
夜も 薯飯 薯時期には薯

A マー チョットー キノキータ モンガー ミバンニー フトバン<sup>(20)</sup>  
まあ ちよっと 気の利いた 者が 3晩に 一晚

バカーレ<sup>(21)</sup>  
ばかり

B ムギメシバ  
麦飯を

A ムギメシバ エテ<sup>(22)</sup> ( B 笑 ) フイオッタ トター。  
麦飯を 貰って ( ) 食べていたんよ。

B ムギメシヤー ヒトツモ コメバ イレテクー モンガ ウーカ。<sup>(23)</sup>  
麦飯を 少しも 米を 入れて食べる者が多い。

A ウン。  
うん。

B コメバー チーット イレテクー モナー ヨカ モンジャッタ  
米を 少し 入れて食う 者は 悪まれた者だった  
トター。  
んよ。

A ソラー ミバンニ フトバンバカイジャッタ。 イェンチヘンナ。<sup>(24)</sup>  
それは 3晩に 一晩ばかりだった。 わか家では。

B ソージャッタ トー。  
そうだったよ。

H ナラ コー サカナモ トレオッタ トレオッタトニ サカナワ  
そんなら こう 魚も とれていた とれていたので 魚は  
タベオランジャッタ ト。  
食べていなかったの？

A サカナワ タベオッタ トター。 ( B サカナワ )  
魚は 食べていた んよ。 ( 魚は )

B サカナワー ショテワ<sup>(25)</sup> モー イマヨカ<sup>(26)</sup> タベオッタッター。  
魚は 昔は もう 今よりか 食べていたんよか。

ドコツキヤ。

どこでも。

A ウー サカナー ソン サカナバ タブル モンジャルケン カラ  
うい 魚 その 魚を 食べる ものだから 体

ダガ スイジャクシェデ ナー。 アー ショ<sup>(27)</sup>ゾン ヒバン オツ  
が 衰弱しなくて ねえ。 ああ 干葉の おつ

ケデモー

ゆでも

B ショテワ ネー。 ( A ナンデン ) ジブンジブンデー コー  
音は ねえ。 ( 何でも。 ) 自分自分で こら

<sup>(28)</sup>  
フキー イキオッタ トサー。

引きれ 行っていたんよね。

A モー アサカラー ( B イチバン ) ア モー バンモー フキー  
もう 朝から ( 一番 ) あ もう 晩も 引きれ

<sup>(29)</sup>  
イキオッタ トケー。

行っていたんたよ。

B モー アンテユートワ フトカトノー ヨンニョ フネ イッピー  
もう 網っていうのは 大きいもの たくさん 船 いっぱい

モー ( A モー )  
もう ( もう )

A ジャッコテユート コマカ サカナワ タベオッタ トー。 ソル  
雑魚っていつて 小さい 魚は 食べていたよ。 そう

ケンカー カラダノ オー ソーマデー ソ アノー イエイヨー  
だから 体が おう そうまで そ あの 栄養は

ワ ソッデ イクラカ トレオッタ トー。

それで いくらか 取れていたよ。



H ンー。  
うん。

A マター コノゴロン ナットユート イワシアミノッテユエテ  
また この頃に なるというと 魚弱網のって言って

バンニ ンー サンヨン ゴッ サンヨニズツ モヨテー フキ  
晩に うん 3.4 5 3.4人ずつ いっしょに 引き

ー イクトユート コヤシモ トー <sup>(30)</sup>ソノー ショーケッテユエテ  
に 行くというと 肥料も 取る その そうけっていって

ワケテー イェンチャン モッテクレバー ソロー <sup>(31)</sup>ナマデー  
分けて 家に 持って帰っると それを 生で

エー モ <sup>(32)</sup>テーブル  
ええ もう 食べる

B ~~~~~ンデ<sup>32</sup> タブール  
食べる

A シオッタ ト。 ソルケンカー イエイヨーワ マー ドーナッコ  
いていたよ。 そうなから 栄養は まあ どうなり

ーナッ トレオッタツジャロ ダー。 ( B イワシアンテ ショテ )  
こうなり とれていたのだらうよ。

B イワッシヤンテ ショテワ イェンチ <sup>(33)</sup>フキ フキオライタケン ネ  
魚弱網って 昔は 家で <sup>xxxx</sup>引き <sup>xx xx</sup>引きおられたから ねえ。

ー。 <sup>(34)</sup>チンゴンナチュトコレー ソコン ソーテャ オンドマ  
「チンゴノ浦」という所に そこに みんな おれたらは

エッ イガ カルッテ モラギャー <sup>(35)</sup>イキオッター イワシバ ソ  
えっ 赤人坊き背負って もらいに 行っていた。 魚を そ

ースリヤ フトツカンズーツ <sup>(36)</sup>モロテキヨッタ。 ( 笑 )  
うすると 一掴みずつ 貰って来ていた。

H イワシト イモト ヨー アウ トカナ<sup>(37)</sup>  
鰯と 薯と よく 合うのかね。

B (笑) イワシト イモト ヨー (笑) アッテ アワデナモ<sup>(38)</sup>  
鰯と 薯と よく ほら 合わないでも  
ドギャン スン ナー。 (A イワシイモ) タベオッタ トター。  
どう する ねえ。 (鰯 薯) 食べていたんだよ。

(笑)

H ナアノー ベントーワ。  
ねあの 弁当は。

B オナシ コト サー。 チョードー バッチンモ。  
同じことよお。 ちょうど 薯飯も。

A ベントーモ バッチンメシ ター。 バッチンメシトー オー  
弁当も 薯飯よお。 薯飯と おお

マー  
まあ

B ガッケー イク トキチャ ズー。 バッチンメシバー ニギッテ  
学校へ 行く 時でも よお。 薯飯を ねきって

ソシテエテ ウメバ イレテイク モナー イーク<sup>(39)</sup> イカンモナ  
そしておいて 梅を 入れて行く 者は 行く 行かない者は

バッチンメシバ<sup>(40)</sup>ッカル モッテイク シオッ<sup>(41)</sup>ト。 モー オマ  
薯飯ばかり 持って行く しているよ。 もう お前

エタチントキ モー ソギャン シェンジャッタロ ダイニャー。<sup>(42)</sup>  
ねあの時は もう そんなに しなかっただろうよねえ。

(哭)

H ウンニャー。  
いいえ。

A バッチンメシバ アッテ <sup>(43)</sup> ヒロシキ ツツデー ウデー コー  
箸飯を ほら 風呂敷に 包んで 腕に こう  
<sup>(44)</sup>  
ニーデ プラーン プランシテ ガツケニャ イキオッタ トター。  
通して ぷらあん ぷらんして 学校には 行ってたんよ。

B (笑)

A ソースットユートー トキナワー コマカ ヒロシキバ モットレ  
そうするというと 時々は 小さい 風呂敷を 持っている  
バー オチョツキチャーテ <sup>(45)</sup>  
と 落してしまって

B ヒットデテ <sup>(46)</sup> ~~~~~ (笑)  
とび出して

A (笑) ソシテ <sup>(47)</sup> ヒルテ マタ コー ツツデー <sup>(48)</sup> ヘッ <sup>(49)</sup> モッテ  
そして 拾って また こう 包んで 持って  
イタリシオッタ トター。  
行ったり してたんよお。

B ショテジブンノ コトワ イマゴロ イワルル モンナ。 <sup>(50)</sup>  
昔の頃のことは 今頃 言われるものね。

A (笑)

B イマゴラ イワレン <sup>(51)</sup> トバ。  
今頃は 言われぬよね。

H ナラ オッ ベントーニワ オカズワ ナンバ モッテイキヨライ  
そんなら おっ 弁当には おかずは 何を 持って行っておられ

タッカナー。

たのかねえ。

B バッチンメシ<sup>(52)</sup>ン トキ ヤー。

暮飯の時かぬ。

H ウン。

うん。

B ウメボーシ<sup>(53)</sup>。

梅干。

A ウメー。

梅。

H アー。

ああ。

A オーカタ。

おおかた。

B モッテイカン モンガ オーカッタロ ダー。

持って行かない 着か 多かつたろうよお。

A アー。

ああ。

H ナラ バッチンメシワ ナーンモ イレジナ ソンママ フロシキ

そんなら 暮飯は 何れも 入れないで そのまま 風呂敷に

ツツーデ イキヨライタ トナ。

包んで 通っておられたよね。

B ~~~~~

A マー タケン カワドメ<sup>(54)</sup>ー コー イレテイク モンノ オッタ

まあ 竹の 皮などに こう 入れて行く 着か いた

ナー。

ねえ。

B ハー タケン カワニ フキノー ハー モッテ コー ニギッタ  
はあ 竹の 皮<sup>は</sup>や ふきの葉<sup>は</sup> 持って こう にきった

トバ イッチョズツ モッテイキヨッタター。 ニギッテ  
のを 一個ずつ 持って行ってたんよ。 にきって

H ウーン。

ううん。

B ムカシャー。

昔は。

## 注記

- (1) 「サイ」は、[soɾe] > [sai] と考えられる。
- (2) 「バッチンメシ」の「バッチン」はさつま芋。語原は「8里」。「9里」(粟)の味より、少し落ちるという洒落の発想。また、「～メシ」の長音は、当地の特徴的なもの。以下これを、特徴的長音と略記する。
- (3) 「ドー」は「ドーシテ」を言おうとしたものと考えられる。
- (4) 「バ」は「バッチンメシ」を言い出そうとしたもの。
- (5) 「アル」の「ル」は、当地によく見られる、[ti] > [tu]。
- (6) 「トーリヤ」の「トー」は、[tawə~] > [to:~]。
- (7) 「ムシ」は、後の「ムシノツッケン」の「ムシ」が、一度出かけたもの。
- (8) 「イレトル」の「ル」は、[ti] > [tu]。
- (9) 「モンナー」は文末詞。
- (10) 「ホン」は、「ホンナコテ」の「ホン」と思われる。
- (11) 「ドー」は「ドーシテ」を言おうとしたものと考えられる。
- (12) 「シャ」は、[sa] > [a]。
- (13) 「スーッ」は吸気音。
- (14) 「キー」は、[kwi:] (「クイ-」) に近く聞こえる。
- (15) 「ナウヤ」の「ウヤ」は、[wja]。
- (16) 「ソイカール」の長音は、特徴的長音。
- (17) 「オ」は、[o]。
- (18) 「ター」は文末詞。
- (19) 「トカ」は文末詞。
- (20) 「フ」は、[fi] > [ɸu]。
- (21) 「レ」は、[ti] > [te]。「バカール」の長音は、特徴的長音。
- (22) 「エテ」は「得て」。
- (23) 「ムギメシラー ～ ウーカ。」の文意は、矛盾しているが、これは、「米を入れなくて食べる者」を「コメバ イレテクモシガ」と言い換えたものと考えられる。

- (24) 「 ～ ンナ」は連声現象。
- (25) 「シヨテ」は、「初手」で、ここでは「昔」。
- (26) 「イマヨカ」は、「イマヨリカ」の [ɾi] の脱落。
- (27) 「シヨゾン」は意味不明。
- (28) 「フ」は、[ɕi] > [ɕu]。
- (29) 「トケー」は、「トコレー」からの文末詞。
- (30) 「トー」は、[to]u > [to:]。
- (31) 「ソロー」は、「それを」からのものか。
- (32) 「タブニル」の長音は、例の特徴的長音。
- (33) 「エンテ」と聞こえるが、意味不明。
- (34) 「チンゴンナ」は地名で、ここは、昔、「きひな」がよくとれた。
- (35) 「モラギャー」は、「モライギャー」で、「ギャー」は「に」に当る。
- (36) 「フトツカンズニツ」の長音は、特徴的長音。
- (37) 「トカナ」は文末詞。
- (38) 「アワデナモ」は、「アワデナ」（合わないで）に「モ」助詞の添ったもの。なお、これを含む文と次文は、笑い声での表現。
- (39) 「イニク」の長音は、特徴的長音。
- (40) 「 ～ バッカル」の「ル」は、[ɾi] > [ɾu]。
- (41) 「モツテイク シオッ」は、逐語訳では、「持って行くしている」となるが、意味は、「持って行くというようにしている」の意。
- (42) 「ダイニャー」は文末詞。
- (43) 「ヒ」は、[ɕu] > [ɕi]。
- (44) 「ニーデ」は「貫いて」出自で、「通して」の意になる。
- (45) 「オチヨッキャー(テ)」は、「オツチャカス」（落す）の連用形。
- (46) 「ヒット」は、接頭辞。
- (47) 「ヒルテ」の「ル」は、[ɾo] > [ɾu]。
- (48) 「ツツーデ」は、「ウ」音便。
- (49) 「ヘッ」は軽い笑い声。

(50)「モンナ」は文末詞。

(51)「トバ」は文末詞。

(52)「ヤー」は文末詞で、ここでは、問いかけ。

(53)「ウメボ<sup>・</sup>ーシ」の長音は、特徴的長音。

(54)「～ドメー」は、「～ドモニ」からのもの。



昭和54年3月

国立国語研究所

東京都北区西が丘3丁目9番14号  
電話 東京(900)3111(代表)

## 国立国語研究所刊行書一覽

### 国立国語研究所報告

|      |   |         |        |
|------|---|---------|--------|
| 1    | 八 丈 島 の 言 語 調 査                             | 秀英出版刊   | 品切れ    |
| 2    | 言 語 生 活 の 実 態<br>——白河市および付近の農村における——        | 〃       | 〃      |
| 3    | 現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞<br>——用法と実例——            | 〃       | 700円   |
| 4    | 婦 人 雑 誌 の 用 語<br>——現代語の語彙調査——               | 〃       | 500円   |
| 5    | 地 域 社 会 の 言 語 生 活<br>——鶴岡における実態調査——         | 〃       | 品切れ    |
| 6    | 少 年 と 新 聞<br>——小学生・中学生の新聞への接近と理解——          | 〃       | 180円   |
| 7    | 入 門 期 の 言 語 能 力                             | 〃       | 品切れ    |
| 8    | 談 話 語 の 実 態                                 | 〃       | 〃      |
| 9    | 読 み の 実 験 的 研 究<br>——音読にあらわれた読みあやまりの分析——    | 〃       | 〃      |
| 10   | 低 学 年 の 読 み 書 き 能 力                         | 〃       | 〃      |
| 11   | 敬 語 と 敬 語 意 識                               | 〃       | 〃      |
| 12   | 総 合 雑 誌 の 用 語 (前編)<br>——現代語の語彙調査——          | 〃       | 〃      |
| 13   | 総 合 雑 誌 の 用 語 (後編)<br>——現代語の語彙調査——          | 〃       | 〃      |
| 14   | 中 学 年 の 読 み 書 き 能 力                         | 〃       | 400円   |
| 15   | 明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語                         | 〃       | 品切れ    |
| 16   | 日 本 方 言 の 記 述 的 研 究                         | 明治書院刊   | 〃      |
| 17   | 高 学 年 の 読 み 書 き 能 力                         | 秀英出版刊   | 〃      |
| 18   | 話 し こ と ば の 文 型 (1)<br>——対話資料による研究——        | 〃       | 800円   |
| 19   | 総 合 雑 誌 の 用 字                               | 〃       | 品切れ    |
| 20   | 同 音 語 の 研 究                                 | 〃       | 〃      |
| 21   | 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1)<br>——総記および語彙表—— | 〃       | 〃      |
| 22   | 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (2)<br>——漢 字 表——    | 〃       | 1,000円 |
| 23   | 話 し こ と ば の 文 型 (2)<br>——独話資料による研究——        | 〃       | 品切れ    |
| 24   | 横 組 み の 字 形 に 関 す る 研 究                     | 〃       | 〃      |
| 25   | 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (3)<br>——分 析——      | 〃       | 〃      |
| 26   | 小 学 生 の 言 語 能 力 の 発 達                       | 明治図書刊   | 2,100円 |
| 27   | 共 通 語 化 の 過 程<br>——北海道における親子三代のことは——        | 秀英出版刊   | 品切れ    |
| 28   | 類 義 語 の 研 究                                 | 〃       | 〃      |
| 29   | 戦 後 の 国 民 各 層 の 文 字 生 活                     | 〃       | 400円   |
| 30-1 | 日 本 言 語 地 図 (1)                             | 大蔵省印刷局刊 | 品切れ    |

|      |  |       |         |
|------|--|-------|---------|
| 30-2 | 日 本 言 語 地 図 (2)                                      | 〃     | 〃       |
| 30-3 | 日 本 言 語 地 図 (3)                                      | 〃     | 〃       |
| 30-4 | 日 本 言 語 地 図 (4)                                      | 〃     | 〃       |
| 30-5 | 日 本 言 語 地 図 (5)                                      | 〃     | 〃       |
| 30-6 | 日 本 言 語 地 図 (6)                                      | 〃     | 10,000円 |
| 31   | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究                              | 秀英出版刊 | 450円    |
| 32   | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)<br>——親族語彙と社会構造——             | 〃     | 品切れ     |
| 33   | 家庭における子どものコミュニケーション意識                                | 〃     | 350円    |
| 34   | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 ( II )<br>——新聞の用語用字調査の処理組織—— | 〃     | 品切れ     |
| 35   | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)<br>——マキ・マケと親族呼称——            | 〃     | 450円    |
| 36   | 中学生の漢字習得に関する研究                                       | 〃     | 5,000円  |
| 37   | 電子計算機による新聞の語彙調査                                      | 〃     | 1,300円  |
| 38   | 電子計算機による新聞の語彙調査(II)                                  | 〃     | 2,800円  |
| 39   | 電子計算機による国語研究(III)                                    | 〃     | 700円    |
| 40   | 送 り が な 意 識 の 調 査                                    | 〃     | 1,500円  |
| 41   | 待 遇 表 現 の 実 態<br>——松江24時間調査資料から——                    | 〃     | 900円    |
| 42   | 電子計算機による新聞の語彙調査(III)                                 | 〃     | 1,200円  |
| 43   | 動詞の意味・用法の記述的研究                                       | 〃     | 5,000円  |
| 44   | 形容詞の意味・用法の記述的研究                                      | 〃     | 3,000円  |
| 45   | 幼 児 の 読 み 書 き 能 力                                    | 東京書籍刊 | 4,500円  |
| 46   | 電子計算機による国語研究(IV)                                     | 秀英出版刊 | 700円    |
| 47   | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3)<br>——性用語彙と価値観——              | 〃     | 700円    |
| 48   | 電子計算機による新聞の語彙調査(IV)                                  | 〃     | 3,000円  |
| 49   | 電子計算機による国語研究(V)                                      | 〃     | 900円    |
| 50   | 幼 児 の 文 構 造 の 発 達<br>——3歳～6歳児の場合——                   | 〃     | 品切れ     |
| 51   | 電子計算機による国語研究(VI)                                     | 〃     | 1,000円  |
| 52   | 地 域 社 会 の 言 語 生 活<br>——鶴岡における20年前との比較——              | 〃     | 1,800円  |
| 53   | 言 語 使 用 の 変 遷 (1)<br>——福島県北部地域の面接調査——                | 〃     | 2,500円  |
| 54   | 電子計算機による国語研究(VII)                                    | 〃     | 1,000円  |
| 55   | 幼 児 語 の 形 態 論 的 な 分 析<br>——動詞・形容詞・述語名詞——             | 〃     | 1,300円  |
| 56   | 現 代 新 聞 の 漢 字  | 〃     | 3,000円  |
| 57   | 比 喩 表 現 の 理 論 と 分 類                                  | 〃     | 6,000円  |
| 58   | 幼 児 の 文 法 能 力  | 東京書籍刊 | 5,500円  |
| 59   | 電子計算機による国語研究(VIII)                                   | 秀英出版刊 | 1,300円  |
| 60   | X線映画資料による母音の発音の研究<br>——フォネーム研究序説——                   | 〃     | 2,500円  |

|    |                      |       |        |
|----|----------------------|-------|--------|
| 61 | 電子計算機による国語研究(Ⅸ)      | 〃     | 1,300円 |
| 62 | 研究報告集(1)             | 〃     | 1,700円 |
| 63 | 児童の表現力と作文            | 東京書籍刊 | 6,000円 |
| 64 | 各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1) | 秀英出版刊 |        |

国立国語研究所資料集

|    |                       |         |        |
|----|-----------------------|---------|--------|
| 1  | 国語関係刊行書目(昭和17~24年)    | 秀英出版刊   | 45円    |
| 2  | 語彙調査——現代新聞用語の一例——     | 〃       | 品切れ    |
| 3  | 送り仮名法資料集              | 〃       | 〃      |
| 4  | 明治以降国語学関係刊行書目         | 〃       | 〃      |
| 5  | 沖繩語辞典                 | 大蔵省印刷局刊 | 3,500円 |
| 6  | 分類語彙表                 | 秀英出版刊   | 1,600円 |
| 7  | 動詞・形容詞問題語用例集          | 秀英出版刊   | 1,700円 |
| 8  | 現代新聞の漢字調査(中間報告)       | 〃       | 500円   |
| 9  | 牛店安愚楽鍋用語索引            | 〃       | 1,500円 |
| 10 | 方言談話資料(1)——山形・群馬・長野—— |         | 非売品    |

国立国語研究所論集

|   |           |       |        |
|---|-----------|-------|--------|
| 1 | ことばの研究    | 秀英出版刊 | 品切れ    |
| 2 | ことばの研究第2集 | 〃     | 750円   |
| 3 | ことばの研究第3集 | 〃     | 品切れ    |
| 4 | ことばの研究第4集 | 〃     | 1,300円 |
| 5 | ことばの研究第5集 | 〃     | 1,300円 |

国立国語研究所年報 秀英出版刊

|    |        |      |    |        |      |
|----|--------|------|----|--------|------|
| 1  | 昭和24年度 | 品切れ  | 16 | 昭和39年度 | 品切れ  |
| 2  | 昭和25年度 | 〃    | 17 | 昭和40年度 | 250円 |
| 3  | 昭和26年度 | 160円 | 18 | 昭和41年度 | 300円 |
| 4  | 昭和27年度 | 160円 | 19 | 昭和42年度 | 300円 |
| 5  | 昭和28年度 | 品切れ  | 20 | 昭和43年度 | 品切れ  |
| 6  | 昭和29年度 | 200円 | 21 | 昭和44年度 | 〃    |
| 7  | 昭和30年度 | 品切れ  | 22 | 昭和45年度 | 400円 |
| 8  | 昭和31年度 | 〃    | 23 | 昭和46年度 | 450円 |
| 9  | 昭和32年度 | 〃    | 24 | 昭和47年度 | 450円 |
| 10 | 昭和33年度 | 〃    | 25 | 昭和48年度 | 品切れ  |
| 11 | 昭和34年度 | 〃    | 26 | 昭和49年度 | 600円 |
| 12 | 昭和35年度 | 350円 | 27 | 昭和50年度 | 700円 |
| 13 | 昭和36年度 | 160円 | 28 | 昭和51年度 | 非売品  |
| 14 | 昭和37年度 | 220円 | 29 | 昭和52年度 |      |
| 15 | 昭和38年度 | 250円 |    |        |      |

国語年鑑 秀英出版刊

|        |     |        |        |
|--------|-----|--------|--------|
| 昭和29年版 | 品切れ | 昭和42年版 | 1,100円 |
| 昭和30年版 | 〃   | 昭和43年版 | 品切れ    |
| 昭和31年版 | 〃   | 昭和44年版 | 1,500円 |

|          |        |          |        |
|----------|--------|----------|--------|
| 昭和 32 年版 | 〃      | 昭和 45 年版 | 1,500円 |
| 昭和 33 年版 | 〃      | 昭和 46 年版 | 2,000円 |
| 昭和 34 年版 | 〃      | 昭和 47 年版 | 2,200円 |
| 昭和 35 年版 | 〃      | 昭和 48 年版 | 2,700円 |
| 昭和 36 年版 | 800円   | 昭和 49 年版 | 3,800円 |
| 昭和 37 年版 | 品切れ    | 昭和 50 年版 | 3,800円 |
| 昭和 38 年版 | 〃      | 昭和 51 年版 | 4,000円 |
| 昭和 39 年版 | 980円   | 昭和 52 年版 | 4,500円 |
| 昭和 40 年版 | 1,100円 | 昭和 53 年版 | 4,600円 |
| 昭和 41 年版 | 1,100円 |          |        |

日本語教育教材

- |   |                         |                   |         |      |
|---|-------------------------|-------------------|---------|------|
| 1 | 日本語と日本語教育<br>——発音・表現編—— | 国立国語研究所<br>文化庁 共編 | 大蔵省印刷局刊 | 650円 |
| 2 | 日本語と日本語教育<br>——文字・表現編—— | 〃                 | 〃       | 850円 |
| 3 | 日本語の文法(上)               | ——日本語教育指導参考書4——   | 〃       | 〃    |

- |                 |                      |       |      |
|-----------------|----------------------|-------|------|
| 高校生と新聞          | 国立国語研究所<br>日本新聞協会 共編 | 秀英出版刊 | 280円 |
| 青年とマス・コミュニケーション | 日本新聞協会<br>国立国語研究所 共著 | 金沢書店刊 | 品切れ  |

日本語教育教材映画一覧

(各巻16ミリカラー, 5分, 日本シネセル社販売)

| 巻 題 名                                    | プリント価格  |
|--|---------|
| 第1巻 これをはかえるです——「こそあど」+「は～です」——           | 30,000円 |
| 第2巻 さいふはどこにありますか ——「こそあど」+「が～ある」——       | 〃       |
| 第3巻 やすくないです, たかいです ——形容詞とその活用導入——        | 〃       |
| 第4巻 なにをしましたか ——動 詞——                     | 〃       |
| 第5巻 しずかなこうえんで ——形容動詞——                   | 〃       |
| 第6巻 さあ, かぞえましょう ——助数詞——                  | 〃       |
| 第7巻 うつくしいさらになりました ——「なる」「する」——           | 〃       |
| 第8巻 きりんはどこにいますか ——「いる」「ある」——             | 〃       |
| 第9巻 かまくらをあるきます ——移動の表現——                 | 〃       |
| 第10巻 おかねをとられました ——受身の表現1——               | 〃       |
| 第11巻 どちらがすきですか ——比較・程度の表現——              | 〃       |
| 第12巻 もみじがとてもきれいでした ——「です」「でした」「でしょう」——   | 〃       |
| 第13巻 きょうはあめがふっています ——「して」「している」「していた」——  | 〃       |
| 第14巻 そうじはしてありますか ——「してある」「しておく」「してしまう」—— | 〃       |
| 第15巻 おみまいにいきませんか ——依頼・勧誘の表現——            | 〃       |
| 第16巻 なみのおとがきこえてきます ——「いく」「くる」——          | 〃       |

(第1巻～第3巻は, 文化庁との共同企画・V T R価格1/2インチオープンリー  
ル21,000円, 3/4インチカセット20,000円)

NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE PUBLICATIONS

SOURCE X-II

TEXTS OF TAPE-RECORDED CONVERSATIONS  
IN JAPANESE DIALECTS

(Volume 2)

CONTENTS

**Foreword**

**Purpose and Outline**

**Text**

Part 1 : NARA PREFECTURE (Hamlet Natiai and Tanigaito,  
Village Totukawa, District Yosino)

Part 2 : KÔTI PREFECTURE (Hamlet Takimoto, Town Okô,  
City Nangoku)

Part 3 : NAGASAKI PREFECTURE (Hamlet Otogô-koguti, Town  
Kinkai, District Nisisonoki)

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

TOKYO JAPAN

1979